新潟県埋蔵文化財調査報告書 第168集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXI

中 曽 根 遺 跡

２００６

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXI

中曽根遺跡

（なかそね）

2006

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

日本海東北自動車道は新潟市の新潟中央ジャンクションから日本海に沿って北上し、山形県を経て秋田自動車道と接続する秋田県河辺ジャンクションに至る高速自動車道です。新潟県内では胎内市の中条インターチェンジまでが平成14年度に完成しています。

高速自動車道建設を取り巻く状況は厳しいものがありますが、平成15年末の国土開発幹線自動車道建設会議（国幹会議）において、日本海東北自動車道の中条―朝日間は、旧日本道路公団が有料道路として建設を進めることになりました。その後、公団の民営化により、平成17年10月に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれましたが、平成18年2月の国幹会議において、荒川―朝日間については国土交通省が新直轄道路として建設することになりました。日本海東北自動車道はこの地域内外の経済的な交通・流通を促すだけでなく、救急患者の搬送・災害時の緊急輸送など「命の高速道」としての役割も期待されており、早期の開通が望まれます。

本書は、この日本海東北自動車道建設に先立って発掘調査を実施した「中曽根遺跡」の報告書です。調査の結果、遺跡からは弥生時代・古代・中世・近世の遺構・遺物を検出しましたが、遺跡の中心は古代と弥生時代で、共に集落跡であることがわかりました。古代は複数の掘建柱建物が当時の小河川沿いに建てられ、小規模で断続的ながら、7世紀から11世紀にかけて比較的長期間利用された場所であったようです。また、弥生時代は2か所の炉跡とそれを中心に遺物が出土し、これらを住居跡と想定しています。東北地方の系統である天王山式土器が出土し、沖積地に進出した数少ない遺跡といえるでしょう。

今回の発掘調査が、考古学研究者はもとより、地域の歴史を知り、学ぼうとする多くの方々に活用されることを願っております。

最後に、この調査に参加された地元住民の方々や地元区長並びに荒川町教育委員会には多大なる御協力と御援助をいただきました。また、東日本高速道路株式会社及び村上工事事務所、荒川沿岸土地改良区には、調査に際して格別のご配慮をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

新潟県教育委員会

教育長　武　藤　克　己

例　　言

1　本書は新潟県岩船郡荒川町大字金屋字中曽根725ほかに所在する中曽根遺跡の発掘調査記録である。

2　本発掘調査は、日本海東北自動車道（以下、日東道とする）建設に伴い、新潟県教育委員会（以下、県教委とする）が東日本高速道路株式会社から受託したものである。調査は県教委が主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団とする）に委託し、埋文事業団の管理・監督のもと加藤建設株式会社が平成17年度に行った。

3　整理作業及び報告書作成に係る作業は、平成17年度に埋文事業団指導のもと、加藤建設株式会社がこれにあたった。本書は、本文、遺構・遺物観察表、遺構・遺物実測図版、写真図版からなる。図版の縮尺はそれぞれの図版に記した。また遺物写真については原則として実測図と縮尺を合わせた。

4　出土遺物及び調査・整理・自然科学分析に係る各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。

5　遺物の註記は、中曽根遺跡の省略記号「05ナカソネ」として、出土地点や層位を続けて記した。

6　本書で示す方位はすべて真北である。また本文で述べる軸方向は真北に対する東西方向の傾きである。

7　本書に掲載した遺物番号は種別に係りなく通し番号とし、本文及び観察表・実測図版・写真図版の番号は一致している。

8　本文中の註は脚注とし、引用文献は筆者及び発行年を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

9　航空写真撮影は、J.T空撮に委託した。

10　自然科学分析は、すべて株式会社パレオ・ラボに委託した。

11　本遺跡出土の墨書土器の観察表は、田中一穂（埋文事業団調査課嘱託員）が作成した。

12　遺構・遺物図の各種図版作成・編集に関しては以下の通りである。遺構図はAdobe社Illustraorを用い、遺構写真はリバーサルフィルムで撮影したものをスキャニングし、遺物写真はデジタルカメラで撮影し、入稿を行った。また遺物図版に関しては版下を作成して入稿した。

13　本書の執筆は、青木　学（加藤建設株式会社調査担当）、内田　仁（同社調査員）、荻野早苗（同社調査員）、松田重治（同社調査員）、長谷川寿樹（同社補助調査員）、鈴木俊成（埋文事業団調査課課長代理）がこれにあたり、編集は青木が行った。執筆分担は以下の通りである。

Ⅰ章1（鈴木）　Ⅰ章2・3、Ⅲ章、Ⅳ章1・2・3、Ⅴ章1・2・3A・4C、Ⅶ章1、2A・C（青木）

Ⅱ章、Ⅳ章4B・C・D・F（内田）　Ⅳ章4A、Ⅴ章3B（荻野）　Ⅳ章4D（長谷川）

Ⅳ章4E、Ⅴ章4A・B、Ⅶ章2B（松田）

Ⅵ章1（植田弥生）

Ⅵ章2（小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani）

Ⅵ章3（黒澤一男）

14　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くのご教示・ご協力をいただいた。ここに記し、厚く御礼申し上げる。（敬称略、五十音順）

池田悦夫　石川日出志　伊東　崇　及川　穣　小野田恵　岡本郁栄　菊池誠一　関　雅之

高濱信行　野田豊文　安井千栄子　吉井雅勇

荒川町教育委員会

目　　次

第Ⅰ章　序　　章 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調 査 経 過 …… 2

A　試 掘 調 査 …… 2

B　本　調　査 …… 5

3　調査・整理体制 …… 7

第Ⅱ章　遺跡の環境 …… 8

1　遺跡の位置 …… 8

2　地理的環境 …… 8

3　周辺の遺跡 …… 11

A　弥生時代の遺跡 …… 11

B　古代の遺跡 …… 12

第Ⅲ章　調査の概要 …… 15

1　グリッドの設定 …… 15

2　基 本 層 序 …… 15

第Ⅳ章　遺　　構 …… 18

1　遺構の概要 …… 18

2　記述の方法 …… 19

3　弥生時代の遺構 …… 20

A　住　　跡 …… 20

B　土　　坑 …… 21

C　土器集中部 …… 21

4　古代の遺構 …… 22

A　掘立柱建物・柱穴列・ピット …… 22

B　井　　戸 …… 24

C　土　　坑 …… 24

D　溝 状 遺 構 …… 29

E　性格不明遺構 …… 33

F　自 然 流 路 …… 34

第Ⅴ章　遺　　物 …… 36
1　遺物の概要 …… 36
2　記述の方法 …… 36
3　弥生時代の遺物 …… 37
A　土　　器 …… 37
B　石　　器 …… 38
4　古代の遺物 …… 39
A　土器の分類 …… 39
B　土　　器 …… 43
C　土製品・石製品・鉄滓 …… 50
D　木製品・建築材 …… 50
5　その他の時代の遺物 …… 52
A　陶　磁　器 …… 52
B　銭　　貨 …… 53
第Ⅵ章　自然科学分析 …… 54
1　出土木製品の樹種同定 …… 54
2　放射性炭素年代測定 …… 60
3　珪藻化石群集分析 …… 63
第Ⅶ章　ま　と　め …… 67
1　弥 生 時 代 …… 67
A　遺　　構 …… 67
B　土　　器 …… 69
C　石　　器 …… 71
2　古　　代 …… 72
A　遺構および遺跡の立地 …… 72
B　中曽根遺跡出土の古代土器の編年的位置づけ～食膳具を中心に …… 73
C　墨 書 土 器 …… 80
《要　約》 …… 83
《引用・参考文献》 …… 84
《遺構観察表》 …… 88
《遺物観察表》 …… 91

挿図目次

第 1 図　5トレンチ土層堆積状況 …… 2
第 2 図　29トレンチ縄文土器出土状況 …… 2
第 3 図　60トレンチ杭検出状況 …… 2
第 4 図　試掘調査位置および本調査範囲図 …… 3
第 5 図　試掘トレンチ柱状図 …… 4
第 6 図　胎内川・荒川下流における旧流路・低湿地 …… 9
第 7 図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 10
第 8 図　阿賀北地域と隣接地域の主要な弥生遺跡 …… 11
第 9 図　阿賀北地域の主な窯跡と消費遺跡 …… 13
第10図　グリッド設定図 …… 15
第11図　南側調査区　基本層序 …… 16
第12図　北側調査区　基本層序 …… 17
第13図　微地形と遺構配置 …… 19
第14図　天王山式土器の文様帯 …… 36
第15図　古代の土器の部位名称と凡例 …… 39
第16図　器種分類（須恵器）…… 40
第17図　器種分類（土師器）…… 41
第18図　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（1）…… 57
第19図　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（2）…… 58
第20図　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（3）…… 59
第21図　暦年較正結果 …… 62
第22図　SR1における珪藻化石分布図 …… 65
第23図　SR2における珪藻化石分布図 …… 65
第24図　堆積物中の珪藻化石顕微鏡写真 …… 66
第25図　弥生時代　遺構配置図 …… 67
第26図　弥生時代中期～後期　住居例 …… 68
第27図　中曽根遺跡における遺構の変遷 …… 78
第28図　遺物から見た土地利用変遷 …… 79
第29図　「還」の字体（『五體字類』）…… 80
第30図　墨書土器出土位置 …… 81

表　目　次

第 1 表　本調査部分試掘トレンチ出土遺物（中世以前）…… 4
第 2 表　出土木製品の樹種同定結果一覧 …… 54
第 3 表　柱根の遺構毎の検出樹種 …… 54
第 4 表　測定試料および処理 …… 60
第 5 表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 61
第 6 表　珪藻化石産出表 …… 64
第 7 表　弥生時代中期末葉～後期編年 …… 70
第 8 表　各段階の特徴 …… 70
第 9 表　墨書土器観察表 …… 82

図版目次

〔図　版〕

図版 1　遺構全体図
図版 2　遺構分割図（1）
図版 3　遺構分割図（2）
図版 4　遺構分割図（3）
図版 5　遺構分割図（4）
図版 6　遺構分割図（5）
図版 7　遺構分割図（6）
図版 8　遺構分割図（7）
図版 9　弥生時代遺構実測図（1）SI40・SK53・P214・P219・P220・P222・P231
図版10　弥生時代遺構実測図（2）SI41・P217・P218・P228・P270
図版11　北側調査区弥生時代遺物分布図
図版12　弥生時代遺構実測図（3）土器集中部1・2・3
図版13　掘立柱建物実測図（1）SB4
図版14　掘立柱建物実測図（2）SB13・SB50
図版15　掘立柱建物実測図（3）SB37・SA5・17・P60・227
図版16　遺構実測図（1）SE14・SK6・7・24
図版17　遺構実測図（2）SK25・26・27・28・30・31・32・33・36・39
図版18　遺構実測図（3）SK42・44・45・46・47・48・49・51・52・56
図版19　遺構実測図（4）SD1・2・3
図版20　遺構実測図（5）SD1・3
図版21　遺構実測図（6）SD3・8・9・10・11・18・19・20・21・34・35・43
図版22　遺構実測図（7）SX22・55
図版23　遺構実測図（8）SX29・38・54
図版24　遺構実測図（9）SR1
図版25　遺構実測図（10）SR2
図版26　遺物分布図（1）
図版27　遺物分布図（2）
図版28　遺物実測図（1）弥生時代実測図
図版29　遺物実測図（2）弥生時代実測図

図版30　遺物実測図（3）SK6・27・28・30・31・39・47・48・52・56・SD1・2
図版31　遺物実測図（4）SD3
図版32　遺物実測図（5）SD3・8・9・19・35・43・SX38
図版33　遺物実測図（6）SR1・2
図版34　遺物実測図（7）SR2
図版35　遺物実測図（8）SR2・遺構外・木製品
図版36　遺物実測図（9）木製品
図版37　遺物実測図（10）その他の時代の遺物

〔写　真〕

図版38　調査区全景写真
図版39　調査区全景写真・基本土層
図版40　遺構写真（1）SI40
図版41　遺構写真（2）SI41
図版42　遺構写真（3）SK53・土器集中部1・2・3
図版43　遺構写真（4）SB4
図版44　遺構写真（5）SB4
図版45　遺構写真（6）SB13
図版46　遺構写真（7）SB37
図版47　遺構写真（8）SB50
図版48　遺構写真（9）SA5・17・P60
図版49　遺構写真（10）P227・SE14・SK6・7
図版50　遺構写真（11）SK7・24・25・26・27
図版51　遺構写真（12）SK28・30・31・32
図版52　遺構写真（13）SK33・36・39・42
図版53　遺構写真（14）SK44・45・46・47・48
図版54　遺構写真（15）SK49・51・52・56
図版55　遺構写真（16）SD1・2・3
図版56　遺構写真（17）SD1・2・3
図版57　遺構写真（18）SD2・3・8・9
図版58　遺構写真（19）SD10・11・19・20
図版59　遺構写真（20）SD21・34・35・43
図版60　遺構写真（21）SX22・29・38・54・55
図版61　遺構写真（22）SR1・2
図版62　遺物写真（1）弥生時代遺物
図版63　遺物写真（2）弥生時代遺物・SK6・27・28・30・31・39・48
図版64　遺物写真（3）SK47・52・56・SD1・2・3
図版65　遺物写真（4）SD3・8・9・19・35・43・SX38
図版66　遺物写真（5）SR1・2
図版67　遺物写真（6）SR2・遺構外・木製品
図版68　遺物写真（7）木製品・その他の時代の遺物
図版69　遺物写真（8）墨書土器

第Ⅰ章　序　　章

1　調査に至る経緯

日本海東北自動車道（以下、日東道とする）は、新潟中央ジャンクションから日本海に沿って北上し、山形県を経て秋田県の秋田自動車道と接続する高速自動車道である。新潟県側は新潟空港・中条インター間が平成14年度に完成している。中条インター以北は平成元年及び平成3年に基本計画が決定され、本遺跡が所在する中条・朝日インター間は、平成10年4月に施行命令が出された。これを受けて、東日本高速道路株式会社[1)]（以下、東日本高速道路とする）と新潟県教育委員会（以下、県教委とする）との間で、道路法線内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

分布調査：調査は県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団とする）が平成11年度に中条・朝日インター間で実施した。調査の結果、道路法線上には8か所の遺跡（新発見も含む）と27か所の遺跡推定地が存在し、これらについて試掘確認調査が必要である旨を県教委に報告した。中曽根遺跡は周知の道端遺跡の試掘確認調査範囲にあたり、後述する試掘調査によって道端遺跡から分離・独立させ新規登録した遺跡である。

試掘調査：調査は平成14年5月7日から7月31日に実施した。調査の結果、主要地方道新潟・新発田・村上線以北で古代を中心とする遺構・遺物を検出し、検出地点の小字名から中曽根遺跡として登録した。この時点で推定された本発掘調査面積は12,000㎡である。

試掘調査後、高速自動車道早期供用のため、当面は暫定二車線部分に調査範囲を限定することが決定され、中曽根遺跡の本発掘調査面積は8,810㎡と修正した。

平成15年10月1日の東日本高速道路・県教委及び埋文事業団との協議（以下、三者協議とする）で、東日本高速道路が示した平成16年度の調査要望は膨大なものであった。しかし、この調査要望も「民営化」や「事業の見直し」など諸問題を抱えている東日本高速道路にあっては確定的なものではなかった。10月8日、県教委と埋文事業団は平成16年度の受託事業について協議を行った。そして、日東道建設が決定し要望どおりの調査量が提示された場合、現調査体制ではこれに対応できないことから、日東道建設に限って民間調査機関に全部委託するという方針が出された。翌年の1月8日、国土開発幹線自動車建設会議が終了し、日東道は東日本高速道路で建設することが可能になった旨が県教委に伝えられた。これを受けて2月20日に最終的な三者協議が開設され、調査は埋文事業団職員の管理・監督のもと民間の調査機関に全部委託することとなった。

本発掘調査：平成17年度調査か所の協議は平成16年9月30日から開始し、平成17年2月17日の三者協議で決定された。調査は胎内市・荒川町・神林村内の9遺跡、面積にして約76,000㎡である。

中曽根遺跡は、この9遺跡の一つで、調査面積8,810㎡を対象に4月19日から実質的な調査を開始した。

---

1)　日本海東北自動車道の事業は、日本道路公団の分割民営化により、平成17年10月17日に設立された東日本高速自動車道路株式会社に引き継がれた。本文中では「東日本高速道路」と統一して表記する。

2 調査経過

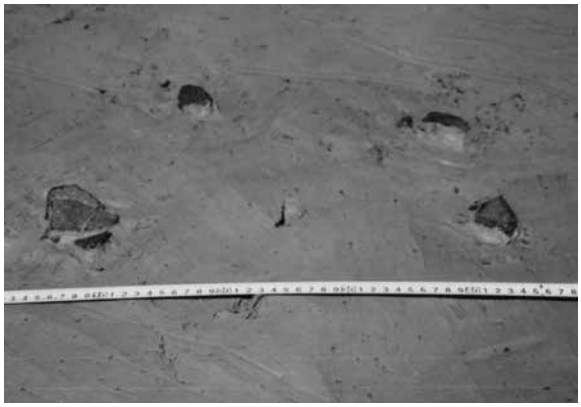
A 試掘調査

中曽根遺跡についての試掘調査は、県教委から委託を受けた埋文事業団が平成14年5月7日から7月31日の期間に、周知の遺跡である道端遺跡内に合計69か所のトレンチを任意に設定し実施した。遺物は調査範囲のほぼ全域に渡って出土し、時期は縄文時代・古墳時代・古代・中世・近世のものがみられた。遺構が集中して検出される範囲を確認したが、道端遺跡とは約800m離れており、別遺跡と考えられた。そこで字名をとって「中曽根遺跡」と呼称することとした。なお上記のトレンチのうち、中曽根遺跡の範囲内にあたるものは7トレンチ、9～69トレンチまでの計62か所である。

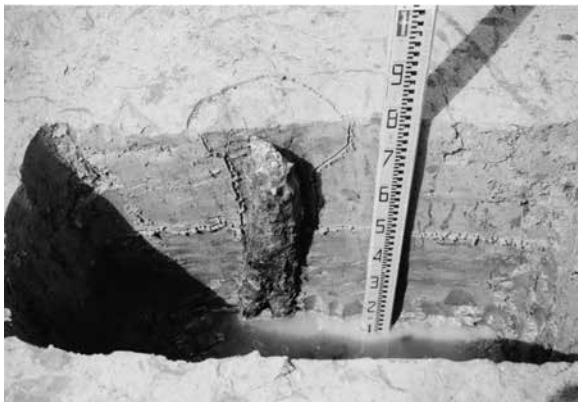
試掘範囲は広範囲に渡り、また調査範囲内で旧河川が調査区を横切るように何条も検出されている。旧河川が検出されたトレンチは20・33・34・37・39・53・66～68トレンチであり、そのうち66～68トレンチで検出されたものは本調査の自然流路2に相当すると思われる。湧水がみられる標高も一定ではなく、5・6トレンチ付近では標高－0.5mにおいても明確な湧水はなかったが、43・44トレンチ付近では標高2m付近で激しい湧水がみられた。このような状況から考え、中曽根遺跡範囲内の堆積状況は一定ではなかったと思われる。確認された堆積土は耕作土以下粘質土、粘性シルトを主体とする層が多く、色調も緑灰色～青灰色が大半を占めていた。鍵層となるような、「ガツボ層」と呼ばれる未分解植物層も少なく、各トレンチ間での対応関係は明瞭ではなかった。なお本来ならば耕作土の下位に古代の包含層が存在すると考えられたが、試掘範囲内ではほとんど確認されなかった。

試掘調査の結果、中曽根遺跡の範囲内で遺構の確認されたトレンチは13基である。その内訳は34トレンチでピット、52・57・58のトレンチでは同一のものと考えられる溝状遺構、55・59トレンチではピット、60トレンチで杭、61・62トレンチでは大規模な遺構プラン、66～68トレンチで埋没河川、69トレンチで井戸・溝状遺構・ピット13基が検出されている。このうち60トレ

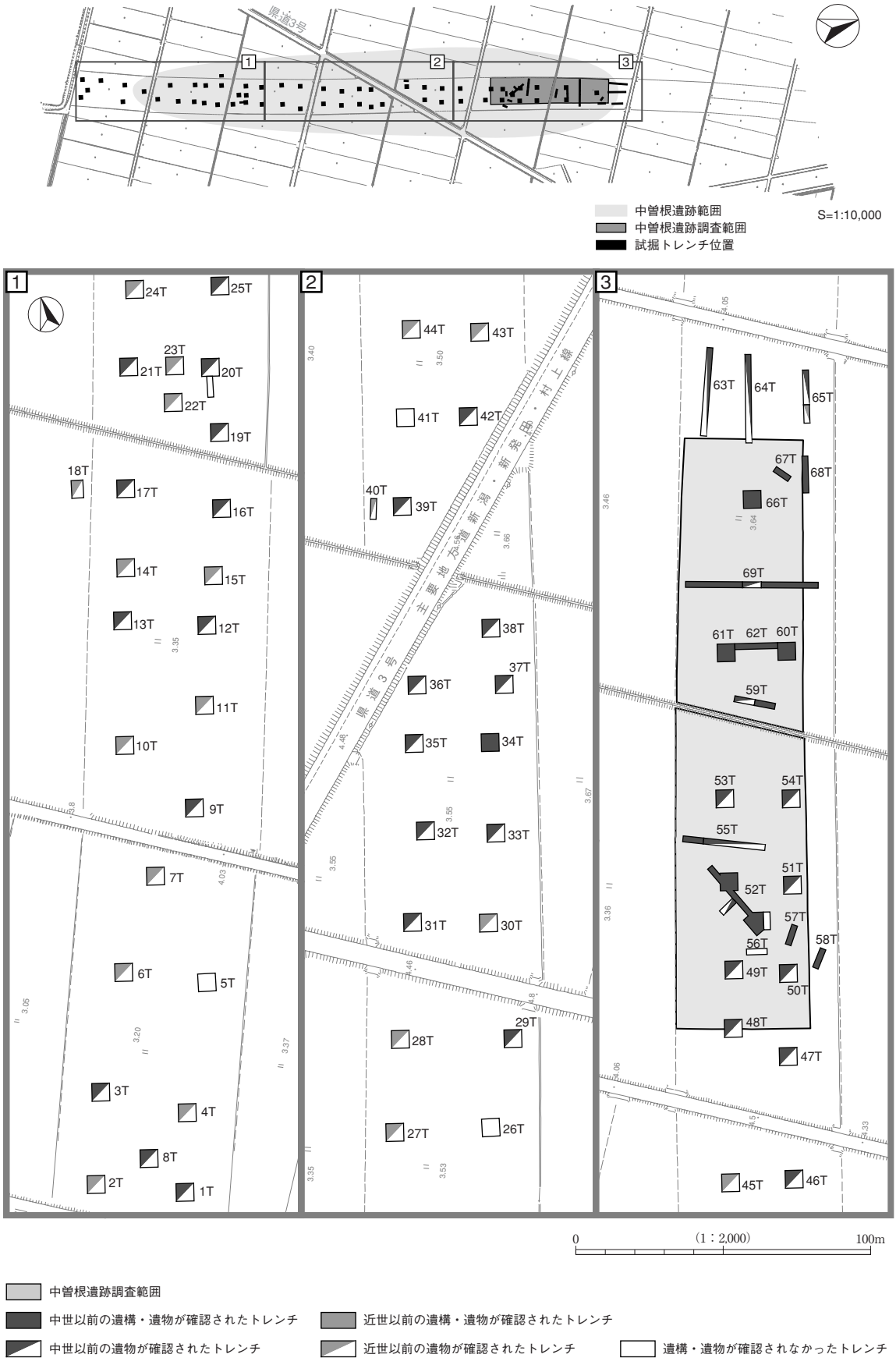
第1図　5トレンチ土層堆積状況



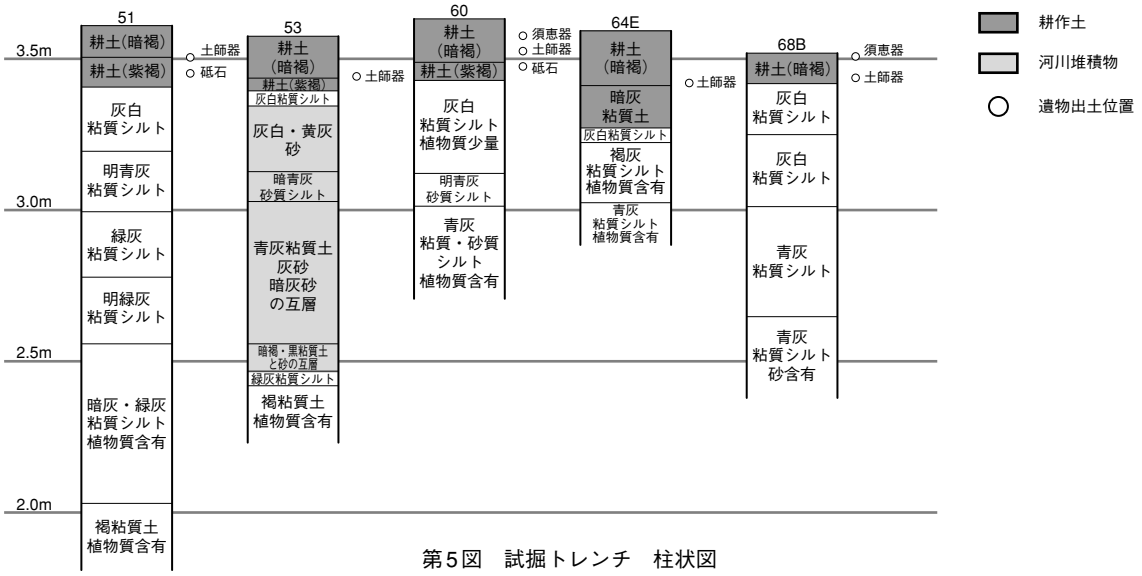
第2図　29トレンチ縄文土器出土状況



第3図　60トレンチ杭検出状況



第４図　試掘調査位置および本調査範囲図



第５図　試掘トレンチ　柱状図

トレンチ	層位	種別	点数	備考
48	耕作土	土師器	1	
49	耕作土	土師器	1	
50	耕作土	瀬戸美濃？	1	
		土師器	3	
51	耕作土	土師器	2	
		不明	1	
		砥石	1	
		木製品	3	
52	耕作土	須恵器	6	
		土師器	33	
		砥石	1	
		礫	2	
		石材	2	
	SD覆土	須恵器	2	
		土師器	4	
		剥片	1	
		礫	1	
53	耕作土	土師器	6	
		木製品	1	
54	耕作土	土師器	7	
		木製品	1	
55	耕作土	須恵器	1	
		土師器	26	
		粘土塊	1	
		叩石	1	
		木製品	1	
56	耕作土	木製品	1	
57	耕作土	土師器	9	
		漆器	1	
		礫	1	
58	耕作土	須恵器	1	
		土師器	2	
59	耕作土	須恵器	2	
		土師器	44	
		砥石	1	
	Pit覆土	須恵器	2	
60	耕作土	須恵器	3	
		土師器	39	小片あり
		鉄滓	16	
		礫	8	被熱
	Pit覆土	柱根	1	

トレンチ	層位	種別	点数	備考
61	耕作土	須恵器	7	
		土師器	45	小片あり
		灰釉陶器？	1	
		礫	8	
	3層	須恵器	5	
		土師器	41	小片あり
62	耕作土	土師器	35	
		礫	2	
63	耕作土	須恵器	2	
		土師器	22	小片あり
		剥片	1	
64	耕作土	須恵器	3	
		土師器	14	
		砥石	1	
		石材	1	
65	耕作土	須恵器	1	
		土師器	5	小片あり
66	耕作土	須恵器	1	
		土師器	40	小片あり
		礫	2	
	河川跡	土師器	2	
67	耕作土	須恵器	2	
		土師器	10	小片あり
		須恵器	1	
	河川跡	土師器	31	小片あり
68	耕作土	須恵器	1	
		土師器	4	
		須恵器	1	
	河川①～③層	土師器	24	
		須恵器	1	
	河川④～⑥層	土師器	18	
		礫	1	
	河川⑦層	土師器	2	
		礫	2	
69	耕作土	須恵器	14	
		土師器	111	
		鍛冶関連	4	
		石材	1	
		須恵器	1	
	SD覆土	土師器	1	

第１表　本調査部分試掘トレンチ出土遺物（中世以前）

ンチの杭は、検出位置から本調査のSB50を構成する柱根であったと考えられる。

遺構の検出された面は、耕作土直下の明青灰色・灰白色を呈する粘質土または粘質シルトとなっている。遺構分布を見ていくと、34トレンチで検出されたピット以外は、県道3号線（主要地方道新潟・新発田・村上線）より北側に分布している。これらの遺構の時期は、検出層位および出土遺物からすべて古代に属するものと考えられる。

遺物は大半のトレンチで出土しており、縄文時代・古墳時代・古代・中世・近世のものがみられる。出土層位は前述のように古代の遺物包含層がほとんど確認されておらず、少数のものを除いてほぼ耕作土からとなっている。種別は縄文土器、古墳時代土師器、古代土師器・須恵器、中世土師器、珠洲焼、青磁、近世以降陶磁器、鉄滓・羽口などの鍛冶関連遺物、石器、礫などとなっている。縄文時代の遺物は19・21・29・35・36トレンチで散発的にみられ、遺物の時期は19・21トレンチが縄文時代中期初頭、29トレンチが縄文時代晩期初頭、35トレンチで縄文時代後期前葉～中葉、36トレンチで縄文時代晩期末葉となっている。出土レベルは、19・21トレンチで標高約1.5～2m、29トレンチで標高約2.5m、35トレンチでは標高約1.6～2.3m、36トレンチで標高約3mを測る。そのうち35トレンチは河川堆積物と考えられる砂質シルト層からの出土である。古墳時代土師器は遺跡南端付近の9・12・16トレンチでみられ、12トレンチの遺物は包含層と考えられる層からの出土である。なお両時代の遺物は、県道3号線より北側ではみられなかった。古代の遺物の分布傾向は59～62トレンチ付近に多くみられ、県道より南側は各トレンチで5点以下となっている。鉄滓は59トレンチに集中しており、また羽口片は60トレンチで出土している。中世の遺物は12・13・20・25・36・50トレンチで出土しているが、出土量は少なく、また遺構も検出されていない。近世以降の陶磁器は遺跡全域から出土しているが、遺構は検出されていない。

以上のように中曽根遺跡は出土量に濃淡はあるが、遺跡全域に渡って遺物が出土している。その中においても遺構と遺物の検出状況から、特に古代を中心にした集落遺跡と考えることができる。そこで本発掘調査範囲は古代の遺構・遺物の分布が集中しており、集落の中心と考えられる第4図のように決定した。

B　本発掘調査

本発掘調査は、試掘調査結果に基づいて8,810㎡を対象に行った。調査区内は現代の水田面より標高が下がることから、調査区の周囲に排水用の開渠を施設し、調査区内に水が溜まるごとに排水を行った。また調査区中央を東西方向に農業用水路が横切っており、南北に調査区が分断されている。そこで水路を挟んで南側調査区と北側調査区に分けて（第10図）調査を行うこととし、南側調査区から開始した。なおこの農業用水路は現地表面から約1.5m掘り込まれており、その部分は遺構などが破壊されていることが判明した。そのため水路部分は調査を行わないこととした。ただし水路両脇の盛土部分には、遺構が存在しており、調査を実施するとした。

調査開始は4月19日からであり、始めに試掘調査で確認された土層の堆積状況、遺構確認面までの深さなどを再確認するために調査区内にトレンチを10か所任意に設定し、人力で掘削を行った。これによって古代の遺物包含層は残っておらず、表土直下が遺構確認面になっていることが確認された。遺構確認面までの深さは調査区の南北端でやや深くなるが、20E区付近では浅く約15cmで達することが判明した。

4月20日からトレンチ掘削と並行して重機による表土除去を開始したが、天候不順などの影響もありゴールデンウイークを挟んだ5月18日に終了した。

本格的に調査を開始したのは表土掘削の終了する直前の5月17日からであり、作業員を増員し南側調

査区から行った。遺構精査は6月13日まで行い、また遺構確認面には水田耕作による踏み抜き痕が見られたことから、遺構確認が十分行える面まで掘削した。その作業を行っている最中の、6月6日に弥生土器が7B6・7区のⅣ層から集中して出土し、その周囲を精査したところ6月9日に7C15区からもう1か所土器集中部が発見された。また6月9日には13・14D・E区付近で柱根を伴うピット群が検出され、後にSB4・13の掘立柱建物になることが判明した。遺構掘削は、6月8日より遺構精査の終了した南側から開始した。溝状遺構などの遺構掘削は当初順調に進んだが、7月中旬にSD3で大量に遺物が出土し、掘削と遺物取り上げを交互に行うような状況となった。7月下旬にはSD3の遺物取り上げが一段落して、また遺構掘削も目処がつく状況となった。航空写真撮影は天候不順によって何度か延期になったものの、8月2日に行った。航空写真終了後最終確認作業を行い、8月8日に南側調査区の調査を終了した。

北側調査区は南側調査区と並行して、6月23日より調査を開始した。遺構精査は南側調査区と同じように進め、お盆休みを挟んで8月29日まで行った。その作業中の8月19日に弥生土器が20D・E区付近から焼土とともに集中して出土し、弥生時代の遺構・遺物も存在することが判明した。遺構掘削は、遺構精査と並行して7月6日より行った。遺構は南側調査区と比較して密度が高く、特にピットが多量に検出されたため、その実測などに追われることとなった。また自然流路が2条検出されたが、自然流路2としたものが規模も大きく底面まで深かったため、掘削に時間がかかる状況になった。9月中旬には北側調査区における遺構の概要がほぼ判明し、9月27日に航空写真撮影を行い、10月1日に遺跡見学会を実施した。10月3日から遺跡中央を横切る農業用水路に伴う盛土部分の調査を開始し、SD3の延長部分、SB13の柱穴などの調査を行った。その作業と並行して北側調査区の最終確認作業を実施し、10月13日に終了した。10月14日には盛土部分の調査を終了し、重機によって盛土の復旧を行い、18日に終了した。10月21日に土層堆積状況の確認のための深堀りと残っていた実測作業を行い、すべての調査を終了した。実質調査面積は8,563㎡となった。

10月24日に県教委による終了確認、翌25日に新潟県荒川沿岸土地改良区による水路盛土部分の復旧確認を得て、10月27日に東日本高速道路へ引渡した。

3　調査・整理体制

調 査 体 制

【試掘調査】

調査期間　平成14年5月7日～7月31日
調査主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越　麟一）
調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
管　　理　黒井　幸一（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団事務局長）
　　長谷川司郎（　同　総務課長）
　　岡本　郁栄（　同　調査課長）
庶　　務　高野　正司（　同　総務課班長）
調査指導　寺崎　祐助（　同　調査課公団担当課長代理）
調査担当　石川　智紀（　同　班長）
　　片岡　千恵（　同　嘱託員）

【本発掘調査・整理作業】

現地調査　平成17年4月19日～10月21日
整理作業　平成17年7月1日～平成18年3月31日
調査主体　新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）
調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
管　　理　波多　俊二　（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団事務局長）
　　長谷川二三夫（　同　総務課長）
　　藤巻　正信　（　同　調査課長）
監　　督　鈴木　俊成　（　同　調査課日東道担当課長代理）
　　辻　　範朗　（　同　調査課日東道担当主任調査員）
庶　　務　長谷川　靖　（　同　総務課班長）
調査組織　加藤建設株式会社
　現場代理人　寿盛　友則（加藤建設株式会社新潟支店）
　調 査 担 当　青木　　学（　同　調査担当）
　調　査　員　内田　　仁（　同　調査員）
　　松田　重治（　同　調査員）
　　荻野　早苗（　同　調査員）

第Ⅱ章　遺跡の環境

1　遺跡の位置

中曽根遺跡は県道3号線沿いの新光寺集落と金屋集落の間、岩船郡荒川町大字金屋字中曽根725ほかに位置する。

遺跡が所在する荒川町は新潟県北部、下越地方の岩船郡の南端に位置する。荒川町は昭和29（1954）年に保内町と金屋町の合併により誕生した。この合併は、地方自治の基盤を強化し地方行政を簡素合理化することを目的とした町村合併促進法に基づいたものであり［勝田1988］、当時荒川町と同じように県内外を問わず多くの町村合併が行われ、新たな自治体が誕生した。

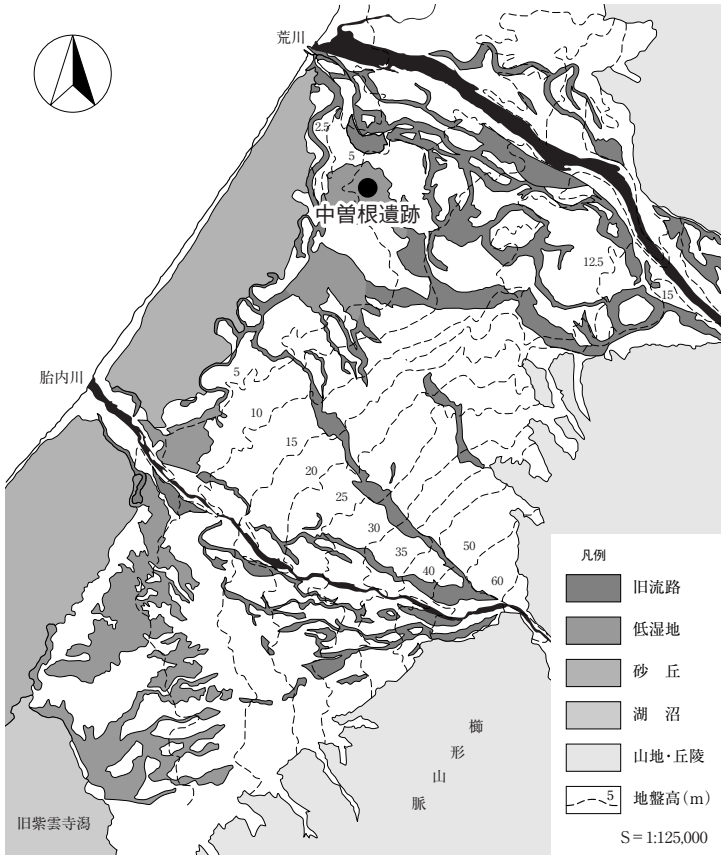
現在、周囲には北に岩船郡神林村、東に同郡関川村、そして荒川町を包み込むように南西から南東に掛けて胎内市が接している。荒川町は交通の要衝であり、国道7号線と113号線が縦横に走り、JR坂町駅では羽越本線（新潟・新津－秋田）と米坂線（米沢－坂町）が分岐する。

2　地理的環境

中曽根遺跡は日本海岸に沿って南西から北東に細長く広がる越後平野の北東部、砂丘列の後背地に位置する。現況はほ場整備事業により水田化されており、旧地形を窺い知ることが出来ない。しかし、今回の調査で旧地形に若干の高低差があることが認められた。遺跡の標高は3.2～3.5mを測る。

中曽根遺跡が所在する越後平野は日本でも有数の広さを誇る平野であり、面積は約2,000k㎡に及ぶ。越後平野は沖積低地が大半を占め、洪積段丘は小千谷市周辺から長岡にかけて発達する以外は、新津丘陵と笹神丘陵の西側、新発田市東方などにみられるだけで、その面積も極めてわずかである［歌代ほか1979］。また、盆地を通り抜けて日本海に流れ出る南西部の信濃川、阿賀野川などの流域では扇状地の発達が乏しい。一方、越後山脈から直接流れ込む北東部の河川流域では扇状地が発達している。中曽根遺跡の周辺を流れる胎内川と荒川でも扇状地が形成されており、特に胎内川は等高線が同心円状になる代表的な扇状地を形成する［歌代ほか1979・鈴木2004］。中曽根遺跡の前方に広がる越後砂丘は、海岸線に平行して発達し、越後平野最北端に位置する岩船から角田山麓にいたる延長約80km、最大幅約10kmを有する日本海側最大の砂丘である［新潟古砂丘グループ1974］。砂丘列は阿賀野川以北、新潟東港付近で最も多い10列を数え、信濃川と阿賀野川に挟まれた旧中蒲原郡亀田町付近で最も内陸まで分布する［鈴木2005］。また平野の両端部では、より新しい砂丘が古い砂丘に覆い重なるように収斂する。砂丘列の形成年代については、これまでさまざまな検討がなされている［阪口1964・新潟古砂丘グループ1974・大平1992・田中ほか1996］。新潟古砂丘グループが砂丘列を新砂丘Ⅰ～Ⅲに大きく3つに大別し、さらに新砂丘Ⅰ－1～4、新砂丘Ⅱ－1～4、新砂丘Ⅲ－1～2と細分して以降は、おおよそこの分類が踏襲されている。砂丘列の形成時期はまず遺跡や考古遺物を基準にして行われ、その後C14年代値や珪藻分析等の自然科学も利用されるようになる。特に鴨井は、それまで推定されていた年代値の幅がかなり大きく、細かな時期の比定がされていないこと、砂丘例の形成と遺跡や遺物が残されるまでの時間差が不明であり、推定年代が真の形

成年代を示すとは限らないことを指摘し、C14年代値に基づき砂丘列ごとに細かく推定を行っている「鴨井2002」。その推定によると、新砂丘Ⅰの基層となる砂層の形成が約8,000年前（縄文時代早期中葉）、新砂丘Ⅰ－1及びⅠ－2が約6,000年前（縄文時代早期末～前期初頭）、新砂丘Ⅰ－3が約6,000～5,000年前（縄文時代前期）、新砂丘Ⅰ－4が約5,000年前（縄文時代前期末～中期初頭）、新砂丘Ⅱ－1が約4,800～4,000年前（縄文時代中期）、新砂丘Ⅱ－2が約3,600～3,000年前（縄文時代後期）、新砂丘Ⅱ－3が約3,000年前（縄文時代後期末～晩期初頭）、新砂丘Ⅱ－4が約2,000年前（弥生時代）、新砂丘Ⅲ－1が約1,700～1,100年前（古墳時代～平安時代初期）、新砂丘Ⅲ－2が約1,100年以降（平安時代中頃）としている。これまでの形成年代観とは、新砂丘Ⅱの細分を行ったこと、新砂丘Ⅲに具体的な時代を付与した点が大きく異なっている。中曽根遺跡付近の砂丘列は乙砂丘と呼ばれている。越後砂丘は加治川分水を越える付近になると、各列が上下に重なり、一列の砂丘列になる［鈴木2005］ことから、乙砂丘も新砂丘列Ⅰ、Ⅱ、Ⅲが累重する状態となる。



※複数の異なる時代の流路も含まれている可能性がある。

第6図　胎内川・荒川下流における旧流路・低湿地（鈴木2004一部改変）

中曽根遺跡の周辺では荒川、乙大日川、胎内川が流れている。遺跡の北側を流れる荒川は信濃川、阿賀野川に次いで県内では3番目に大きな河川である。山形県小国町の大朝日岳（1,870m）を発し、小国盆地を通過して新潟県内に入り、乙大日川と合流して胎内市桃崎浜で日本海に流れ出る。遺跡の南側を流れる胎内川は胎内市と新発田市にまたがる二ッ峰の胎内市側を水源とする。山間部においては北、もしくは北西方向に流れているが、平野部に差し掛かると西方向に流れを変え、越後平野を横断して胎内市笹口浜から日本海に流れ出る。現在の河口は明治21（1888）年に行われた砂丘の開削工事により形成されたものであり、以前は、日本海沿いに発達した砂丘列に流れが遮られるため、砂丘列に平行しながら北流し、荒川と河口付近で合流していた。現在、荒川の支流として管理されている乙大日川は、胎内川が北流していた当時の名残である。

（国土地理院「中条」1991）

No.	遺跡名	時　代
1	宮の越遺跡	古代
2	高田遺跡	古代
3	在ヶ付III遺跡	弥生・古代
4	石川遺跡	古代・中世
5	砂山VI遺跡	古代
6	窪田遺跡	古代・中世・近世
7	衣田遺跡	縄文・古墳・古代
8	黒田B遺跡	縄文・古代
9	黒田A遺跡	縄文・古代
10	長松遺跡	縄文・弥生・古代
11	中部北遺跡	弥生
12	道上遺跡	古代

No.	遺跡名	時　代
13	中部遺跡	弥生・古墳・古代・中世
14	西部遺跡	古代・中世
15	田島遺跡	古代・中世
16	桜林遺跡	縄文・古代・中世・近世
17	坂町宮ノ越Ｂ遺跡	古代
18	坂町宮ノ越Ｄ遺跡	弥生・古代
19	鴨侍遺跡	古代
20	寺田遺跡	古代
21	古谷地B遺跡	古代
22	道端遺跡	縄文・弥生・古墳
23	高柳A遺跡	古代
24	高柳B遺跡	古代

No.	遺跡名	時　代
25	乙遺跡	弥生
26	乙宝寺	古代・中世
27	城山遺跡	弥生・古代
28	元山窯跡群	古代
29	江添遺跡	縄文
30	昼塚遺跡	縄文
31	道下遺跡	縄文
32	野地遺跡	縄文
33	松山窯跡	古代
34	大坪遺跡	古代
35	沢田遺跡	古代

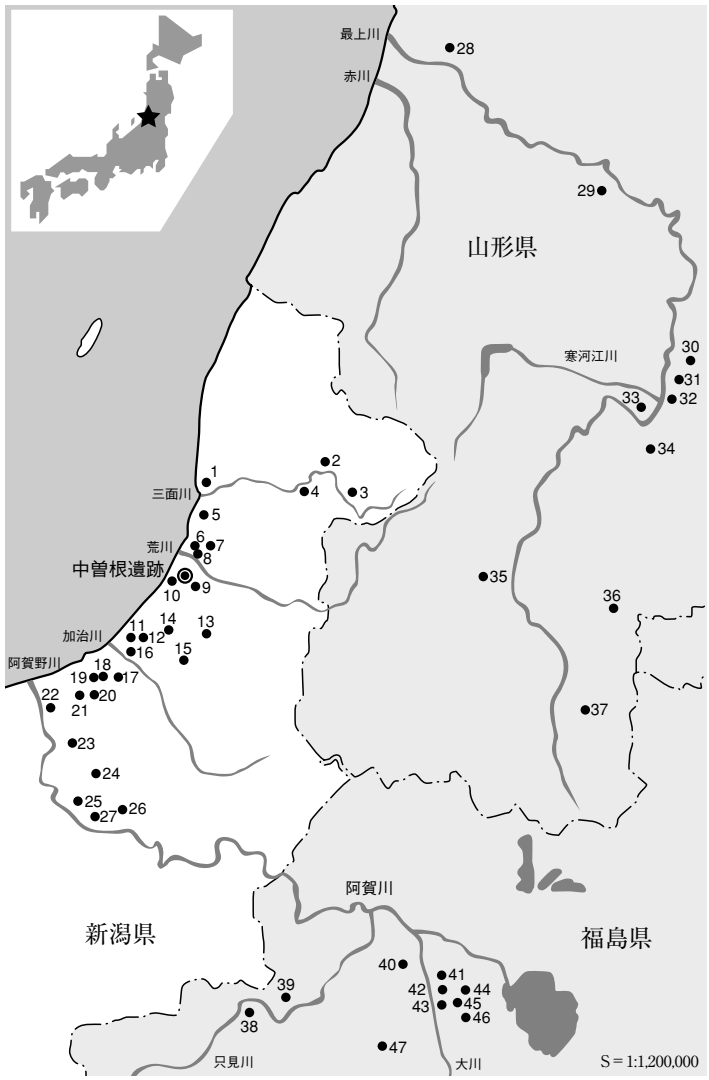
第７図　遺跡の位置と周辺の遺跡

3　周辺の遺跡

中曽根遺跡の時期は、検出された遺構および遺物から弥生時代と古代に大きく分けることができる。そこで、ここではこれらの時期ごとに本遺跡周辺の遺跡について述べる。ただし、中曽根遺跡周辺は弥生時代の遺跡が非常に少ないため、下越地方の阿賀野川以北（以後、阿賀北地域とする）にまで範囲を広げて概観する。さらに、弥生時代の遺跡の位置を示した挿図には、参考のため近隣の山形県と福島県の代表的な遺跡を加えた。

A　弥生時代の遺跡

越後平野では砂丘上、もしくはその背後に広がる後背湿地に立地した遺跡が多い。これは狩猟採集を生業の基盤とする縄文時代の遺跡が、開析谷の河川流域、丘陵や台地の縁に多く分布することと大きく異なる。低地への進出は、水稲耕作に適した土地の利用を目的としたものと思われる。しかし、現在のところ阿賀野川以北においては、刈羽村西谷遺跡［滝沢ほか1992］の水田跡や佐渡市平田遺跡［坂上ほか2000］の板杭列のように、水稲耕作に関連する遺構は検出されていない。新潟県内で最初に弥生時代遺跡として発掘調査が行われた山草荷遺跡も砂丘上に立地する遺跡である。山草荷遺跡［八幡1936］は加治川右岸の砂丘上に立地し、昭和10年（1935）に八幡一郎・大木金平によって調査が行われた。遺跡からは東北地方南部の影響を受けた多数の土器が出土し、二本一単位の平行沈線で渦巻文や菱形文を描く特徴を有する山草荷式土器の標識遺跡となっている。そのほかでは、村上市の砂山遺跡［石丸ほか



■新潟県
1．滝ノ前／村上市
2．長者岩陰／岩船郡朝日村
3．二又／岩船郡朝日村
4．岩崩／岩船郡朝日村
5．砂山／村上市
6．長松／岩船郡神林村
7．衣田／岩船郡神林村
8．中部／岩船郡神林村
9．道端／岩船郡荒川町
10．乙／胎内市（旧中条町）
11．兵衛／胎内市（旧中条町）
12．四ツ持／胎内市（旧中条町）
13．分谷地Ａ／胎内市（旧黒川村）
14．下町・坊城Ｂ地点／胎内市（旧中条町）
15．村尻／新発田市
16．山草荷／新発田市（加治川村）
17．山三賀Ⅱ／北蒲原郡聖籠町
18．二本松 二本松東山／北蒲原郡聖籠町
19．椋3／新潟市（旧豊栄市）
20．城山／新潟市（旧豊栄市）
21．松影Ａ／新潟市（旧豊栄市）
22．引越／新潟市（旧豊栄市）
23．猫山／阿賀野市（旧京ヶ瀬村）
24．十二神遺跡／阿賀野市（旧笹神村）
25．獅子沢／阿賀野市（旧安田町）
26．六野瀬／阿賀野市（旧安田町）
27．大曲／阿賀野市（旧安田町）

■山形県
28．生石／酒田市生石
29．上竹野／最上郡大蔵村
30．小田島城跡／東根市
31．蟹沢／東根市蟹沢
32．地蔵池／天童市
33．石田Ａ／寒河江市
34．向河原／山形市
35．長者屋敷／長井市草岡
36．観音岩岩陰／高畠町
37．堂森／米沢市

■福島県
38．荒屋敷／三島町
39．宮崎／三島町
40．能登／会津坂下町
41．屋敷／会津若松市
42．二ツ釜／会津若松市
43．一ノ堰Ｂ／会津若松市
44．墓料／会津若松市
45．河原町口／会津若松市
46．南御山／会津若松市
47．五本松／会津美里町

第８図　阿賀北地域と隣接地域の主要な弥生遺跡

2003］、神林村の長松遺跡［田辺ほか1991］、胎内市の兵衛遺跡［水澤1998］、四ツ持遺跡［水澤1998］、新潟市松影Ａ遺跡［加藤ほか2001］なども砂丘上に立地する当該期の代表的な遺跡である。特に、海岸から内陸に約6kmに入った砂丘上に立地する松影Ａ遺跡からは、広義の天王山式土器がまとまって出土しているほかに、数量的には少ないものの、北陸系土器の一群が出土しており、両者の関係を明らかにする上でも貴重な遺跡である。

また阿賀北地域ではほとんど住居の検出例がなく、柏崎市の下谷地遺跡［高橋ほか1979］のように集落の様相を窺い知ることができる遺跡は、現在のところ見つかっていない。村上市に所在する滝ノ前遺跡［関1972］は、三面川が日本海へと流れ出る河口の右岸に形成された段丘上に立地する。滝ノ前遺跡では竪穴式住居が3軒検出されている。住居は円形のプランを呈し、ほぼ中央に地床炉を持つ。発掘調査で確認されているわけではないが、胎内市の乙遺跡でも炉跡を伴う竪穴式住居と見られる落ち込みが5軒確認されている［戸根2005］。再葬墓が検出されたことで著名な猫山遺跡［古澤ほか2003］では、近年再び調査が行われ、弥生時代前期に属する掘立柱建物が検出された。そのほかでは、17年度に調査が行われた道端遺跡［前川2005］からも検出されている。

一方、再葬墓を中心とした墓域の検出例は上越・中越地域よりも多く検出されており、この地域の特徴と言える。胎内川左岸の標高約100mの段丘上に位置する分谷地Ａ遺跡では、弥生時代前期から中期に至る時期の再葬墓が検出されている。また、出土した土器には東海地方を中心として分布域を持つ水神平式土器も含まれており、広範囲な地域間交流が行われていたと考えられる［伊東2005］。新発田市の北東部、坂井川の自然堤防上に立地する村尻遺跡［関ほか1982］では、検出された11基の土坑のうち、9基が再葬墓であった。分谷地Ａ遺跡と同様に東海系の土器が出土しているほか、副葬品と思われるヒト形土製品が出土するなど当時の墓制を明らかにする上で貴重な成果が得られている。そのほかにも、阿賀野川流域では新潟市の猫山遺跡、阿賀野市の六野瀬遺跡［杉原1968］、大曲遺跡［北越考古学研究会1989］がある。六野瀬遺跡では再葬墓に隣接して伸展葬人骨一体が検出され、再葬方法の一端が明らかになった。

以上のように阿賀北地域の弥生時代遺跡を概観していくと、まだ十分とは言えないものの、遺跡の立地、土器や石器などの生活用具、墓制についてはある程度当時の様子を窺い知ることのできる資料が得られていると言える。しかし、上述したように水田などの生産遺構や住居跡の検出例が非常に少ないことから、当該期の集落形態となると非常に不明瞭である。このため中曽根遺跡における住居跡の検出例は、当時の居住形態を明らかにする上で一つの手がかりになると思われる。

Ｂ　古代の遺跡

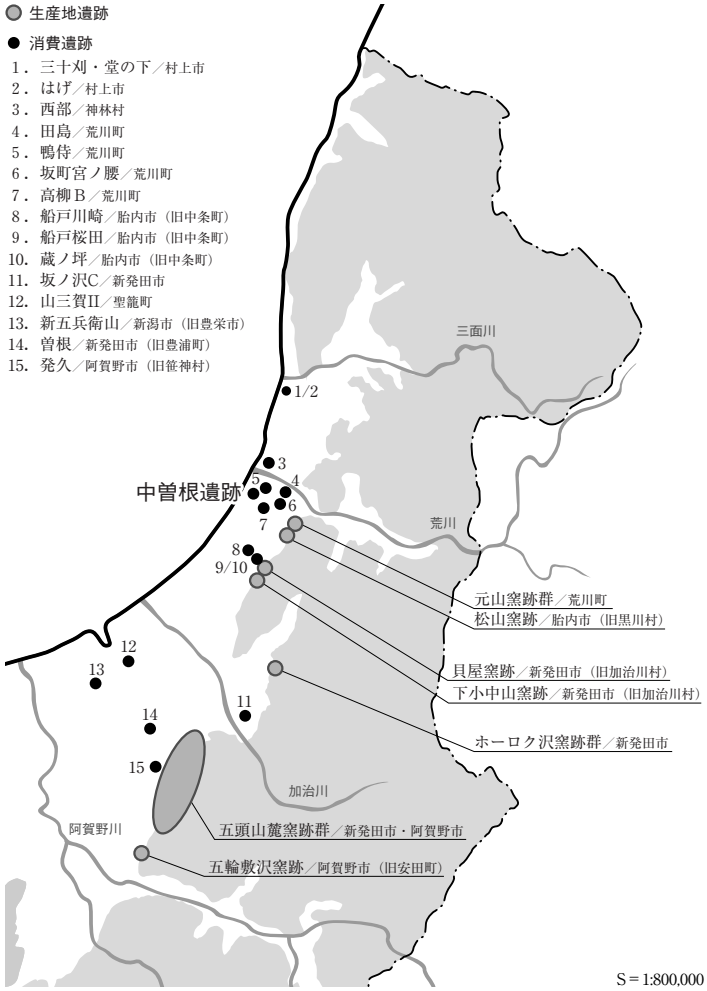
7世紀中頃まで中曽根遺跡周辺を含む阿賀北地域は辺境と位置づけられ、中央の力が及ばない地域であった。そのため大和朝廷は、蝦夷政策の拠点として大化3年（647）に渟足柵、同4年（648）磐舟柵を設置した。ほぼ同時期に、太平洋側でも宮城県仙台市に陸奥国府の前身となる郡山遺跡［仙台市史編さん委員会1994］が築かれており、辺境地政策が日本海と太平洋の両側で同時平行的に行われていたことがわかる。

弥生時代以降顕著になった低地への進出は普遍化し、人々の生活の場が平野部に移行した。特に中曽根遺跡の周辺では砂丘の内陸側及び自然堤防上に多くの遺跡が残されている。ところで、胎内川右岸の沖積地には、この時期の遺跡がほとんどない。これはかつて北流していた旧胎内川（現乙大日川）の堆積作用の影響で、遺跡が埋没している可能性が極めて高い［戸根2005］。対照的に、胎内川左岸にはこの時期の

遺跡が比較的多く分布している。

次に、古代における中曽根遺跡の周辺遺跡を概観する上で、集落、窯跡や製塩などの生産、祭祀というように整理して述べていきたい。

本遺跡の南東に位置する鴨侍遺跡では、中心的建物と考えられる大型の掘立柱建物を含む、7棟の建物が検出されている。この遺跡からは複数の陶製硯が出土し、周溝がめぐる大型建物と一般掘立柱建物や倉庫がセット関係にあることから、一般の農民集落とは考えにくく、郡司層の居宅と想定されている［吉井2002］。また、中曽根遺跡から約2.5km東に位置する田島遺跡［吉井2001］では、竪穴式住居から製作年代が明らかな緑釉陶器・灰釉陶器とともに、ほとんどの器種を含む良好な一括資料が出土し、編年的位置づけを行う上で非常に有益な資料が得られている。さらに、中曽根遺跡からやや南へ進んだ舟戸川沿いに蔵ノ坪遺跡［飯坂ほか2002］がある。蔵ノ坪遺跡で検出された川跡から、「津」と記された墨書土器、「少目御館米五斗」と書かれた荷札木簡などが出土し、また川跡の両岸に建物群が建ち並んでいたことが判明した。それゆえ、これら出土資料および建物の立地構造から、蔵ノ坪遺跡は川の津施設と想定された。蔵ノ坪遺跡から西に約400m離れたところにある船戸桜田遺跡［水澤ほか2001］でも、川跡から人面墨書土器や「麻續部宿奈万呂」と人名が記された木簡を含む大量の遺物が出土している。船戸桜田遺跡は蔵ノ坪遺跡で検出された川跡の下流部に位置し、ここでも川岸から掘立柱建物が検出されている。その他、荒川右岸に位置する西部遺跡［折原ほか2004］でも、当該期の良好な遺構が検出され、多数の遺物が出土している。しかし、現在も継続して調査が行われているため、本報告の刊行を待ちたい。



第9図　阿賀北地域の主な窯跡と消費遺跡

中曽根遺跡周辺の須恵器窯跡は、櫛形山脈の西麓に点在している。本遺跡の南西に位置する元山窯跡では、7基の須恵器窯とそれらに伴う灰原及び作業場が検出された。出土した多量の土器は、おおよそ8世紀後半から9世紀前半に位置づけられる。また検出された7基の窯跡は、出土した土器の分析と遺構間の切り合い関係から、同時ではなく、それぞれ時間的前後関係をもって操業していたことがわかった［吉井1999］。特に6号窯跡は、福島県会津市の大戸窯の系譜と考えられ、一般的に北陸を経由した畿内系を技術的母胎とするこの地域の特色と異なる。元山窯跡の南側には9世紀前葉から中葉に位置づけられる松山窯跡［伊東1998］がある。松山窯跡からは2基の須恵器窯と灰原、そして2基の竪穴状遺構が検出された。

元山窯跡と同様に会津地方の影響を受けたと考えられる資料が存在する。しかし、沼垂郡に特有な折縁杯を生産しているなど、元山窯跡との違いも認められる。それゆえ、沼垂郡の窯跡群の影響を受けながらも基本的には元山窯跡群と共通した生産体制の下で操業が行われていた［笹沢2004］と考えられている。

中曽根遺跡の南西に位置する沢田遺跡［熊﨑ほか2005］では、炉跡や集石遺構が検出され、その周辺から多量な土器とともに製塩土器が出土した。分析の結果から、土器製塩が行われていた可能性が高い。しかし、海岸から約3km内陸に位置することから、二次製塩を行っていたものと推定されている。中曽根遺跡からはやや離れているが、胎内市の村松浜に所在する下原遺跡では、製塩土器が出土しており、海岸部に近いことから一次製塩が行われたと想定される。しかし、ここでは製塩に関連する遺構が検出されてない。

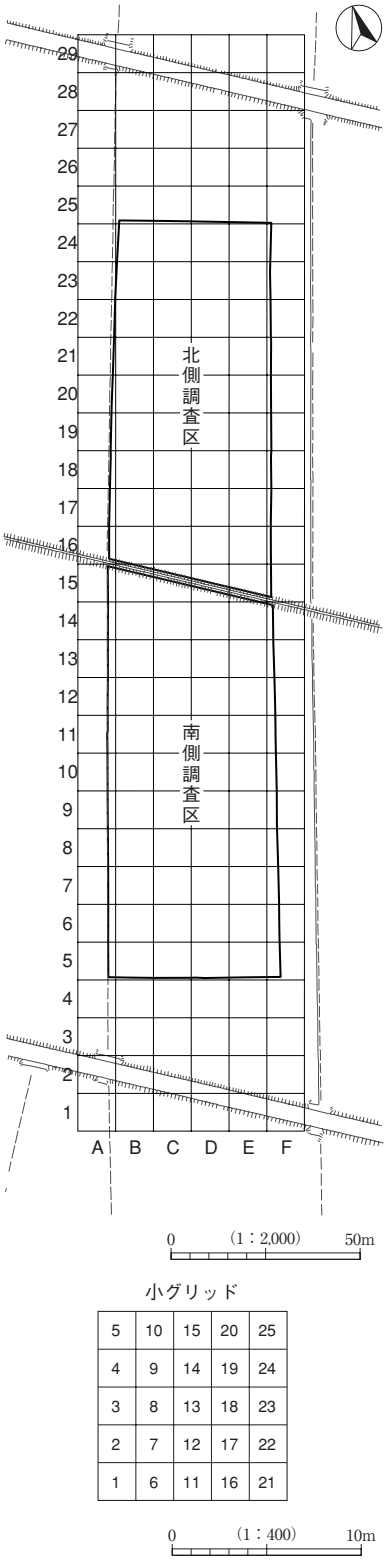
船戸川崎遺跡［水澤2002］は蔵ノ坪、船戸桜田遺跡と同様に川跡が検出され、やはり大量の土器・木製品等が出土している。川跡から出土した遺物には人形や斎串などが出土し、川辺で何らかの祭祀行為が行われていたと考えられる。船戸川崎遺跡から西に約8kmのところに位置する中倉遺跡［水澤ほか1999］でも、川跡から土器・木製品が廃棄されている場所が2か所見つかっている。多くの遺物が完形に近い形で出土することから、意図的に廃棄されたものと考えられる。出土した木製品には斎串や馬形などが含まれていることから、ここでも何らかの祭祀が行われていたと思われる。

以上のように中曽根遺跡の周辺では、官衙に関連する遺跡や生産遺跡など様々な遺跡が存在している。そのなかで、当該期における中曽根遺跡はとりわけ遺構数や遺物量が多いわけではなく、また特筆するような特徴を有する遺跡ではない。ただし、川沿いに立地するというこの地域の普遍的な特徴を踏襲しており、当時の一般的な集落のあり方を表しているものと思われる。

第Ⅲ章　調査の概要

1　グリッドの設定

グリッドは遺跡の南西部分に基点を作り、調査区の中央をグリッドラインが通り、また拡張の可能性も考慮に入れ、南北方向に余裕を持つように設定した。基点はＸ：236250.211、Ｙ：80681.207の座標とした。主軸は真北より16°－23′－42″東偏している。大グリッドは10m四方であり、名称は南北方向をアルファベットの大文字、東西方向を算用数字として、両者の組み合わせで「1A」等と表し、グリッドを示す杭はグリッド南西隅に打設した。また小グリッドは大グリッドを2m四方に25等分して1～25の算用数字で表し、南西隅を1、北東隅を25とした。表記は大グリッド表示に続けて、「1A10」のように付して呼称した。



第10図　グリッド設定図

2　基 本 層 序

地表下1.5mの範囲で、Ⅰ～Ⅹ層の10枚の土層を確認した。Ⅰ～Ⅲ層は表土で、Ⅱ層は自然流路1付近でⅡａ層・Ⅱｂ層に、Ⅳ層はⅣａ層・Ⅳｂ層・Ⅳｃ層に細分される。Ⅱ層は主に南側調査区を中心に認められる。古代の遺構確認面となるのがⅣ層上面で、本来ならばこの上に古代の遺物包含層が存在したと推定されるが、削平を受けており存在していない。Ⅳ層は全域に広がっているが、3層に細分できたのは21D・E区付近のみであり、弥生時代の遺物の分布域と重なっている。このうち弥生時代の遺物包含層はⅣａ層であり、Ⅳ層の上位が弥生時代人の活動によって汚れてやや黒ずんだ部分と考えられる。なお弥生時代の遺構確認面は、Ⅳｂ層上面である。

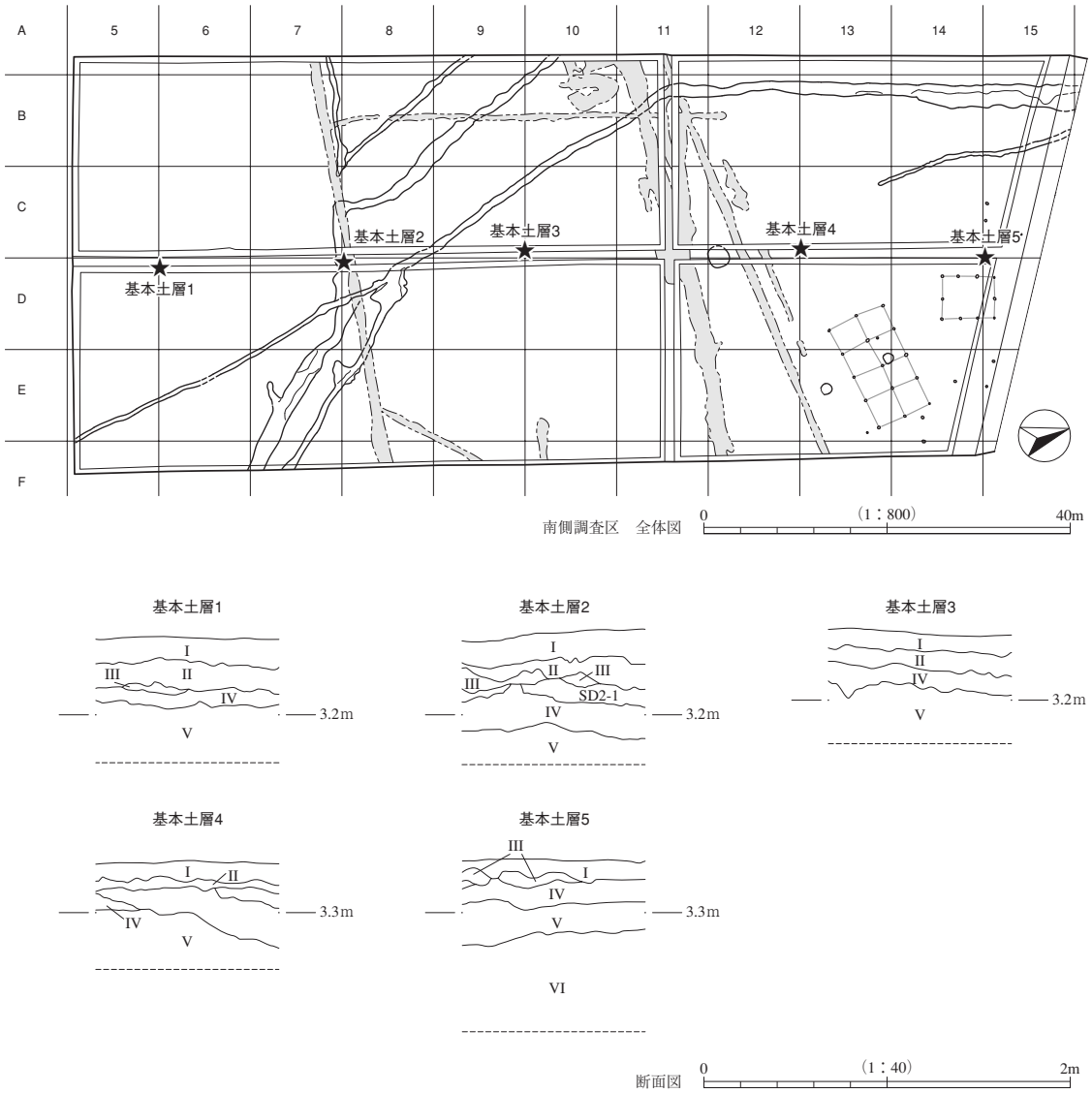
以下基本層序を記していく。

Ⅰ層　オリーブ黒色土層（5Y3/2）。しまりやや強く、粘性やや弱い。小円礫（2～10mm）を含む。耕作土。

Ⅱ層　灰オリーブ色シルト層（7.5Y4/2）。しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（1～3mm）を少量含む。耕作土。

Ⅲ層　灰オリーブ色シルト層（7.5Y4/2）。しまり強く、粘性やや弱い。耕作土とⅣ層の混合土。

Ⅳａ層　灰色シルト層（7.5Y4/1）。しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（1～2mm）を少量含む。Ⅳｂ・ｃ層と比較してやや



第11図　南側調査区　基本層序

黒ずんでいる。弥生時代の遺物包含層。

Ⅳb層　灰色砂質シルト層（7.5Y4/1）。しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（1mm）を微量含む。

Ⅳc層　灰色シルト層（5Y6/1）。しまりやや強く、粘性やや弱い。褐灰色シルト（10～20mm）を微量に含む。遺跡全域にみられるⅣ層は、本層位に類似する。

Ⅴ層　灰色粘質シルト層（5Y6/1）。しまりやや強く、粘性やや強い。褐灰色シルト（10～20mm）を微量に含む。

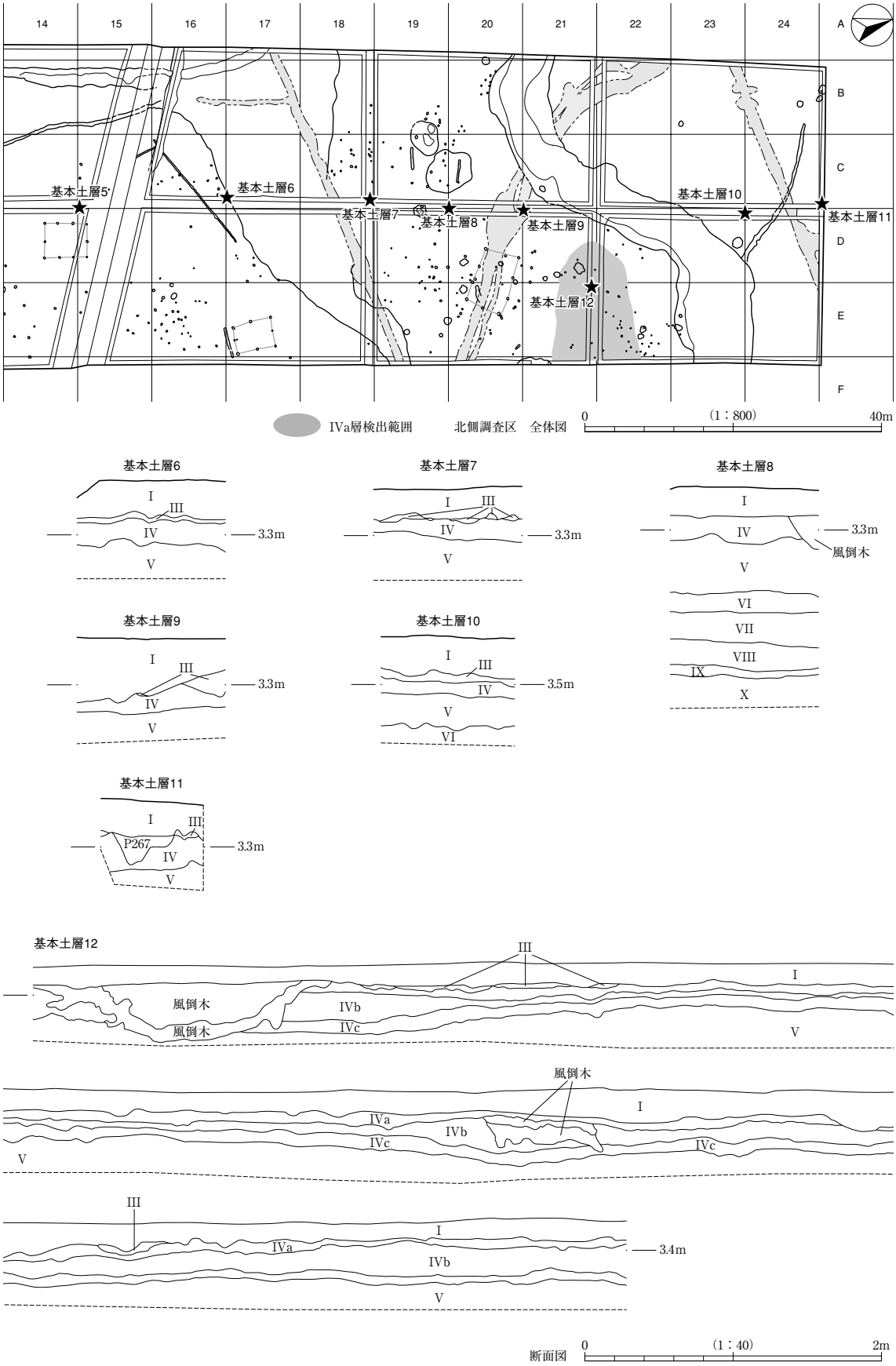
Ⅵ層　青灰色粘質シルト層（5GB6/1）。しまり弱く、粘性強い。下層の砂質シルトを多量に含む。

Ⅶ層　青灰色砂質シルト層（5GB6/1）。しまり弱く、粘性弱い。

Ⅷ層　緑灰色粘性シルト層（5G5/1）。しまり弱く、粘性強い。

Ⅸ層　緑灰色粘性シルトと砂質シルト層（5G5/1）。しまり弱く、粘性やや強い。

Ⅹ層　緑灰色粘性シルト層（5G5/1）。しまり弱く、粘性強い。



第12図　北側調査区　基本層序

第Ⅳ章　遺　　構

1　遺構の概要

中曽根遺跡は調査区中央を農業用の水路が横断しており、水路を挟んで南側を南側調査区、北側を北側調査区として調査を行った。調査の結果、弥生時代と古代の遺構がそれぞれ検出された。弥生時代と古代の遺構確認面は、10cm前後の弥生時代遺物包含層を介在する部分も存在したが、それ以外の部分では耕地の区画整備事業などによって削平を受けており、遺構検出面の標高がほとんど変わらず、同一面での調査となった。弥生時代と古代の遺構は遺跡全体に満遍なく分布はせず、若干標高の高い13D・E区～22D・E区に集中する。この標高の高い地形は調査範囲外の東側の県道3号線方面に延びていくものと推定され、遺構の分布状況もこれに一致する。なお検出された遺構総数は、弥生時代と古代の遺構を合わせて260基である。

弥生時代とした遺構は、住居2軒、土坑1基である。しかし遺構の覆土はⅣ層を主体とし、古代の遺構覆土と明確に区別できず、古代の遺構としたものの中に上記の3基以外にも弥生時代の遺構が含まれている可能性が考えられる。遺構は、出土遺物から弥生時代中期末葉～後期前葉に構築されたと考えられる。

住居は共に掘り込みや周溝などが確認できなかったが、炉跡の検出と遺物の出土状況、炭化物の分布範囲から遺構の存在を推定し、その周辺を精査した結果不揃いながらピットが検出され、住居と認定したものである。したがって遺構の明確な範囲は、特定できなかった。SK53はSI40の北東に位置する小型の土坑であり、覆土上位から弥生土器の大型破片が出土したことからこの時期の遺構と認定したものである。また遺構ではないが、南側調査区でほぼ完形に復元できる土器2個体が約14m離れて単独で出土している。掘り込みなどを伴っていないが、便宜的に土器集中部1、2、3として扱うこととした。このうち土器集中部1、2は約1m離れて検出されたが、接合して1個体となったことから、併せて記述することとした。

古代の遺構は、掘立柱建物4棟、柱穴列2基、井戸1基、土坑24基、溝状遺構13条、性格不明遺構5基、ピット208基の総数257基で、このほかに自然流路が2条確認されている。なおピット列としたものは、掘立柱建物の可能性が考えられたが、それ以外に柱穴が検出されず確定することができなかったものである。これらの遺構は、出土遺物などから8世紀～10世紀代の間に構築されたと考えられる。掘立柱建物などは標高の高い部分に選地しており、また掘り込みのしっかりした溝状遺構は標高の高い部分の裾を巡るように構築されている。土坑は24基検出されているが、この内22基が北側調査区で検出され調査区の中でも比較的散らばって分布している。井戸は1基のみで、自然流路から離れた南側調査区の掘立柱建物の近くで検出され、溝状遺構を除いたその他の遺構の南限となっている。2条確認された自然流路のうち自然流路1は、掘立柱建物などの遺構群を分断して標高の高い部分を横断するように流れている。また自然流路2は、標高の高い部分を巻くように流れている。208基検出されたピットは、掘立柱建物を構成する柱穴と比較すると、概して径及び深さとも小規模なものであった。また柱根や柱痕が確認されるものも少なく、配列など規則性はほとんどみられなかった。

検出された遺構のうち、重要と思われるものについて各説でふれ、ピットは遺構図版の全体図に掲載するに留めた。

2　記述の方法

本遺跡から検出された遺構種別の略号は、住居を「SI」、掘立柱建物を「SB」、柱穴列を「SA」、井戸を「SE」、土坑を「SK」、溝状遺構を「SD」、性格不明遺構を「SX」、ピットを「P」、自然流路を「SR」とした。遺構番号は、時代・種別に関係なくすべて通し番号とした。今回住居としたものは炉跡とピットにそれぞれ遺構番号を付しており、本報告書では炉跡の遺構番号を住居に振り替えた。掘立柱建物の柱穴は、調査段階でその所属が判明したため、「SB4－P1」のように番号を付けた。また整理作業段階で、同一遺構と判断したものは早い番号を生かし、後の番号を欠番とした。

遺構の記載は、まず弥生時代と古代に分けてそれぞれを記述した。弥生時代は住居（SI）、土坑（SK）、土器集中部、古代の遺構は掘立柱建物（SB）とそれに関係する遺構、柱穴列（SA）および柱根の残るピット（P）、井戸（SE）、土坑（SK）、溝状遺構（SD）、性格不明遺構（SX）、自然流路（SR）の順で記述した。遺構の計測値は最大残存値または復元値とし、以下のようにした。

住　　居

住居は周溝や立ち上がりが検出されておらず範囲が明確ではないが、遺物・炭化物の分布範囲から推定した値を表した。炉跡など住居の付帯施設については、個々に計測を行った。

掘立柱建物・柱穴列

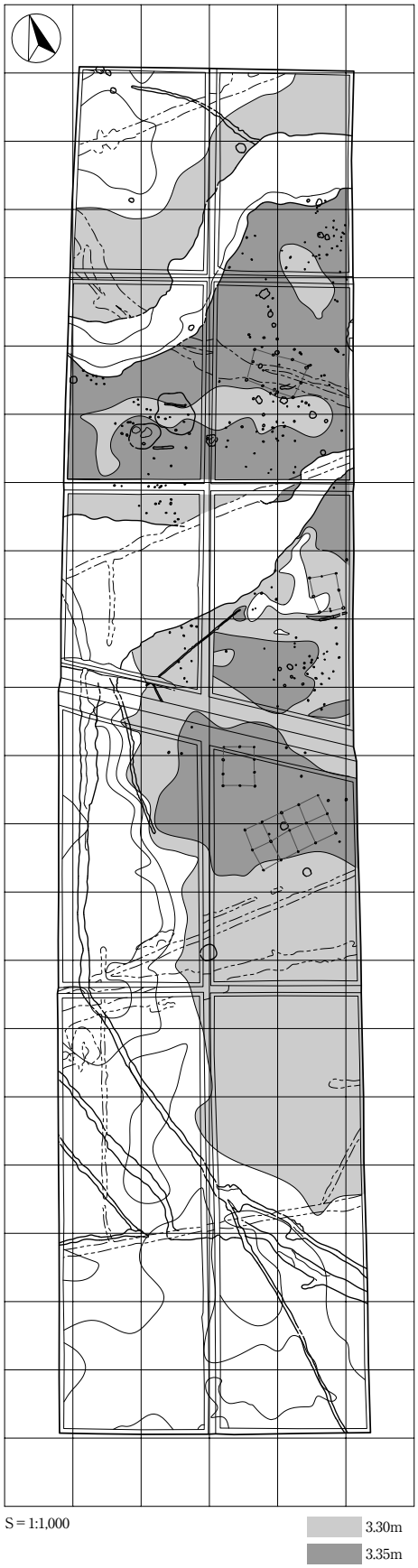
掘立柱建物は柱間の多い方向（原則として長軸）を「桁行」、少ない方向を「梁間」とし、建物の向きは桁行方向を主軸として磁北からの東西方向への角度で表した。柱根の残存しているものに関しては、柱芯間の数値を計測した。また柱穴と柱根の関係は、青田遺跡［荒川ほか2004］の以下の分類基準を参考にした。

A類：柱穴の底面より上に柱根が位置するもの

B類：柱穴の底面より柱根の底面が低いもの

井戸・土坑・性格不明遺構

規模の記述は円形、楕円形については径（長径・短径）



第13図　微地形と遺構配置

を用い、方形その他不定形のものについては長軸・短軸として最大値を表している。深さについては、遺構確認面からの最深部を計測している。また長軸を主軸と仮定して、磁北からの東西方向への角度で表した。

溝状遺構・自然流路

全長は確認できる最長の距離とし、途中で角度が変わるものは部分ごとに計測してそれらを合計した数値を表した。軸方向は磁北からの東西方向への角度とし、角度が変わるごとに表した。

3　弥生時代の遺構

A　住　　居

SI40（図版9・11・40）

北側調査区の19・20D・E区に位置し、SD35およびSB37と重複する。同じ弥生時代の遺構であるSI41とは、炉跡間の距離で北に約14.5m、SK53とは北東に約5m離れている。この遺構は古代の遺構確認中にⅣ層上位から弥生土器が出土したため、周辺を精査し、炉跡とそれを中心に半円状に廻る5基のピットを検出したことにより住居跡と認定した。規模は炭化物や土器などの遺物の分布範囲から長径5.68m、短径4.80m程度の楕円形プランが推定される。しかし北東方向には近世以降の攪乱が存在しており、遺物も推定範囲外から出土していることから、遺構範囲が広がる可能性も考えられる。壁の立ち上がり及び周溝は、炉跡を中心にトレンチを入れて確認したが、検出できなかった。しかし攪乱など後世の影響によって壁が確認できなかった可能性も考えられ、竪穴式であるか平地式であるかを特定することはできない。床面は炉跡の検出状況及び遺物の出土状況からみて、遺構確認面とほぼ同じ高さの標高約3.35m付近に存在したと推定される。

炉跡は、20E1・2区に位置する。規模は完掘時で長軸約1.12m、短軸0.98mを測り、覆土は4層に分層される。1～3層はⅣ層を主体としている。3層は被熱層で厚さ約8cmを測り、上面が火床面と思われる。4層は、3層の外側に位置し炭化物を少量含む層で、掘り方と考えられる。なお2層に微量、3層に中量の骨片と思われる0.5mm前後の白色粒が含まれていたが、取り上げることはできなかった。柱穴と考えられるピットは、P214・P219・P220・P222・P231の計5基が検出されている。これらは炉跡を中心に精査を行って検出したものである。ピットの形状は円形または楕円形で、径12～20cm前後、深さ10～20cm前後を測る。ピットの覆土はP214を除き、中央に柱痕がみられる。柱痕の周りの覆土は埋土と考えられ、Ⅳ層を主体としており、一部オリーブ黒色シルトや暗灰色シルトを含んでいる。柱痕は径6～12cm、深さ8～12cmを測り、オリーブ黒色土を主体としている。ピットの配置は、炉跡を囲むようにみられるが、北東側は検出されておらず半円状を呈する。ただし北東側はSD35や攪乱がみられるため、消失した可能性も考えられる。ピット間の距離は最長で2.20m、最短で0.96mとなっており、規則性は認められない。

遺物は、SI40と考えられる範囲から86点出土している。土器は炉跡を挟んで東西に3か所集中する状況がみられ、1～7が出土している。石器はまとまって3点（22・23・27）出土しているが、土器と比較して炉跡に近接した場所で出土している。これらの遺物は、住居の床面直上か若干浮いている状況であったと考えられる。

SI41（図版10・11・41）

北側調査区の21・22D・E区に位置し、弥生時代に属するSK53は南東に12m離れて存在している。古代の遺構確認中にⅣ層から弥生土器・磨製石斧が出土したため、周辺を精査し、炉跡が検出されたことにより住居と認定した。規模は炭化物・遺物の分布範囲などから長径8.2m、短径4.6m程度の楕円形プランが推定されるが、北東側は包含層となっており、範囲は非常に判り難い状況であった。22区ラインの土層帯及び炉跡を中心に設定したトレンチ調査の所見によると、古代の遺構確認面としたⅣ層上面から下方5～10cmの範囲に炭化物を含み黒ずんだ層（Ⅳa層）が存在し、この範囲に弥生土器が包含され、炉跡はこの層の下面から掘り込まれていた。このⅣa層は遺構覆土の可能性もあったが、北東方向に広がっており、遺構の壁も確認できなかったことから、ここでは弥生時代の遺物包含層と考えておきたい。SI40同様、竪穴式であるか平地式であるかは確定することができなかった。

炉跡は21D19・20・24・25区に位置する。規模は完掘時で長軸1.42m、短軸1.15mを測り、覆土は3層に分層される。1層は炉跡本体脇に位置する落ち込みの土層であり、少量の炭化物とともに石器製作時に出た頁岩の剥片及び砕片を多量に含んでいる。2層は焼土や炭化物とともに骨片と思われる0.5㎜前後の白色粒を少量含む層で、炉跡の覆土となっている。　3層はⅣ層が被熱した層で厚さ約4cmを測りブロック状を呈している。この層の上面が火床面と考えられる。柱穴と考えられるピットは炉跡を囲むようにして、P217・P218・P228・P270の計4基検出された。ピットの形状は円形または楕円形で、径12～24cm前後、深さ9～25cm前後を測る。P228で柱痕が確認されたが、そのほかでは見られなかった。P217・P218・P228・P270の覆土は、Ⅳ層を主体としてオリーブ黒色土ないしシルトを含むという点で共通している。ピットの配置は、炉跡を囲んで不整長方形になっている。隣接するピット間の距離は最長で2.96m、最短で1.46mである。

遺物は、SI41と考えられる範囲から301点出土している。ただし弥生時代の遺物包含層が北東側に広がっているため、明確にSI41のものと包含層のものを区別することは困難であった。土器は、炉跡の周辺に3か所集中する部分がみられる（8・11～13）。石器は磨製石斧・石鏃・石錐・剥片・砕片などがみられ、特に炉跡付近で頁岩の砕片が集中して出土した。また磨製石斧（32）と二次加工剥片（31）は住居の床面に置かれるように出土している。なおP270においても、図示していないが弥生土器の小片が出土している。

B　土　　坑

SK53（図版9・11・42）

北区の20E14区に位置し、古代の遺構であるSB37－P8に隣接している。SB37－P8の確認トレンチによって一部破壊されているが、平面形は楕円形を呈する。断面形は台形状を呈し、壁は急角度に立ち上がる。規模は長径0.49m、短径0.33m、深さ15cmを測る。覆土は2層に分層され、共にⅣ層より黒味が強く、炭化物を少量含んでいる。出土遺物は甕胴部の大型破片（15）のみであり、1層上部から内面を上に向けた状態で出土している。

C　土器集中部

土器集中部1・2（図版12・42）

南側調査区の7B区に位置し、土器集中部3が東に約13.5m、SI40が北東に約131m離れて存在している。古代の遺構確認中にⅣ層上位から検出され、標高は3.2m前後を測る。土器のまとまりは約1m離れて2か

所あり、7B6区に位置するものを土器集中部1と、7B7区に位置するものを土器集中部2とした。土器集中1と2において接合関係がみられ、1個体（20）となった。遺構の可能性もあり周辺を精査したが、そのほかの遺物や掘り込み・ピットなどは確認されず、垂直分布においてもまとまって落ち込んでいるような状況ではなかった。また層位についても、Ⅳ層を分層しⅣa層（弥生時代遺物包含層）を識別することはできなかった。

土器の遺存状況は両集中部とも細かく割れており、大きいもので約8cm、大半のものが3cm前後の小破片となっていた。両集中部間では土器がまったく出土しておらず、また土器の特定の部位がどちらかの集中にまとまるような状況もみられなかった。破片の状況などから、土器は人為的に破壊され、両集中部に廃棄されたと考えることができる。

土器集中部3（図版12・42）

南側調査区の7C15区に位置し、SI40が北北東に約124m離れて存在している。古代の遺構確認中にⅣ層上位から検出され、標高は3.2m前後を測る。遺構の可能性を考えて周辺を精査したが、その他の遺物や掘り込み・ピットなどは検出されなかった。また層位についても、土器集中部1・2と同様である。土器（21）は口縁を北側に向けて横倒しになった状態であり、土圧によって潰れた状況で出土した。

4　古代の遺構

A　掘立柱建物・柱穴列・ピット

SB4（図版13・43・44）

13・14D・E区に位置し、遺構範囲内にSK6が存在する。桁行4間（約12.0m）、梁間2間（約6.4m）の総柱建物で、面積は約74.4㎡を測る。主軸方向はN－80°－Eである。平面形は、梁行中央の柱穴がやや外側に張り出す形状を示す。柱間寸法は2.75～3.30mとばらつくが、桁行が梁間に比べて短い傾向にある。柱掘方は径18～41cmの円形や楕円形を呈し、深さ7～48cmで、断面形は漏斗状やU字状などとなっている。覆土はいずれも炭化物を含み、上部はやや暗い色調のオリーブ灰色シルトで、下部は地山のオリーブ灰色シルトを主体としている。P1・P10からは径13cm前後の柱根が検出され、樹種同定の結果、共にコナラ属であった。また6基の柱穴において柱痕が観察され、それらには黒もしくはオリーブ黒色土・シルトが含まれていた。柱穴と柱根の関係は、A類に該当する。遺物はP2・P14の柱掘り方から3点出土したが、いずれも土師器細片であり図示していない。なお柱根に関して放射性炭素年代測定を行い、暦年較正用年代で1109±22yrBP、1073±22yrBPという結果が得られている。

SB13（図版14・45）

14・15D区に位置する。桁行3間（約5.70m）、梁間2間（約4.65m）の掘立柱建物で、面積は約26.1㎡を測る。主軸方向はN－17°－Eである。柱間寸法は桁行方向で1.70～2.05m、梁行方向で2.10～2.50mを測り、全体にややばらつきがみられる。柱掘方は径15～37cm程の円形や楕円形を呈し、深さ15～58cmを測り、断面形はU字状が主体で漏斗状などがみられる。柱を支える掘り方の埋土は、灰色シルトを主体としている。南北の梁間中央にくるP4・9は、残存する柱根および柱痕からほかの柱よりも径の小さい柱材を使用している可能性がある。P3・4・8を除く柱穴から柱根が検出され、樹種同定の結果、サクラ属・クワ属・ニレ属であった。柱根は丸材と割材が確認され、そのうち丸材が6本となっている。柱根の規模は径10cm前後が中心であり、前述のP9のみ径5.5cmとなっている。柱穴と柱根の関係は、A類と

該当する。遺物は出土していない。なおP2・P6の柱根に関して放射性炭素年代測定を行い、暦年較正用年代で1197±22yrBP、1180±22yrBPという結果が得られている。

SB37（図版15・46）

20D・E区に位置し、遺構範囲内にSK27・53及びSD35が存在する。桁行3間（約8.20m）、梁間2間（約5.10m）の掘立柱建物で、面積は約38.1㎡を測る。主軸方向はN－55°－Wである。柱間寸法は2.40～3.00mとばらつく。柱掘り方は径20～42cmの円形や楕円形を呈し、深さ11～43cmを測り、断面形はU字状が主体で台形状・V字状・弧状・箱状である。P1～4・7で柱痕が観察され、径10～16cm程の柱材であったと考えられる。柱痕はオリーブ黒色土となっており、柱を支える掘り方の埋土は、地山の灰色シルトを主体とし微量の炭化物が含まれている。柱穴と柱根の関係は、A類に該当する。本掘立柱建物からは柱根及び遺物は出土していない。

SB50・SD12（図版14・47）

SB50は17E区に、SD12は16・17E、17F区に位置する。SB50は桁行2間（約5.30m）、梁間2間（約3.95m）の掘立柱建物で、面積は約19.8㎡を測る。主軸方向はN－1.8°－Eである。柱間寸法は桁行方向で2.50～2.80m、梁行方向で1.70～1.90mを測り、全体にばらつきがみられる。柱掘り方は径20～41cmの円形や楕円形を呈し、深さ51～90cmを測り、断面形はU字状・漏斗状となっている。すべての柱穴から柱根が検出され、樹種同定の結果クリ4本、サクラ属2本、ケヤキ1本であった。柱根はすべて丸材で、うちP3検出のものは樹皮が残存していた。柱根の規模は径約10～15cm、現存の長さ約60～90cmである。埋土は地山の灰色シルトを主体とし微量の炭化物が含まれている。柱穴と柱根の関係は、ほかの掘立柱建物と異なりB類に分類される。P5・P6の柱根に関して放射性炭素年代測定を行い、暦年較正用年代で1247±22yrBP、1208±22yrBPという結果が得られている。

SD12は、SB50の南側の梁行に沿う溝で、長さ4.15m、幅24～30cm、深さ2～7cmを測る。主軸方向はN－88°－Wであり、溝底面はほぼ水平である。覆土は暗灰黄色シルトとなっている。

遺物はSD12から土師器細片が1点出土しているのみである。

SA5（図版15・48）

14E・F区に位置する。2基の柱穴が東西方向に2.4mの間隔で並ぶ柱穴列である。主軸方向はN－77°－Wである。P1が円形で長径30cm、短径28cm、深さ44cmを測り、断面形はU字状、P2が楕円形で長径38cm、短径28cm、深さ40cmを測り、断面形はU字状となっている。柱を支える掘り方の埋土は、オリーブ灰色シルトを主体としている。共に柱根が検出され、樹種同定の結果P1がクリ、P2がサクラ属であった。柱根は割材であり、太さはP1が15.6cm、厚さ12.1cm、P2が6.7cm、厚さ5.2cmとなっている。遺物は出土していない。P1の柱根に関して放射性炭素年代測定を行い、暦年較正用年代で1231±22yrBPという結果が得られている。

SA17（図版15・48）

15C区に位置する。2基の柱穴が東西方向に1.8mの間隔で並ぶ柱穴列である。主軸方向はN－69°－Wである。P1が円形で径26cm、深さ22cmを測り、断面形はU字状、P2が楕円形で長径36cm、短径24cm、深さ14cmを測り、断面形は台形状となっている。P1で柱根が検出されたが、軟質で腐食が進み、取り上げることはできなかった。柱を支える掘り方の埋土は、オリーブ灰色シルトを主体としている。遺物は出土していない。

ピット

今回の調査ではピットは合計205基検出された。そのうち柱材が検出された2基について報告する。

P60（図版15・48）

14E9区に位置するピットである。楕円形で長径28cm、短径23cm、深さ33cmを測り、断面形は現状でU字状となっている。柱根は丸材で、径8.9cmを測り、芯部分が欠落している。樹種同定の結果、オニグルミであった。柱を支える掘り方の埋土は、地山の灰色シルトを主体とし微量の炭化物が含まれている。

P227（図版15・49）

20D20区に位置するピットである。円形で長径18cm、短径16cm、深さ21cmを測り、断面形はU字状となっている。柱根は樹種同定の結果、サクラ属であった。柱根は腐食が進んでおり、詳細は不明である。埋土はオリーブ黒色シルトを主体としている。

B　井　　戸

SE14（図版16・49）

12C21・22区、12D1・2区に存在する井戸である。上面の平面形は確認面で南北径2.28m、底面は南北径で0.8mを測り、共に円形を呈する。底面は上方から見て、上面のやや南西側に位置している。深さは,確認面より1.34mを測り、最下層では地山に埋没する流木を切断して掘り込まれていた。断面形は漏斗状を呈し、平坦な底面から壁がほぼ垂直に立ち上がり、確認面下50～60cmのところで25°前後屈曲し、外側に大きく開いて立ち上がる。覆土は12層に分層され、9層と12層に腐植質の褐灰色土が多量に含まれる。遺物は、1～6層から土師器椀・甕などが10数点出土した。しかし、出土遺物の大半は細片で、図化できるものはない。7層より下層からは、土器等の人工遺物が出土しないものの、トチノキやモモの種子、そして根などの未分解植物が多量に出土している。

C　土　　坑

土坑と認定した遺構は23基を数え、そのうち21基が北側調査区に集中する。平面形は円形もしくは楕円形のものが多く、不定形のものも見られるが、方形もしくは長方形を呈するものはない。反面、断面形はバラエティに富んでいる。これらの土坑は、自然流路内およびその沿岸部にあるものを除き、概ね調査区内において比較的標高が高いところに位置する。一方、自然流路内およびその沿岸部で検出された土坑は、断面形が箱状ないし台形状を呈し、覆土に未分解植物を含むなど類似した様相を見せる。このことからこれらの土坑が、同じような機能を果たしていた可能性もある。

SK6（図版16・49）

13E5区と14E1区にまたがって存在するほぼ円形の土坑で、直径1.15m、深さ70cmを測る。本遺構の周囲にはSB4の柱穴群が巡り、南に約7.5mの所にはSK7が存在する。断面形はU字状を呈し、平坦な底部から、南東側では鋭角的に、北東側はやや緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は11層に分層され、やや暗めの灰色系シルトである1～3層、明るめの灰色系シルトである4～5層、暗灰色系シルトである6～11層、と大きく3区分することができる。覆土のしまりは下層になるほど弱くなり、反対に粘性は強くなる傾向を示す。遺物は、11層から部材と思われる木製品（207）と土師器椀の底部片（33）が出土している。そのほかにも土師器片が5点出土しているが、総じて細片である。また、10層において帯状の樹皮が、本遺構のほぼ中央付近から出土した。樹皮のみの出土であり、そのほかの植物遺体は出土していない。

SK7（図版16・49・50）

13E7・12区において検出された楕円形の土坑で、南端の確認面付近は撹乱により切られている。本遺構の北側にはSB4が隣接している。主軸はN－9°－W、長径1.2m以上、短径1.15m、深さは60cmを測る。断面形は南北方向でU字状、東西方向では漏斗状を呈する。底面は丸みを帯び、緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は8層に分層され、全般的にどの層にも炭化物が含まれるが、特に1・2・4層において多い。遺物は土師器細片と礫の計7点出土しており、8層から出土した土師器椀の口縁部片以外は、ほとんど覆土上位部分からの出土である。覆土上位部分から出土した土師器細片は、表面が著しく摩滅しており、遺存状態が良くない。

SK24（図版16・50）

19E18区に位置する円形の土坑で、直径0.7m前後、深さ15cmを測る。本遺構の南側にはSR1が隣接する。断面形は弧状を呈し、ほぼ平坦な底面から緩やかな立ち上がりをみせる。覆土は、オリーブ灰色シルトを含む黒色土の単層である。遺物は、土師器片が18点、小礫が2点出土している。土師器片は全て細片であり、表面の摩滅も著しいことから、器形及び時期判別は困難である。

SK25（図版17・50）

19E15区と20E11区にまたがって存在する土坑である。本遺構はSR1とSR2に挟まれた、比較的標高の高いところに位置し、南東側にSK30、北西側にはSB37・SD35・SI40が近接する。平面形はやや北側が膨らむものの、ほぼ円形を呈する。直径は1m前後、深さは45cmを測る。断面形は台形状を呈し、やや凹凸があるものの概して平坦な底面から、北壁は若干丸みを帯び、南壁は外傾してそれぞれ急斜度に立ち上がる。覆土は3層に分層され、1・2層は黒色土を含む灰色シルトで、特に1層は黒色土が斑状に多く混入する。3層は黒褐色土で未分解植物が含まれている。遺物は、土師器片5点、礫片1点が出土している。土師器片はいずれも細片であり、器形及び時期判別可能な資料は含まれていない。

SK26（図版17・50）

20D16・17区に存在する土坑である。本遺構は、SK25と同様にSR1とSR2に挟まれた、比較的標高の高いところに位置し、東側にSB37とSI40が近接する。平面形は、北側と東側がやや凹む楕円形を呈し、長径約1.0m、短径約0.7m、深さ約20cmを測る。主軸方向はN－20°－Wである。断面形は弧状を呈し、底面は凹凸を有する。壁面は急斜度に立ち上がる南壁を除き、概ね緩やかに外傾する。覆土は2層に分層され、1・2層共に灰色シルトであるが、1層の方が2層の色調と比べてやや暗く、炭化物の混入量も多い。出土遺物はない。

SK27（図版17・50）

20D19区に位置する楕円形の土坑で、主軸はN－42°－Eである。長径は約0.65m、短径は約0.50m、深さは46cmを測る。本遺構の周囲にはSB37の柱穴が巡り、東側にSK33、南側にSD35とSI40、南西側にはSK26がそれぞれ3～6mの範囲で近接する。断面形は漏斗状を呈し、底面は丸みを帯びる。壁面は垂直に立ち上がった後に、確認面下約25cmのところで32°前後屈曲し、やや外反して立ち上がる。覆土は2層に分層され、1層の上部には花崗岩の破砕礫が多く含まれている。遺物は1層から土師器椀（34）が出土したほか、土師器細片7点と破砕礫が55点出土した。破砕礫は概ね3～4cmほどの大きさであるが、大きいもので拳大ほど、小さいもので小指の爪先ほどの大きさである。また、これらの破砕礫は1個体が割れたものではなく、数個体の礫から構成されている。

SK28（図版17・51）

20A23区・20B3区に存在する土坑である。調査区の西壁に接するように位置し、北側にはSR2が隣接

する。平面形は円形を呈し、直径1.04m、深さ45cmを測る。断面形は箱状で、壁は平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がる。覆土は6層に分層され、オリーブ黒色土の1層以外は、灰色系のシルトを基本とする。また、2層のみ粘性が弱い。遺物は土師器甕（36）、土師器鍋の口縁～体部片（37）が北東壁近くの5層から出土しているほか、覆土中から土師器椀（35）なども出土している。

SK30（図版17・51）

19E20区に存在する円形の土坑で、直径0.5mを測る。深さは、確認面から14cmと浅い。本遺構はSR1とSR2に挟まれた、比較的標高の高いところに位置し、SK25が北西側に隣接している。断面形は弧状を呈し、丸い底部からやや内湾ぎみに立ち上がる。覆土は灰オリーブ色シルトの単層で、炭化物と焼土塊を多く含む。遺物は、土師器椀底部（38）、土師器鍋の口縁～体部片（39）、土師器鍋の体部片（40・41）や焼けた小礫など、計12点が出土している。土師器片は比較的大きな破片である。

SK31（図版17・51）

21D22区に存在する円形の土坑で、北側にはSK32が隣接している。直径は約0.58m、深さは21cmを測る。断面形は半円状を呈し、壁はやや丸みを帯びた底面から連続する緩やかなカーブで立ち上がる。覆土は4層に分層され、1・3層には比較的多くの炭化物が含まれる。また、2・3層に焼土が少量混じる。遺物は土師器甕の体部片（42）と底部（43）、土師器細片など、計25点が出土している。出土遺物は、全般的に器面が摩滅している。

SK32（図版17・51）

21D23区に存在する楕円形の土坑である。南側にはSK31が隣接し、SI41が約3m北に位置している。長径は0.83m、短径は0.69m、深さは22cmを測り、主軸方向はN－39°－Eである。断面形は台形状を呈し、壁はほぼ平坦な底面から急斜度に外傾して立ち上がる。覆土は2層に分層され、上層、下層ともに灰色土を基本とする。上層は下層と比べ、炭化物、オリーブ黒色シルトの混入量が多く、さらに焼土を含む。遺物は出土していない。

SK33（図版17・52）

20D25区と20E5区にまたがる楕円形の土坑で、N－80°－Eを主軸とする。南側にSB37が隣接し、南西側にはSK27が近接している。長径は0.63m、短径は0.53mを測り、深さは40cmである。断面形は概ねU字状であるが、西壁は段を有し、東側の壁面は、やや凹凸のある丸底から比較的緩やかに広がって立ち上がる。覆土は2層に分層され、それぞれ灰色土を基本とするが、しまり・粘性・炭化物の混入量が異なる。上層は下層と比較して、しまりが強く、粘性が弱い。また、炭化物の混入量がやや多い。遺物は、覆土から土師器細片が7点出土したのみである。土師器細片には椀の口縁部片なども含むが、図化できるものはない。

SK36（図版17・52）

21C17区に位置し、SR2内に存在する楕円形の土坑である。主軸はN－66°－Eであり、その方位は流路（SR2）のカーブと平行するようである。長径は0.88m、短径は0.62m、深さは44cmを測る。断面形は北半が箱状、南半が漏斗状に近い形状を呈し、壁は平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がる。覆土は4層に分層され、4層には木片や植物繊維などの未分解植物が含まれている。遺物は、器面が摩滅した土師器細片が2点出土したのみである。

SK39（図版17・52）

20E14区に位置する楕円形の土坑で、N－94°－Wを主軸とする。本遺構の西側には、SB37－P8と

SK53が隣接している。長径は0.33m、短径は0.22mを測り、深さは10cmと浅い。断面形は弧状を呈し、やや丸みを帯びた底面から西壁は緩く外反し、東壁は内湾ぎみに立ち上がる。覆土は2層に分層され、1層には比較的多くの炭化物が含まれる。遺物は、須恵器甕の体部（46）、土師器甕の口縁～体部片（45）、土師器甕の体部片（44）など計10点が出土している。また、遺物の出土層位は1層上部であり、出土地点もほぼ中央部にまとまる傾向を示す。

SK42（図版18・52）

23D10・15区に存在する角が丸みを帯びた七角形状を呈する土坑で、N－45°－Wを主軸とする。北東側にSD43、南東側にはSR2が隣接し、ちょうどSD43とSR2が合流する地点の西側に位置している。長径は1.49m、短径は1.32mを測り、深さは64cmである。断面形は概ね箱状を呈し、丸みを帯びた底面から、北壁はほぼ垂直に立ち上がる。一方、南壁はやや内湾ぎみに急斜度で立ち上がった後、確認面下約30cmで軽く屈曲し、外反して緩やかに広がる。覆土は3層に分層され、1層には比較的多くの炭化物が混入する。また、3層から帯状の樹皮が、底面に張り付いた状態で出土した。今回の調査ではこの樹皮が自然に埋没したものか、人為的に埋められたものかは明らかにすることができなかった。しかし、SK6からも本遺構と類似した樹皮が検出されていることから、樹皮が遺構内で何らかの役割を果たしている可能性も考えられる。遺物は覆土から摩滅した須恵器細片が1点出土したのみである。

SK44（図版18・53）

24B14・19区に存在する土坑である。本遺構の北側にはSK45とSK46、東側にはSD43がそれぞれ近接している。平面形は北側がやや張り出す円形であり、直径は0.84m、深さは45cmを測る。断面形は台形状を呈し、底面は北側がやや盛り上がる。壁面は急斜度で外傾して立ち上がる。覆土は4層に分層され、1層と4層から遺物が出土している。遺物は土師器片、礫など計4点が出土しているが、図化できるものはない。

SK45（図版18・53）

24B15区と25B11区にまたがって存在する土坑である。平面形はやや不定形な楕円形を呈し、主軸方向はN－29°－Wである。本遺構の北側にはSK46が隣接し、南へ約2.7mのところにSK44が位置している。長径は0.96m、短径は0.61mを測り、深さは12cmと浅い。断面形は弧状を呈し、丸みを帯びた底面から緩やかに立ち上がる。覆土は灰色土の単層で、地山のⅣ層と比べて黒味が強いため、区別することができる。遺物は出土していない。

SK46（図版18・53）

24B15区と25B6・11区にまたがって存在する土坑である。遺構は、北側を開渠に切られているものの、調査区北壁の断面に残存する遺構の一部が残っていることから、不定形な楕円形を呈すると推定される。長径は1.2m以上、短径は0.58m以上を測り、遺存部分における深さは10cmである。断面形は弧状を呈し、壁は平坦な底面から緩やかに立ち上がる。覆土は灰色土の単層であり、SK45と同様に黒味が強いため、地山と区別するのは容易である。出土遺物はない。

SK47（図版18・53）

23B21区に存在する土坑である。平面形は南側がやや張り出す楕円形で、主軸方向はN－64°－Wである。長径は0.72m、短径は0.58mを測り、深さは45cmである。断面形は箱状を呈し、壁はやや丸みを帯びた底面からほぼ垂直に立ち上がる。覆土は3層に分層され、各層一様に炭化物を多く含む。また2層において、炭化物が一部帯状に連なって混入している。遺物は2層から出土した土師器鍋の口縁部片（49）

のほか、覆土中から須恵器片、土師器片など11点が出土している。出土した遺物のほとんどが細片であり、須恵器片を除き、表面が摩滅している。

SK48（図版18・53）

19C19区に位置する円形の土坑で、北側にSX22が隣接している。直径は0.32m、深さ20cmを測る。断面形は箱状を呈し、壁は凹凸のある底面からほぼ垂直に立ち上がる。覆土はオリーブ黒色土の1層と灰色シルトの2層に分層され、両層共に炭化物を少量含む。遺物は1層から土師器甕の体部片（47）を含む計4点出土しており、2層から出土した遺物はない。

SK49（図版18・54）

19C23・24区と19D3・4区にまたがって存在する上面が不定形で、底部が楕円形の土坑である。本遺構は中央ベルト上に位置し、東側を開渠に切られている。また、北西側にはSX22が近接している。南北1.64m、東西0.84m以上、深さは36cmを測る。断面形は幅広の階段状を呈し、壁は丸底の底面から緩やかに立ち上がり、一度平坦になった後に、確認面下約15cmのところから、再び垂直ないしは急斜度で立ち上がる。覆土は灰色土の単層であり、炭化物とオリーブ黒色シルトを多く含む。炭化物は層上部において密集し、一部脈状をなす。出土遺物はない。

なお、本遺構の形状や覆土から風倒木痕の可能性も考えられたが、明確に断定するほどの所見が得られなかったため、土坑として扱った。

SK51（図版18・54）

16E2・7区に位置する楕円形の土坑で、主軸方向はN－37°－Wである。長径は0.89m、短径は0.65mを測り、深さは10cmと浅い。断面形は台形状を呈し、壁はやや段差がある底面から緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は2層に分層され、1・2層共に灰色シルトを基本とするものの、色調は1層のほうがやや暗い。遺物は出土していない。

SK52（図版18・54）

23E11区に位置し、SR2内に存在する土坑である。本遺構はSR2を掘削する過程で検出した。SX38出土資料と同一個体を有することから、本来はSR2の確認面、もしくはそれより上層から掘り込まれていた可能性がある。平面形は南西側がやや張り出す円形で、直径は約0.40m、深さは確認面から33cmを測る。断面形は箱状を呈し、底面はやや凹凸を有する緩い丸底である。壁面は、南壁が垂直に立ち上がるのに対し、北壁は内湾して袋状をなす。覆土は2層に分層され、上層は炭化物を少量含む褐灰色土、下層は種子や木片などの未分解植物を含む褐色土である。遺物の出土層位は層上面及び上層からで、層下部からの出土はない。遺物の分布は、遺構の南側に集中し、同一個体と思われる一群は遺構外にも及ぶ。遺物は土師器甕（48）を中心に、須恵器横瓶の体部片、小礫、種子など計90点が出土している。土師器片はいずれも器面が著しく摩滅しており、同一個体と思われる資料も接合が困難な状態である。また、須恵器横瓶の体部片が、SR2内の23E22区で集中して出土した一群と接合し、SX38には同一個体と思われる資料が出土している。

SK56（図版18・54）

23E11・16区に位置し、SR2内に存在する土坑である。本遺構の西側に隣接するSK52と同様に、SR2を掘削する過程で検出された。SX38出土資料と接合する遺物が出土していることから、こちらも本来はSR2の確認面、もしくはそれより上層から掘り込まれていた可能性がある。平面形は主軸をN－28°－Eに採る楕円形で、長径は1.11m、短径は0.76mを測り、深さは確認面から30cmである。断面形は台形状

を呈し、壁はやや中央部が盛り上がる底面から急斜度に外反して立ち上がる。覆土は4層に分層され、各層一様に炭化物を含むが、特に1・2層は多量に混入している。また、1層には併せて焼土が多く含まれている。遺物の出土層位は2層を中心としながら、概ね各層から出土している。遺物の分布は、中央から東側にかけて広がる傾向を示す。遺物は土師器甕の体部～底部（50）や体部片（51）、土師器細片、頁岩の砕片などが出土しており、特に土師器甕の底部は、約5m南に位置するSX38出土の資料と接合した。

D　溝 状 遺 構

溝と認定した遺構は14条を数え、そのうち南側調査区に位置するものは4条、北側調査区に位置するものは8条である。また、SD3・SD10のように両調査区にまたがって存在する溝もある。溝の規模は大小様々であるが、形態は全般的に直線状を呈するものが多く、蛇行や屈曲をする溝は少ない。溝の主軸方向は、南側調査区が概ね南北方向を示すものが多いのに対して、北側調査区は不規則である。断面形は、多様な形態をとる土坑とは異なり、ほとんどが弧状を呈する。溝はそれぞれ単独で存在していたわけではなく、合流や分岐、そして切り合うなどをしていたと考えられる。また、自然流路に合流すると思われる溝も存在することから、これも併せて考える必要がある。

SD1（図版2・3・19・20・26・55・56）

5E21区から8D8区にかけて存在する溝である。平面形はほぼ直線的に南北に走り、主軸方向はN－12°－Wを測る。溝底面は北から南方向へ傾斜する。調査区内での全長は約39mで、溝の南端は調査区外に延び、北端は8D8区でSD3と合流する。合流部における土層断面の観察からは、SD1とSD3の前後関係を確認できない。一方、7D15・8D11区ではSD2を切っている。幅は確認面で0.36～1.06mを測る。南側の溝幅は40cm前後と一定しているが、北側はSD2との切り合い付近から徐々に広がりを見せる。深さは16～27cmを測る。断面形は台形状を呈し、壁は平坦な底面から緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は、SD2との切り合い部分、SD3との合流部分では複数層に分層されるが、概ね炭化物を少量含む灰色シルトの単層である。遺物は、7D19区から須恵器有台杯（52）出土したほか、SD3との合流部付近から須恵器片3点が出土している。

SD2（図版2・3・19・26・55～57）

7F6区から10A22区に存在する溝である。全体の平面形は、調査区外の南東側から北西方向に走り、SD1に切られ、7D15・8D11区で東に約30°屈曲し、東から西方向へと進路を変える。その後、7C15・8C11区で北西に約50°屈曲し、再び南東から北西方向に走る。SD2の周囲にはSD3が北東側、SD8が南西側をほぼ平行して走る。調査区内での全長は59.4mで、溝の両端部は調査区外へさらに延びる。溝底面は若干の凹凸があるものの、全体的には水平である。幅は確認面で0.69～2.20mを測る。数値の示す通り、溝幅は不規則であるが、北西側に比べて南東側の方がやや幅広の様相を呈する。深さは5～30cmとこちらも一定していない。断面形は弧状を呈し、ほぼ平坦な底面から緩やかに内湾して立ち上がる。覆土は地点により、単層のところから5層に分層されるが、概ね上層がオリーブ黒色土もしくはオリーブ灰色土、下層が灰色系のシルトで構成される。遺物は7E12・13・17区を中心にして分布しており、須恵器墨書杯（56）、須恵器無台杯（53・54・55）、土師器椀の底部片（57）など約40点が出土している。また、7C20区から出土した須恵器片がSD9出土の須恵器無台杯に接合した。

SD3（図版2～6・19～21・26・27・55～57）

7F8区から17A22・23区にかけて存在する溝である。全体の平面形は、南側調査区を南東方向から北

に向けて大きな弧を描きながら縦断し、水路を越えた17A区から北西にやや進路を変えて調査区外へ抜ける。溝の調査区内での全長は119.5mを測り、溝の両端部は調査区外へさらに延びる。溝底面は、南東から北に向かって傾斜している。幅は確認面で0.56～2.38m、深さは13～38cmを測る。数値には開きが見られるが、全体の傾向としては、北側に向かうにつれて溝幅が広くなり、深さが増す傾向を示す。

SD3は、調査区の半分を縦断するような長い遺構ということもあり、地点により堆積状況や遺物の出土状況が異なる。そのため3区分して記述する。

7F8区～8D3・4区間は、調査区外の南東側から等高線に沿って北東に向かって走り、主軸方向はN－43°－Wを測る。その後、やや北に26°屈曲し、南南東から北北東へ進路を変える。周囲には8D8区でSD1と合流するほか、SD2が南西側を並走する。SD2とSD3は芯々間で約3.5mを測る。断面形は台形状を呈し、壁は中央がやや凸状になる底面から緩やかに外反して立ち上がる。地点により覆土は2～5層に分層されるが、いずれの地点においても1層にオリーブ黒色土、2層に暗灰色シルトを含むオリーブ灰色シルトが堆積している。遺物は、南東側で出土した60点ほどの資料が、ほぼ土師器であるのに対して、SD1との合流部付近では須恵器と土師器が混在して出土している。

8D3・4区～11B4・9区間は、等高線を縦断して南南東から北北西に向かって走り、主軸方向はN－17°－Wを測る。その後、北に33°屈曲し、南南西から北北東へと進路を変える。SD3の南西側にはSD8とSD2がほぼ平行に並走しており、SD2とSD3は芯々間で約9mを測る。断面形は台形もしくは半円状を呈し、やや丸みを帯びた底面から緩やかに外傾して立ち上がる。ただし、地点によって片壁に段を有する場合もある。覆土は5層に分層され、上からオリーブ黒色土、灰色土、灰色シルトの順である。また、全体的に各層とも砂粒を含む。この区間においては、ほとんど遺物が出土していない。8D4・5区において須恵器蓋（59）が出土しているが、これはSD1との合流部付近における遺物集中に関連する資料と捉えることとする。

11B4・9区～17A22・23区間は、南側調査区の平坦部を等高線にほぼ平行して南南西から北北東に向かって走り、水路を越えた16B3・8区で進路を北方向に変える。主軸方向は、それぞれN－16°－EとN－2°－Wを測る。南区では約6m東側にSD10が並走し、北区ではSD3と直交するSD19とSR1に切られる。ただしSR1による削平は一部に止まり、溝の下部が遺存する。断面形は平坦ないしはやや起伏をもつ底面から、急斜度で立ち上がった後に、東壁は中場が段状に大きく広がり、西壁は屈曲して外へ広がる。覆土は地点により2～7層に分層されるが、中層部では地山を供給源とする砂粒が多く含まれる。ほぼ全ての遺物が14・15B区から出土し、特に溝幅が大きく広がる14B2・7区より北側に集中する。遺物は、東壁の広い段から底部に下る落ち際に比定される層位からの出土が多く、遺物の分布範囲も落ち際に沿って出土していることが認められる。遺物は500点以上出土しており、その大半が土師器である。数は少ないものの、須恵器、黒色土器、土製品、鉄滓も見つかっている。

SD8（図版3・21・57）

8B21区から9A22区にかけて存在する溝である。平面形はほぼ直線的に南東から北西に走り、主軸方向はN－24°－Wを測る。溝底面は南東から北西に緩く傾斜する。本遺構の周囲には、SD2とSD3がほぼ平行に並走し、SD2とは芯々間で約6mの距離である。また、南側でSD9と直交する。調査区内の全長は17.3mを測り、南端はSD9に切られ、北端は遺構外へ更に延びる。幅は確認面で0.48～0.62m、深さは17～20cmといずれも一定している。断面形は弧状を呈し、丸底から緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は2層に分層され、上層、下層共に灰色系のシルトを基本とするが、上層の方がやや暗い色調である。遺物

は覆土から須恵器杯の口縁～体部片（122）が1点出土したのみである。

SD9（図版3・21・57）

7A25区から7C5区にかけて存在する溝である。平面形は緩く蛇行しながら東西に走り、主軸方向はN－82°－Wを測る。溝底面はほぼ水平である。本遺構の東端付近では、直行するSD8を切っている。調査区内での全長は12.37mを測り、東端は調査区を東西に走る撹乱に削平され、西端は調査区外へ延びている。東端は、SD2と溝の軸方向が比較的近いこと、SD2出土の須恵器片と接合する須恵器無台杯（123）が出土していることから接続していた可能性もある。幅は確認面で0.42～0.84m、深さは12～15cmを測る。幅に関しては、やや数値に開きが見られるが、概して50cm前後が平均な溝幅である。断面形は弧状を呈し、やや丸みを帯びた底面から緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は灰色シルトを主体とする単層である。また、土層断面図作成地点において噴砂が認められた。SD9はこの噴砂痕を切っている。遺物は覆土から上記した須恵器杯が1点出土したのみである。

SD10（図版4・5・21・58）

13C5・10区から16B11・16区にかけて存在する溝である。平面形は、等高線に沿って緩く蛇行をしながら南北に走る。溝底面は全般的に水平であるが、北端部でやや北へ傾斜する。周囲にはSD3が西側で並走し、SA17が約5m東に位置している。調査区内での全長は23.51mで、南端はそのまま収斂し、北側は農業用水路の構築時に破壊されたと思われる。ただし、底部が一部遺存しており、溝幅が広がる状況から、SR1に合流していた可能性もある。幅は確認面で0.30～0.53m、深さは5～11cmを測り、北に向かって幅広になる。断面形は幅広のV字状を呈し、丸底から緩やかに外傾して立ち上がる。なお、南側に向かうにつれて溝の上面と底面の高低差がなくなり、壁と底面の境が不明瞭になる。覆土は灰色シルトを斑状に含むオリーブ黒色土の単層である。遺物は、覆土から土師器甕の体部片や土師器細片など計4点出土しているが、図化できるものはない。

SD11（図版5・21・58）

15C、16C・D、17D区に存在する溝である。平面形は直線的に北東から南西に走り、主軸方向はN－68°－Eを測る。溝底面は北東から南西方向に緩く傾斜する。SD11はSR1の南側を並走しており、16C1・6区ではSD19、16C12区ではP18と切り合っている。SD19およびP18との新旧は、両遺構共に本遺構を切る関係にある。全長は17.7mで、幅は確認面で0.15～0.29mを測る。深さは3～12cmである。断面形は半円状を呈し、壁はほぼ全域において急斜度で立ち上がる。覆土は炭化物を微量に含む黒褐色シルトの単層である。遺物は、覆土から摩滅した土師器細片が1点出土している。なお、調査区の中央を通る農業用水路脇の土盛り部分を調査した際に、全長2.65mの溝が本遺構の約1m南東で検出された。平面・断面形状及び覆土より、同一遺構と考えられる。残念ながらSD19に切られており、交点は確認されなかった。位置関係は、本遺構の西端より約1m東で交わったと考えられ、77°南に屈折している。この部分からの出土遺物はない。

SD19（図版5・21・58）

16A22・23区から16C11区にかけて存在する溝である。平面形は南東から北西方向へ走り、主軸方向はN－60°－Wを測る。溝底面は南東から北西方向に緩く傾斜する。SD19は農業用水路建設に伴い、遺構の南岸側と南東側を削平されている。また調査区西壁の土層観察の結果から、SR1からも上層部分が削平されていることが認められた。一方、西側では南側調査区から延びるSD3を切り、東側ではSD11を切っている。調査区内での全長は16.65mを測り、西端部は調査区外へ延びている。東端部は削平されてい

るため全容は不明であるが、SD19の東側に位置する15・16D区において、その痕跡が認められないことから、農業用水路部分をそのまま東方向へ延びていたものと推定される。幅は確認面で1.04～1.78m、深さは11～24cmを測る。断面形は弧状を呈し、壁はやや凹凸のある底面から緩やかに立ち上がる。覆土は3層に分層され、1層には木片などの未分解植物が混じる。遺物は、須恵器無台杯片（124）、土師器椀の底部片（125）、土師器甕の体部片（126）など計20点以上が出土している。

SD20（図版6・21・58）

20C6・11・16区に存在する溝である。平面形は南東から北西方向へ直線的に走り、主軸方向はN－68°－Wを測る。溝底面は南東から北西へ傾斜する。本遺構は、SX22内の北側に位置している。全長は3.04mを測り、幅は確認面で0.18～0.26m、深さは6～7cm、と幅・深さは共にほぼ一定である。断面形は弧状を呈し、壁は平坦な底面から緩やかに立ち上がる。覆土は灰オリーブ色砂質土の単層である。覆土に炭化物が多く混入する理由としては、風倒木と推定されるSX22の影響も考えられる。遺物は土師器細片が6点出土している。

SD21（図版6・21・59）

19C3・8・13区に存在する溝である。平面形は南東から北西方向へ直線的に走り、主軸方向はN－75°－Wを測る。溝底面はほぼ水平である。本遺構の北側には、SX22とSX55が隣接し、約6m南にはSD20がほぼ平行に並走している。全長は3.0mで、幅は確認面で0.29～0.40m、深さは4～9cmを測る。断面形は弧状を呈し、平坦な底面から緩やかに立ち上がる。覆土は炭化物を少量含む灰色砂質土の単層である。遺物は土師器片が1点出土している。

SD34（図版7・21・59）

20E25区に存在する溝である。平面および断面形状から土坑と認定しがたく、溝とした。全長は0.78mで、幅は確認面で0.23mを測る。深さは16cmで、底面はほぼ水平である。主軸方向はN－28°－Wを測る。断面形は半円状を呈し、壁は北側が急斜度に立ち上がる。覆土は炭化物を中量含む灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SD35（図版7・21・59）

20E2・3・7・8区に存在する溝である。平面形は東西に走ると推定されるが、直交する撹乱に削平されるため、全容は不明である。ただし、撹乱の向かい側に本遺構の痕跡が認められないことから、撹乱内で収斂すると思われる。遺存部分における溝底面は、ほぼ水平である。幅は0.37～0.47m、深さは4cmを測り、東側でやや幅広になる。断面形は概ね弧状を呈するが、中央部はW字状になる。底面には凹凸があり、溝の上面と底面との高低差があまりないため、壁と底面の境は不明瞭である。覆土は炭化物を少量含むオリーブ黒色土の単層である。遺物は須恵器蓋片（127）のほか土師器片が10数点出土した。土師器片の大半は器面が摩滅した細片あり、図化できるものはない。また、本遺構およびその周辺から、ややまとまって破砕礫が出土している。

SD43（図版8・21・59）

23D20区から24B24・25区に存在し、南東から北西方向へ緩やかに屈曲する溝である。溝底面は緩く南東から北西へ傾斜する。南東には本遺構と直交するような形でSR2が位置し、南にはSK42、北西端付近にはSK44がそれぞれ近接している。本遺構の南東端は撹乱されており、SR2と直接接合していないものの、SR2に向かうにつれて溝幅が広がること、SR2の壁面部に合流痕を有することから、同時存在していたと推定される。全長は20.3mで、幅は0.27～0.86mを測る。深さは4～6cmで、ほぼ一定している。

断面形は弧状を呈し、壁は比較的平坦な底面から緩やかに立ち上がる。しかし、上面と底面の高低差があまりないため、壁と底面の境は不明瞭である。覆土は、炭化物を微量含むオリーブ黒色土の単層である。遺物は中央付近で須恵器の体部片（128）が1点出土したのみである。

E　性格不明遺構

平面形状が不整形で、完掘後も用途や性格の推定が難しい遺構を総称してSXとした。SXは4基検出されているが、そのいずれもが北側調査区である。

SX22（図版22・60）

19C区と20C区にまたがって検出された遺構である。本遺構内にはSD20があり、南側にはSK48、西側にはSX55が隣接する。平面形は不定形な円形を呈し、長径・短径共に5.75mを測る。深さは確認面から29cmである。断面形は概ね台形状であるが、底面は所々に凹凸を有する。壁面は底面から緩やかに内湾して立ち上がる。覆土は15層に分層され、特に2・3・6層で炭化物が多く含まれる。出土遺物はない。形状や覆土の状況から、風倒木痕であると考えられる。

SX29（図版23・60）

調査区東端の20F5区と21F1・2区において検出された遺構であるが、その大半は調査区外へ広がっている。南北3.7m以上、東西1.0m以上を測る不定形な遺構で、深さは17cmである。遺存部分における底面は所々に凹凸を有するが、全体の断面形は弧状を呈すると思われる。覆土は3層に分層され、各層とも灰色系のシルトを基本とする。これらは地山に酷似するが、いずれの層も炭化物を含み、特に1層は多量に混入する。遺物は覆土から土師器細片が56点出土した。いずれも器面が摩滅しており、遺存状態が非常に悪い。形状や覆土の状況から、風倒木痕の可能性が強い。

SX38・54（図版23・60）

22E13・14・18・19区に位置し、共に不定形な楕円形を呈する遺構で、互いに隣接して検出された。規模はSX38が長径0.95m、短径0.75mを測る。断面形はごく浅い弧状を呈するが、西端付近は楕円形に窪んでおり、その部分の深さは10cmとなっている。SX54は長径0.80m、短径0.64m、深さ5cmを測る。覆土はともにオリーブ黒色土の単層で、焼土粒や炭化物を多く含んでおり、ほぼ同一と思われる。これらの遺構周辺には、ピットが多数検出されている。これらは大半が径20cm前後、深さ10～30cmの遺構規模となっているが、配置などに規則性は認められない。出土した遺物は多く、遺物の分布も遺構覆土内に限らず、同一個体と考えられる資料が検出面上や遺構周辺の表土中から出土している。このことからSX38・54は、掘り込みを持つ同一遺構の上部が削平された可能性も考えられる。遺物は、灰釉陶器皿の口縁部片（129）、須恵器横瓶の体部片、土師器甕（130、131）、黒色土器など計300点以上が出土している。出土遺物は、比較的接合する資料がある一方で、ほとんどが摩滅した土師器細片である。そのため、これらの遺物が接合する割合は低い。また、本遺構から出土した須恵器片が、北に約5mのところに位置するSR2出土資料と、また土師器甕の体部片数点がSK56出土資料と接合している。

SX55（図版22・60）

19B区と19C区にまたがって存在する遺構である。本遺構の東側にSX22、南東側にSD21がそれぞれ隣接している。平面形は不定形な楕円形を呈し、主軸方向はN－87°－Eである。長径は4.78m、短径は3.76m、深さは確認面から75cmを測る。断面形は概ね弧状であるが、所々に落ち込みがあり、場所によっては漏斗状をなすところもある。壁面は凹凸のある丸底から、緩やかな傾斜で立ち上がる。覆土は14

層に分層され、全般的には黄灰色系シルトと灰色系シルトを基本とする。7、8、10、11層には炭化材や炭化物が多く含まれ、9層からは樹根も出土している。これら出土した炭化材や樹根に加工痕がないこと、覆土と地山の土質が酷似していることなどから、これを人為的な遺構とは考えにくく、風倒木の可能性が高い。

F　自然流路

SR1（図版5・6・24・61）

19F区から16～18A区にかけて、東西に走る川跡である。川の幅は、広いところで約23.2m、狭いところで約3mを測り、東から西に向かうにつれて川幅が広がる。深さは、浅いところで17cm、深いところで39cmを測る。流路の最深部は概ね川跡の中央を通過するが、西端付近では左岸寄りとなる。底面は東側が若干高く、西側はほぼ水平である。土層断面の観察からは、覆土に切り合い関係が認められず、深度も浅いため、水流の弱い河川であったと考えられる。なお、珪藻化石の分析からは、SR1が湿地もしくは沼沢地環境という所見が得られている。この分析結果は、土層断面観察の所見と概ね合致するものと思われる。南西側において、SR1は農業用水路に破壊されるが、一方で、南側調査区から延びるSD3と南側を並走するSD19の一部を削平している。断面形は、全般的に弧状を呈し、壁は凹凸のある底面から緩やかに立ち上がる。西側の右岸は、底面から緩やかに立ち上がった後に、凹凸のある平坦面が広がり、壁面と上面の境が不明瞭となる。覆土は3層に分層され、1層が黒色粘質シルト、2層が褐灰色粘質シルト、3層が褐灰色砂質シルトである。2層と3層の色調は非常に酷似しているが、3層に含まれる砂粒の混入量が多いため、比較的容易に分けることが可能である。また、全ての層に微細な木片や繊維状の未分解植物が含まれ、2・3層に含まれる暗褐色シルトも腐植植物質を母材として変化したものと思われる。遺物は概して満遍なく出土するものの、川幅が狭い18・19E区付近ではやや密集した状態で出土している。遺物の出土層位は、大半が1・2層であり、3層からの出土数は少ない。そして、1層出土の遺物、特に土師器は細片が多いのに対して、2層の遺物は土師器でも比較的大きな破片が含まれる傾向がある。出土遺物は400点以上を数え、須恵器・土師器・黒色土器・土製品などが出土している。全般的に出土した土器は細片が多く、時期及び器形の判別が可能な資料は少ない。また、18D13区から出土した須恵器甕の口縁部破片が、SR2の23E11・17・22・23区から出土した須恵器甕（174）と接合した。この接合資料により、SR1とSR2の同時存在の可能性が推定される。本遺構東側の左岸で流木がいくつか検出されたが、木製品は出土しなかった。

SR2（図版7・8・25・61）

20A・21A区から23F・24F区にかけて、東西に蛇行して走る川跡である。土層断面の観察から、SR2は流路の移動や川幅の増減を繰り返し行い、その流路形成から埋没に至るまで、何段階かの過程を踏んでいることが認められる。珪藻化石の分析からは、河川の影響を受ける湿地もしくは沼沢地環境という所見が得られている。つまり、遺跡が形成されていた当時は、常時水が流れていたわけではなく、本流の流路や水量の変化によって、時折水流があったものと思われる。土層断面図作成地点において、覆土は全部で26層に分層され、大きくはSR2が埋没する段階で主に遺物が含まれる1～6層、遺跡が形成された当時の川底および川岸であると思われ、若干の遺物が含まれる7～17層、SR2に水流がある段階で遺跡が形成された時期よりやや古い土師器椀の口縁～体部片（175）が出土した18～26層に区分できる。ただし、1～6層の出土遺物と7～17層の出土遺物には明確な時期差は認められない。遺跡形成段階における川幅は、

カーブの部分で増減があるものの、6.5～7m前後を測り、比較的一定していると思われる。深さは50～70cmである。最終的に掘り上げた川幅は、広いところで約10m、深さは約100cmである。なお、調査の終盤に下層部分の堆積状況を確認するため重機を使用して深掘りをしたところ、20・22・25層で認められる灰白色の砂層が引き続き堆積していることが認められた。流路の最深部は川跡のほぼ中央を通過し、底面は東から西に向けて緩く傾斜している。断面形は弧状を呈し、壁は起伏のある底面から両壁が大きく開いて立ち上がる。1－6層における遺物の分布は、遺構が集中する調査区東側の左岸側で多く出土する傾向を示す。特に、23E11区と23E17・22区では遺物が集中して出土した。ただし、23E11区の集中部に関しては、遺物の取り上げ後に精査を行ったところ、SK52が検出された。そのため、これら集中部の遺物群が、本来SK52に伴う資料を含む可能性もある。出土遺物は1800点以上を数え、須恵器・土師器・黒色土器などが出土している。出土した遺物の多くが土師器片であり、全体では8割以上にも達する。しかし、土師器片は遺存状態が悪く、細片が大半を占める。また、本遺構から出土した須恵器片にSX38出土資料が接合した。これらは須恵器横瓶（171）と同一個体と思われる。SR1と同様に流木や種子などの未分解植物が含まれるが、木製品は出土していない。

第Ⅴ章　遺　　物

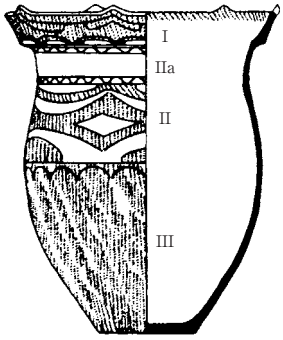
1　遺物の概要

遺物は、古代を中心に弥生時代から近世まで幅広い時代のものが平箱（54 × 34 × 14cm）で26箱出土した。弥生時代の遺物は3箱で、包含層であるⅣa層を中心に出土している。古代の遺物は23箱で、包含層が削平されており、遺構出土のものを除いて表土から中・近世の遺物と共に出土している。遺物の内訳は、弥生時代では土器と石器および搬入礫、古代では土師器・須恵器・木製品・土製品・鉄滓・石製品などである。そのうち土師器はロクロ成形のものが大多数を占めるが、一部非ロクロ成形のものもみられる。また中・近世の遺物は陶磁器、銭貨などで、近世の陶器は近世初頭のものがまとまっており、特に唐津焼のいわゆる「古唐津」といわれる時期のものが多くみられる。銭貨は寛永通宝も出土しているが、渡来銭が半数以上を占めている。

2　記述の方法

遺物の記述は、弥生時代、古代、その他の時代に分けて行うこととした。各時代の記述は遺物の大別ごとに行い、その中で遺構出土のものから遺構外へと続けた。

本遺跡から出土した弥生時代の遺物は、大部分を包含層遺物として取り上げを行ったが、その後、炉跡が検出され遺物も大部分がその周辺に分布していることが判明した。そのことから住居跡と認定した。住居跡のところで述べたように遺構の範囲が明確ではなかったが、炉跡を中心とした推定範囲周辺で出土した遺物を便宜的に住居出土として扱うこととした。また住居などの遺構から離れて出土した遺物は、遺構外出土として扱った。



第14図　天王山式土器の文様帯

弥生時代の遺物は土器と石器があり、分けて記述を行った。弥生土器は東北系のものが大多数であり、広義の天王山式土器［石川2000］と考えられるものが中心となっている。そこで土器の説明には第14図の鈴木正博氏の文様帯区分［鈴木1976］に従うことにした。この文様帯区分は口縁部がⅠ文様帯、頸部がⅡa、胴部上半がⅡ、胴部下半がⅢとなっている。

古代の遺物は遺構によって出土量に大きな差があり、掘立柱建物や土坑は出土量が少なく、主にSD3、SR1・2からの出土となっている。そのような出土状況であったため、古代の遺物を抽出するにあたっては、遺構出土のものを極力抽出する方針とした。なお各器種の部位名称・遺物図版のスクリーントーンの使用例は、第15図の通りとした。

3　弥生時代の遺物

A　土　　器

SI40 およびその周辺（図版28－1～7・図版62）

1は甕の口縁部から頸部の破片で、二次焼成を受けている。形状は口縁部がやや肥厚し、外傾している。口唇部は刻み目、Ⅰ文様帯には斜位のRLの縄文が施され、2条の弧線文はその頂部及び弧の中心で反転している。弧線は非常に緩やかである。口頸部の境は段がみられ、Ⅱa文様帯は無文となっている。Ⅱ文様帯には横位の沈線が配置され、RLの縄文が斜め方向に見られる。内面はナデ調整であり、胴部には輪積み痕がみられる。20E8区出土である。2は壺ないし甕の胴部破片である。RLの縄文が施され、上向きの弧線文及び横位の沈線文がみられる。20E7区出土である。3は甕の頸部破片であり、半截竹管状の施文具で櫛描文が横位に施されている。屈曲がみられることから、器形は口縁が外に開くものと考えられる。20E7区出土である。4は甕の底部の破片で、二次焼成を受けている。RLの縄文が、底部直前まで縦方向に施されている。20E6・7区出土である。5は壺または甕の胴部の破片である。RLの縄文が施され、上向きの弧線文と縦位の弧線文がみられる。6は壺または甕の胴部の破片である。RLの縄文が施され、横位・斜位の沈線と縦位の弧線文がみられる。5と6は共に20E7区出土であり、同一個体とも考えられる。7は胴部以下が残る甕である。頸胴部の境は、横位の沈線となっている。Ⅱ文様帯は沈線による菱形文とそれの崩れたものがみられ、場所によって文様が異なっている。Ⅲ文様帯との境は2本の横位の沈線が施されている。Ⅲ文様帯は上向きの連弧文が2条施されている。なお地文にLRの縄文が施されたと考えられるが、わずかに胴部下半で確認されるのみである。20D21・20E1区出土である。

SI41 およびその周辺（図版28－8・10～13・図版62）

8は甕の口縁部から頸部の破片で、外面に煤の付着がみられる。口唇部には小突起がみられ、外面方向からの刻みとLRの縄文が施される。Ⅰ文様帯は、LRの縄文が斜めに施されるのみである。口頸部の境は区画文がみられないが、段によって区分されており、Ⅱ文様帯は無文となっている。内面は、確認できる部分ではナデ調整が行われている。21E5・22E1区出土である。10は図上で復元を行った甕で、胴部下半に炭化物の付着がみられる。口唇部には小突起がみられ、LRの縄文が施される。Ⅰ文様帯はLRの縄文が斜位に施され、また口頸部の境は区画文がみられず明瞭ではない。Ⅱ文様帯はLRの縄文が横位に施されている。22E1・6区出土である。11は図上で復元を行った口縁が内湾する甕である。Ⅰ文様帯は口縁を肥厚させており、そこにLRの縄文が斜位に施されている。口頸部の境は、明瞭な段によって区画されている。Ⅱa文様帯は無文となっており、Ⅱとの境は区画されておらず明瞭ではない。Ⅱ文様帯は、LRの縄文が横位に施されている。21D20・22D16・21区出土である。12は口縁がやや内湾する甕で、口縁部の破片と胴部の大形破片からなるが接合はできなかった。口唇部には小突起がみられ、刻みが施されている。文様帯Ⅰは非常に狭くなっており、指頭押圧を加えた隆帯と横位の沈線が1条施されている。口頸部の境は平行沈線内に「ハ」の字の刺突列がみられるが、沈線は一部不明瞭となっている。Ⅱa文様帯は、2条の沈線によって下向きの連弧文が施されている。頸胴部の境は、平行沈線内に交互刺突がみられる。Ⅱ文様帯はLRの縄文が横位に施され、4条の沈線による山形文がみられるが、一番上位の沈線は「V」字状となっている。Ⅱ文様帯とⅢ文様帯の境は、1条の横位の沈線によって区画されている。Ⅲ文様帯は、Ⅱと同様にLRの縄文が横位に施されている。内面は口縁部付近がナデ調整であり、胴部はハケ調

整となっている。21E10・22D21区出土である。13は甕で、胴部から底部にかけて残存している。LRの縄文が斜位に施されるが、胴部下半までは施文されていない。21D19区出土である。

SK53（図版28－15・図版62）

15はSK53出土の甕または鉢の胴部破片であり、土器外面に煤が付着している。Ⅱ文様帯とⅢの境は横位の沈線によって区画されており、ⅢはRLの縄文が縦位に施されている。

土器集中部（図版29－20・21・図版63）

20・21は共にほかの土器と異なり、南側調査区出土である。20は土器集中1・2出土の甕である。口縁は外傾しており、土器表面には煤が付着している。文様帯の区分はみられず、口唇部及び口縁から胴部半ばまでLRの縄文が横位・斜位に乱雑に施され、また内面には輪積み痕がみられる。21は土器集中部3出土である。器形は小型の鉢で、底部は丸底となっており、器高6.6cmを測る。口縁は外傾し、口縁内面および口唇部にLRの縄文が施されている。胴部上半は重菱形文が描かれ、胴部下半には連続刺突文による区画がなされ、その下に横位の平行沈線が4条みられる。内面の調整は口縁直下がハケ、胴部上半がナデ、胴部下半がハケ、底部がナデとなっている。

遺構外出土（図版28－9・14・図版29－16～19・図版62）

9は甕の胴部破片で、LRの縄文が横位に施される。土器外面に煤、内面にタール状の炭化物の付着がみられる。22E2・3区出土である。14は甕の胴部破片で、土器内外面に炭化物の付着がみられる。文様は、LRの縄文が斜位に施されている。21E5区出土である。16は内湾する甕の口縁部破片であり、LRの縄文が横位に施されている。22D21区出土である。17は甕の口縁部付近から頸部の破片である。Ⅰ文様帯はLRの縄文が斜位に施されている。口頸部の境は区画文がみられず、またⅡa文様帯は無文となっている。21E10区出土である。18は甕の口縁部破片である。口縁は大きく外傾しており、内外面に横位のハケ調整がみられる。21E9区から出土しており、ほかの遺物とはやや離れている。19は甕の胴部破片で、Lの撚糸文が横位に施されている。21E5区出土である。

B　石　　器

SI40およびその周辺出土（図版29－22・23・29・図版63）

22・23は有茎石鏃である。22は裏面が平坦剥離によって仕上げられており、断面形は三角形を呈する。裏面には素材剥片の剥離面を残し、素材剥片を縦位に用いていることがわかる。表面先端部にはわずかに原礫面を残す。23は両面調整であるが、やや大ぶりな加工に留まっている。2点とも石材は頁岩である。27は石錐である。平面形は棒状を呈し、縁辺に加工が施されている。先端部をわずかに欠損する。石材は頁岩である。29は2極1対の楔形石器であり、上下両端からの剥離痕、刃潰れが認められる。石材は頁岩である。

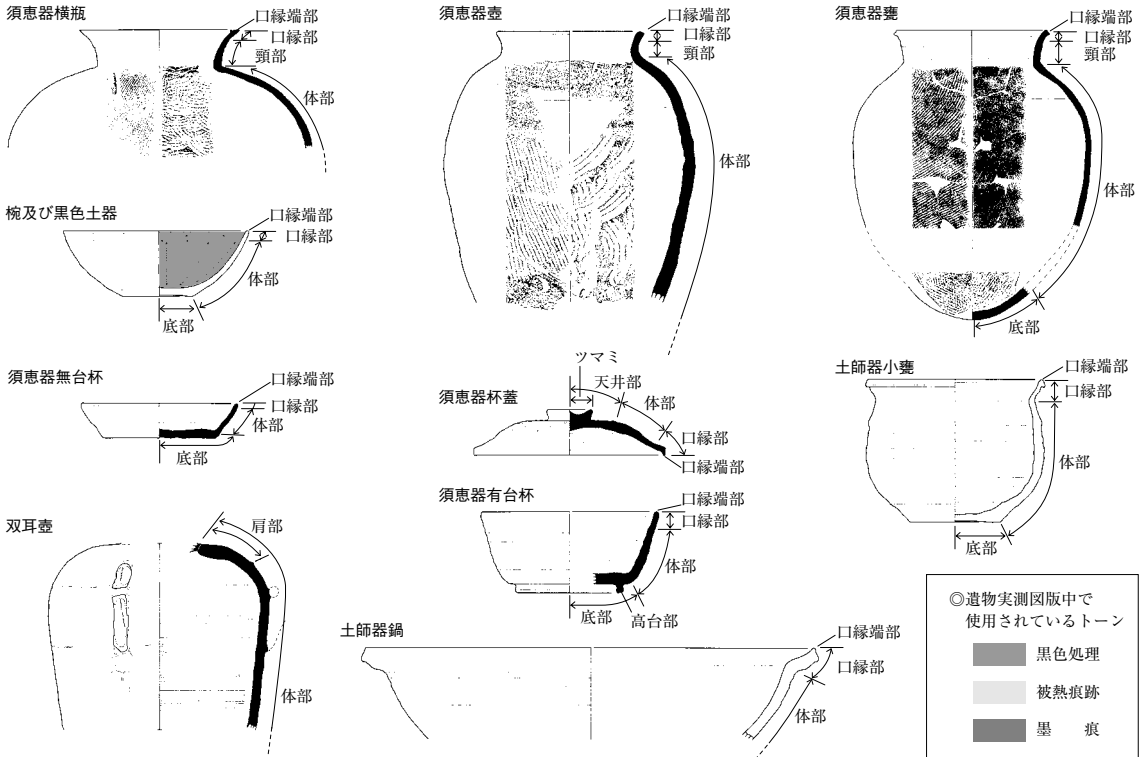
SI41およびその周辺出土（図版29－24・25・28・31・32・図版63）

24・25は有茎石鏃である。24は素材剥片を横位に用い、表面は全面、裏面は縁辺部のみに加工が施されている。石材は頁岩である。25は素材剥片を縦位に用い、大ぶりな加工が施される。表面基部にわずかに原礫面を残す。加工が比較的粗く基部のつくりがしっかりしていないことなどから、未成品あるいは失敗品とも考えられるが、先端部を欠損しているので、石鏃として使用されたものと考えられる。28は石錐である。表面に原礫面を大きく残す縦長剥片を縦位に用い、打面部および周縁部に加工が施されている。先端部をわずかに欠損する。石材は頁岩である。31は二次加工剥片である。幅広の不定形剥片を素

材として、微細な二次加工が表裏側縁部と表面下部に観察される。右側縁部を欠損する。石材は頁岩である。32は両刃の磨製石斧である。全面に製作時の敲打痕がクレーター状に認められ、また表面右側に横方向の擦痕がみられる。石材は砂岩である。

遺構外出土（図版29－26・30・図版63）

26は表土出土の有茎石鏃である。素材となる剥片の打面部を基部側に置き、裏面は周縁部のみの加工が施される。表面の加工は裏面よりも大きいが、中央まで及ばず若干素材の面を残している。石材は頁岩である。30は2極1対の楔形石器であり、上下両端からの剥離痕、刃潰れが認められる。右側縁に両面加工が、裏面左側縁に微細剥離が見られるが、両極打撃によるものではないと考えられる。石材は頁岩である。



第15図　古代土器の部位名称と凡例

4　古代の遺物

A　土器の分類（第16・17図）

各種報告書などを参考に器種分類を行なった。

食膳具

杯：還元焔焼成による、やや深身の器。

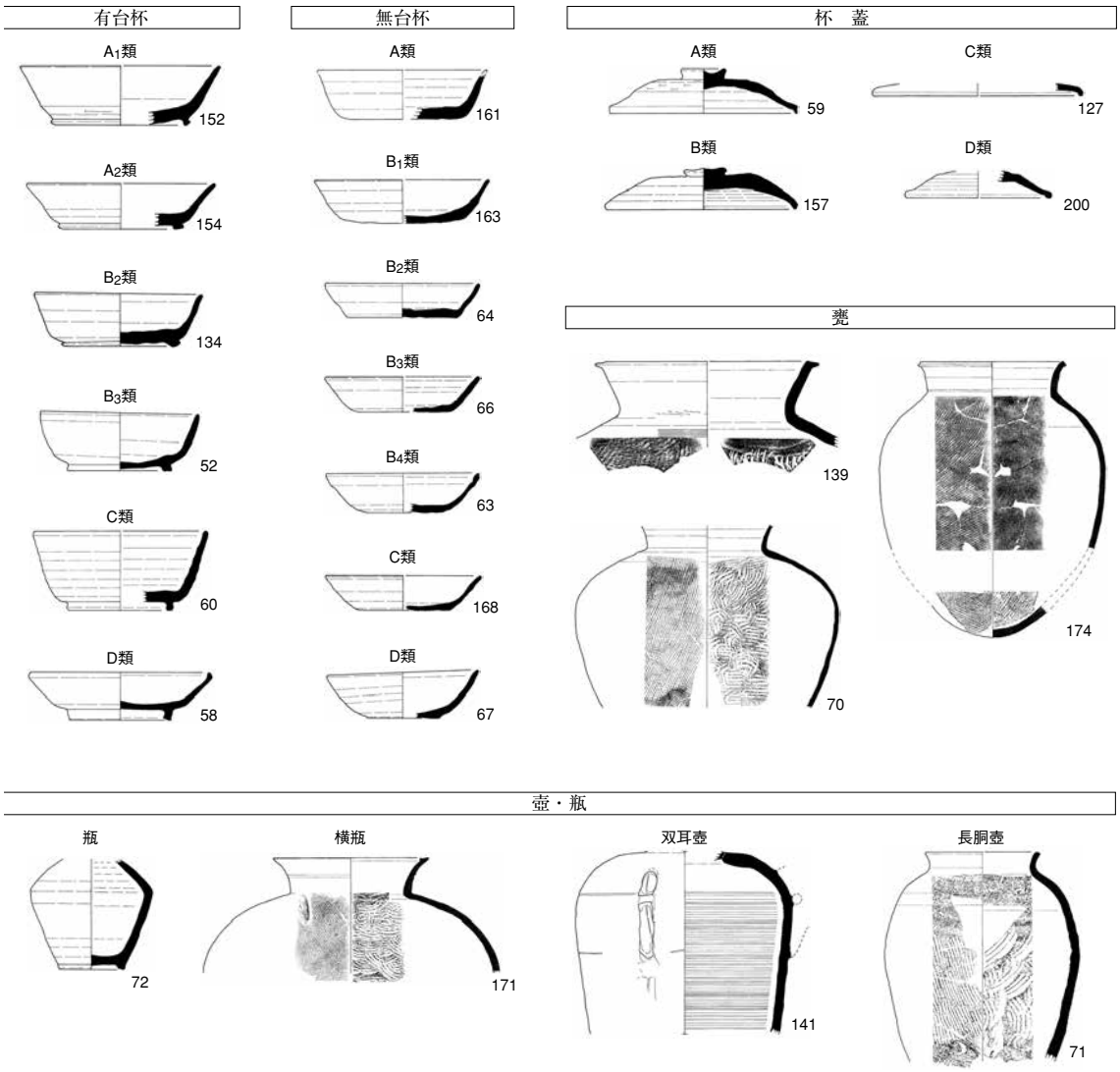
有台杯……高台を持つ杯

A類：口径に比して器高が低い一群（図版33－154）

B類：口径に比して器高が高い一群（図版30・33－52・134）

C類：口径に比して器高が高く、口縁が直立する一群（図版31－60）

■須恵器



第16図　器種分類（須恵器）

D類：折縁のもの（図版31－58）

このうちA類とB類については底部における高台の位置と立ち上がりの形態で1～3類に細分できる。

1類：底部の外端に高台が付されるもので、立ち上がりはヘラケズリにより斜上方向の平坦面を有する。

2類：底部付け根の外端から平坦面が横に少し伸びた後に体部が立ち上がるもので、立ち上がりは明瞭な稜をなす。

3類：高台は丸底の端部より内側に付されるもので、立ち上がりは丸く底部より上方に位置する。

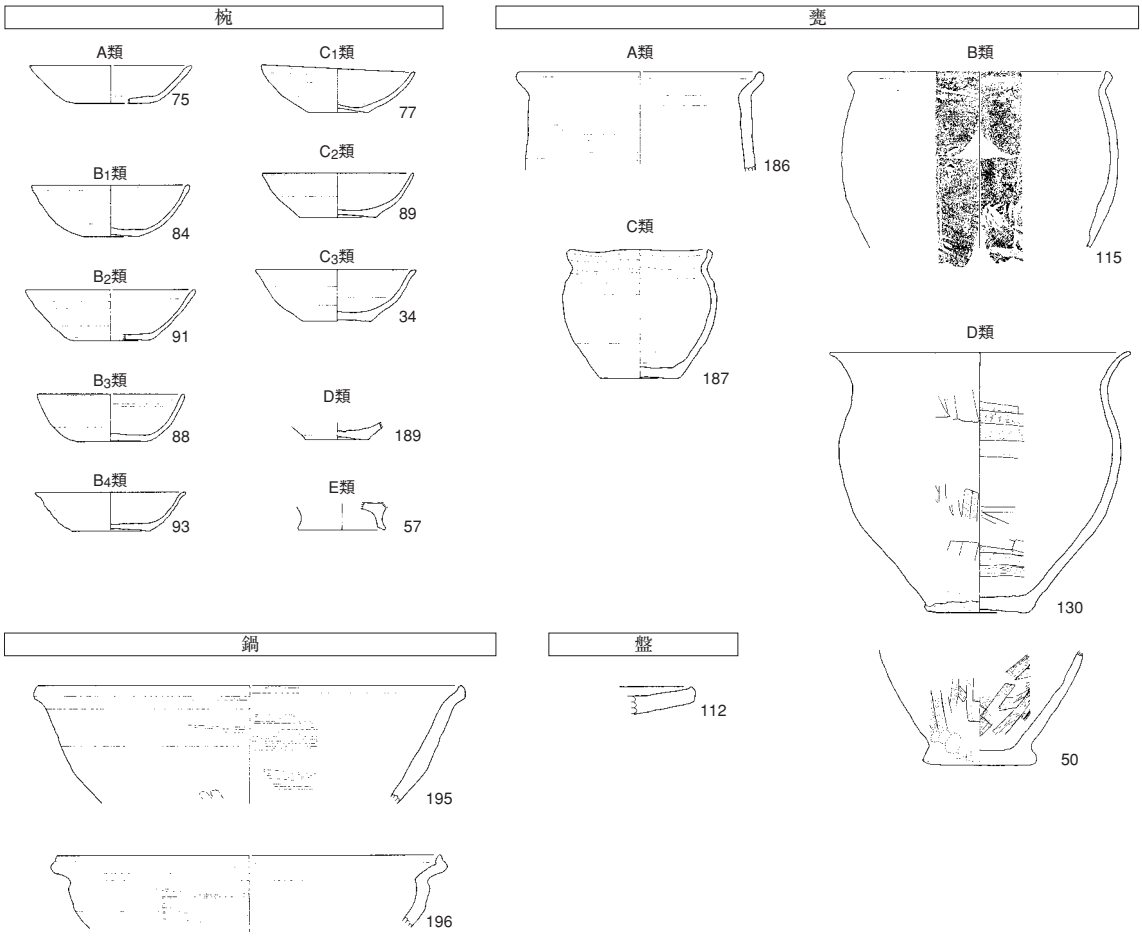
本文中においてはA・B類と1～3類の組み合わせによって有台杯A1類、B2類と表記する。

無台杯……高台を持たない杯

A類：器壁が厚く、口径に比して深身な一群（図版34－161）

形態等により数形式が存在すると考えられるが、出土数が少ないことから、あえて細分は行わ

■土師器



第17図　器種分類（土師器）

ないこととする。

B類：器壁が厚く、口径に比して浅身な一群

底部や立ち上がりの形状、口縁部の違いから1～4類に細分できる。

1類：底部から屈曲して直線的に広がる口縁部を持ち、内面は中心から緩やかな弧を描いて口縁部に至る。（図版34－163）

2類：平たい底部から広がる口縁部を持つ。体部は直線的なものと丸みを帯びるものがあり、立ち上がりの形状は屈曲するものと丸いものがある。（図版31－64）

3類：2類に比べ小さい底部から大きく開く体部を有する。立ち上がりは丸い。（図版31－66）

4類：3類と同様の形態を呈するが、口縁部が折縁状に屈曲するもの。（図版31－63）

本文中においてはB類と1～4類の組み合わせによって無台杯B1類、B2類と表記する。

C類：器壁が薄く、口径に比して浅身な一群（図版34－168）

D類：椀形の器形を呈するもの（図版31－67）

椀：酸化焔焼成の器

A類：須恵器の器形を呈するもの（図版31－75）

B類：底部と体部の境が凹まない一群

底部や立ち上がりの形状、口縁部の違いから１～４類に細分できる。

１類：体部～口縁部にかけて丸みを帯びるもの（図版31－84）

２類：体部～口縁部が直線的なもの（図版31－91）

３類：体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部が直線的なもの（図版31－88）

４類：体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部が外反するもの（図版31－93）

本文中においてはＢ類と１～４類との組み合わせによって椀B1類、B2類と表記する。

Ｃ類：底部と体部の境が凹む一群

底部や立ち上がりの形状、口縁部の違いから１～３類に細分できる。

１類：体部～口縁部にかけて丸みを帯びるもの（図版31－77）

２類：体部～口縁部が直線的なもの（図版31－89）

３類：体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部が外反するもの（図版30－34）

Ｄ類：底部に円盤状高台のような小さな段を有するもの（図版34－189）

Ｅ類：高台を有する椀（図版30－57）

本文中においてはＣ類と細分１～３類との組み合わせによって椀C1類、C2類と表記する。

杯蓋：有台杯に組み合うと考えられる蓋

Ａ類：ボタン状のツマミを有するもの（図版31－59）

Ｂ類：扁平なツマミを有するもの（図版33－157）

Ｃ類：低平なもの（図版32－127）

Ｄ類：小型品（図版35－200）

盤：皿型で口径の大きいもの（図版32－112）

貯蔵具・煮炊具

壺・瓶：須恵器。相対的な頸の長さと括れの強さで区分

壺……頸が短く括れが弱い

長胴壺：体部が長い壺（図版31－71）

双耳壺：肩部に把手を持つ壺（図版33－141）

瓶……頸が長く括れが強い（図版31－72）

横瓶：須恵器。体部が「俵形」を呈する瓶（図版34－171）

破片で両者の区別が付けがたいものについては壺（瓶）と表記する

甕：種別により定義が異なる

須恵器……丸い底部と体部をもち、頸部が大きく外反するもの。貯蔵具（図版31・33・34－70・139・174）

土師器……内傾する体部から外に広がる口縁部を有するもの。煮炊具

Ａ類：口径に比して器高が高い一群。長甕（図版34－186）

Ｂ類：口径に比して器高が低い一群。鉢形甕（図版32－115）

Ｃ類：口径・器高ともに小さい一群。小甕（図版34－187）

Ｄ類：口縁部が直立気味で、端部が外へ緩やかに折れ曲がるもの、底部が横に広がり、底外面に砂痕あるいは木葉痕が残るものなど、東北地方の影響を受けたと考えられる一群（図版30・32－50・130）

破片で両者の区別が付けがたいものについては「甕」と表記する

鍋：土師器。口径は概ね25cm以上で外開きの口縁部と椀形の体部を有するもの（図版35－195・196）

B　土　　器

遺構出土土器

SK6（図版30－33・図版63）

33は土師器椀の底部である。摩滅のために内外面の調整は不明である。底径は4.8cmを測る。

SK27（図版30－34・図版63）

34は土師器椀C3類1点（34）が出土している。やや上げ底の底部から内湾しながら立ち上がる体部を有し、口縁部はわずかに外反する。底部は回転糸切りである。

SK28（図版30－35～37・図版63）

35は土師器椀A類である。土師器としては極めて堅致かつ良好な焼成から67（SD3）のような、土師器の製作技法を用いた須恵器かもしれない。口縁部片と底部片であるが、胎土や焼成、色調から同一個体とした。36は土師器甕A類である。内傾気味の体部から屈曲する口縁部を持ち、端部を軽く上方へ折り曲げる。37は土師器鍋である。内湾する体部から強く屈曲する口縁部を有し、端部は大きく上方につまみ上げられる。器面には板ナデおよび回転ナデが施される。

SK30（図版30－38～41・図版63）

38は土師器椀の底部である。平底から稜をもって立ち上がる体部を有する。全体に摩滅が激しいが、底部に回転糸切り痕が残る。39～41は土師器鍋である。39は口縁～体部である。内湾気味の体部から屈曲して上外方にのびる口縁部を持ち、端部を上方に折り曲げる。体部外面にカキ目が巡らされる。40・41は体部片で、40は外面に左下がりの細かいタタキが施され、内面の当て具痕はハケにより丁寧に消される。41は外面に荒く強い、斜方向のタタキが交差する。内面は短軸の丸い当て具を使用する。内外面とも現存部の上端に強いナデが巡らされる。

SK31（図版30－42・43・図版63）

42・43は土師器甕である。42は体部片で、内外面ともにハケが施される。43はD類の底部である。外面に指頭圧、内面はナデ調整がなされ、底面に木葉痕が残る。

SK39（図版30－44～46・図版63）

46は須恵器甕の体部片である。外面はタタキが横および右上がりに施され、内外面には当て具痕による平行文が残る。なお、現存部の上方は平行の当て具痕に先行する青海波状文が確認できる。

44は土師器甕の体部片である。内面は摩滅・剥離しているために調整は不明だが、外面は右上がりのタタキの後に、部分的にカキ目が巡らされている。45は土師器鍋の口縁～体部である。内湾気味の体部から上外方へ短く広がる口縁部を持ち、端部をわずかに上方へ摘み上げる。口縁に比して体部は厚い。器面は内外面とも摩滅しているが、カキ目を確認することができる。

SK47（図版30－49・図版64）

49は土師器鍋の口縁部である。摩滅により内外面の調整を確認することはできないが、端部は軽くつまみ上げられている。

SK48（図版30－47・図版63）

47は土師器甕の体部片である。内外面ともに摩滅しているが、外面に施されたタタキとカキ目をわず

かに確認できる。二次焼成により現存部の下半が赤く変色している。

SK52（図版30－48・図版64）

48は土師器甕Ｄ類の口縁～頸部である。直立気味に立ち上がる口縁部は端部を外方へ折曲げる。口縁部の折曲げ部付近はごく細いヘラミガキ２条が確認できる。

SK56（図版30－50・51・図版64）

50・51は土師器甕である。50は体部～底部で裾部が大きく張り出す特徴から、東北地方の影響を受けたと考えられるＤ類とする。調整は内外面とも指頭圧後ハケで、底面には砂痕が残る。51は体部片で内外面にハケが施される。

SD1（図版30－52・図版64）

52は厚手の有台杯B3類である。丸底気味の底部に付される高台は、外開きのしっかりしたもので、端面接地である。底部からやや明瞭な稜を持って区画される体部はやや丸みを帯びるが直線的に開く。

SD2（図版30－53～57・図版64）

53～56は須恵器無台杯B2類であり、いずれも底部は回転ヘラ切りである。56は墨書土器で、体部外面に「還万呂」の３文字がみえる。外反する体部を有し、底部には回転ヘラ切り後に回転ナデが施される。また胎土に黒色粒を多く含む。53・54は内湾しながら広がる口縁部を持つもので、法量的にも近似している。底部も回転ヘラ切りの後、ナデ調整を行う。このうち54は全体に摩滅が著しいが、底部内面には渦巻状のロクロ目を観察できる。55は内湾気味に開く体部を有し、体部の開きは他の３点に比べ若干大きい。57は土師器椀Ｅ類の底部である。外反気味に「ハ」字形に開く、やや高い高台を有し、外端接地である。

SD3（図版31・32－58～116・図版64・65）

須恵器（58～72・116）　58は有台杯Ｄ類である。口縁部は、直線的に開く体部から屈曲して若干内湾気味に立ち上がる。底部と体部の境の稜は弱く、体部から緩やかなカーブで底部に至る。底部端にはやや内傾する高台が付され、接地は外端である。内外面とも回転ナデによる調整が行われており、口縁部には重ね焼きの痕跡がみられる。また、胎土に黒色粒を多く含む。59は杯蓋Ａ類である。硯に転用されている。胎土は粗く、長石の微細粒を非常に多く含む。焼成は酸化焔焼成で、色調は全体ににぶい赤褐色である。口縁部外面が輪状に暗紫灰色を呈することから、焼成時は杯身上に反転した状態で重ねられていたものと考えられる。天井部から外反しながら下方に広がる口縁部を持ち、端部を鉛直方向に摘み出している。天井部外面にはヘラケズリが施され、中心に直径3.5cm、高さ0.8cmのツマミが付される。ツマミは中心部の周囲が凹み、断面形状は「山」字形に近い。60は有台杯Ｃ類である。高台は底部端より若干内側の位置から垂下し、接地面が内外に広がる形状を呈する。体部は底部から直線的に開き、外面には強いロクロ目が残る。体下部には幅1.0cm程度でヘラケズリが廻る。胎土や焼成、色調は59に酷似している。61～69は無台杯で、Ａ類61・62、Ｂ類63～66・69、Ｃ類68、Ｄ類67に分類される。61は丸い底部から外反気味に立ち上がる体部を持つ。62は内湾しながら立ち上がる体部を持ち、口縁部は外反気味である。体部の傾きからＤ類や有台杯ではないと考える。Ｂ類はB1～B4の４形式に細分される。64・65はB2類である。この２点は平たい底部から屈曲して直線的に開く体部を有し、器高が低い。また器壁が底部に比してやや薄くなるという器形的な共通点が見られる。両者とも胎土に長石を多く含むこと、器面に黒斑がみられること、口縁部のみ酸化焔焼成で橙色を呈するという特徴から同じ産地の製品であると考えられ、法量的には65が一回り大きい。66・69はB3類である。66は平たい底部から緩やかに立ち上がり、直線

的に広がる口縁部を有する。器厚は一定であるが、底部内面における体部との境付近で盛り上がる。底部は回転ヘラ切り後にナデ調整で施される。体部内面にはヘラで引っかいたような回転方向の傷がみられる。69は内湾気味に大きく開く体部を持つ。底部外面には「大」の墨書がみられる。内面における底部と体部の境の形状は66に似るが、底部の切り離しは回転ヘラ切りで、その後は未調整である。63はB4類で、体部が底部から丸みを帯びて立ち上がり、直線的に広がる。口縁部は外反した後、折縁状に屈曲している。胎土に比較的大粒の長石を含む。67はD類である。内湾しながら立ち上がる口縁部を持ち、底部の切り離しは回転糸切りである。色調は口縁部のみが暗青灰色を呈し、体部はにぶい赤褐色であることから焼成不良の須恵器と考えられ、胎土には黒色粒をやや多く含む。68はC類の口縁～体部片である。器壁は極めて薄いが、体部の傾きは66に近い。70は甕の頸部～体部で口縁部と底部を欠損する。大きく開く肩の張った体部を有し、頸部は外反気味に直立する。頸部の外面に、左半を欠損するが「×」状と思われるヘラ記号が現存し、調整は頸部が回転ナデ、体部は格子タタキである。内面には平行と弧線状の2種類の当て具痕が見られる。また、胎土に長石と石英を非常に多く含む。71は長胴壺である。丸くあまり肩の張らない体部から、やや外反する短い頸部を持つ。口縁端部は拡張されることなく、四角く収まる。外面の調整は口縁～肩部までは回転ナデ、体部は平行タタキ、体下部にはヘラケズリが施される。内面は口縁～肩部が回転ナデ、体部には青海波状文（弧）が施される。72は瓶の肩部～底部である。直線的に上外方に伸びる体部から屈曲して頸部に至る。回転ヘラ切りされた底部に断面逆台形の高台を貼り付けており、体部から高台へ至るラインはなだらかである。器面調整は内外面とも回転ナデによる。胎土には長石、石英、黒色粒の微細粒を多く含む。116は甕の体下部である。外面は橙色系と灰褐色系の色調を呈するが、内面は灰色系である。二次焼成を受けた須恵器であると考えられる。外面の調整は現存部の上方が平行タタキ、下方は格子タタキである。内面の当て具痕は平行文であるが、上方ではそれに先行する青海波状文が切り合っている。また、胎土にやや大きめの長石を含む。

土師器（73～115）　73～108は椀である。A類75、B類73・74・76・79～81・84～88・91・93、C類77・78・82・83・89・90・92・94～100が確認できる。これらの出土地点は大きく7～8C・D区と14～15B区の2か所に分けられ、前者からは75・87・95・96・100、残りは後者からの出土である。表面が摩滅するものが多い中、確認できるものはいずれもロクロ成形であり、底部の切り離しは回転糸切りによる。75は摩滅が著しいため底部の切り離し技法は不明であるが、法量や形態は須恵器無台杯のB3類によく似ている。焼成不良の須恵器とも考えられるが、灰黄色を呈する色調と焼成は土師器のものである。B類はB1～B3類がここでは確認できる。B1類は79・81・84～87が該当し76もここに属する可能性がある。これらはさらに細分が可能で、76・79・81は比較的大きな底部から立ち上がる体部を持ち、底部と体部の境にはやや明瞭な稜を有する。体部の器厚は底部から口縁部に向かって薄くなる。84は小さい底部を有し、器厚は底部から口縁部まで概ね一定で薄い。85は大きく開く体部を有する浅身の個体である。B2類は91が該当し、80もこれに属する可能性がある。91は平底から折れて直線的に広がる体部を有する。器厚は体下部が薄く、口縁部に向かって厚みを増す。80は底部を欠損する。やや内湾気味の体部は開きがやや小さい。B3類は86・88である。両者とも底部と体部の境に稜はなく、立ち上がりは大きく内湾する。93はB4類である。大きい底部から稜をなして立ち上がる体部は緩やかに内湾し、口縁部は外反する。また、体部にはロクロ目が顕著に残る。C類にはC1～C3類が見られる。77・78・82・83はC1類である。77・78・82は小さい底部と大きく開く体部を持つ一群である。77は上げ底の底部を持つ。非常に薄手の個体であるが、体部よりも底部が薄いという特徴がある。78は上げ底気味でやや厚い

底部を有する。体部の器厚は底部から体部の中程までは一定であるが、そこから口縁部に向かって急激に薄くなる。82は器形的に77に似るが、底部が厚い。C2類は89・90・92・96である。89は上げ底気味の大きい底部を有し、器高・口径ともやや小さい。器厚は底部端～立ち上がり部分がやや厚く、口縁部に向かってやや薄くなる。90・96は体部の開きがやや大きい。器厚は薄く、ほぼ一定である。C3類には92・94・95・97～100が該当する。92・93・95は底部が大きく、体部の開きが大きい一群である。97～100は底部が小さく、体部の開きが小さい。なお、73・76・80・87・96の体部外面及び細片である101～108には墨書が見られる。109～111は黒色処理が施された椀で、109はC1類、110・111はB3類に分類される。内外面ともに摩滅が著しいが、体部外面に回転ナデ、内外面の口縁付近に横方向のヘラミガキ、底部内面は縦方向に放射状のヘラミガキが確認できる。また110を除いて底部外面に回転方向の傷が見られるが、ヘラケズリの有無、もしくは底部の切り離しは摩滅のため不明である。112は盤の口縁部片であると思われる。口縁端部を上方に摘み上げ、口縁部外面は指頭圧で成形する。

113・114は甕C類である。114は口縁部と体部の破片であり接合資料ではないが、胎土や焼成、法量から同一個体とみなし、図上で復元した。どちらもロクロ成形あるが、形態上の相違点がある。共に、外開きの体下部から内湾する体部と屈曲して直線的に開く口縁部を有するが、端部の成形が異なっている。114は端部を上方に折り返して、口縁部の拡張を行っている。対して113は、口縁部内面にナデの痕跡は見られるが、口縁部の拡張はなされていない。また体下部の開き具合は113が大きく、そのために下膨れの形態となる。113の底外面は回転糸切りである。115は甕B類である。内湾気味に直立する体部から上外方に広がる短い口縁部を持ち、端部を摘み上げている。外面の体上部にはカキ目が巡り、下部は平行タタキが施される。内面は下部に粗い青海波状文がみられる。

SD8（図版32－122・図版65）

122は須恵器無台杯B2類である。底部を欠損するが、丸く立ち上がる体部を有し、口縁部は外反気味に開く。

SD9（図版32－123・図版65）

123は須恵器無台杯B2類であるが、硯に転用されており、やや窪んだ底部外面中央に直径4.6cm程度の範囲で墨が付着している。内湾しながら広がる体部を持ち、底部は回転ヘラ切り後ナデを施す。口縁部に重ね焼きによる焼成差が生じている。また、胎土には長石、石英のほか、海面骨針や黒色粒などを多く含む。

SD19（図版32－124～126・図版65）

124は須恵器無台杯B2類である。平坦な底部から直線的に開く体部を持ち、口縁部はやや内湾する。内面の底部と体部の境はヨコナデにより明確で、底内面は中央付近で一段低くなる。底部は回転ヘラ切りの後にナデ調整を行う。器面には黒斑がみられる。

125は土師器椀の底部である。上げ底気味の底部から直線的に開く体部を有する。底面の切り離しは回転糸切りによる。胎土に砂粒をほとんど含まない。126は土師器甕の体部である。内外面にはカキ目が巡らされており、外面に煤が付着している。

SD35（図版32－127・図版65）

127は須恵器杯蓋C類である。口縁部付近の破片であるが、非常に薄手で横に開く体部から、口縁部は丸みを帯びて下垂する。端部は丸い。

SD43（図版32－128・図版65）

128は須恵器の体部片である。外面は縦および左斜めの細かいタタキの上からカキ目が施され、内面には指頭圧が残る。

SX38（図版32－129～131・図版65）

129は灰釉陶器の皿の口縁部片で、内外面に施釉される。口縁部内面が面をなし、体部との境を形成する小さな段に釉が溜まる。130・131は土師器甕Ｄ類である。130は体部が外反しながら立ち上がった後に内湾し、口縁部は外反気味に開く。最大径は口縁部である。底部外面の拡張は顕著でなく、ナデつけによってわずかに広げられている。胎土は粗く、また体下部～底部にかけては二次焼成による変色が見られると同時に、器面の一部が剥落している。調整は内外面とも口縁部にヨコナデ、体部にはハケが施され、底部は外面が指頭圧痕、内面はナデによる。131は口縁部片と体部片を胎土や法量、器厚などから同一個体とみなし、図上復元を行った。底部を欠損しているが、器面の調整や口縁部の形態などが130と類似するためＤ類に分類した。直立気味の体部から屈曲して外反気味に開く口縁部を持ち、端部は拡張されることなく薄くなる。内外面にハケが施される。

SR1（図版33－132～150・図版66）

須恵器（132～145）　132・133は有台杯Ａ2類、134は有台杯Ｂ2類である。いずれも「ハ」字状に広がる高台を持ち、内端で接地する。132は外に広がる小さい高台を有し、体部は高台の付け根から丸く立ち上がる。口縁部は外反気味に広がる。133は断面長方形のしっかりした高台を持ち、端部内面を若干内側へ摘み出す。底部は回転ヘラ切り後、ナデ調整を行っている。体部は高台の付け根から直線的に上外方へ開いた後、やや外開き気味に直線的に伸びる。体下部にヘラケズリはみられず、ナデ消されているものと思われる。134は直線的に広がる体部から、口縁部をわずかに外反させる。高台は低平で、底部はヘラ切り未調整である。

135～138は無台杯Ｃ類である。いずれも口縁部に重ね焼きの痕跡がみられ、底部を欠損する137・138を除いて底部外面には回転ヘラ切りが観察できる。体下部に弱いヘラケズリが認められる。135・136はともに平たい底部から直線的に広がる体部を有し、底部は回転ヘラ切り後にナデが施される。内面はヨコナデによって区画され、ヨコナデの内側は盛り上がる。135は胎土中に長石を多く含み、器面には黒斑がみられる。136は転用硯である。底内面に墨が付着する。140は肩部片で壺（瓶）あるいは横瓶であると思われる。成形は外面をタタキの後に部分的にナデが施され、内面の当て具痕は青海波状文である。142は壺（瓶）の体下部で底部付近であると思われる。外面はヘラケズリ後ナデ、内面は強い回転ナデが施され、底部との境をなすと思われる現存部の下端には、静止ナデが見られる。143・144は壺（瓶）の底部である。144は底面端から垂下する縦長の高台を有し、端面で接地する。体部外面はヘラケズリ後ナデ、内面には回転ナデが施され、底外面はナデ調整である。一方143は内湾気味に外に開く高台を有するが端面で接地する。141は双耳壺の体部である。やや肩が張る形態で把手を欠損する。把手の欠損部分には地肌に縦方向の沈線がみえ、把手接合の際の目印であると考えられる。外面に自然釉がかかり、内面にはカキ目が施される。頸部の接合は粘土充填によるものであることが、断面から確認できる。139・145は甕の口縁部である。139には体部が若干現存している。体部外面は頸部と体部の境から幅3cm程度の範囲でタタキをヨコナデによってナデ消しており、その直下にはカキ目を施している。内面も同様に、当て具痕を約3.5cmの幅でナデ消す。内面には縦方向の弧線状の当て具痕が確認できる。口縁部は強いヨコナデによって端部を外方に摘み出す。145は細片であるが、頸部外面に波状文を２条廻らせ、口縁端部を内外に拡張している。内面は摩滅が激しいが、カキ目を確認できる。

土師器（146～150）　147は黒色処理が施された椀である。内外面ともに摩滅が著しいが、口縁部内面に横方向、体部内面に縦方向のヘラミガキを確認できる。148・149は甕である。148は口縁部片で、器壁の薄い口縁部が大きく外反して開く形態から、D類の範疇でとらえられよう。149はA類である。内傾気味の体部から屈曲して上外方に開く口縁部を持ち、口縁端部を折り曲げて拡張する。体部外面にはカキ目が残る。146・150は鍋である。146は口縁部と体部の境に明瞭な段を有する。口縁の屈曲度は弱い。150は体部からの屈曲後に内湾しながら立ち上がる口縁を持つ。146・150とも口縁端部はわずかに上方へ拡張する。

SR2（図版33～35・図版66・67）

須恵器（152～174）　157・158は杯蓋B類である。ともに直径15cmを超える大型品で、平たく広い天井部から直線的に下方に広がる体部を持つ。157の頂部には扁平なツマミがみられるが、158は欠損している。しかし体部の形状から、157と同様のツマミが付されていたと思われる。両者とも天井部外面にはヘラケズリが施される。

152～156・159は有台杯であり、A類152・154、B類153・155・156・159に分類される。これら有台杯は分類を問わず、いずれも高台の内端で接地する。152はA1類で丸い底部を有する。高台は底部端から外下方に広がる小さいもので、断面形状は縦長の長方形に近いが、外端部を外方に摘み出すような形状を呈する。154はA2類である。平たい高台を有し、口縁部は大きく外反する。153はB2類である。長方形状の断面を呈する高台は、底部端から内側4.5㎜のところに位置し、内湾気味に外へ開く。端部の拡張はなされない。体部は内湾気味に立ち上がり、器厚は口縁部に向かって急激に薄くなる。155はB2類である。口縁部を欠損するが、立ち上がりの形状から体部は直立気味に広がるものと思われる。薄く、やや外開き気味の高台は両側が拡張される。156はB1類の底部である。底部端より内側7.5㎜に位置から下垂する小さい高台を有し、下端を内側に拡張する。端面はヨコナデによって仕上げられている。器厚は立ち上がり部分でも厚く、口縁部に向かって急激に薄くなるものと思われる。159はB2類であり、硯に転用されている。高台は底部端から外開きにつき、下端は両側に張り出し、端面はヨコナデにより凹んでいる。底面は高台の内側の上端から平坦面が内に伸びた後、中央部が若干隆起する。この個体を転用硯と判断した根拠である底面、高台の内側に残る墨痕は、この隆起を取り囲むように広がっている。

160は須恵器杯の口縁部であるが、底部が欠損しているため高台の有無は不明である。器厚は均一であるが厚く、口縁部は外反する。161～169は無台杯で、A類161、B1類163・166、C類162・164・165・167～169がある。いずれも底部から直線的に口縁部へ至る体部を有する。161は体部が直立気味に立ちあがる。163・166はやや厚い底部から屈曲して上外方に広がる体部を有する。器厚は口縁にむかって急激に細くなる。163が丸底なのに対し、166は静止ヘラ切りの後にヘラケズリが施され、平底である。C類とした一群は、いずれも平坦な底部から直線的に広がる体部を有する点で共通する。162は内面をヨコナデにより底部・体部が区画され、ヨコナデの内側は盛り上がる。また、底部と体部の外面に墨書がみられ、特に底部に書かれた文字は「田」と読むことができる。164は162と同様に、ヨコナデにより内面が底・体部に区画され、ヨコナデの内側は盛り上がっている。口縁部には重ね焼きの痕跡がみられ、胎土中に長石粒を多く含み、器面に黒斑がみられる。165は口縁～体部で底部を欠損する。直線的に開く体部を持ち、口縁部は外反した後に折れて直立する。167は内面の底・体部の境に段があり、ヨコナデにより区画されている。170は瓶の口縁から頸部である。やや内湾気味に立ち上がる頸部は上外方に伸びて口縁部へ至り、口縁端部はヨコナデにより両側へわずかに摘み出される。171は横瓶の口縁～体部上半である。

丸い体部から外反しながら立ち上がる頸部を持つ。口縁部は強いヨコナデによって内側に若干拡張され、頸部には沈線が1条巡る。体部外面の成形は斜方向の平行タタキで、部分的に縦方向のカキ目がみられる。内面の当て具痕は青海波状文であるが、その形状は俵形を呈する平面形の中央が弧線状、外側が円状である。172は壺の肩部である。外面にカキ目が施され、内面には釉がかかる。胎土は粗く白色を呈するなど、ほかの須恵器と様相を異にすることから搬入品の可能性がある。器厚や胎土、内面への自然釉のかかり方から表採資料である204と同一個体であると考えられる。173は器面が薄い短頸壺の頸部～肩部片で、水平気味の肩部から屈曲して直上に伸びる頸部を有する。肩の張りの強い個体であると思われる。成形は外面に平行タタキ痕が認められ、その後カキ目によって調整されている。内面の調整もカキ目である。174は甕である。尖底気味の丸底から緩やかに内湾する体部を有し、頸部は直立し、口縁部は短く外反する。端部はヨコナデによりわずかに下端を外方に引き出している。体部の成形は外面に斜方向の平行タタキの後、部分的に横方向のカキ目を巡らせる。タタキは下から上、左から右へと押圧している。内面の上半は当て具痕を丁寧になで消した後まばらにハケ調整を行ない、底部付近には平行の当て具が横方向を中心に添えられる。SR1出土の破片と、接合関係がみられる。

土師器（175～198）　175～185・189は椀で、B類178・183～185、C類176・179～182、D類189が確認できる。175は非ロクロ成形で、内湾しながら口縁部へ至る体部を持ち、口縁部にはヨコナデが施される。内外面にヘラミガキが残る。この資料は、集落存在時の川底より下位に位置する河川堆積物層から出土したものである。176～185・189はロクロ成形によるもので、底部には回転糸切り痕が残る。183・184はB1類である。183は上げ底気味の厚い底部を有し、体部の開きは比較的小さい。184は歪みが大きくB2あるいはC1類かもしれない。185はB2類である。全体に歪みが大きく、口縁部は楕円形状に変形している。178はB3類である。体部にやや歪みがあり、口縁部は傾いている。179・182はC1類であり、ともに小さい底部を有する。179は浅身、182は深身の器形を呈する。176・180・181はC2類である。いずれも大きい底部を持ち、器高は低い。体部の開きはいずれも大きめであるが、その中でも180はさらに大きく開く。189はD類の底部片である。底と体部の境に指頭圧痕が施され、円盤状高台のような底部を作り出す。墨書は182・183にみられる。ともに底部外面の端寄りに墨書が残り、それぞれ「し ヵ」「還ヵ」と記されている。188は器種不明であるが、ロクロ痕跡が見られないことから、非ロクロ成形であると考えられる。内外面に横方向のヘラミガキが確認できる。186・187・197・198はロクロ成形の甕で、A類186・197・198、C類187が確認できる。186・197は口縁部である。186は直立気味の体部から上外方に緩やかに開く口縁部を有し、口縁端部は上方に摘み上げられている。197は内傾気味の体部から上外方に緩やかに開く口縁部を持ち、口縁部はやや肥厚している。口縁外面には板ナデが施されており、形態はエッジの効いた印象を受ける。198は体部片と底部片であり、色調や胎土、法量から同一固体として実測した。外面には縦方向の荒いハケが施され、内面は体部にカキ目、底部に指頭圧が残る。187はやや肩の張る体部から屈曲して上方に伸びる口縁部を有し、口縁端部を摘み上げる小型甕である。内外面ともにロクロ目が顕著で、底部の切り離しは回転糸切りによる。190～194は非ロクロ成形の甕で、D類の底部である。190は体部下半～底部で、外反しながら立ち上がる体部を持つ。内外面ともハケ調整であるが、体部下端は指頭圧である。191・193・194は底部の裾が広がっている。調整は192のみ摩滅のため不明であるが、その他は指頭圧痕およびナデが残り、193には縦方向のハケも観察できる。191・193・194の底外面の外周には砂痕が、192には木葉痕がみられる。198は甕の体部と底部の破片であるが、法量や形態、調整、胎土などから同一個体とみなした。体部外面には縦方向のハケが施され、内面の調整はカ

キ目と指頭圧である。底面に砂痕が残る。195・196は鍋である。196は内湾しながら立ち上がる体部から、強く屈曲して上外方に伸びる口縁部を有し、口縁端部は上方に折り曲げられる。体部の調整は板ナデとカキ目である。195は直線的に上外方に広がる体部から、緩やかに開く短い口縁部を持ち、端部を上方に摘み上げる。体部の調整は口縁付近のヨコナデのほか、外面の体部上半のカキ目と体部下半にタタキが、内面はハケが施される。

遺構外出土（図版35－200～206・図版67）

200～205は須恵器である。200は杯蓋D類である。天井部の平坦面が段をなし、そこからさらに短く水平に広がった後下外方に直線的に広がる体部を持つ。口縁部の下垂は短く丸い。また、胎土に長石、黒色粒を多く含む。201は有台杯B3類である。内端接地でやや外開きのしっかりとした高台は端部を若干外側へ拡張している。体部の調整は回転ナデであるが、下端の外面には回転ヘラケズリの痕跡が認められる。丸みを帯びた高台内には回転ヘラケズリがなされるが、高台の付け根部分のみナデが施されている。202・203・205は杯で、202・203がA類、205がC類である。203は厚い底部から内湾気味に立ち上がる体部を持ち、口縁部は外反気味である。底部の調整は回転ヘラ切りの後ヘラナデである。202は丸底から直線的に立ち上がる体部を持ち、口縁部は外反する。蓋の可能性も考えられるが、口縁～体部と底部に重ね焼きに起因するとみられる焼成差が認められ、これを根拠に杯とした。205は平底から屈曲して直線的に伸びる口縁部を有する。底部は回転ヘラケズリ未調整で、口縁部には重ね焼きによる焼成差が生じている。204は前述のように、172と同一固体と考えられる資料である。上げ底気味の底部から内湾しながら立ち上がる体部を持つ。外面は左下がりのタタキの後にカキ目が巡らされ、体下部はその後に横および右下へのヘラケズリが施される。内面に当て具の痕跡は見られない。206は土器の口縁部片である。器種不明であるが、火鉢あるいは鉢状の形態を呈し、口径は40cm程度になると思われる。内外面ともに黒色で、胎土には雲母を多く含む。

C　土製品・石製品・鉄滓（図版32・33・35－117～121・151・199・図版65～67）

117・118はSD3出土の土錘である。いずれも焼成は土師質で平面形は断面が菱形状を呈する管状錘であるが、117はやや扁平である。117は長さ3.4cm、径1.5cm、直径約0.3cmの孔が貫通する。118は長さ2.5cm、径1.5cmとなり、直径約4㎜の孔が貫通する。これら2点は、共に松影A遺跡の土錘の分類の5類［加藤2001］に相当する。119はSD3出土の用途不明土製品である。土師器椀の体部片を利用している。台形を横にしたような平面形状を呈しており、縦3.6cm、横4.7cm、厚さ0.4cmを測る。右側縁辺内面の稜がなくなるまで摩滅している。151はSR1出土の用途不明土製品である。棒状で、長さ5.0cm、径2.4cmを測る。表面に指頭圧痕がみられ、短軸方向に浅い沈線状の工具痕が5条確認できる。199はSR2出土の石製品である。使途は砥石とも考えられるが不明である。直径6.1cm、厚さ3.6cmの円柱状で、側面は細かく削られている。材質は凝灰岩である。120・121はSD3出土の鉄滓である。120は長さ3.9cm、幅2.6cm、断面形状が不整円形で直径約2.1cm、121は長さ3.4cm、幅2.7cm、断面形状が約1.7×2.0cmの不整円形である。共に磁着度は低い。

D　木製品・建築材（図版35・36・図版67・68）

本遺跡の木製品・建築材は22点出土しており、そのうち20点の実測を行った。木製品はSK6出土の1

点のみであり、ほかは掘立柱建物と柵列および単独のピット出土の建築材である。これらの建築材はすべて柱根であり、そのうち掘立柱建物ではSB37を除いて他の3棟（SB4・SB13・SB50）から出土している。

SK6（図版35－207・図版67）

207は不明木製品で、芯を持たない全長48.9cm、幅3.0cm、厚さ1.0cmの柾目材を使用している。ほぼ中央に縦2.0cm、横1.3cmの柄穴（1）が、表面に斜め45°を測る幅約2.0cm、深さ0.2cmの加工痕（2）が確認される。柄穴の表面上側は両側を浅く削っており、凸状（3）となっている。また図面下側の小口面から12cmの範囲において、表面に14条、裏面に3条の細かい弧状の引っかき傷状の痕跡（4）がみられる。建築材ではなく道具の部材と考えられるが、器種の特定はできなかった。

SB4（図版35－208・209・図版67）

SB4では2点の柱根が残存していた。208はP1出土でコナラ節の丸材を使用しており、径12.6cmを測る。底面は、現状では片面加工と考えられる。209はP10出土でコナラ節の丸材を使用しており、径13.8cmを測る。底面は二面加工であり、また側面は加工されているようにもみえるが、腐食が進んでおり詳細は不明である。

SB13（図版35・36－210～215・図版67）

SB13では7点の柱根が残存しており、うち6点について実測を行った。210はP1出土でサクラ属の丸材を使用しており、径10.8cmを測る。底面は二面加工であり、一方向から2/3ほど加工を行っている。また側面は平坦な面を有しており、加工を行っているとも考えられるが、腐食が進んでおり詳細は不明である。211はP2出土でクワ属の丸材を使用しており、太さは9.0cmを測る。底面は二面加工で、また側面は平坦な面を有していることから加工を行っていると考えられるが、ともに腐食が進んでおり詳細は不明である。212はP5出土でニレ属の丸材を使用しており、径10.6cmを測る。底面は二面加工であり、一方向から2/3ほど加工を行っている。断面が五角形状を呈しており、側面加工が行われていると思われるが、加工痕は観察できない。213はP6出土でサクラ属の丸材を使用しており、径11.2cmを測る。底面は二面加工であり、側面は腐食が進んでおり詳細は不明である。214はP7出土でサクラ属の割材を使用し、現状で幅12.3cm、厚さ8.7cmを測る。底面は、二面加工である。側面は腐食が進んでおり、加工など詳細は不明である。215はP9出土でニレ属の丸材を使用しており、径5.5cmを測る。SB13のほかの柱根と比較して、本資料は細くなっている。底面は二面加工である。

SB50（図版36－216～222・226・図版67・68）

SB50では検出された7基のすべての柱穴から柱根が検出された。他のSBと比較して掘り込みが深く、柱根も非常によい残存状況であった。216はP1出土でクリの丸材を使用しており、一部自然面が残存している。径約11.9cmを測る。底面は二面加工であり、一方向から3/4ほど加工を行っている。217はP2出土でサクラ属の丸材を使用していると思われ、径10.0cmを測る。底面は二面加工であり、一部に明瞭な段がみられる。218はP3出土でケヤキの丸材を使用しており、現状は三分割となっている。一部樹皮も残存しており、径13.6cmを測る。底面は二面加工であり、ほぼ中央で分断されている。219はP5出土でサクラ属の丸材を使用しており、径12.6cmを測る。底面は片面加工であり、ほぼ平坦となっている。220はP4出土でクリの丸材を使用しており、径12.5cmを測る。底面は二面加工であり、側面は平坦面を有することから加工を行っていると考えられるが、現状では加工痕は観察できない。221はP6出土でクリの丸材を使用しており、一部に自然面が残存している。径11.7cmを測る。底面は二面加工であり、「V」字状を呈している。222はP7出土でクリの丸材を使用しており、径14.9cmを測る。底面はおおむね平坦

であり、二面加工でほぼ中央で二分される。また断面が七角形を呈しており、側面加工が行われていると考えられるが、現状では加工痕は観察できない。226は試掘調査時に60トレンチから出土した柱根であり、検出位置からSB50の北側中央の柱と推定される資料である。丸材を使用しており、径16.0cmを測る。底面は三面加工と考えられる。

SA5（図版36－223・224・図版68）

SA5は2基の柱穴から構成され、共に柱根が残存していた。223はP1出土でクリの芯外しの割材を使用しており、幅15.6cm、厚さ12.1cmを測る。底面は概ね平坦であり、現状においては片面加工と考えられる。側面に平坦な面があり、芯を有していないことから、側面加工を行っていると考えられるが、腐食が進んでおり詳細は不明である。224はP2出土でサクラ属の芯持ちの割材を使用しており、幅6.7cm、厚さ5.2cmを測る。底面は片面加工であり、また側面は腐食が進んでおり詳細は不明である。

P60（図版36－225・図版68）

P60は北側調査区で検出された柱穴である。225はオニグルミの丸材を使用しており、径は8.9cmを測る。芯部分が消失しているが、両面加工と考えられる。

5　その他の時代の遺物

耕作土から近世の陶磁器や銭貨、キセルなどが出土している。陶磁器類は特にまとまっておらず、調査区全体から散漫に出土している。銭貨は44点出土しており、8点が寛永通宝、1点が銭種不明、その他が渡来銭となっている。これらは北側調査区で多く出土しており、特に23D区で13点、24C区で16点とまとまっている。しかし遺構などは検出されなかった。なお渡来銭とした銭貨は正規銭と模鋳銭に区別されるが、識別が困難であるため今回は渡来銭として一括した。

A　陶　磁　器（図版37－227～236・図版68）

227は中国産の磁器皿であり、器厚が薄く、見込に草花文と考えられる文様が描かれている。228は中国産の磁器皿であり、高台に砂目が付着している。胎土から漳州窯の製品と考えられる。229は肥前系磁器の瓶であり、胴部に鉄釉がかかり、また高台は無釉となっている。年代は17世紀中葉～後葉と考えられる。230は唐津焼の灰釉皿で胎土は赤褐色を呈しており、底部は削り高台である。見込に胎土目痕が4か所みられ、外面は腰部以下無釉となっている。また見込内に一部擦れが認められ、一部釉がはがれている。231は唐津焼の灰釉皿で胎土は赤褐色を呈しており、底部は削り高台である。見込に砂目痕が4か所みられ、外面は腰部以下無釉となっている。被熱しており、一部釉がはがれている。232は唐津焼の藁灰釉碗で胎土は明褐灰色を呈しており、底部は削り高台である。外面は腰部以下無釉であり、また砂目痕が1か所みられる。235は唐津焼の灰釉皿で胎土は灰色を呈しており、底部は削り高台である。外面は腰部以下無釉となっている。233は陶器の鉄釉碗で胎土は灰色を呈しており、底部は右回転の回転糸切である。見込に重ね焼痕がみられ、外面は腰部以下無釉となっている。産地は不明である。234は陶器の灰釉皿で胎土は灰色を呈しており、底部は削り高台である。見込に胎土目痕が1か所みられ、また現状では外面に釉は見られない。産地および年代は瀬戸美濃系、17世紀前半の可能性が考えられる。236は陶器の碗で、胎土は乳白色を呈している。見込内は蛇の目釉剥ぎがなされ、中央に青花が描かれている。高台内は無釉で、削りが施されている。産地は中国福建省または広東省、年代は17世紀末～18世紀と推定される。

本遺跡から出土した230～232・235の唐津焼は灰釉で削り高台という特徴をもち、またいくつかに胎土目痕や砂目痕がみられる。唐津焼では、窯詰め技法によって時期が細分されるといわれている［村上2004］。それによると、胎土目積み段階から砂目積み段階に変化していくとされている。胎土目積みが多いが砂目積みなどが混在する胎土目積み段階前半が1590年代後半から1600年代、胎土目積みが主体となる胎土目積み段階後半が1600年代から1610年代、胎土目積みと砂目積みが混在する砂目積み段階前半が1610年代から1620年代、砂目積みが主体となる砂目積み段階後半が1620年代から1640年代とされている。また釉薬は、胎土目積み段階前半は藁灰釉・長石釉・灰釉・鉄釉・透明釉が使用され、胎土目段階後半では灰釉・透明釉が増加・主体となり、砂目積み段階前半では藁灰釉・灰釉が限定的となって透明釉が主体となるとされている。以上のことから本遺跡の唐津焼は、1590年代後半から1640年代の間に位置するものと考えられる。また初期の唐津焼の流通範囲は太平洋側では瀬戸内・関西までであり、日本海側は全域となっている。今回出土した唐津焼や中国製品などの陶磁器類は、日本海を使った交易などによって本遺跡またはその周辺にもたらされたものと考えることができる。

B　銭　　貨（図版37－237～272・図版68）

237は24C区で出土した銭緡で、16枚以上緡してあったと考えられるが、取り上げ時は9枚のみ合着した状況であった。これら銭貨は238・244～246・254～256・264・272であり、唐の開元通宝（初鋳年621年）から南宋の淳祐元寶（初鋳年1250年）が含まれていた。

出土位置は267が7B区、241が7～11B区、262が10E区、239・240・243・247～250・257・265・266・268・269・271が23D区、238・244～246・251～256・258～261・263・264・272が24C区、242・270が北側調査区一括となっている。

第Ⅵ章　自然科学分析

1　出土木製品の樹種同定

A　はじめに

ここでは、古代の木製品１点と掘立柱建物跡の柱根20点の樹種同定結果を報告する。なお樹種同定と同じ７試料についてはAMS法による年代測定が実施され、平安時代の年代値が得られた（第Ⅵ章2）。

B　試料と方法

木製品から材の３方向（横断面・接線断面・放射断面）を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、永久プレパラート（材組織標本）を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40～400倍に拡大し観察した。

材組織標本は、埋文事業団に保管されている。

遺構	器種	樹種	年代測定番号
SK6	木製品	スギ	
SB4P1	柱根	コナラ節	PLD-5442
SB4P10	柱根	コナラ節	PLD-5443
SA5P1	柱根	クリ	PLD-5444
SA5P2	柱根	サクラ属	
SB13P1	柱根	サクラ属	
SB13P2	柱根	クワ属	PLD-5455
SB13P5	柱根	ニレ属	
SB13P6	柱根	サクラ属	PLD-5446
SB13P7	柱根	サクラ属	
SB13P9	柱根	ニレ属	
SB13P10	柱根	ニレ属	
SB50P1	柱根	クリ	
SB50P2	柱根	サクラ属	
SB50P3	柱根	ケヤキ	
SB50P4	柱根	クリ	
SB50P5	柱根	サクラ属	PLD-5447
SB50P6	柱根	クリ	PLD-5448
SB50P7	柱根	クリ	
P60	柱根	オニグルミ	
P227	柱根	サクラ属	

第２表　　出土木製品の樹種同定結果一覧

C　結　　果

同定結果の一覧を表２に示し、表３では遺構ごとに検出された樹種を比較した。

SK6から出土した木製品１点は、スギであった。

掘立柱建物跡３棟（SB4・SB13・SB50）、柱穴列１基（SA5）、柱穴２基（P60・P227）から出土した柱根20点は、サクラ属（7点）・クリ（5点）・ニレ属（3点）・コナラ節（2点）・クワ属（1点）・ケヤキ（1点）・オニグルミ（1点）で、落葉広葉樹７分類群が検出された。検出点数が最も多かったサクラ属は３遺構（SA5・SB13・SB50）から検出され、次に多いクリは２遺構（SA5・SB50）から検出された。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の３方向の組織写真を提示した。

遺構	掘立柱建物跡				柱穴		合計
樹種	SB4	SA5	SB13	SB50	P60	P227	
サクラ属		1	3	2		1	7
クリ		1		4			5
ニレ属			3				3
コナラ節	2						2
クワ属			1				1
ケヤキ				1			1
オニグルミ					1		1

第３表　柱根の遺構毎の検出樹種

樹種記載

(1) スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don　スギ科

第18図1a～1c（SK6　木製品）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量が多く、晩材の仮道管壁は極めて厚い。分野壁孔は大型で孔口は楕円形に大きく開いたスギ型、１分野に主に２個ある。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。日本海側では縄文時

代に低地にスギ林が成立していたことが知られている。

(2) オニグルミ　*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura　クルミ科

第18図2a～2c（P60　柱根）

中型の管孔が単独や2～3個が複合し、除々に径を減じながら散在し、接線状の柔組織が顕著な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にチロースがある。放射組織はほぼ同性、主に1～3細胞幅である。

オニグルミは暖帯から温帯のやや湿った所に生育する落葉高木である。

(3) コナラ属コナラ亜属コナラ節　*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科

第18図3a～3c（SB4P1）

年輪の始めに大型の管孔が配列し除々に径を減じ、晩材部では薄壁で角形の小型管孔が火炎状に分布する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと広放射組織がある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。

(4) クリ　*Castaneacrenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科

第19図4a～4c（SB50P6）

年輪の始めに大型の管孔が配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状や柵状である。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。

(5) ニレ属　*Ulmus*　ニレ科

第19図5a～5c（SB13P9）

年輪の始めに大型の管孔が配列し徐々に径を減じ、晩材では小型の管孔が集合し塊状・接線状・波状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は同性、1～5細胞幅の紡錘形である。

ニレ属は北地の温帯に多いハルニレ・オヒョウ、暖帯の荒地や川岸に普通に見られるアキニレがあり、いずれも落葉高木である。

(6) ケヤキ　*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino　ニレ科

第19図6a～6c（SB50P3）

年輪の始めに大型の管孔が1～2層配列し、その後は小型の管孔が集合して塊状・接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～5細胞幅の紡錘形、上下端や縁に大型結晶細胞がある。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。

(7) クワ属　*Morus*　クワ科

第20図7a～7c（SB13P2）

年輪の始めに大型の管孔が配列し除々に径を減じ、晩材では小型や非常に小型の管孔が集合し斜状・波状に分布する環孔材。周囲状柔組織が顕著である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にらせん肥厚があり、内腔にはチロースがある。放射組織は異性、1～5細胞幅の紡錘形で上下端に方形細胞があり、道管との壁孔は大きく交互状に配列している。

クワ属は落葉高木または低木で、温帯から亜熱帯の山中に広く分布するヤマグワと、和歌山県・中国地方・四国・九州の暖帯の山中にまれにあるケグワがある。

(8) サクラ属　*Prunus*　バラ科

第20図8a～8c（SB50P5）

小型の管孔が年輪の始めにやや密に分布し、単独から2～数個が複合して分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にらせん肥厚があり、褐色内容物がある。放射組織はほぼ同性、1～5細胞幅、道管との壁孔は小型で密在する。

サクラ属は暖帯から温帯の山地に生育する多くは落葉高木で、モモ・ウメ・スモモなどの栽培種も含まれる。

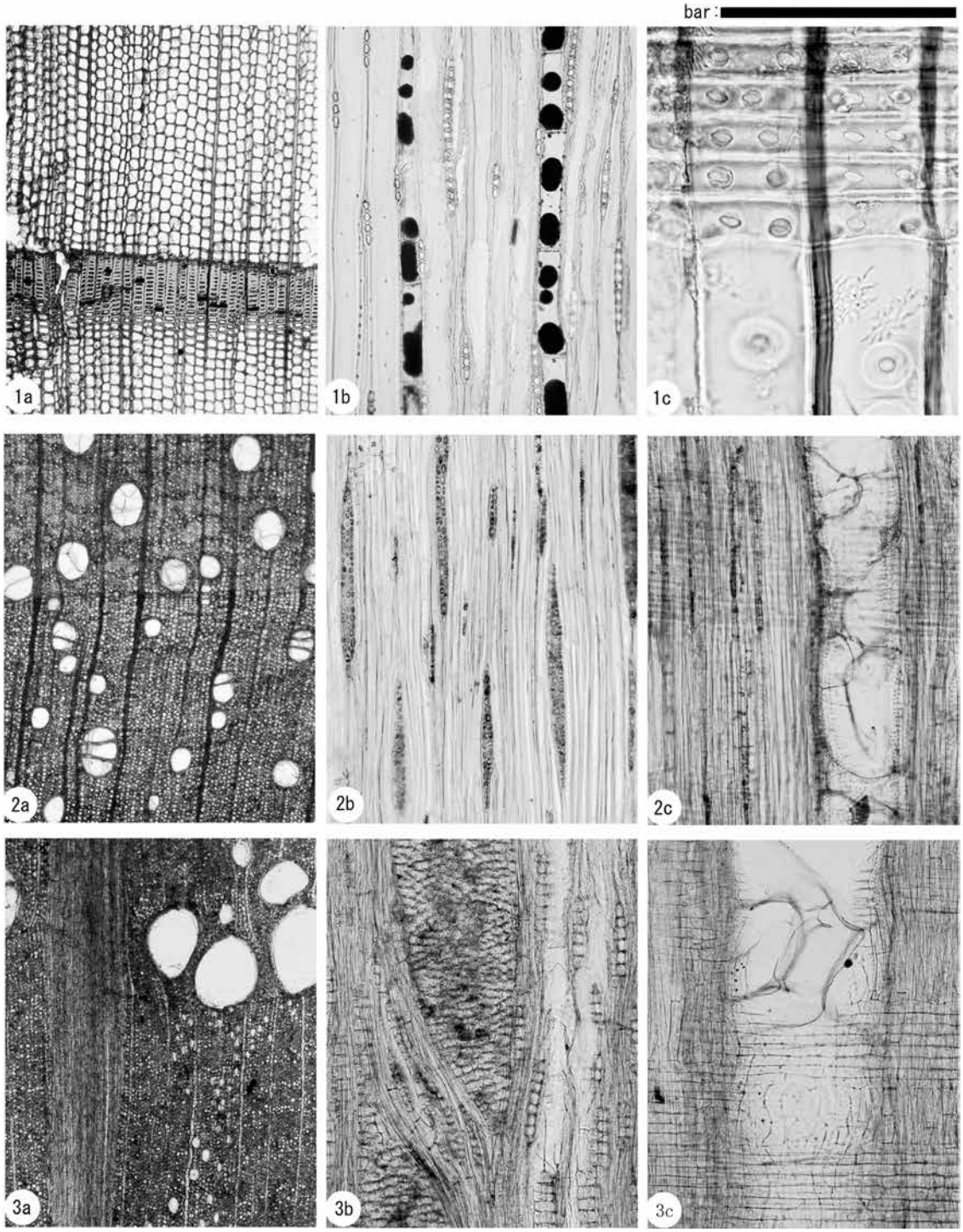
D　考　　察

SK6の木製品1点は、日本海側の遺跡出土木製品に非常に多く利用されているスギであった。しかし、複数の掘立柱建物跡や柱穴の柱根を調査した結果、サクラ属・クリ・コナラ節など複数種類の落葉広葉樹材が利用されていた。今回の調査では、柱根からスギは検出されなかった。検出数が多いサクラ属とクリは、2ないし3棟に共通して利用されていたことから、柱材として利用度の高い樹種であったと推測される。

新潟県内の古代から中世の遺跡から出土する木製品はスギが多く利用されているが、杭や柱根にはクリが多いとされる［松葉2001］。当遺跡においても柱根には、スギよりサクラ属やクリなどの広葉樹材が選択利用されていたことが明らかになった。

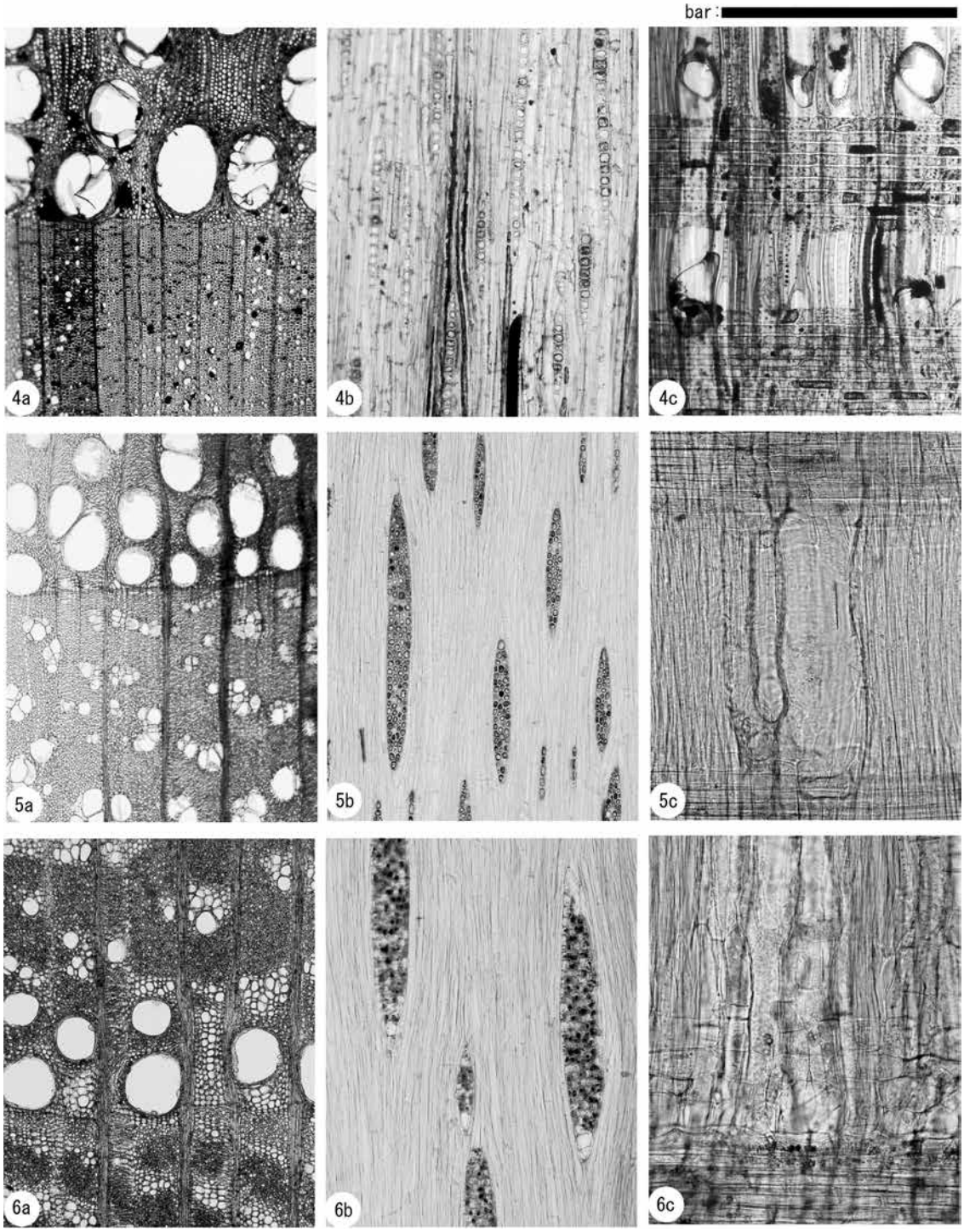
石川県金沢市の低地遺跡では、弥生時代や古墳時代の柱材には、スギ以外にもクリやコナラ節も見られるが、平安時代前後からはスギの割合が多くなる［鈴木・能城1991、鈴木1994、松葉2002、植田2003など］。また、能登半島の付け根で、自然堤防上に立地する羽咋市の吉崎・次場遺跡でも木製品全般にはスギが最も多く検出されているが、弥生時代の柱はスダジイが多く、奈良時代ではクリが最も多くイヌシデ節・ブナ属など複数種類の広葉樹材が報告されている［鈴木ほか1994］。従って日本海側の遺跡では、柱材の樹種利用については、一概にスギが多いとは言えず、地域や時代により樹種選択が異なっていたようである。

扇状地末端の低地に立地する当遺跡においては、古代の柱材にスギの優占は見られず、サクラ属やクリなど複数種類の広葉樹材が多く利用されていた。柱材の樹種利用がかならずしもスギ優占ではない要因については現時点では不明であるが、今後も資料を蓄積してゆく必要があると思われる。



第18図　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（1）

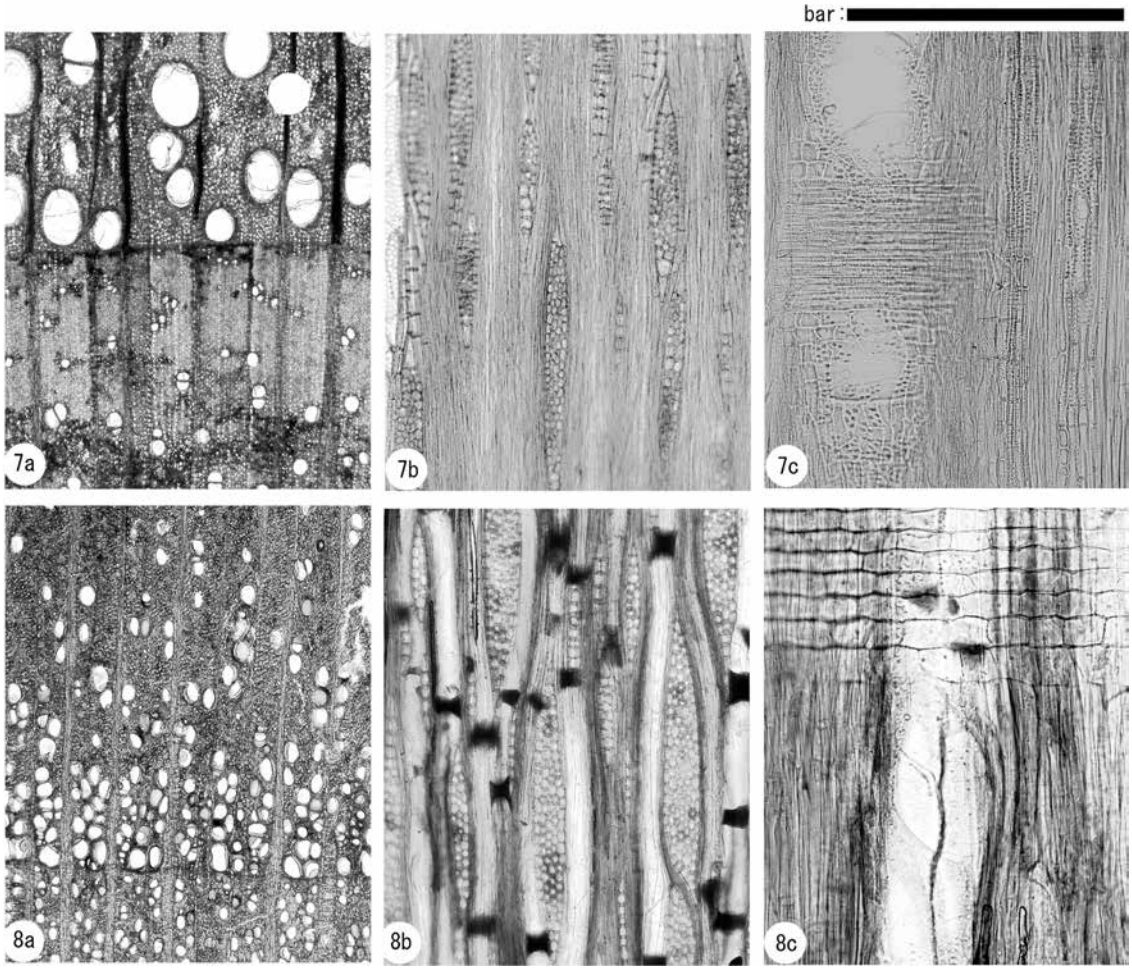
1a－1c：スギ（SK6　木製品）　2a－2c：オニグルミ（P60　柱根）　3a－3c：コナラ節（SB4P1）
a：横断面　b：接線断面　c：放射断面　bar：a＝1.0mm，b＝0.4mm，1c＝0.1mm，2c・3c＝



第19図　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（2）

4a－4c：クリ（SB50P6）　5a－5c：ニレ属（SB13P9）　6a－6c：ケヤキ（SB50P3）

a：横断面　b：接線断面　c：放射断面　bar：a = 1.0mm，b = 0.4mm，1c = 0.4mm,，2c・3c =



第20図　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（3）

7a－7c：クワ属（SB13P2）　8a－8c：サクラ属（SB50P5）

a：横断面　b：接線断面　c：放射断面　bar：a = 1.0mm，b = 0.4mm，c = 0.2mm

2　放射性炭素年代測定

A　はじめに

中曽根遺跡より検出された掘立柱遺物の柱根試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

B　試料と方法

測定試料には、すべて掘立柱遺物の柱根試料であり、SB4とSB13とSB50より各2点、SA5より1点の計7点の試料を用いた。なお測定試料の情報、調整データは第4表のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-5442	遺構：SB4P1	試料の種類：生試料・材（コナラ節） 試料の性状：最外以外樹皮に近い部分を採取 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo：NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5443	遺構： SB4P10	試料の種類：生試料・材（コナラ節） 試料の性状：最外以外樹皮に近い部分を採取 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N,塩酸1.2N）	PaleoLabo：NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5444	遺構：SA5P1	試料の種類：生試料・材（クリ） 試料の性状：最外以外樹皮に近い部分を採取 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo：NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5445	遺構： SB13P2	試料の種類：生試料・材（クワ属） 試料の性状：最外以外樹皮に近い部分を採取 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo：NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5446	遺構： SB13P6	試料の種類：生試料・材（サクラ属） 試料の性状：最外以外樹皮に近い部分を採取 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo：NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5447	遺構： SB50P5	試料の種類：生試料・材（サクラ属） 試料の性状：最外以外樹皮に近い部分を採取 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo：NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5448	遺構： SB50P6	試料の種類：生試料・材（クリ） 試料の性状：最外以外樹皮に近い部分を採取 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo：NEC製コンパクト AMS・1.5SDH

第4表　測定資料および処理

C　結　　果

表5に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行った^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、第21図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇

測定番号	δ 13C（‰）	^{14}C 年代（yrBP ± 1 σ）	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代（yrBP ± 1 σ）
			1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲	
PLD-5442	-26.45 ± 0.16	1110 ± 20	895AD（28.8％）925AD 935AD（39.4 ％）975AD	890AD（95.4 ％）990AD	1109 ± 22
PLD-5443	-27.17 ± 0.13	1075 ± 20	900AD（14.1％）920AD 960AD（54.1 ％）1020AD	890AD（21.2％）930AD 940AD（74.2 ％）1020AD	1073 ± 22
PLD-5444	-25.61 ± 0.12	1230 ± 20	710AD（22.4％）750AD 760AD（35.9 ％）830AD 840AD（9.8％）860AD	690AD（31.9％）750AD 760AD（63.5 ％）880AD	1231 ± 22
PLD-5445	-25.71 ± 0.13	1195 ± 20	775AD（9.9％）795AD 800AD（58.3 ％）875AD	770AD（95.4 ％）900AD	1197 ± 22
PLD-5446	-27.47 ± 0.15	1180 ± 20	780AD（5.9％）790AD 810AD（62.3 ％）890AD	770AD（92.8 ％）900AD 920AD（2.6 ％）940AD	1180 ± 22
PLD-5447	-26.4 ± 0.14	1245 ± 20	690AD（53.8 ％）750AD 760AD（14.4 ％）780AD	680AD（95.4 ％）870AD	1247 ± 22
PLD-5448	-24.33 ± 0.15	1210 ± 20	775AD（43.3 ％）830AD 835AD（24.9 ％）870AD	720AD（4.1％）740AD 770AD（91.3 ％）890AD	1208 ± 22

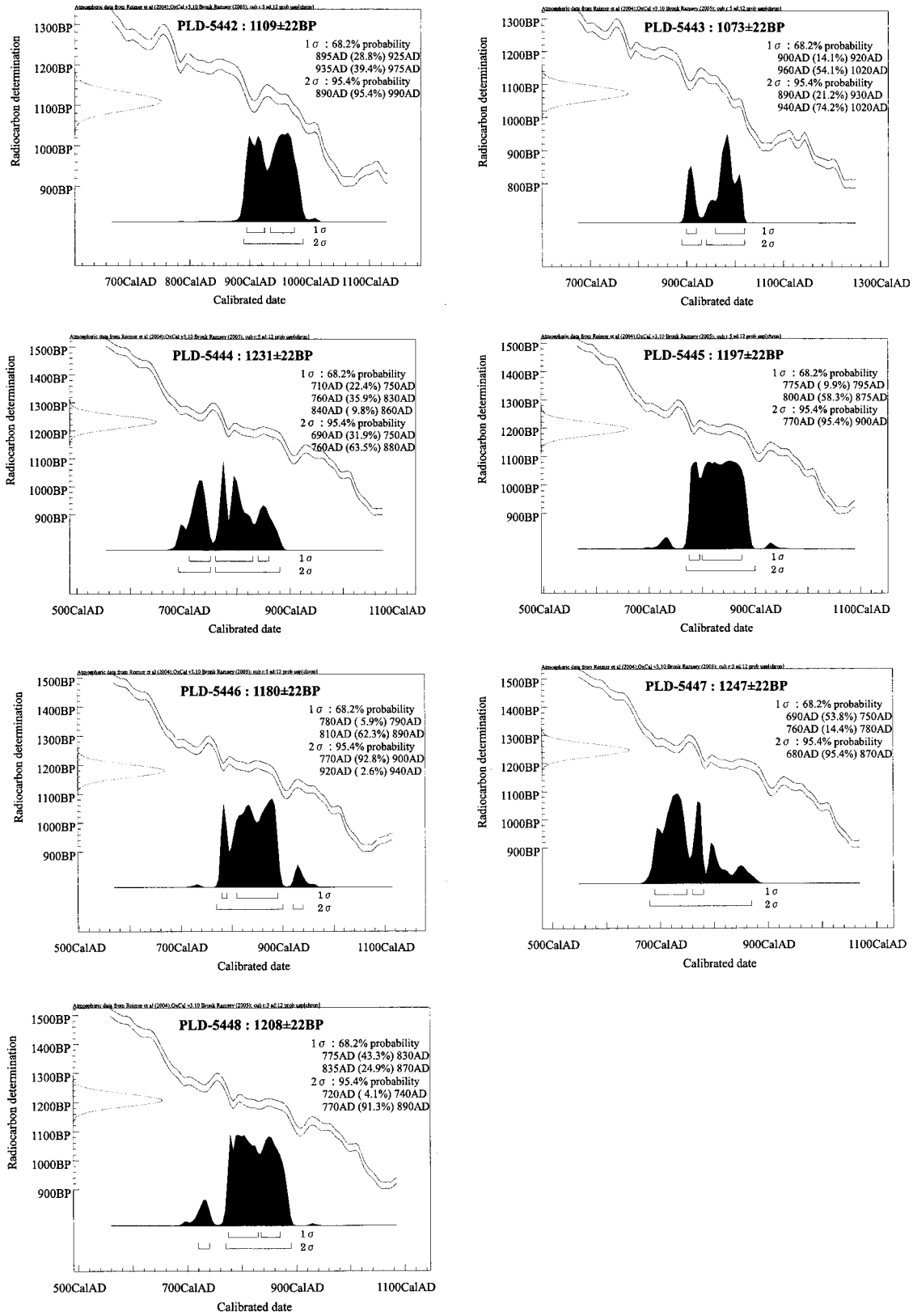
第５表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

D　考　　察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、16 暦年代範囲でその確率の最も高い年代範囲に着目すると、SB4 では西暦 935 ～ 1020 年、SA5 では西暦 760 ～ 830 年、SB13 では西暦 800 ～ 890 年前後、SB50 では西暦 690 ～ 830 年の年代値が得られた。この年代値は、木の伐採された時期に近い年代を示しており、その木材が伐採後長い期間置かずに使用されたと考えるとそれらを使用して建てられた建物の年代をおおよそ示すと考えられる。それをふまえ今回の結果をまとめると、SA5 と SB50 と SB13 が平安前期に、SB4 が平安中期に建てられた建物であると考えられ、これらの中では SA5 と SB50 が最も古く、SB4 が最も新しい建物であるといえる。


PLD-5442 : 1109±22BP
1σ : 68.2% probability
895AD (28.8%) 925AD
935AD (39.4%) 975AD
2σ : 95.4% probability
890AD (95.4%) 990AD
PLD-5443 : 1073±22BP
1σ : 68.2% probability
900AD (14.1%) 920AD
960AD (54.1%) 1020AD
2σ : 95.4% probability
890AD (21.2%) 930AD
940AD (74.2%) 1020AD
PLD-5444 : 1231±22BP
1σ : 68.2% probability
710AD (22.4%) 750AD
760AD (35.9%) 830AD
840AD (9.8%) 860AD
2σ : 95.4% probability
690AD (31.9%) 750AD
760AD (63.5%) 880AD
PLD-5445 : 1197±22BP
1σ : 68.2% probability
775AD (9.9%) 795AD
800AD (58.3%) 875AD
2σ : 95.4% probability
770AD (95.4%) 900AD
PLD-5446 : 1180±22BP
1σ : 68.2% probability
780AD (5.9%) 790AD
810AD (62.3%) 890AD
2σ : 95.4% probability
770AD (92.8%) 900AD
920AD (2.6%) 940AD
PLD-5447 : 1247±22BP
1σ : 68.2% probability
690AD (53.8%) 750AD
760AD (14.4%) 780AD
2σ : 95.4% probability
680AD (95.4%) 870AD
PLD-5448 : 1208±22BP
1σ : 68.2% probability
775AD (43.3%) 830AD
835AD (24.9%) 870AD
2σ : 95.4% probability
720AD (4.1%) 740AD
770AD (91.3%) 890AD
Radiocarbon determination
Calibrated date
1σ
2σ

第21図　暦年較正結果

3　珪藻化石群集分析

A　はじめに

珪藻は淡水から海水に至るほとんどすべての水域に生息し、水域生態系の一次生産者として重要な位置を占めている。微小（0.01～0.5mm程度）ながら珪酸体からなる殻を形成するため、化石として地層中によく保存される。また種類ごとに様々な水域に適応し生息するため古環境の指標としてもよく利用されている。

ここでは新潟県岩船郡荒川町の中曽根遺跡より採取された試料を用いて珪藻化石群集を調べ、その堆積環境について検討する。

B　試料及び分析方法

分析には、中曽根遺跡のSR1から採取された6試料と、SR2から採取された3試料の計9試料を用いて、以下の珪藻分析を行った。

① 試料を湿潤重量で約1g程度（SR2）取り出し、秤量した後にトールビーカーに移し、30％過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。

② 反応終了後、水を加え、1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てた。この作業は上澄み液が透明になるまで7回以上繰り返し行った。

③ ビーカーに残った残渣は遠心管に回収した。

④ マイクロピペットを用い、遠心管から適量を取り、カバーガラスに滴下し、乾燥した。乾燥後にマウントメディア（封入剤）で封入し、プレパラートを作成した。

⑤ 各プレパラートを光学顕微鏡下400～1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数を行った。なお、珪藻化石が少ない試料に関してはプレパラート全面について精査した。

C　珪藻化石の環境指標種群について

珪藻化石の環境指標種群は、主に［小杉1988］および［安藤1990］により設定された環境指標種群に基づいた。［小杉1988］は汽水～海水域における環境指標種群、［安藤1990］は淡水域における環境指標種群を設定した。なお環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種として、海水種と汽水種は不明種として扱った。また、破片であるため属レベルで同定した分類群は不明種として扱った。以下に［小杉1988］と［安藤1990］において設定された環境指標種群の概要を記す。

外洋指標種群（A）　塩分が35‰以上の外洋水中を浮遊生活する種群。

内湾指標種群（B）　塩分が26～35‰の内湾水中を浮遊生活する種群。

海水藻場指標種群（C1）　塩分が12～35‰の水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群。

海水砂質干潟指標種群（D1）　塩分が26～35‰の水域の砂底に付着生活する種群。

海水泥質干潟指標種群（E1）　塩分が12～30‰の水域の泥底に付着生活する種群。

汽水藻場指標種群（C2）　塩分が4～12‰の水域の海藻や海草に付着生活する種群。

汽水砂質干潟指標種群（D2）　塩分が5～26‰の水域の砂底に付着生活する種群。

汽水泥質干潟指標種群（E2）　塩分が2～12‰の水域（塩性湿地など）の泥底に付着生活する種群。

上流性河川指標種群（J）　河川上流の渓谷部に集中して出現する種群。

中～下流性河川指標種群（K）　中～下流域、すなわち河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群。

最下流性河川指標種群（L）　最下流域の三角州の部分に集中して出現する種群。

湖沼浮遊性指標種群（M）　水深が1.5m以上で、水生植物が水底には生息していない湖沼に生息する種群。

湖沼沼沢湿地指標種群（N）　湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群。

沼沢湿地付着生指標種群（O）　水深が1m内外で、植物が一面に繁茂しているところおよび湿地において付着状態で優勢な出現が見られる種群。

高層湿原指標種群（P）　ミズゴケを主とした植物群落および泥炭地の発達が見られる場所に出現する種群。

陸域指標種群（Q）　前述の水域に対して、陸域を生息域として生活している種群（陸生珪藻）。

分類群	種群	SR1 1層下部	SR1 2層	SR1 3層	SR1 IV層上部	SR1 IV層下部	SR1 VI層	SR2 1層	SR2 2層	SR2 6層
Grammatophora macilenta	B	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Melosira sulcata	B	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Achnanthes crenulata	W	-	-	-	3	-	-	1	-	2
Amphora ovalis var.libyca	W	1	-	-	-	-	-	2	1	3
Caloneis bacillum	W	-	-	-	-	-	-	-	-	1
C. silicula	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-
C. spp.	?	2	-	-	-	-	-	-	-	1
Cocconeis placentula	W	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Cyclotella kuetzingiana	W	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Cymbella aspera	O	30	-	-	-	-	1	12	13	1
C. cistula	O	5	-	2	-	-	-	-	2	-
C. cuspidata	W	-	4	1	-	-	-	-	-	1
C. minuta	W	-	-	-	-	-	-	1	-	1
C. spp.	?	2	3	3	-	-	-	2	1	-
Diatoma mesodon	?	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Diploneis finnica	W	1	-	1	-	-	-	-	-	-
D. yatukaensis	W	-	-	-	-	1	-	1	-	-
D. spp.	?	-	1	-	-	-	1	-	-	1
Epithemia turgida	W	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia formica	W	-	-	-	-	-	-	1	1	1
E. pectinalis	O	17	-	-	1	-	-	14	8	2
E. pectinalis var.minor	O	3	-	-	-	-	-	3	-	-
E. praerupta var.bidens	O	8	-	-	1	-	-	-	2	3
E. spp.	?	14	-	-	-	2	1	13	7	5
Fragilaria fasciculata	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Frustulia vulgaris	W	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Gomphonema acuminatum	O	-	-	-	-	-	-	2	-	-
G. parvulum	W	1	-	-	-	-	-	-	1	-
G. truncatum	W	-	-	-	-	-	1	-	-	-
G. spp.	?	-	-	-	-	-	2	2	1	1
Hantzschia amphioxys	Q	4	2	1	-	-	-	-	1	1
Melosira islandica	W	-	-	-	2	-	-	-	-	-
M. pensacolae	N	-	-	-	-	-	-	-	1	-
M. spp.	?	-	-	-	-	-	1	1	-	-
Meridion circulae var.constricta	K	6	1	-	-	-	-	13	2	9
Navicula americana	W	-	-	-	-	-	-	-	2	-
Navicula cryptocephala	W	2	-	-	-	-	-	2	-	-
N. cuspidata	W	-	-	-	-	-	-	1	-	-
N. mutica	Q	-	-	-	-	-	-	-	-	1
N. viridula	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-
N. spp.	?	-	-	1	1	-	-	1	-	1
Neidium iridis	O	1	-	-	-	-	-	-	1	-
N. spp.	?	1	1	-	-	1	-	3	2	-
Nitzschia plana	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-
N. spp.	?	3	1	-	-	-	-	-	1	-
Pinnularia acrosphaeria	O	-	-	-	-	-	-	1	-	-
P. borealis	Q	1	-	-	-	-	-	-	-	-
P. gibba	O	2	-	-	-	-	-	1	-	1
P. maior	W	4	-	-	-	-	-	1	14	-
P. microstauron	W	1	-	-	-	-	-	-	2	-
P. viridis	O	33	1	1	-	1	-	14	18	4
P. spp.	?	12	8	2	1	1	-	12	6	4
Rhopalodia gibba	W	-	-	-	-	1	-	-	-	-
R. gibberula	W	6	-	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis acuta	W	15	1	-	-	-	-	5	18	1
S. phoenicenteron	O	9	3	1	-	-	-	6	5	-
S. producta	W	-	-	-	-	-	-	-	1	1
S. spp.	?	5	-	-	-	-	-	1	5	1
Surirella angusta	W	-	-	-	-	-	-	-	-	1
S. spp.	?	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Synedra ulna	W	9	1	-	1	2	2	2	1	6
Unknown	?	1	-	1	1	-	-	-	-	-
内湾	(B)	-	-	-	-	1	1	-	-	-
中～下流性河川	(K)	6	1	-	-	-	-	13	2	9
湖沼沼沢湿地	(N)	-	-	-	-	-	-	-	1	-
沼沢湿地付着生	(O)	108	4	4	2	1	1	53	49	11
陸域	(Q)	5	2	1	-	-	-	-	1	2
広布種	(W)	44	7	2	6	4	4	18	42	18
不明	(?)	41	14	7	3	4	5	35	23	15
珪藻殻数		204	28	14	11	10	11	119	118	55

第6表　珪藻化石産出表

D　珪藻化石群集の特徴

（図22・23、表6）

本研究において検出された珪藻化石は、61分類群25属46種3亜種である。これらの珪藻種から設定された環境指標種群は、広布種を含め5種群である。以下に地点ごとにこれら種群の出現状況の特徴と堆積環境について述べる。

SR1

Ⅰ帯（2層～Ⅵ層）　堆積物1g中の珪藻殻数は3.76×10^3～1.74×10^4個と非常に少なく、完形殻の出現

率は約7～27％と低くなる。これらの試料から検出された珪藻殻は非常に少なかったため、珪藻化石より環境を推定することはできない。

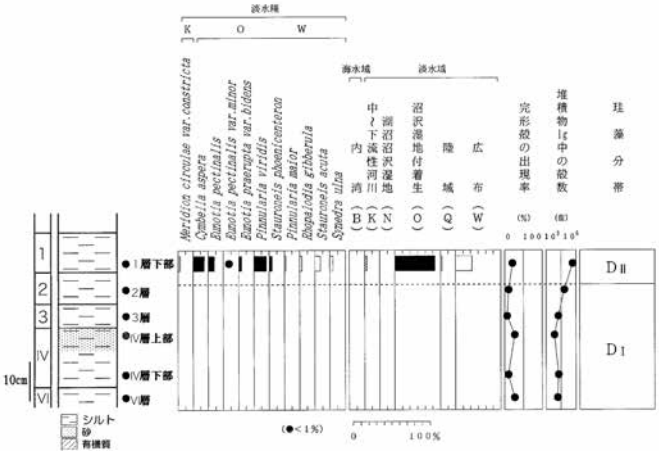
Ⅱ帯（1層下部）　堆積物1g中の珪藻殻数は5.99 × 10^4個、完形殻の出現率は約21％となる。この試料からは*Pinnularia viridis*や*Cymbella aspera*などの沼沢湿地付着生指標種群が特徴的に検出される。

このことから堆積環境は、沼沢地もしくは湿地的環境であったと推定される。

SR2

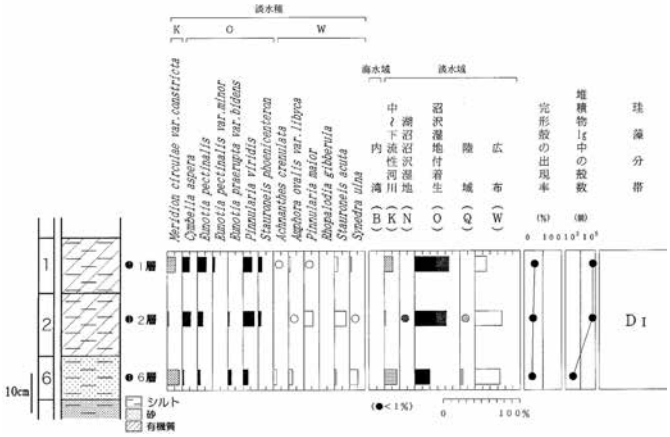
堆積物1g中の珪藻殻数は3.25 × 10^3～7.08 × 10^4個、完形殻の出現率は約22～29％となる。これらの試料から*Pinnularia viri*や*Eunotia pectinalis*などの沼沢湿地付着生指標種群が特徴的に検出され、1層と6層においては、中～下流性河川指標種群の*Meridion circulae* var. *constricta*が随伴して検出される。

このことから堆積環境は、河川の影響を受ける沼沢地もしくは湿地的環境であったと推定される。



第22図　SR1における珪藻化石分布図

（3％以上の分類群を表示）



第23図　SR2における珪藻化石分布図

（3％以上の分類群を表示）

E　考　　察

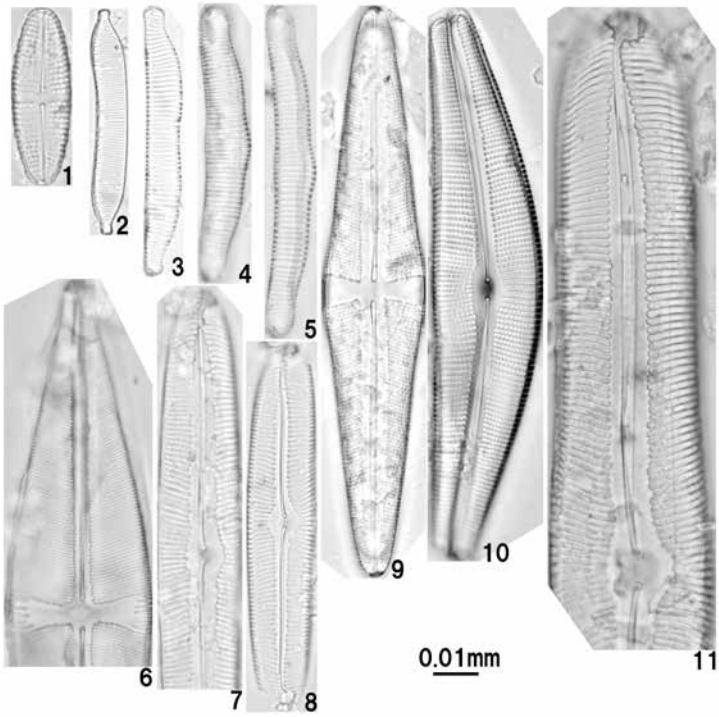
中曽根遺跡より採取した堆積物試料を用いて珪藻分析を行った結果について考察する。

今回分析した試料からは珪藻化石が希薄であった。特にSR1の2層以深では検出される珪藻殻が30個未満という少ない状況であった。珪藻は水生植物であるため、水分のない所には生育できない。今回分析した試料から珪藻化石が検出されなかった理由として、乾燥した陸域環境であったことが考えられる。しかし、計数には含まれない破片が多数確認され、*Pinnularia*属や*Cymbella*属、*Stauroneis*属など沼沢地や湿地で比較的多く検出されるものが多かった。このことを考慮すると乾燥した陸域環境というのは考えづらい。また、湿原における珪藻殻の消失する現象が［Murakami1996］によって報告されている。その原因は明確になっていないため、検討するには問題があるが、今回の結果は同様な現象が起こった可能性も考えられる。珪藻殻の消失が起こっていると想定すると、本地域の堆積環境は概ね湿地もしくは沼沢地であったと考えら、SR2においては河川の影響を受ける環境下であったと考えられる。

F　お わ り に

中曽根遺跡から採取された堆積物試料中の珪藻化石を検討した結果、SR1の堆積環境は、湿地もしくは

沼沢地環境、SR2の堆積環境は河川の影響を受ける湿地もしくは沼沢地環境であったと考えられる。



Scale 0.01mm

1	*Achnanthes crenulata*	(SR2 2層)	2	*Hantzschia amphioxys*	(SR1 3層)
3	*Eunotia pracrupta* var. *bidens*	(SR1 1層)	4	*Eunotia pectinalis*	(SR1 1層)
5	*Eunotia pectinalis*	(SR2 2層)	6	*Stauroneis phoenicenteron*	(SR2 2層)
7	*Pinnularia vilidis*	(SR2 2層)	8	*Pinnularia vilidis*	(SR2 2層)
9	*Stauroneis acuta*	(SR2 2層)	10	*Cymbella aspera*	(SR1 1層)
11	*Pinnularia major*	(SR2 2層)			

第24図　堆積物中の珪藻化石顕微鏡写真

第Ⅶ章　ま　と　め

1　弥生時代

A　遺　　構

本遺跡で検出された弥生時代に属する遺構は、住居2軒と土坑1基及び土器集中部3か所であった。これらの遺構は、遺跡中央付近の標高の高い部分に立地しており、3か所の土器集中部（7B・C区）を除いた遺物の分布範囲もこの部分に重なっている。この部分は古代においても遺構が集中しており、周辺と比較して地形が高く、水のつきにくい場所であったと考えられる。遺構検出面はⅣb層上面であり、この上位に遺物包含層であるⅣa層がみられるが、この包含層が堆積する範囲は非常に限定的なものであった。

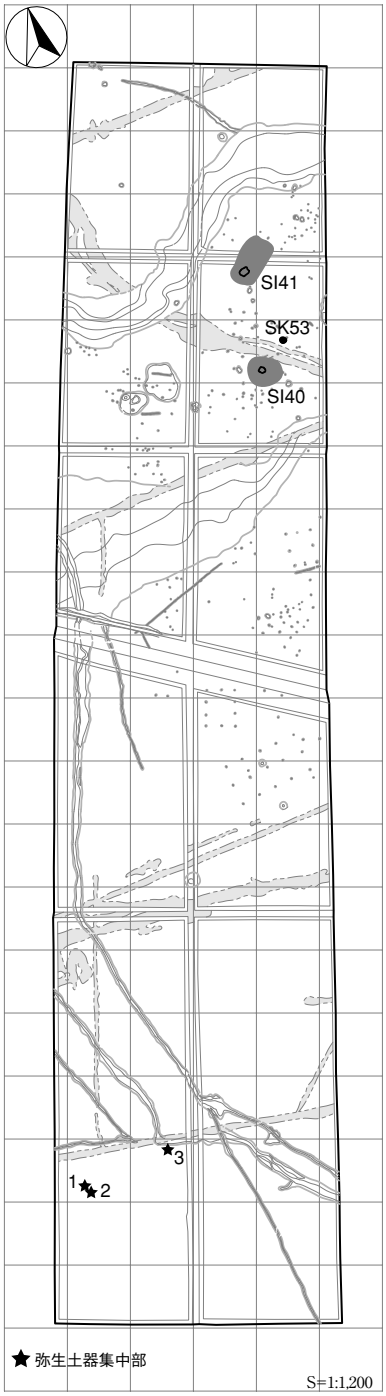
また3か所の土器集中部はともに南側調査区南西部分に位置し、この部分は、古代においても溝状遺構以外発見されておらず、遺物分布も希薄であった。

遺構の時期は出土土器から弥生時代中期終末～後期前葉と考えられる。なお出土した土器は東北地方を中心に分布する天王山式土器と考えられるものが多く、新潟県では下越の阿賀北地方に多く出土する傾向がみられる。

本遺跡の位置している新潟県阿賀北地方では、第Ⅱ章で述べたとおり弥生時代の遺跡は非常に少なく、遺跡の大半は砂丘上に立地している。砂丘上に立地する傾向は弥生時代中期からみられ、沖積地への進出は後期後半になってからといわれている［野田ほか2005］。しかし、本遺跡や荒川町道端遺跡［前川ほか2006］および神林村中部北遺跡［沢田ほか2003］のように弥生時代中期～後期前葉に、すでに沖積地に進出する遺跡が見られ、本地方では稲作の普及も含め遺跡の立地など、複雑な様相を示している。

本遺跡で住居としたものは、壁や周溝が確認されず住居の明確な範囲が不明であるが、炭化物や遺物の分布などから推定して炉を中心に径5m前後の楕円形を呈していたと推定される（第Ⅳ章3参照）。

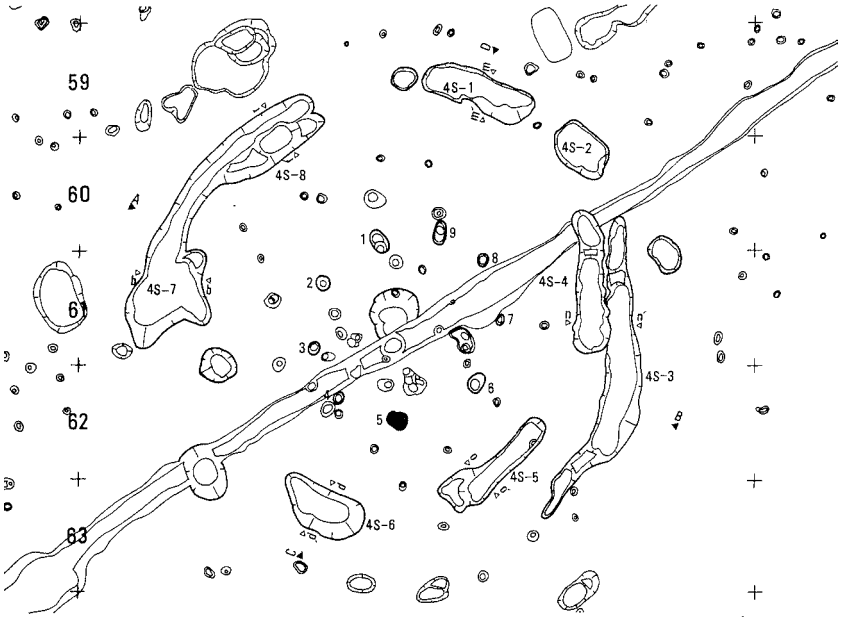
阿賀北地域では調査例が少ないが、村上市滝ノ前遺跡や道端遺跡において当該期の住居が報告されている。滝ノ前遺跡では、天王山式期の住居が3軒検出されている。検出された3軒の住居はすべて周溝を伴った竪穴式住居と考えられている。住居の平面形態は円形で径はそれぞれ約5mを測り、そのうち1軒には中央に炉跡が発見



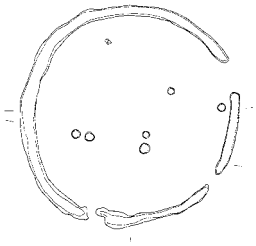
第25図　弥生時代　遺構配置図

されている。道端遺跡では、弥生時代中期中葉～末葉の竪穴式と平地式の住居が検出されている。また山形県や福島県など新潟近県においても、弥生時代中期後半から後期の住居の検出例が認められる。福島県会津若松市屋敷遺跡［木元ほか1991］では中期後半の径5.8mほどの円形の竪穴式住居が、会津坂下町の細田遺跡［東日本埋蔵文化財研究会福島実行委員会2000］・舘ノ内遺跡［東日本埋蔵文化財研究会前掲］では共に天王山式期と考えられる住居が発見されており、細田遺跡では円形、舘ノ内遺跡では方形となって

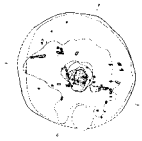
■中期後半～天王山式土器直前



柏崎市下谷地遺跡4号住居（北陸系）

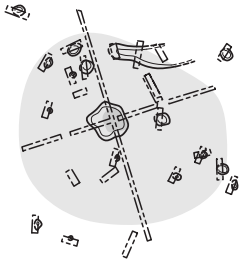


福島県屋敷遺跡12号住居

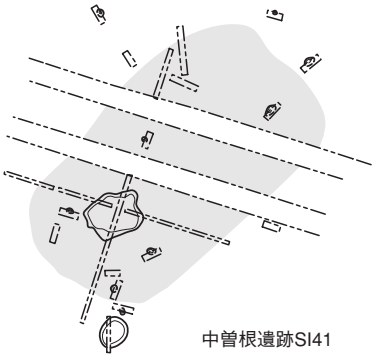


秋田県はりま館遺跡SI190

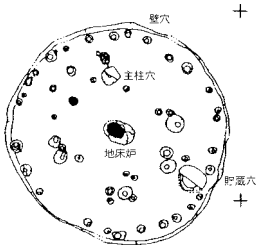
■天王山式土器期



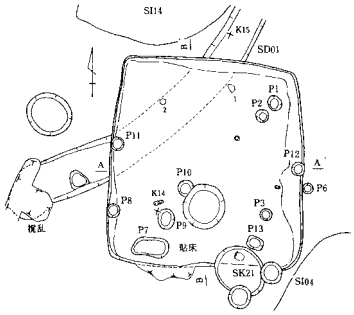
中曽根遺跡SI40



中曽根遺跡SI41

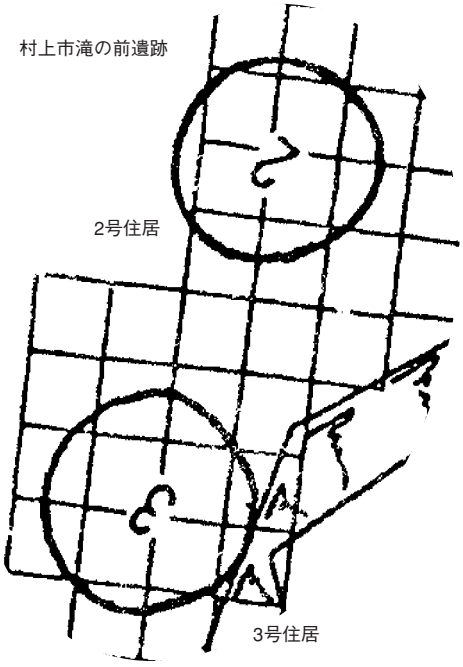


山形県向河原遺跡ST1068



福島県舘の内遺跡3号住居

村上市滝の前遺跡



＊図上、上方向が北。

0　(1：200)　10m

第26図　弥生時代中期～後期　住居例

いる。

山形県山形市向河原遺跡［東日本埋蔵文化財研究会前掲］では、天王山式期の中央に炉跡をもつ径6mほどの円形の竪穴式住居が、秋田県鹿角郡小坂町はりま館遺跡［小林ほか1990］では、天王山式土器直前と考えられる中央に炉跡をもつ径3mほどの円形の竪穴式住居が発見されている。基本的には中期後半以降天王山式土器を含む東北系の土器をもつ集団の住居は円形と考えられるが、舘ノ内遺跡のように方形の住居も発見されており、いくつかの平面形態が存在したと思われる。本遺跡で推定した住居のうち、SI41は不明であるが、SI40は径5mほどの円形住居と考えられる。一方、同時期の北陸系土器を主体とする遺跡では、柏崎市下谷地遺跡の例のように円形に幅の広い周溝を廻らせた住居（建物）が検出されている。この住居形態は、北陸地方に広く認められる低地特有のもの［滝沢1999］で、土器と同様北陸地方の影響と考えられる。

本遺跡の住居は、掘り込みを確認することができなかった。しかし天王山式土器を主体する遺跡では、執筆者の調べた限り平地式住居は確認されておらず、竪穴式住居が主体となっている。このことから本遺跡の住居も、竪穴式住居であった可能性が高いが、平地式住居も否定できない。

B　土　　器

今回出土した弥生土器は前述の通り、弥生時代中期終末から後期前半と考えられる。この時期の新潟県下の遺跡では、東北系の天王山式土器と北陸系の法仏式土器および信州系の土器などが出土することが知られている。このうち天王山式土器は新潟県では下越地方を中心に出土しており、阿賀北地域の当該期では主体となり、本遺跡においても大多数を占めている。なお現在天王山式土器は、狭義と広義の二通りの意味で用いられている。狭義の天王山式土器は、福島県白河市天王山遺跡［石川2000］の出土資料（第8表　天王山式参照）を基に設定されたものであり、広義は交互刺突文など狭義の土器群の伝統を引き継ぐ諸形式を含めたものである。今回は、そのうち広義のものを指すこととする。

阿賀北地域で天王山式土器が出土する遺跡（中期末葉～後期前葉）はおおよそ16遺跡を数え、そのうち10遺跡が調査されている。これらの調査された遺跡では、ほとんどの場合天王山式土器のほかに北陸系の土器などが伴って出土しており、阿賀北地域では両土器の共伴が一般的な状況となっている。しかし本遺跡の出土土器はすべて天王山式土器かその系統のものと考えられ、北陸系の土器は出土していない。このことは、本遺跡の1つの特徴と考えられる。

天王山式土器はいくつか細分案が作られているが（第7表）、ここでは本遺跡の時期設定を行う上で、東北型式を参考にすることとした。この時期区分は5期に区分し、1期を兎Ⅱ段階、2期を能登段階、3期を天王山式段階、4期を屋敷段階、5期を最終段階としており、各段階の特徴は第8表のようになる。また新潟県内の各段階の特徴は、以下のようになるといわれている［野田2005］。狭義の天王山式土器成立以前の1・2期の特徴としては台形状刺突列が挙げられ、これはほとんどが胴部半ばの文様帯Ⅱ・Ⅲを分ける区画文として用いられる。3期は狭義の天王山式土器の時期であるが、県内では天王山式土器との相違点も確認されている。それは、①文様帯Ⅱaの発達、②重菱形文が主文様となる、③口縁部内面に沈線・縄文などが施されて文様帯を形成する、④口唇部に短斜線が施されて等間隔で斜線の向きを変える手法、⑤縦走するRL縄文が卓越する、⑥口縁部肥厚が比較的薄く、口頸部境に交互刺突文を施さないものも認められる、などである。4・5期における新潟県内の特徴としては、①口縁部文様の中に「三角文」・「凹点文」がほとんど認められない、②文様帯Ⅱaの無文化が卓越する、③「八幡山式土器」［渡辺2001］

<table>
<tr><th></th><th>東北形式</th><th>野田2005</th><th>新潟
［滝沢2000］</th><th>八幡山遺跡
［渡辺2001］</th><th>砂山・滝ノ前
［石丸ほか2003］</th><th>北陸型式</th></tr>
<tr><td>弥生中期末</td><td>兎Ⅱ段階</td><td>1a期</td><td></td><td></td><td rowspan="2">砂山3群</td><td>戸水</td></tr>
<tr><td rowspan="6">弥生後期</td><td>能登段階</td><td>1b期</td><td rowspan="3">1期</td><td></td><td rowspan="4">猫橋</td></tr>
<tr><td rowspan="2">天王山式</td><td rowspan="2">2期</td><td>1期（古）</td><td rowspan="2">砂山4群</td></tr>
<tr><td>1期（新）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">屋敷段階</td><td rowspan="2">3a期</td><td>2期（古）</td><td>2期（古）</td><td rowspan="2">滝ノ前2・3群</td><td rowspan="2">法仏</td></tr>
<tr><td>2期（新）</td><td>2期（新）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">赤穴式など</td><td rowspan="2">3b期</td><td>3期</td><td>3期</td><td rowspan="2">滝ノ前2・3群の一部</td><td rowspan="2">月影</td></tr>
<tr><td>4期</td><td>4期</td></tr>
</table>

第7表　弥生時代中期末葉～後期編年　※［野田2005］を改変

	兎Ⅱ段階	能登段階	天王山式	屋敷段階	最終段階
特徴	・器種組成に高杯が確認できない ・Ⅰ文様帯が未発達 ・口縁部肥厚 ・兎Ⅱタイプの刺突文 ・端部を描き加える手法が確認できない ・LRの縄文が主体	・交互刺突文成立刺突文 ・Ⅱa文様帯とⅡ文様帯の融合 ・確実な高杯が確認できない ・注口付土器の注口部の形態 ・Ⅰ文様帯が比較的狭く、口縁部文様が横に間延びする	・器種組成に壺・甕・高杯・浅鉢・台付鉢・注口土器などが確認できる ・平行沈線内の交互刺突文 ・無文帯のⅡa文様帯とⅡ文様帯の発達 ・口縁内面への施文 ・磨消縄文や連弧文を多用 ・RLの縄文が卓越	・退化した交互刺突文 ・Ⅰ文様帯幅の拡張 ・Ⅰ文様帯文様の多様化 ・撚糸文、付加条・羽状の撚糸文	・文様帯の消失 ・LR縄文、撚糸文、付加条・羽状の撚糸文 ・器種の激減

第8表　各段階の特徴

とされる土器の成立、などである。これらの点を踏まえて、以下本遺跡出土の代表的な土器の特徴を再度確認し、時期的な位置づけを行うこととする。

1は口縁部肥厚が薄く、口頸部境に交互刺突文が使用されず、また口唇部に向きを変える短斜線（刻み目）がみられる。7は口縁部及び頸部の特徴が不明であるが、胴部には菱形文・連弧文がみられる。また地文としてLRの縄文を胴部下半まで横位に施しているが、RLの縄文を胴部下端まで施す天王山式土器と比較して古い様相である。8は口頸部境に交互刺突文がみられず、口縁部肥厚が薄くなっている。10は器形などから天王山式土器の中でも後出的なものと考えられ、村上市砂山遺跡では口縁形状が異なるが、類似の土器を滝ノ前2・3群として4期としている［石丸ほか2003］。11は口縁を肥厚させており、最大径が胴部半ばにくる器形である。12は文様帯Ⅱaに下向きの連弧文が施され、口頸部境に「ハの字」状刺突列、頸胴部境に交互刺突列がみられる。13・20はLRの縄文が胴部下端まで施されておらず、7と同様に古い様相を示している。15はRLの縄文が縦位に施されている。21は、口縁部内面にもLRの縄文による文様帯がみられ、また口縁内面は稜がみられる。主文様は重菱形文で、文様帯ⅡとⅢの境は平行沈線内に刺突を施して区画を行っている。主文様である重菱形文は端部を巻き込んでおらず、また口縁内面の稜は中期宇津ノ台式土器にみられる特徴であり、ともに古い様相となっている。

以上のことから考えていくと、1・8・11・12・15は3期の特徴をもっており、当該期のものと考えられ、特に1・8・11・15は新潟県内の特徴をよく示している。7は古い様相もみられるが、文様などから3期と考えられる。10は、3期または4期と考えられる。13・20はやや古い様相をもち、器形は1～3期でよくみられるものである。21は口縁内面への施文は3期の特徴であるが、内面の稜などは古い様相であり、また重菱形文などから2期と考えることも可能である。これらの土器の出土位置をみると、1・7がSI40周辺、8・11・12・13がSI41周辺、20が土器集中部1・2、21が土器集中部3となっている。遺構を時期ごとに整理すると、土器集中部は共に古い様相もつ土器となっており、土器集中部3の土器から2期と考えることも可能である。SI40周辺とSI41周辺及びSK53は共に3期の土器が出土しており、その

段階の遺構とすることができる。細かくみると、SI40周辺では古い様相を示す土器も出土しており、またSI41周辺では4期の可能性がある土器が含まれている。そのことから若干時期差が存在する可能性も考えられ、その場合はSI40が先に構築されたとも推測される。

C　石　　器

今回の調査で出土した石器は、出土層位および出土位置や形態から弥生時代中期末葉から後期前葉に属するものと考えられる。内訳は石鏃・石錐・楔形石器・スクレーパーとして使われたと考えられる二次加工剥片・磨製石斧及び剥片・砕片であり、天王山式土器によく伴うアメリカ式石鏃はみられなかった。使用石材は、26の石鏃、27の石錐、31の二次加工剥片及び32の磨製石斧以外を除き、剥片・砕片の大半を含めて半透明の頁岩である。半透明の頁岩は、近隣の砂山遺跡で石鏃などの主要石材となっている［石丸ほか2003］。この石材は、荒川［秦2001］やその支流など［田村2005］で採取することができるとされている。26・27・31は共に頁岩を素材としており、これも荒川支流など近隣で採取できる［石丸ほか前掲］。このことから本遺跡で使用された石器石材は、周辺で採取され持ち込まれたものが大半を占めると考えられる。

SI41の推定範囲からは石鏃2点、石錐1点、二次加工剥片・磨製石斧各1点が出土している。特に炉跡付近から半透明の頁岩の剥片・砕片が多量に出土し、剥片には表皮がついているものがみられ、この場で石鏃などの石器製作が行われた可能性がある。また磨製石斧と二次加工剥片の出土位置は、炉跡の掘り込み面とほぼ同じ標高で、住居床面からの出土と考えられる。またSI40の推定範囲内からは石鏃2点、石錐・楔形石器が各1点出土しており、近接した範囲外からも石鏃・楔形石器が各1点出土した。

弥生時代の出土石器は石鏃が5点、石錐が2点、楔形石器が2点、二次加工剥片及び磨製石斧が各1点、剥片・砕片類が230点、搬入礫1点の計242点である。このうち9割以上を占める剥片・砕片類は大多数が5㎜未満である。剥片・砕片および搬入礫を除いた11点の狭義の石器のうち、石鏃などの剥片石器は10点と多く、そのなかでも、石鏃が5点含まれ半数を占めている。剥片石器が多くみられる傾向は、砂山遺跡においても確認されている［石丸ほか前掲］。この時期、石鏃は砂山遺跡や滝ノ前遺跡、神林村長松遺跡［田辺ほか1991］、新潟市（旧豊栄市）松影A遺跡［加藤ほか2001］などで数多く出土しており、また、弥生時代の石器集成によれば県外の同時期の遺跡においても石鏃が顕著である［埋蔵文化財研究会・関西世話人会1992］。これらのことから石鏃は、この時期普遍的に認められる石器であったと考えられる。磨製石斧は、砂山遺跡や松影A遺跡などにおいても出土している。それらの遺跡では縄文時代の遺物も共に出土しており、松影A遺跡では出土した磨製石斧を縄文時代の遺物と推定されているが、砂山遺跡については形態上の特徴から弥生時代の可能性も否定できない。天王山式土器を含めたこの時期は、一般的に鉄器が伴うとされている。特に木工具は鉄器化を達成していたといわれており［石川2000］、石斧が減少すると考えられている。その点から本遺跡の磨製石斧は、天王山式土器に伴う数少ない資料と評価することができる。

2 古　　代

A 遺構および遺跡の立地

今回の調査で古代の遺構として掘立柱建物4棟、井戸1基、土坑24基などが検出されている。遺跡は遺構の分布や地形から東側に延びていると推定され、遺構や遺物のあり方から、本遺跡は当時の一般的な集落と考えられる。遺跡の主体となる時期は後述するが、およそ『越後阿賀北地域の古代土器様相』［春日ほか2004］の土器編年Ⅳ期（8世紀中葉～9世紀初頭）～Ⅶ期（10世紀初頭～10世紀前葉）と考えられる。

各掘立柱建物の年代は、柱根の年代測定（第Ⅵ章2参照）によってSB4が10世紀中葉から11世紀前葉、SB13が9世紀代、SB50が7世紀末葉から9世紀前葉の値が得られている。またSB37には配置から本遺構に伴うと考えられるSK27にⅦ期の土器が出土している。以上のことから本遺跡の掘立柱建物の時期は平安時代前葉のSB13とSB50、平安時代中葉のSB4とSB37の2グループに大別される。また掘立柱建物の平面積はSB4が約72㎡、SB13が約27㎡、SB37が約36㎡、SB50が約20㎡となっている。SB4は平面積が他の3棟と比較して2倍の大きさであり、唯一検出された井戸もこの建物から約15m離れたところに存在している。

北側調査区を横断する形で2条の自然流路が検出されており、流路内の出土遺物から集落と同時に存在していたと考えられる。遺物は覆土上層よりも中層以下からの出土が多くなっているが、一括廃棄など多量に出土するような状況ではなかった。SR1では下流部分が浅く幅が20m以上に広がり、湿地ないし沼沢地などの端部に連なっていたとも考えられる状況で、珪藻化石の分析（第Ⅵ章3参照）によっても裏付けられている。SR2では深さもありSR1よりも長期に渡って流れていたと考えられ、また自然流路内及び川岸からはいくつかの遺構が検出されている。ただし珪藻化石の分析（第Ⅵ章3参照）の結果、集落存在時においては河川の影響を受ける湿地もしくは沼沢地とされている。自然流路と遺構の関係をみると、掘立柱建物はSR1の南側に3棟、SR1と2に挟まれた部分に1棟の計4棟が検出されている。井戸は、自然流路から離れて検出された1基のみである。土坑は調査区の中に散漫に位置しており、SK36やSK42など5基の土坑はSR2の立ち上がりおよび川岸に構築されている。溝状遺構は自然流路を切るものや切られるものが認められ、またSD43は接点部分が攪乱されているが、自然流路2から延びるようにみえる。このように本遺跡は、集落内に位置する自然流路と遺構配置において密接な関係があったと考えられる。

本遺跡に隣接する旧中条町（現胎内市）の例ではあるが、遺跡数が8世紀になると爆発的に増加するとされている［水澤2002］。阿賀北地域では古代の遺跡が、496遺跡確認されている。それらの遺跡は、平野及び低地上に179遺跡、砂丘上に124遺跡、各河川の自然堤防上に58遺跡となっており、標高の低い平野中央に進出した生活拠点といわれている［荒川ほか2004］。遺跡の細かな立地傾向としては、砂丘の東側斜面、湖岸堤防上に多くみられるとされている［水澤2004］。

本遺跡に近接した村上市南部・神林村・荒川町・胎内市の海岸平野部で詳細が明らかな遺跡は、本遺跡も含め28遺跡ほど確認されている。これらは村上市三角点下遺跡・神林村長松遺跡を除き、ほぼⅣ期からⅦ期が主体となっている。遺跡の立地傾向としては、旧岩舟潟・旧紫雲寺潟（塩津潟）の自然堤防（湖岸堤防）や荒川の自然堤防、胎内川扇状地の扇端部などに多くみられ、また砂丘上に位置するものも確認されている。これらの低地部に位置する遺跡のうち、半数以上の16遺跡で当時の河川跡が検出されている。検出されていない遺跡の中には調査面積が狭いものもあり、実際にはもう少し増えるものと考えられ

る。河川が検出された遺跡の中で、「津」墨書土器などが検出された胎内市蔵ノ坪遺跡、船戸川崎遺跡、草野遺跡、荒川町鴨侍遺跡などは官衙遺跡もしくは官衙関連遺跡と考えられる。また胎内市沢田遺跡は製塩に関連する遺跡と考えられ、そして本遺跡を含めたほかの遺跡は一般的集落と思われる。これらのことから、当時、川沿いに集落などが立地するということはある程度一般的にみられる形態であると考えられる。集落などが川沿いに立地する要因としては、日常的な水資源の利用のほかに、内水面を利用した交通網の利用を想定することができる。本遺跡を含めた当地域は、『越後国瀬波郡絵図』や『正保二年越後国絵図』によると、以前は潟を含めた湖沼や小河川、低湿地などが多くみられ、また胎内川が荒川に河口付近で合流し、旧岩舟潟も荒川と通じる環境であった。また本遺跡や西川内北遺跡では東北系と考えられる土師器が出土しており、西川内北遺跡では海岸砂丘上との連絡に内水面の交通を利用していたと想定している［野水ほか2005］。これらのことから公的な施設も含め、当時は集落間の移動などには内水面の交通が重要であり、それにより集落も川に面したところに立地するものが多くみられるのではないかと考えられる。

B　中曽根遺跡出土の古代土器の編年的位置づけ～食膳具を中心に～

1）は じ め に

今回の調査において中心となる時代の土器は奈良・平安時代に属するもので、2本の自然流路及びSD3からある程度まとまって出土しており、SD2からも一定量の出土をみる。ところが出土状況を見ればそれらが一括資料とは考えにくく、年代幅もかなり広いように思われる。そこで今回は、比較的型式変化が顕著な須恵器および土師器の食膳具に注目し、それを詳細に検討することで中曽根遺跡の編年的位置づけを提示したいと考える。

具体的な方法としては、表採資料も含めた中曽根遺跡出土のそれぞれの器種について本文中の分類から項目ごとにさらに細分し、『越後阿賀北地域の古代土器様相』［春日ほか2004］に提示された岩船郡内の編年に照らし合わせて検討する。検討材料としては同書において岩船郡内の編年の指標とされた遺跡のほかに、資料不足を補うために聖籠町山三賀Ⅱ遺跡［坂井ほか1989］と中曽根遺跡周辺の窯跡から出土した須恵器の編年を参考にした。また、定点を与えるために実年代資料を伴う古志地域の編年として出雲崎町梯子谷窯跡［春日ほか2001］を援用し、時期の表記は『越後阿賀北地域の古代土器様相』に従うこととする。

2）主要な遺構から出土した遺物の検討

すでに本節の冒頭でも述べたように、SD2・SD3・SR1・SR2は遺物の出土状況からは一括資料とみなすことはできない。言い換えると、それぞれの遺構に複数時期の遺物を含むと考えられるわけで、実際にそれらを一瞥した限りにおいても、個々の遺物の型式変化を追うことはできそうである。

ここではSD3・SR1・SR2から出土した須恵器杯類及び須恵器蓋について、それぞれ器種ごとに編年を行ない、次節で中曽根遺跡の編年的位置づけを行う際の材料としたい。なお、前述の遺構出土の土師器椀は中曽根遺跡だけで比較検討することが困難であると思われることから、「3）中曽根遺跡の編年的位置づけの検討」で改めて検討材料に加えることにする。

須恵器無台杯

B1類はSR2から2点（163・166）出土している。両者とも底部から屈曲して立ち上がる形状を呈し、内

面は底部から丸みを帯びたまま口縁部に至るという共通点がある。しかし、詳細ではいくつかの相違点がある。163が丸底であるのに対し、166は静止ヘラケズリが施され平底である。また口径は163が13.8cmであるのに対し、166は12.8cmと小ぶりである。この2点は焼成具合による色調の相違はあるものの、長石の微細粒を多く含む胎土に類似性が認められることから同一産地の製品である可能性がある。底部の成形に大きな違いはあるが、現段階では近い時期の所産として捉えておくことにする。

B2類はSD2（53～55）およびSD3の7～8C・D区（64・65）より出土している。このうちSD3出土のものは胎土・焼成ともに酷似することから、同じ産地の製品であると思われる。64と65を比較すると、65が法量的に大きく、体部も64が外反気味に立ち上がるのに対して、65はやや丸みを帯びて口縁部へ至る。この差異を個体差とすることもできるが、時期差を反映しているのかもしれない。一方、SD2出土の一群のうち53～55は法量や体部の傾きがSD3出土の64に近いが、体部が内湾気味に立ち上がる点が異なる。また55は体部がやや大きく開く点で新しい様相を有する。これらに比してやや法量が大きく、体部が外反する56はSD2出土のものの中で古い様相を示し、さらにSD3の64・65より古く位置づけられる可能性がある。ただし、これらの須恵器無台杯の年代差は、ごく小さいものと考えられる。

B3類は、SD3では7～8C・D区と14～15B区で1点ずつ出土している。7～8C・D区の66と14～15B区の69がそれであるが、焼成は66がやや甘いものの、胎土から産地を同じくする可能性がある。69が法量的に大きく、体部が直線的な66に比べ内湾気味であるなど69に新しい要素を見出すことができる。

B4類はSD3の7～8C・D区から1点（63）出土している。口縁部が折縁状に屈曲するB4類（63）についてはB2類、B3類とも異なる胎土であるようだ。口縁部の相違が産地の違いによるものなのか、時期差であるかは不明である。比較材料に乏しいが、法量が66に似ること、体部が直線的に開く点などを根拠にB3類と同時期であるとしておく。

B1～3類の前後関係であるが、B2類とB3類ではB3類の底部が小さく体部の開きが大きいことから、B2類がB3類に先行するものと考えられる。B1類とB2類を比較すれば、成形・調整においてB1類に丁寧さが認められ、この点からB1類がB2類に先行すると考えられる。

C類はSD3の14～15B区（68）、SR1（135～138）、SR2（162・164・165・167～169）から出土している。SR1出土の135以外は法量、体部の傾きもよく似ており、135以外はいずれも同時期とみなしてよい。135についても器高が高い以外は法量、体部の傾きとも他と近似することから個体差、あるいは時期差があるとしても比較的近い時期であると思われる。

B類とC類の前後関係であるが、SD3の14～15B区からB3類（69）とC類（68）が1点出土している。この2点は焼成（色調）や胎土が酷似することから産地を同じくするものと考えられる。口径や体部の傾きが近似することから、両者の違いを個体差とし、時期的な差異はないとみなすこともできる。しかしC類の器壁が薄く、さらに前述のようなB3類間の違いを加味すれば、C類を後出するものと考えたほうが理解しやすい。

以上から須恵器無台杯B・C類の変遷については、B1→B2→B3、B4→Cとすることができる。

なお、A、D類については後述する。

須恵器有台杯・蓋

SR1出土の有台杯のうち、A2類の132は口径17.8cmを測る大型品である。これとA2類の口径15.3cmの133はその形態及び胎土から同系列と考えられ、133の体部や高台に簡略化が認められることもあわせ

れば132は133に先行すると考えることができる。B2類の134は133に比べ、杯底部の成形が雑である。これは形式的な簡略化というよりむしろ製作上の問題と考えるべきで、反面、体部や内面は丁寧である。体部の形態から134は133に先行すると思われ、132に平行するものとみなし、132の小型品と考えたい。

SR2出土の有台杯の中で最も古いと考えられるのがB2類の159である。厚い底部の端に付される高台と高台上部外端より上方に伸びる体部を有する。体部の厚みは一定である。

132と159では、胎土や法量が異なるものの口縁部の形状や傾きなどから時期は近いと思われる。ただし、高台の位置や高台の端面の調整など132に新しい要素がみられる。

SD3出土の有台杯はC類である60と杯蓋A類である59はレンガ色を呈する色調がよく似ており、法量的な面からもセット関係にあると考えられ、両者は同時期のものである可能性が高い。

杯蓋はSD3でA類（59）、SR2でB類（157・158）が出土している。これらを比較すると、法量、器厚などから157が158に先行し、59は両者の中間に入るものと考えておきたい。ただし、59と158の形式差はわずかであると思われる。

有台杯D（58）については、他に比較材料がないことから後述することとしたい。

3）中曽根遺跡の編年的位置づけの検討

本稿の目的はあくまでも遺物個々の形式を比較することで中曽根遺跡の編年的位置づけを行なうことであり、新たな編年を組むわけではないことを予め断っておく。

須恵器無台杯

無台杯B1類（163・166）については荒川町・元山窯跡4号灰原に類例を求めることができる。それに後続すると考えられている1、2号窯においては同様の形状を呈するものの出土をみないことから、B1類の下限をⅣ1期とすることができよう。

中曽根遺跡SD3の無台杯B2類のように、径高指数が20前後となれば新発田市・ホーロク沢A窯［鶴巻2001、坂井1989ほか］や古志地域・和島村の八幡林官衙遺跡［田中1994］Ⅰ地区11トレンチⅢ層、あるいは少数であるが松山2号窯に類例を求められる。Ⅳ2（新）～Ⅴ期と考えておきたい。

先ほどB2類に後続すると考えたB3類（66・69）に対応するのは鴨侍遺跡［吉井2002］A区22号溝出土の一群で、Ⅴ期に位置する。SD3出土のB4類（63）は鴨侍遺跡A区包含層資料に対応し、こちらもⅤ期の範疇で捉えられる。

C類はB類に比してさらに薄手の一群であり、八幡林官衙遺跡［田中ほか1993］C地区17トレンチ出土の9～11など多くの遺跡で法量、体部の傾きともに近似するものが出土している。Ⅵ2～3期である。

また前項までで触れなかったA類については、SD3出土の61は山三賀Ⅱ遺跡SI115出土の21や梯子谷窯跡［春日2001］の195に近くⅡ2～3期、SR2出土の161が和島村　下ノ西遺跡［田中ほか1998］Ⅱ区SD202の一群に近くⅢ期であると考えられる。

須恵器有台杯・蓋

須恵器有台杯のうち、SR1出土の132と134は先に同時期であると考えた2点であるが、丸底気味の底部の外端に付された高台及び丸い立ち上がりなどの特徴は梯子谷窯跡SK201出土資料に類例を見ることができる。Ⅱ2期に属するものと思われる。SR2出土の152は丸底の外周に小さな高台を持ち、直線状に

斜上方への立ち上がり、折れて外反気味に広がる口縁部を有する器形であるが、現在のところ周辺地域で類例は知られていない。ただし、小さい高台に限っては新発田市（旧加治川村）高床山麓窯跡群の下小中山窯跡に見られることから、これと近い時期であると考えておきたい。Ⅱ～Ⅲ期である。153・154は平底の外端より少し内側に断面長方形の高台を有し、底部端より稜を持って、屈曲して立ち上がる体部を持つ。類例としては新発田市（旧豊浦町）五頭山西麓窯跡群の岡屋敷窯跡［小林2003］にみられ、Ⅳ1期と考えられる。

中曽根遺跡出土のものと同様に体部の外反が弱く高台が内傾する折縁杯は鴨侍遺跡Ａ区22号溝にみることができる。Ⅴ期である。

有台杯Ｃ類（60）は、組み合う可能性が高いと思われる蓋（59）とともにみれば、鴨侍遺跡Ａ区23号溝の身（16）と蓋（28）が近いと思われる。Ⅴ期の所産である。

杯蓋Ｂ（157・158）は比較的低い体部を有し、157には扁平なツマミが付されている。このタイプの蓋はⅣ2（新）～Ⅴ期を通じてみられるようで、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

土師器椀

土師器椀の出現は古く、山三賀Ⅱ遺跡においては東北系と考えられるものを除けばⅢ期、古志地域でもⅢ期を初現とする。しかしその頃の器形は須恵器杯に近似する。比較の対象とした各遺跡において土師器椀が定形化し、定着するにはⅤ2～Ⅵ1期を待たなければならないようだ。

岩船郡内においては、Ⅵ期の土師器椀の形式編年が確立していない。ところが中曽根遺跡ではSD3の7～8C・Ｄ区と14～15B区、ならびにSR2において土師器椀がまとまって出土しており、しかもそれぞれの区域によって形態の傾向を異にしている。このことから中曽根遺跡の動向を探る上においては土師器椀の変遷を掴む必要がある。

周辺の遺跡出土の土師器椀

まず岩船郡内のⅤ2～Ⅶ2期（新）と考えられている遺跡を参考に、土師器椀の大まかな変遷を考えて見たい。

・Ⅴ期　荒川町鴨侍遺跡Ａ区

鴨侍遺跡Ａ区ではＡ類の他に比較的底高指数が高いとみられるB1類の口縁～体部片が1点、報告されている。

・Ⅵ期　鴨侍遺跡Ｃ区河川1・2、神林村衣田遺跡［田辺ほか2001］包含層

鴨侍遺跡Ｃ区は自然河川跡、衣田遺跡は包含層からⅥ1～Ⅵ3期に属するとみられる遺物が出土している。土師器椀については両遺跡に共通する要素はなく、衣田遺跡が主にB1類とB2類で構成されるのに対し、鴨侍遺跡はB4類とC1類に加え、中曽根遺跡では出土例を見ない、直線的な体部から口縁部が外反するものからなる。

・Ⅶ期　金曲遺跡SK80、神林村石川遺跡［鈴木ほか1998］SD1、荒川町田島遺跡［吉井2001］1号・2号住居

金曲遺跡はⅦ1～Ⅶ2（古）、石川遺跡はⅦ2（新）、田島遺跡はⅦ1期とされる。土師器椀において金曲遺跡と田島遺跡に共通する器形はB2類とB3類である。

Ⅶ2（新）と考えられている石川遺跡から出土した土師器椀は層位によって形式差がみられ、それが時期差を反映しているものと思われる。ここではＤ類の出現を境に3・5層を前期、1・2層を後期とする。Ｄ類は比較対象とした遺跡の中で石川遺跡においてのみみられる器形である。

それ以外の器形でも、前期のものは比較的前段階の形態を踏襲する傾向にあるが、後期のＢ・Ｃ類は体部の湾曲が大きくⅢ形に近い形状を呈するようである。

中曽根遺跡の土師器椀

岩船郡内の土師器椀は特にB1類がⅥ期を通じて存続するとみられることから、Ⅵ期におけるSD3（79・81・84～87）とSR2（183・184）の具体的な動向を追うことは難しい。このような状況において、SD3、SR2のB2類（SD3－91、SR2－185）やSD3にみられるC3類（SD3－92・94・95・97～100）はⅥ期の後半～Ⅶ1期まで存続すること、さらに椀以外の遺物でも、SD3の長胴壺（71）、土師器甕Ｂ類（115）及びＣ類（113・114）やSR2の土師器甕Ｃ類（187）、土師器鍋（196）など、Ⅵ1期に位置づけられる資料があることから、両遺構ともⅥ期を通じて存続する可能性が高いと思われる。下限については、SD3・SR2ともにＣ類のうちで器高が低いもの（89・176・180・181など）が出土し、またSD3ではB4類（93）、SR2ではＤ類（189）がみられることからⅦ2（新）期までとすることができる。SR1については、黒色土器椀（147）がB2類の形態に近く、須恵器無台杯Ｃ類（135～138）の存在や、土師器鍋のうちでも新しい様相を呈する116から、Ⅵ期後半からⅦ1期までの範疇で捕らえられよう。なお、SD3出土の須恵器無台杯Ｄ類は形態的に土師器椀B1類に属すると考えられる。

4）中曽根遺跡の実年代（第27・28図）

新潟県内における木簡などの暦年代資料は和島村を中心とする古志地域に集中している。これらについては春日真実氏によって土器編年を絡めて詳細な検討がなされているので［春日2005］、ここではそれを箇条書きにして書き出すにとどめる。そして暦年代が与えられた時期について、中曽根遺跡の動向を探ってみることで本稿の結びとしたい。

① 下ノ西遺跡SD201から神亀2（725）年と記された可能性が高い木簡が出土している。

② 下ノ西遺跡SD201から年代が養老4（720）年もしくは養老4～天平2（735）年に限定できる木簡が出土している。

③ 八幡林Ⅰ地区では貞観5（865）年の地震で生じたと考えられる断層の上位（Ⅱ層）から土器が出土している。

④ 新潟市釈迦堂遺跡では貞観5年の地震で生じたと考えられる噴砂が確認されている。

⑤ 和島村門新遺跡SD152から延長6（928）年と記された漆紙文書が出土している。

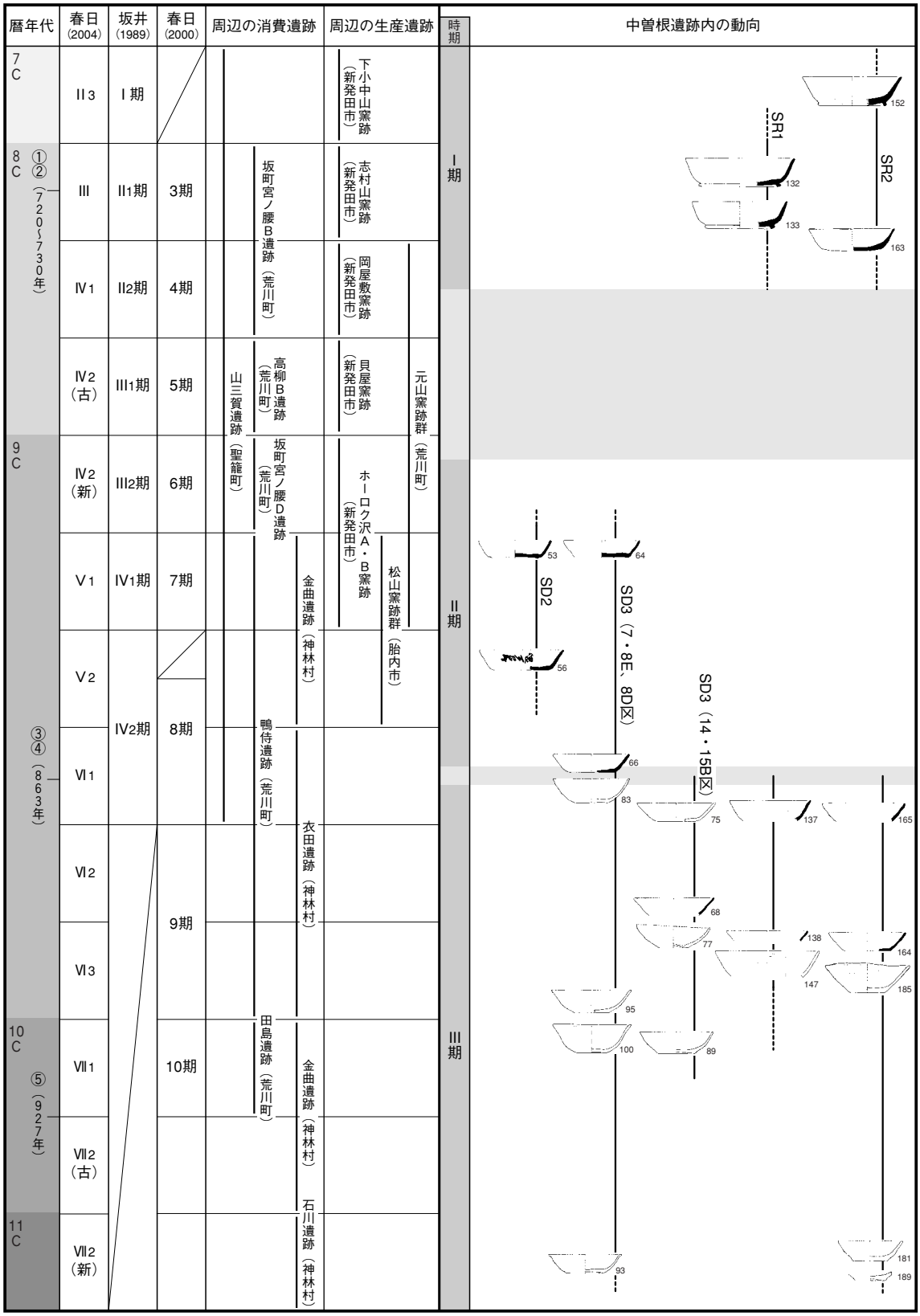
第27図はここまでで検討したSD2・SD3・SR1・SR2出土土器から中曽根遺跡の動向を示したものである。この図はあくまでも出土土器の時期差から遺構の変遷を追ったものであり、それぞれの遺構の存続期間を示すものではないことを予め断っておく。

中曽根Ⅰ期はSR1とSR2を中心とする時期である。阿賀北編年のⅡ3～Ⅲ期に相当し、Ⅳ期まで続く可能性がある。720～735年に比定される木簡が出土した下ノ西遺跡SD201は中曽根Ⅰ期の中葉頃にあたる。

その後Ⅳ2期を中心として遺物の空白期間があり、Ⅳ2期（新）段階になってSD2およびSD3に遺物の出土がみられるようになる。この段階以降を中曽根Ⅱ期とする。

中曽根Ⅱ期の特徴としては、SR1およびSR2への遺物投棄が激減することがあげられる。また、折縁杯や60の有台杯と、それに伴う可能性のある蓋（59）など、この時期特有の須恵器類がみられることも特徴のひとつといえる。

続く中曽根Ⅲ期は、SR1、SR2に再び一定量の遺物が投棄されること、SD3における遺物投棄の中心が



凡例：暦年代の丸数字は本稿4の丸数字に対応

▌…遺物量が多い　┆…遺物量が少ない　線なし…遺物なし

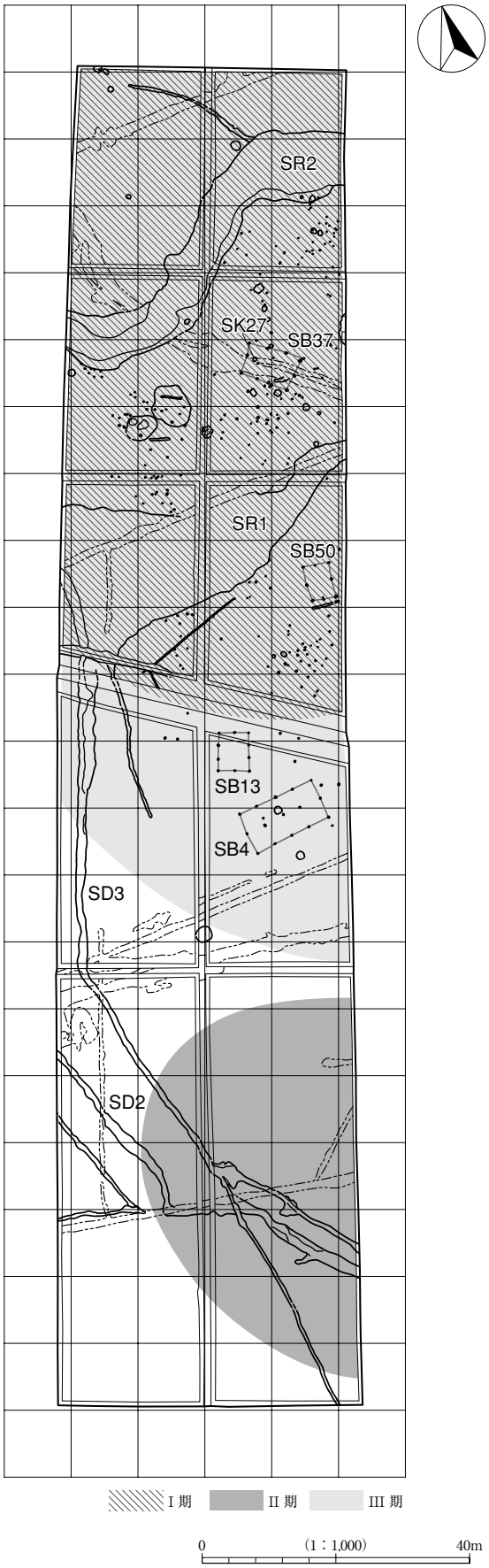
第27図　中曽根遺跡における遺構の変遷（[春日2000、2004] をもとに作成）

14～15C・D区に移るという変化を伺うことができることから設定した。ただしSD3の7～8C・D区でも遺物量こそ減少するものの、時期的な連続性は認めることができることから、この付近も生活域の一部ではあったようだ。

ところでSD2からは須恵器無台杯B2類のほか、土師器有台椀の高台部分（57）が1点出土しているが、これはⅦ2期に属する可能性があるものである。また、前述のように須恵器無台杯B2類がⅣ2期（新）からⅤ期の範疇で捉えられる。すなわちSD2にはⅤ期～Ⅶ期までの空白期間があり、これを埋める土器の出土をみないこと、Ⅶ2期に属すると考えられるものがこの1点であることから、次のような2つの解釈ができる。1つは57を混入品とみなすこと、もう1つはSD2にⅣ2期（新）～Ⅶ2期までの時期幅を与えることである。同様にSD3出土の須恵器無台杯A類（61）はⅡ2期まで遡る可能性があるが、それ以降が空白期間であり、出土が1点のみであることから、SD2と同じく2通りの解釈が可能であろう。

中曽根遺跡の終焉は中曽根Ⅲ期末であるが、一度に廃絶したものではない。本文中でも触れたようにSD3とSR1に切り合い関係があり、SR1が新しい。この点については出土土器の所属時期に齟齬が生じる。SD3とSR1において、最も新しいと考えられる土器の年代は、SR1はⅥ期後半～Ⅶ1期、SD3はⅦ2期である。すなわち、SD3とSR1は本文中で述べた切り合い関係と土器の新旧が逆転する。この理由として理解しやすいのは「SD3埋没後もSR1は流れ続けており、氾濫等の要因で流路が変更された」とする解釈だろう。そしてSR2への投棄の終焉はⅦ2期（新）である。

なお貞観5（865）年の地震は中曽根Ⅱ、Ⅲ期の転換期あたりであると思われ、遺跡が変容した要因として、地震の影響も考えていかなければならないであろう。



第28図　遺物から見た土地利用変遷

C　墨書土器

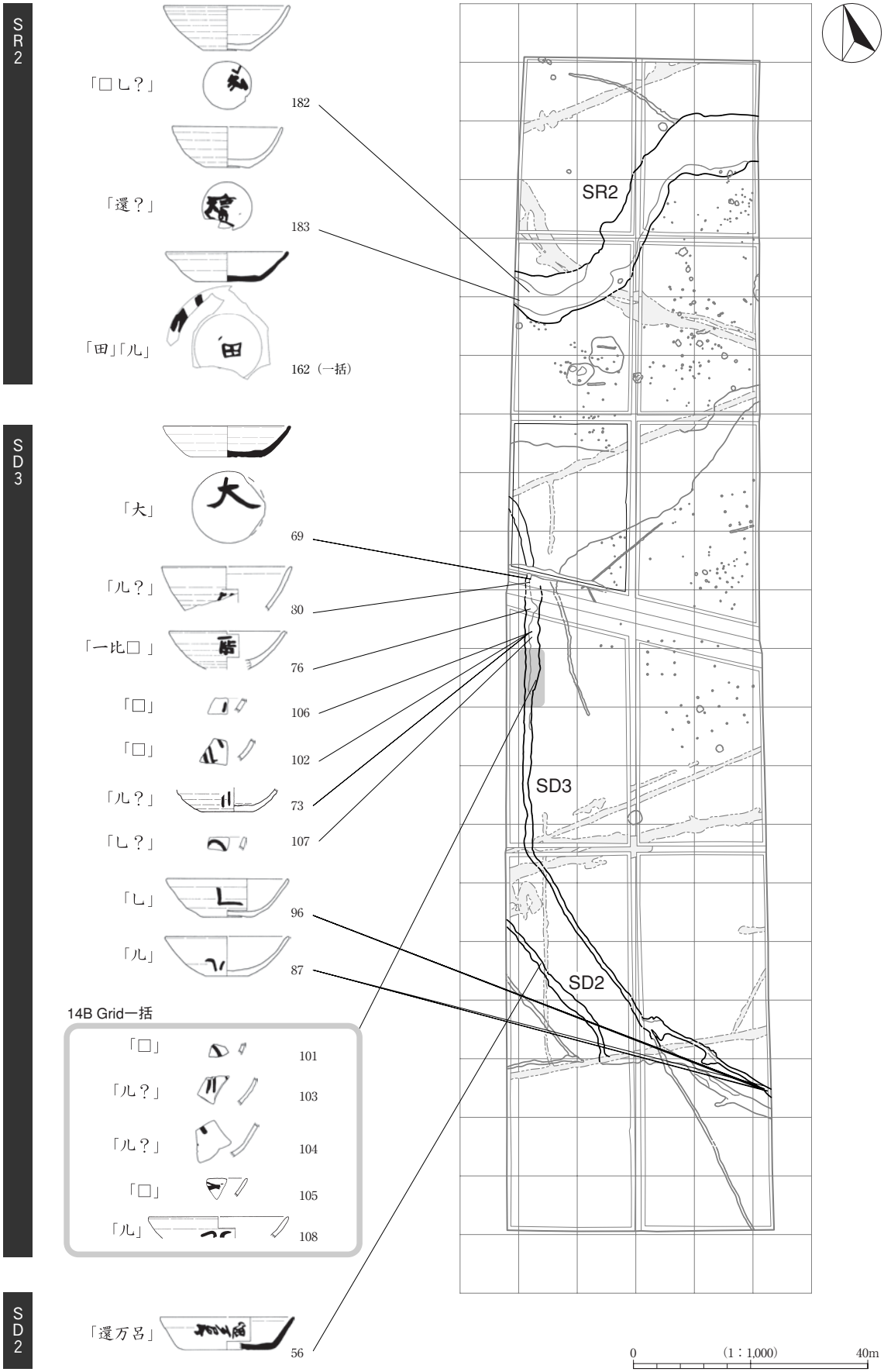
今回出土した墨書土器は計18点を数え、内訳は須恵器3点、土師器15点となっている。新潟県内では一般的に須恵器に墨書されることが多く、本遺跡は対照的な出土傾向となっている。個々の土器の墨痕の大半は2～3本の墨線や墨点状の痕跡が残るもので、書いてある内容など判読が難しいものが多い。そのような中、秀麗な筆致で人名と考えられる文字が記された56と「大」と記された69は共に須恵器であり、識字層によるものと考えることができる。

今回の墨書土器の中で「儿」と記されたかその可能性を指摘できるものが6点出土しており、本遺跡で最も多い。このうち87、108、162は状態など悪いが「儿」と判読される。これらは162を除いてSD3からの出土であり、また体部外面の倒位で記されるという共通点を持っている。その他のものに関しては墨線が平行して二条または一条記されただけであったが、出土位置や墨書の記された方向などから「儿」と判読したものである。「儿」と判読された資料のうち、162だけがSR2出土である。この資料は、底部外面にも「田」と記されている。また「し」と記されている資料も2点確認されている。このうち182は、2文字が記されたと考えられるうちの片方が「し」となっている。なお「儿」、「し」と記された資料は、新潟県内では南魚沼市北沖東遺跡で「し」の資料が確認されている［山崎2006］が、何の文字を記したものかは不明である。「し」は「儿」を省略したものとも考えられるが、そもそも文字として記されたか不明であり、関係も不明とせざるを得ない。

56は人名と考えられる「還万呂」が、また183は「還」と記されたと考えられる。これらの墨書土器の「還」の字は、第29図の『五體字類』に近字体を見出すことができる。このうち183は文字の書き方から文字に精通した人物によるものとは思われず、56の「還」を模倣したものとも考えられる。しかし時期が前後し、また出土遺構が異なっていることから、両者の関係は不明である。

第29図
「還」の字体
（『五體字類』）

墨書土器の出土位置（第30図）は、SD2、SD3、SR2の3遺構となっている。SD3からは14点出土しており、12点が14・15B区に集中している。SD3から出土している墨書土器のうち、時期が判別できるものでは［春日2005］編年のⅥ2～3期（9世紀後半～10世紀初頭）に比定できると思われる。SD2からは上記の「還万呂」と記された資料が出土しており、須恵器からⅣ2～Ⅴ2期（9世紀前葉～中葉）と考えられる。SR2からは3点の資料が出土しており、使用された土器はⅥ期のものと考えられる。これらの出土位置のうち、SD3の14・15B区の東側には掘立柱建物が2棟検出され、そのうちSB13としたものは年代測定によって9世紀代の年代値が与えられており（第Ⅵ章参照）、墨書土器の年代と概ね合致している。このことから推測すると、「儿」、「し」などSD3出土の墨書土器はSB13などに関係した人物によって記され、廃棄されたと考えることも可能である。また、須恵器を再利用した転用硯も出土しており、これらの墨書は遺跡内かその近辺で記された可能性もある。ただし56、69の須恵器資料は、筆致などが土師器資料とは様相を異にしており、遺跡外からの搬入品である可能性も考えられる。なおSD3など墨書土器の出土した遺構からは祭祀に関連するような遺物が出土しておらず、どのような場面で使用され、また廃棄されたかは不明である。



第30図　墨書土器出土位置

報告書№	出土地点	判読	判読備考	器種	部位	墨書方向
56	SD2	還万呂	呂以下にも墨痕があるが、単なる墨跡と思われる	須恵器無台杯	体部外面	横位
69	SD3	大	識字層による文字と思われる。	須恵器無台杯	底部外面	
73	SD3	□	墨線二条のみ。「儿」の可能性も考えられるがが、断定はできない。	土師器椀	体部外面	正位
6	SD3	□□□〔一比ヵ〕	一と比の間に縦画でつなぐ墨痕は見出せない。第3文字目は文字の上半分しか墨痕が残っていない	土師器椀	体部外面	正位
80	SD3	□〔儿ヵ〕	墨線二条のみ。「儿」の可能性が高い。	土師器椀	体部外面	倒位ヵ
87	SD3	儿		土師器椀	体部外面	倒位
96	SD3	□〔し ヵ〕		土師器椀	体部外面	正位
101	SD3 14-B一括	□	墨線一条のみ	土師器椀	体部外面	不明
102	SD3	□	墨線三条	土師器椀	体部外面	不明
103	SD3 14B一括	□〔儿ヵ〕	墨線二条の他に、墨点一点が見出せる。土器の欠損により断定はできないが、これらが一連の一画とすれば、「儿」の可能性が見出せる。	土師器椀	体部外面	倒位ヵ
104	SD3 14-B一括	□〔儿ヵ〕	墨線一条の他に割れ口にもわずかに墨痕が残り「儿」の可能性がある	土師器椀	体部外面	倒位
105	SD3	□	墨線一条のみ。筆を止めた後の残筆に伴う墨痕が口縁部方向に見られる。	土師器椀	体部外面	不明
106	SD3	□	墨線一条のみ	土師器椀	体部外面	不明
107	SD3	□〔し ヵ〕	「し」状の墨線一条のみ。もう一画に相当する地点に墨痕がないので、「儿」の可能性は少ない。	土師器椀	体部外面	不明
108	SD3 14-B一括	儿		土師器椀	体部外面	倒位
162	SR2	田		須恵器無台杯	底部外面	
		□〔儿ヵ〕	墨線二条のみ。「儿」の可能性が高い。第二画目には墨跡も付く。		体部外面	倒位
182	SR2	□□〔し ヵ〕	1文字目は判読不能。2文字目は「し」の可能性がある。	土師器椀	底部外面	
183	SR2	還ヵ		土師器椀	底部外面	

第9表　墨書土器観察表

要　　約

1　中曽根遺跡は岩船郡荒川町大字金屋字中曽根725ほかに所在し、標高は約3.4mを測る。

2　発掘調査は、日本海東北自動車道の建設に伴い、平成17年度に実施した。調査面積は8,563㎡である。

3　遺跡は、砂丘列の後背低地内の微高地上に立地している。

4　発掘調査の結果、弥生時代中期終末から後期前葉と古代の遺構が確認されたが、遺構検出面としてはほぼ同一面であった。

5　弥生時代の遺構は、住居2軒、土坑1基、土器集中部3か所であり、住居と土坑は北側調査区、土器集中部は南側調査区で検出された。遺物は土器、石鏃や磨製石斧などの石器が出土しており、土器は東北系の天王山式土器が主体となっている。阿賀北地域では弥生時代の天王山式土器を伴う住居の検出例が少なく、特に低地では希少な調査例である。

6　古代の遺構は、掘立柱建物4棟、柱穴列2基、井戸1基、土坑24基、溝状遺構13条、不明遺構5基、ピット208基、自然流路2条で掘立柱建物が自然流路と共に検出されており、河川沿いに営まれた一般的集落と考えられる。遺物は須恵器、土師器、土製品、建築材を含む木製品などが出土しており、土器は［春日2005］のⅣ期～Ⅶ期の時期のものが中心となっている。また「几」と記された墨書土器がまとまって出土している。

7　樹種同定の結果、SK6の木製品はスギであり、掘立柱建物の柱材はサクラ属・クリ・ニレ属などさまざまな種類の木材が使用されていることが判明した。また放射性炭素年代測定の結果、SB4・13・50の各掘立柱建物は平安時代前期及び中期頃に構築されたと考えられる。2条検出された自然流路は、珪藻化石分析の結果古代集落の存在時には、SR1が湿地もしくは沼沢地、SR2が河川の影響を受ける湿地もしくは沼沢地であったと考えられる。

8　その他の時代の遺物は、中世と考えられる銭貨、中世末から近世初頭と考えられる陶磁器類が出土している。

引用・参考文献

荒川隆史ほか 2004　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第133集 青田遺跡』新潟県教育委員会　(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

飯坂盛泰ほか 2002　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第115集 蔵ノ坪遺跡』新潟県教育委員会　(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

石川智紀・片岡千恵　2003　「周知2（道端遺跡・中曽根遺跡）確認調査」『平成14年度 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

石川日出志　1988　「笹神村十二神遺跡の天王山式土器と石器」『北越考古学』創刊号　北越考古学研究会

石川日出志　1988　「引越遺跡」「城山遺跡」『豊栄市史』資料編1考古編　新潟県豊栄市

石川日出志　1990　「天王山式土器編年研究の問題点」『北越考古学』第3号　北越考古学研究会

石川日出志　2000　「天王山式土器弥生中期説への反論」『新潟考古』第11号　新潟県考古学会

石川日出志　2003　「関東・東北地方の土器」『考古資料大観』第1巻第5章　小学館

石川日出志　2004　「弥生後期天王山式土器成立期における地域間関係」『駿台史学』第120号　駿台史学会

石丸和正ほか 2003　「新潟県岩船郡地域における弥生時代中期～後期にかけての様相―村上市砂山遺跡・滝ノ前遺跡を中心に―」『三面川流域の考古学』第2号　奥三面を考える会

伊東　崇　1998　『新潟県北蒲原郡黒川村埋蔵文化財調査報告書 第1集 松山窯跡』新潟県黒川村教育委員会

伊東　崇　2003　『新潟県北蒲原郡黒川村埋蔵文化財調査報告書 第8集 分谷地A遺跡』新潟県黒川村教育委員会

伊東　崇　2005　『新潟県北蒲原郡黒川村埋蔵文化財調査報告書 第11集 分谷地A遺跡Ⅲ』新潟県黒川村教育委員会

伊藤廉倫ほか 1993　『二本松東山遺跡』新潟県聖籠町教育委員会

植松暁彦　2005　「山形県の弥生後期～古墳時代前期の様相」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会

歌代　勤ほか 1979　「新潟平野の形成とその災害をめぐって―新潟平野の地形学的特徴とその形成過程」『アーバンクボタ』第17号　クボタ

江口友子　2001　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第100集 釈迦堂遺跡』新潟県教育委員会　(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

大滝良夫ほか 1997　「二又遺跡」『朝日村文化財報告書 第12集 二又遺跡・竪岩遺跡・カラハギ遺跡』新潟県朝日村教育委員会

大平明夫　1992　「完新世における新潟平野北東部の地形発達史」『地理学評論』65

小野　昭　1993　『長者岩屋岩陰』新潟県朝日村教育委員会

折原洋一　2004　「西部遺跡」『埋文にいがた』第49号　(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

貝塚爽平ほか 1996　『写真と図で見る地形学』(財)東京大学出版会

春日真実　1995　「古代集落の展開―越後を事例として―」『研究紀要1995』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　1999　「第4章 古代 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会

春日真実　2005　「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について―今池編年・下ノ西編年・山三賀編年の検討を中心に―」『新潟考古』第16号　新潟県考古学会

春日真実ほか 2001　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第104集 梯子谷遺跡』新潟県教育委員会　(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真美ほか 2004　『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会

加藤　学　2004　「新潟県域における北方系の土師器・甕－事例紹介と問題提起」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会

加藤　学ほか 2001　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第106集 松影A遺跡』新潟県教育委員会　(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

鴨井幸彦　2002　『新潟県下における沖積地の層序および平野の形成過程に関する地質学的研究』新潟大学大学院自然科学研究所
川上貞雄　1982　『加治川村文化財調査報告1 貝屋須恵器窯跡』新潟県加治川村教育委員会
川上貞雄　1999　『豊浦町文化財調査報告7 志村山須恵窯跡』新潟県豊浦町教育委員会
木元元治ほか 1991　『福島県文化財調査報告書 第262集 屋敷遺跡』福島県教育委員会　(財)福島県文化センター
熊﨑　保ほか　2005　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第144集 沢田遺跡・一杯田遺跡』新潟県教育委員会　(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
小林　克ほか 1990　『秋田県文化財調査報告書 第192集 はりま館遺跡発掘調査報告書（下巻)』秋田県教育委員会　秋田県埋蔵文化財センター
小林昌二・戸根与八郎　1995　『新潟県内出土の墨書土器（稿一)』新潟県墨書土器検討会
坂井秀弥　1987　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第48集 番場遺跡』新潟県教育委員会
坂井秀弥　1999　「古代岩船郡の非ロクロ土師器をめぐって」『新潟考古学談話会会報』第20号
坂井秀弥ほか 1989　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第53集 山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会
坂井秀弥ほか 1991　「佐渡の須恵器」『新潟考古』第2号　新潟県考古学会
坂上有紀ほか 2000　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第98集 平田遺跡』新潟県教育委員会　(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
坂口　豊　1964　「越後平野の古地理の問題によせて」『第四紀研究』第3巻　第5号
澤田　敦ほか 2003　「周知1（西部遺跡・中部北遺跡）確認調査」『平成13年度 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
菅井良咲ほか 1996　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第82集 獅子沢遺跡』新潟県教育委員会　(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
杉原荘介　1968　『新潟県六野瀬遺跡の調査』考古学集刊4-1
鈴木郁夫　2004　「序章 中条町の自然」『中条町史』通史編　中条町史編纂委員会
鈴木俊成ほか 1994　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第60集 一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会　(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
鈴木俊成ほか 1998　「石川遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第89集 天皇前遺跡・有明的場遺跡・石川遺跡』新潟県教育委員会　(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
関　雅之　1972　『滝ノ前遺跡 新潟県村上市滝ノ前遺跡緊急調査概報』新潟県村上市教育委員会
関　雅之　1982　『村尻遺跡Ⅰ』新潟県新発田市教育委員会
関　雅之　2001　「新潟県新発田市馬見坂遺跡出土の土師器―阿賀北地域の7世紀の土器様相とその意義―」『北越考古学』第12号　北越考古学研究会
仙台市史編さん委員会　1994　『仙台市史 特別編2 考古資料』宮城県仙台市
高桑　登ほか 2004　『山形県埋蔵文化センター調査報告書 第131集 小田島城跡』(財)山形県埋蔵文化財センター
高橋昭彦　1995　「緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
高橋　保ほか 1979　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第19 下谷地遺跡』新潟県教育委員会
滝沢規朗　1992　『刈羽村埋蔵文化財調査報告書 第1集 西谷遺跡』新潟県刈羽村教育委員会
田中一穂　2005　「見附市上田遺跡出土の文字資料について」『見附市埋蔵文化財報告 第20 上田遺跡』新潟県見附市教育委員会
田中　靖　1995　『和島村文化財調査報告書 第4集 門新遺跡』新潟県和島村教育委員会
田中　靖　1996　「門新遺跡」『和島村文化財調査報告書 第5集 門新遺跡 外割田地区』新潟県和島村教育委員会
田中　靖　1992　『和島村埋蔵文化財調査報告書 第1集 八幡林遺跡Ⅰ』新潟県和島村教育委員会
田中　靖　1993　『和島村埋蔵文化財調査報告書 第2集 八幡林遺跡Ⅱ』新潟県和島村教育委員会
田中　靖　1994　『和島村埋蔵文化財調査報告書 第3集 八幡林遺跡Ⅲ』新潟県和島村教育委員会
田中　靖　1998　『和島村埋蔵文化財調査報告書 第7集 下ノ西遺跡Ⅰ』新潟県和島村教育委員会
田中　靖　1999　『和島村埋蔵文化財調査報告書 第8集 下ノ西遺跡Ⅱ』新潟県和島村教育委員会
田中　靖　2000　『和島村埋蔵文化財調査報告書 第9集 下ノ西遺跡Ⅲ』新潟県和島村教育委員会

田中　靖　2003　『和島村埋蔵文化財調査報告書 第14集 下ノ西遺跡Ⅳ』新潟県和島村教育委員会
田中　靖　2005　『和島村埋蔵文化財調査報告書 第16集 八幡林遺跡Ⅳ』新潟県和島村教育委員会
田中久夫ほか 1996　「新潟砂丘の形成史」『第四紀研究』第35巻　第3号　日本第四紀学会
田辺早苗ほか 1991　『神林村埋蔵文化財調査報告 第3 長松遺跡発掘調査報告書』新潟県神林村教育委員会
田辺早苗ほか 2001　『神林村埋蔵文化財調査報告 第9 衣田遺跡・道上遺跡』新潟県神林村教育委員会
田辺早苗ほか 2001　「引地遺跡」『神林村埋蔵文化財調査報告 第12 城田遺跡・引地遺跡』新潟県神林村教育委員会
田辺早苗ほか 2002　『神林村埋蔵文化財調査報告 第14 金曲遺跡』新潟県神林村教育委員会
田辺早苗ほか 2002　「前坪遺跡」『神林村埋蔵文化財調査報告 第15 山屋遺跡群発掘調査報告書（前坪遺跡・銅鉄遺跡・フケ田遺跡・天皇前遺跡・水口沢遺跡）』新潟県神林村教育委員会
田村　隆　2005　「この石はどこからきたか－関東地方東部後期旧石器時代古民族誌の叙述に向けて－」『考古学』Ⅲ　安斉正人編
鶴巻康志　2001　「新発田市ホーロク沢窯跡採集の須恵器」『北越考古学』第12号　北越考古学研究会
寺崎裕助ほか 2004　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第135集 反貫目遺跡』新潟県教育委員会　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
戸根与八郎　1973　「新潟県北蒲原郡加治川村下小中山の須恵窯跡」『越佐研究』第33号　新潟県人文研究会
戸根与八郎ほか　1981　「高山寺窯跡・馬上遺跡」『新潟県北蒲原郡豊浦町真木山製鉄遺跡の発掘調査報告書 真木山製鉄遺跡』新潟県豊浦町教育委員会
中川成夫ほか 1973　『狼沢2号窯跡』新潟県笹神村教育委員会
長島雄一ほか 1987　『東北地方の弥生式土器の編年について』縄文文化検討会
中条町史編さん委員会　2004　『中条町史』通史編
新潟県史　1983　「二本松遺跡」『新潟県史 資料編1』原始・古代―考古編
新潟古砂丘グループ　1974　「新潟砂丘と人類遺跡－新潟砂丘の形成史Ⅰ－」『第四紀研究』第13巻　第2号
新潟古砂丘グループ　1979　「砂丘と平野」『アーバンクボタ』第17号　クボタ
日本考古学協会新潟大会実行委員会　1993　『日本考古学協会1993年度新潟大会 東日本における古墳出現過程の再検討』
野田豊文　2005　「三面川流域における弥生時代の終わり―天王山式土器から見た新潟県内弥生後期の様相―」『三面川流域の考古学』第2号　奥三面を考える会
野田豊文・野水晃子　2005　「阿賀北地域の様相」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
野水晃子ほか 2005　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第146集 西川内北遺跡・西川内南遺跡』新潟県教育委員会　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
秦　昭繁　2001　「新潟県北部地域の石器石材環境（2）―関川村獅子舞岩の珪質頂岩分析と石材流通構造―」『北越考古学』第12号
東日本埋蔵文化財研究会福島実行委員会　2000　『東日本弥生時代後期の土器編年』
廣野耕造　1994　『三十刈・堂の下遺跡』新潟県村上市教育委員会
廣野耕造　1994　『はげ遺跡』新潟県村上市教育委員会
廣野耕造　1996　『石動遺跡』新潟県新潟市教育委員会
北越考古学研究会　1989　「新潟県安田町・大曲遺跡弥生時代再葬墓群の発掘調査」『北越考古学』第2号
前川雅夫ほか 2005　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第142集 道端遺跡Ⅲ』新潟県教育委員会　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
前川雅夫ほか 2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第162集 道端遺跡Ⅴ』新潟県教育委員会　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
丸山一昭　2005　『和島村埋蔵文化財調査報告書 第17集 門新遺跡 谷地地区Ⅱ』新潟県和島村教育委員会
水澤幸一　1996　『中条町埋蔵文化財調査報告書 第9集 下町・坊城遺跡・中倉遺跡ほか』新潟県中条町教育委員会
水澤幸一　1998　『中条町埋蔵文化財調査報告書 第15集 兵衛遺跡・四ッ持遺跡』新潟県中条町教育委員会
水澤幸一ほか 1999　『中条町埋蔵文化財調査報告書 第16集 中倉遺跡3次』新潟県中条町教育委員会
水澤幸一ほか 2001　『中条町埋蔵文化財調査報告書 第22集 船戸桜田遺跡2次』新潟県中条町教育委員会

水澤幸一　2002　『中条町埋蔵文化財調査報告書 第24集 船戸川崎遺跡４次』新潟県中条町教育委員会
水澤幸一・吉村光彦　2002　『中条町埋蔵文化財調査報告書 第25集 船戸桜田遺跡４・５次 船戸川崎遺跡６次』新潟県中条町教育委員会
水澤幸一　2004c　『中条町埋蔵文化財調査報告書 第30集 草野遺跡２次』新潟県中条町教育委員会
村上伸之　2004　「唐津焼の成立と初期の窯業」『古唐津』（財）出光美術館
山下峰司　1995　「灰釉陶器・山茶椀」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
八幡一郎　1936　「越後北蒲原郡山草荷の弥生式土器」『中部考古学会彙報』第１巻第２号　中部考古学会
吉井雅勇　1993　『荒川町埋蔵文化財調査報告 第１集 坂町宮ノ腰Ｂ遺跡』新潟県荒川町教育委員会
吉井雅勇　1996　「高柳Ｂ遺跡」『荒川町埋蔵文化財調査報告 第３集 高柳Ａ遺跡・高柳Ｂ遺跡・名割遺跡』新潟県荒川町教育委員会
吉井雅勇　1999　『荒川町埋蔵文化財調査報告 第５集 元山遺跡群』新潟県荒川町教育委員会
吉井雅勇　2001　『荒川町埋蔵文化財調査報告 第７集 田島遺跡』新潟県荒川町教育委員会
吉井雅勇　2002　『荒川町埋蔵文化財調査報告 第８集 鴨侍遺跡』新潟県荒川町教育委員会
渡邊朋和ほか 2001　『新津市埋蔵文化財発掘調査報告書 八幡山遺跡発掘調査報告書』新潟県新津市教育委員会
渡邊美穂子ほか　2001　『坂ノ沢Ｃ遺跡Ⅱ（平安時代編）』新潟県新発田市教育委員会
渡邊裕之ほか 1999　「第３章 弥生時代 第２節 土器」『新潟県の考古学』新潟県考古学会

自然科学分析　引用参考文献

樹種同定

松葉礼子　2001　「新保遺跡出土木製品の樹種同定」『新保遺跡』78-82　新潟県教育委員会　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
松葉礼子　2002　「金沢市藤江Ｂ遺跡出土木製品の樹種同定」『金沢市藤江Ｂ遺跡Ｉ』84-88　（財）石川県埋蔵文化財センター
鈴木三男・能城修一　1991　「金沢市畝田遺跡から出土した木製品の樹種」『畝田遺跡』165-189　石川県立埋蔵文化財センター
鈴木三男　1994　「金沢市戸水Ｂ遺跡出土木製品の樹種」『金沢市戸水Ｂ遺跡』111-113　石川県立埋蔵文化財センター
植田弥生　2003　「畝田Ｂ遺跡出土木製品の樹種同定」『畝田・無量寺遺跡 畝田Ｂ遺跡』136-140 石川県教育委員会（財）石川県埋蔵文化財センター

放射性炭素年代測定

Bronk Ramsey C.　1995　Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy:The OxCal Program, *Radiocarbon*, vol.37（2），425-430.
Bronk Ramsey C.　2001　Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon*, vol.43（2A），355-363.
中村俊夫　2000　「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の ^{14}C 年代』3-20
Reimer PJ.MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer.（2004）IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration,0-26 cal kyr BP, *Radiocarbon*,vol.46, 1029-1058

珪　藻

安藤一男　1990　「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』第42巻　73-88.
小杉正人　1988　「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』第27巻　1-20.
Murakami, T.　1996　Silicious Remains Dissolution at Sphagnum-bog of Nagano-yama Wetland in Aichi Prefecture, Central Japan.*The Quaternary Research*, vol.35, 17-23.

弥生時代住居跡

遺構№	方位		平面規模		床面積	—		—	
SI40	N65°W		568×480cm		—	—		—	
構成ピット	位 置	柱	平面形	平面規模	断面形	深 さ	底面標高	ピット間隔	
P222	20D22	ナシ	円 形	17.5×15cm	半円状	10cm	3.25m	P222-P219	120cm
P219	20D21	ナシ	円 形	15×13cm	U字状	15cm	3.16m	P219-P231	220cm
P231	20E1	ナシ	楕円形	18×12.5cm	U字状	12.5cm	3.20m	P231-P220	166cm
P220	20E6	ナシ	楕円形	22.5×15cm	U字状	21cm	3.09m	P220-P214	96cm
P214	20E6	ナシ	円 形	19×19cm	U字状	11cm	3.21m	—	—
炉	20E1・2	—	不整形	111.5×98cm	弧 状	9cm	3.28m	—	—

遺構№	方位		平面規模		床面積	—		—	
SI41	N46°E		820×460cm		—	—		—	
構成ピット	位 置	柱	平面形	平面規模	断面形	深 さ	底面標高	ピット間隔	
P270	21D25	ナシ	楕円形	15×12.5cm	半円状	9cm	3.19m	P270-P228	274cm
P228	21D19	ナシ	楕円形	20×14cm	台形状	12cm	3.21m	P228-P218	240cm
P218	21D23	ナシ	円 形	20×17cm	箱状	25cm	3.08m	P218-P217	146cm
P217	21D24	ナシ	楕円形	24×16.5cm	半円状	12cm	3.20m	P217-P270	296cm
炉	21D19・20・24・25	—	長方形	142×115cm	弧 状	5cm	3.36m	—	—

弥生時代土坑

遺構名	調査区	グリッド	平面形	断面形	規模（m）			主軸方位	覆土
					長軸（直径）	短軸	深さ		
SK53	北	20E14	楕円形	台形状	0.49	0.33	0.15	—	2

古代掘立柱建物

遺構№	方位（桁行）		構造		床面積	桁行		梁間	
SB4	N80°E		4間×2間、総柱式		74.378㎡	北1180cm、南1200cm		東610cm、西645cm	
構成ピット	位 置	柱	平面形	平面規模	断面形	深 さ	底面標高	ピット間隔	
P5	13D15	ナシ	楕円形	32×25cm	U字状	26cm	3.16m	P5-P6	275cm
P6	14D16	ナシ	円 形	26×24cm	U字状	31cm	3.10m	P6-P7	320cm
P7	14E1	ナシ	楕円形	38×30cm	U字状	26cm	3.14m	P7-P8	280cm
P8	14E7	ナシ	円 形	28×28cm	漏斗状	34cm	3.10m	P8-P15	310cm
P15	14E13	ナシ	円 形	20×19cm	弧 状	7cm	3.40m	P15-P2	305cm
P2	14E16	ナシ	長方形	28×22cm	U字状	42cm	3.01m	P2-P4	310cm
P4	13E25	ナシ	円 形	31×28cm	漏斗状	34cm	3.03m	P4-P3	330cm
P3	13E14	ナシ	円 形	29×26cm	U字状	36cm	3.04m	P3-P14	290cm
P14	13E8	ナシ	円 形	25×24cm	U字状	30cm	31.4m	P14-P13	285cm
P13	13E3	ナシ	円 形	26×22cm	U字状	20.5cm	3.15m	P13-P12	300cm
P12	13D17	ナシ	長方形	32×18cm	U字状	28cm	3.06m	P12-P9	330cm
P9	13D19	ナシ	円 形	28×24cm	U字状	31cm	3.13m	P9-P5	310cm
P10	13D24	残存	楕円形	41×28cm	漏斗状	40cm	3.01m	—	—
P11	13E5	ナシ	楕円形	28×22cm	半円状	16cm	3.31m	—	—
P1	14E11	残存	長方形	29×22cm	漏斗状	48cm	2.95m	—	—

遺構№	方位（桁行）		構造		床面積	桁行		梁間	
SB13	N17°E		2間×3間、側柱式		26.122㎡	東570cm、西560cm		北440cm、南465cm	
構成ピット	位 置	柱	平面形	平面規模	断面形	深 さ	底面標高	ピット間隔	
P8	15D6	ナシ	楕円形	22×15cm	U字状	15cm	3.31m	P8-P9	230cm
P9	15D11	残存	楕円形	34×23cm	漏斗状	54cm	2.86m	P9-P10	210cm
P10	15D16	残存	円 形	20×19cm	U字状	46cm	2.96m	P10-P1	185cm
P1	14D20	残存	円 形	24×22cm	U字状	58cm	2.82m	P1-P2	185cm
P2	14D19	残存	楕円形	28×23cm	U字状	52cm	2.89m	P2-P3	205cm
P3	14D18	ナシ	方 形	28×24cm	U字状	28cm	3.03m	P3-P4	220cm
P4	14D13	ナシ	楕円形	28×22cm	台形状	16cm	2.88m	P4-P5	250cm
P5	14D3・8	残存	方 形	27×26cm	U字状	42cm	2.94m	P5-P6	170cm
P6	14D4・9	残存	円 形	28×25cm	漏斗状	38cm	2.97m	P6-P7	200cm
P7	14D5・10	残存	楕円形	37×28cm	U字状	44cm	3.31m	P7-P8	190cm

遺構No.	方位（桁行）		構造		床面積	桁行		梁間	
SB37	N55°W		3間×2間、側柱式		38.078㎡	北820cm、南740cm		東510cm、西470cm	
構成ピット	位 置	柱	平面形	平面規模	断面形	深 さ	底面標高	ピット間隔	
P4	20D13	ナシ	楕円形	42×34cm	台形状	26cm	3.20m	P4-P5	470cm
P5	20D20	ナシ	楕円形	34×28cm	V字状	30cm	3.10m	P5-P6	285cm
P6	20D25	ナシ	円 形	31×27cm	弧 状	11cm	3.28m	P6-P7	300cm
P7	20E9・10	ナシ	円 形	32×28cm	U字状	34cm	3.05m	P7-P8	250cm
P8	20E14	ナシ	楕円形	26×21cm	箱 状	28cm	3.05m	P8-P9	270cm
P9	20E8	ナシ	方 形	32×28cm	U字状	34cm	2.96m	P9-P1	250cm
P1	20E7	ナシ	長方形	39×32cm	U字状	28cm	3.08m	P1-P2	250cm
P2	20D22、20E2	ナシ	円 形	38×36cm	U字状	43cm	2.95m	P2-P3	240cm
P3	20D18	ナシ	楕円形	34×28cm	U字状	40cm	3.00m	P3-P4	250cm

遺構No.	方位（桁行）		構造		床面積	桁行		梁間	
SB50	N1.8°E		2間×2間、側柱式		19.761㎡	北395cm、南360cm		東510cm、西530cm	
構成ピット	位 置	柱	平面形	平面規模	断面形	深 さ	底面標高	ピット間隔	
P4	17E13・14	残存	円 形	30×29cm	U字状	58cm	2.80m	P4-P3	395cm
P3	17E24	残存	楕円形	30×22cm	漏斗状	82cm	2.42m	P3-P1	250cm
P1	17E23	残存	楕円形	34×27cm	漏斗状	90cm	2.40m	P1-P5	270cm
P5	17E21	残存	円 形	40×40cm	U字状	77cm	2.63m	P5-P6	190cm
P6	17E16	残存	円 形	22×20cm	U字状	81cm	2.57m	P6-P7	170cm
P7	17E11・16	残存	楕円形	41×28cm	U字状	70cm	2.59m	P7-P2	250cm
P2	17E12	残存	円 形	34×34cm	U字状	51cm	3.30m	P2-P4	280cm

古代柱穴列・ピット

構成ピット	位 置	柱	平面形	平面規模	断面形	深 さ	底面標高	ピット間隔	
SA5P1	14E17	残存	円形	30×28cm	U字状	44cm	2.94m	P1-P2	240cm
SA5P2	14E22・14F2	残存	楕円形	38×28cm	U字状	40cm	3.01m	—	—

構成ピット	位 置	柱	平面形	平面規模	断面形	深 さ	底面標高	ピット間隔	
SA17P2	15C6・11	ナシ	楕円形	36×24cm	台形	14cm	3.10m	P2-P1	180cm
SA17P1	15C11・16	残存	円形	26×26cm	U字状	22cm	3.06m	—	—

構成ピット	位 置	柱	平面形	平面規模	断面形	深 さ	底面標高	ピット間隔	
P60	14E9	残存	楕円形	28×23cm	U字状	33cm	3.06m	—	—

構成ピット	位 置	柱	平面形	平面規模	断面形	深 さ	底面標高	ピット間隔	
P227	20D20	残存	円形	18×16cm	U字状	21cm	3.05m	—	—

井戸

遺構名	調査区	グリッド	平面形	断面形	規模（m）			主軸方位	覆土
					長軸（直径）	短軸	深さ		
SE14	南	12C21・22 12D1・2	円形	漏斗状	2.28（南北径）	—	1.34	—	12

土坑

遺構名	調査区	グリッド	平面形	断面形	規模（m）			主軸方位	覆土
					長軸（直径）	短軸	深さ		
SK6	南	13E5、14E1	円形	U字状	1.15	—	0.70	—	11
SK7	南	13E7・12	楕円形	U字状（南北） 漏斗状（東西）	1.2以上	1.15	0.60	N9°W	8
SK24	北	19E18	円形	弧状	0.72	—	0.15	—	1
SK25	北	19E15、20E11	円形	台形状	0.98～1.03	—	0.45	—	3
SK26	北	20D16・17	楕円形	弧状	1.00	0.72	0.19	N20°W	2
SK27	北	20D19	楕円形	漏斗状	0.65	0.50	0.46	N42°E	2
SK28	北	20A23、20B3	円形	箱状	1.04	—	0.45	—	6
SK30	北	19E20	円形	弧状	0.50	—	0.14	—	1
SK31	北	21D22	円形	半円状	0.58	—	0.21	—	4
SK32	北	21D23	楕円形	台形状	0.83	0.69	0.22	N39°E	2
SK33	北	20D25・21E5	楕円形	U字状	0.63	0.53	0.40	N80°E	2

土坑

遺構名	調査区	グリッド	平面形	断面形	規模（m）			主軸方位	覆土
					長軸（直径）	短軸	深さ		
SK36	北	21C17	楕円形	箱状（北半） 漏斗状（南半）	0.88	0.62	0.44	N64°E	4
SK39	北	20E14	楕円形	弧状	0.33	0.22	0.10	N94°W	2
SK42	北	23D10・15	七角形	箱状	1.49	1.32	0.64	N45°W	3
SK44	北	24B14・19	円形	台形状	0.84	—	0.45	—	4
SK45	北	24B15、25B11	楕円形	弧状	0.96	0.61	0.12	N29°W	1
SK46	北	24B15、25B6・11	（楕円形）	弧状	1.2以上	0.52以上	0.10	—	1
SK47	北	23B21	楕円形	箱状	0.72	0.58	0.45	N64°W	3
SK48	北	19C19	円形	箱状	0.32	—	0.20	—	2
SK49	北	19C23・24、 19D3・4	不定形	階段状	1.64（南北）	0.84（東西） 以上	0.36	—	1
SK51	北	16E2・7	楕円形	台形状	0.89	0.65	0.10	N37°W	2
SK52	北	23E11	円形	箱状	0.37～0.44	—	0.33	—	2
SK56	北	23E11・16	楕円形	台形状	1.11	0.76	0.30	N28°E	4

溝

遺構名	調査区	グリッド	形態	断面形	規模（m）			主軸方位	覆土
					検出長	幅	深さ		
SD1	南	5～7E、7・8D	直線的	台形状	（39.0）	0.36～1.06	0.16～0.27	N12°W	1～3
SD2	南	7C～F、8B～D、 9B、10A・B	蛇行	弧状	（59.4）	0.69～2.20	0.05～0.30	N20～77°W	1～5
SD3	南北	7E～F、8C～E、 9C、10～17B、 10C、17A	弧状	台形状・半円 状・弧状	（119.5）	0.56～2.38	0.13～0.38	N43°W～ N16°E	2～7
SD8	南	8・9B、8C、9A	直線的	弧状	（17.3）	0.48～0.62	0.17～0.20	N24°W	2
SD9	南	7A～C、8B・C	緩い蛇行	弧状	（12.37）	0.42～0.84	0.12～0.15	N82°W	1
SD10	南北	13・14C、14～ 16B	緩い蛇行	弧状	（23.51）	0.30～0.53	0.05～0.11	N5°W～ N13.5°E	1
SD11	北	16C・D、17D	直線的	弧状～半円状	17.7	0.15～0.29	0.03～0.12	N68°E	1
SD11	北	15C	直線的	弧状	（2.65）	0.15～0.20	0.06～0.08	N10°W	1
SD12	北	16・17E、17F	直線的	弧状	4.15	0.24～0.30	0.02～0.07	N88°W	1
SD19	北	15C、16A～C	直線的	弧状	（6.65）	1.04～1.78	0.11～0.24	N60°W	3
SD20	北	20C	直線的	弧状	3.04	0.18～0.26	0.06～0.07	N68°W	1
SD21	北	19C	直線的	弧状	3.0	0.29～0.40	0.04～0.09	N75°W	1
SD34	北	20E	直線的	半円状	0.78	0.23	0.16	N28°W	1
SD35	北	20E	（直線的）	W字状（中央） ・弧状（東）	（1.43）	0.37～0.47	0.04	N81°W	1
SD43	北	23D、24B～D	弧状	弧状・D字状	（20.3）	0.27～0.86	0.04～0.06	N37°～60°W	1

性格不明遺構

遺構名	調査区	グリッド	平面形	断面形	規模（m）			主軸方位	覆土
					長軸（直径）	短軸（短径）	深さ		
SX22	北	19・20C	円形状	弧状	5.8	—	0.29	N1°W	15
SX29	北	20・21F	不定形	弧状	3.7以上	1.0以上	0.17	—	3
SX38	北	22E	楕円状	弧状	0.95	0.75	0.10	N6°W	1
SX54	北	22E	楕円状	弧状	0.80	0.64	0.05	N22°E	1
SX55	北	19B・C	楕円状	弧状	4.78	3.76	0.75	N89°E	14

自然流路

遺構名	調査区	グリッド	形態	断面形	規模（m）			主軸方位	覆土
					長軸（直径）	短軸	深さ		
SR1	北	・16～18A・B・C ・17・18D ・18・19E ・19F	直線的	弧状	48.5	3.0～23.2	0.17～0.39	—	3
SR2	北	・20・21A・B ・20～22C ・21～24D ・23・24E・F	不定形	弧状	52.5	6.5～7.0	0.5～0.7	—	26

土器観察表（1）

報告No.	出土位置	種別	器種	残存部位	残存率(x/36)	法量（cm）			胎土	色調		焼成	調整		備考
						口径	底径	高さ		外面	内面		外面	内面	
1	20E8	弥生土器	甕	口縁～頸部	5	＜25.9＞	—	—	やや密・石英、長石	褐灰	褐灰		口唇部：沈線（斜）、縄文RL（斜）、沈線（横・斜）	ナデ	
2	20E7	弥生土器	壺 or 甕	胴部	—	—	—	(10.8)	密・石英、長石	黒	灰黄褐		縄文RL（縦）、沈線（「U」字形・横位・斜）	ナデ	筒形
3	20E7	弥生土器	甕	頸部	—	—	—	—	やや密・長石	褐灰	にぶい黄橙		櫛描文（横位）	ナデ	
4	20E6・7	弥生土器	甕	底部	—	—	＜8.0＞	—	密・石英、長石	灰黄褐	にぶい黄橙		縄文RL（縦位）	ナデ	
5	20E7	弥生土器	壺 or 甕	胴部	—	—	—	—	石英、長石	にぶい黄橙	灰黄褐		縄文RL（縦位）、沈線（山形・蛇行垂下）		
6	20E7	弥生土器	壺 or 甕	胴部	—	—	—	—	石英、長石	にぶい黄橙	灰黄褐		縄文RL（縦位）、沈線（横位・山形？・蛇行垂下）		
7	20D21 20E1	弥生土器	甕	胴部～底部	—	—	5.8	(19.9)	密・石英、長石	にぶい黄橙	灰黄褐		縄文LR（横位）、沈線（横・弧状）	ハケ→ナデ	
8	21E5 22E1	弥生土器	甕	口縁～頸部	5	—	—	—	やや密・石英、長石	灰黄褐	褐灰		口唇部：突起、キザミ、縄文LR 胴部：縄文LR（横位）	ナデ	
9	22E2・3	弥生土器	甕	胴部	—	—	—	—	石英、長石	灰黄褐	明褐灰		縄文LR（横位）		外面にススス、内面に炭化物付着
10	22E1・6	弥生土器	甕	口縁～底部	14	＜10.6＞	＜7.2＞	(20.4)	密・石英、長石、雲母（微）	にぶい黄橙	淡黄		口唇部：突起、縄文LR 胴部：縄文LR（横位）	ナデ	図上復元胴部下半に炭化物付着
11	21D20 22D16・21	弥生土器	甕	口縁部・胴～底部	20	＜15.1＞	7.7	(25.3)	やや密・石英、長石、雲母	にぶい黄橙	灰黄褐		口縁部：縄文LR（斜） 胴部：縄文LR（横位）	ハケメ（横・斜）	口縁部：図上復元
12	21E10 22D21	弥生土器	甕	口縁～胴部	7	＜29.4＞	—	—	やや粗・石英、長石、雲母	にぶい黄橙	にぶい黄橙		口唇部：突起、キザミ、胴部：縄文LR（横位）、沈線（横位・斜）、刺突	ナデ・ハケ（斜）	
13	21D19	弥生土器	甕	胴部～底部	—	—	7.2	(23.8)	やや密・石英、長石	灰白	灰黄褐		縄文LR（斜）		
14	21E5	弥生土器	甕	胴部	—	—	—	—	石英、長石	にぶい黄橙	灰白		縄文RL（縦）		内外面に炭化物付着
15	SK53	弥生土器	甕 or 鉢	胴部	—	—	—	(8.6)	やや粗・石英、長石	灰黄褐	にぶい黄橙		縄文LR（斜）	ハケ（横・斜）、ナデ	外面にススス付着
16	22D21	弥生土器	甕	口縁部	5	—	—	—	粗・石英、長石、雲母	にぶい黄橙	灰黄褐		縄文LR（横位）	ハケ	外面にススス付着
17	21E10	弥生土器	甕	口縁～頸部	—	—	—	—	やや粗・石英、長石	灰白	にぶい黄橙		縄文LR（斜）		
18	21E9	弥生土器	甕	口縁部	3	—	—	—	やや粗・石英、長石	灰黄褐	にぶい黄橙		ハケ（横位）	ハケ（横位）	
19	21E5	弥生土器	甕	胴部	—	—	—	—	密・石英、長石、雲母	褐灰	灰黄褐		縄文L（横位）	ナデ	
20	7B6・7・11・12	弥生土器	甕	口縁～底部	—	＜30.7＞	7.5	28.7	やや密・石英、長石	にぶい黄橙	にぶい黄橙		縄文LR（横位・斜）	ナデ	外面にススス付着
21	7C15	弥生土器	鉢	口縁～底部	30	＜9.6＞	—	6.6	粗・石英、長石、雲母	にぶい黄橙	灰黄褐		ヘラ描き沈線文連続刺突文	口縁部内面：ハケ→撚糸文 体部：ハケ→ナデ	内外面にススス付着、底部は丸底に近い

土器観察表（2）

報告No.	出土位置	種別	器種	残存部位	残存率(x/36)	法量（cm）			胎土	色調		焼成	調整		備考
						口径	底径	高さ		外面	内面		外面	内面	
33	SK6	土師器	椀	底部	6	—	＜4.8＞	—	密・0.5mm以下の石英、長石をやや多く含む	にぶい橙	橙	良好	不明	不明	
34	SK27	土師器	椀	口縁～底部	12	＜12.4＞	5.4	4.2	粗・1mm以下の石英、長石を多く含む	浅黄橙	橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	
35	SK28	土師器	椀	口縁～底部	6	＜11.8＞	＜6.4＞	3.1	密・長石、黒粒の微細粒を含む	灰	にぶい褐	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	図上復元
36	SK28	土師器	甕	口縁～体部	—	＜20.1＞	—	—	やや密・1mm以下の石英、長石を多く含む	橙	にぶい黄褐	良好	回転ナデ	回転ナデ	
37	SK28	土師器	鍋	口縁～体部	2	＜33.0＞	—	—	やや密・1mm以下の石英、長石を多く含む	橙	にぶい黄褐	良好	板ナデ	回転ナデ	
38	SK30	土師器	椀	底部	36	—	＜5.6＞	—	やや密・石英、長石の微細粒を多く含む	赤橙	橙	良好	底部回転糸切り	不明	
39	SK30	土師器	鍋	口縁～体部	3	＜26.8＞	—	(4.6)	やや密・1mm以下の石英、長石を含む	にぶい褐	浅黄橙	良好	ナデ、板ナデ	ナデ、板ナデ	
40	SK30	土師器	鍋	体部	—	—	—	(4.3)	やや粗・長石、雲母の微細粒を含む	黄橙	黄橙	良	ハケ、タタキ	ハケ	
41	SK30	土師器	鍋	体部	—	—	—	—	密・2mm以下の石英、長石、雲母を少量含む	黒	浅黄橙	良好	ナデ、タタキ	ナデ、平行文	
42	SK31	土師器	甕	体部	—	—	—	—	粗・2mm以下の石英を多く含む	赤橙	にぶい黄橙	良好	ハケ	ハケ	
43	SK31	土師器	甕	底部	6	—	＜12.6＞	—	やや粗・0.5mm以下の長石、石英を多く含む	橙	にぶい黄橙	良好	指頭圧	ナデ	底外面に木葉痕
44	SK39	土師器	甕	体部	2	—	—	—	やや粗・1mm以下の長石、石英を含む	暗褐	橙	良好	カキ目、タタキ	不明	
45	SK39	土師器	鍋	口縁～体部	3	＜29.0＞	—	—	粗・0.5mm以下の石英、長石を多く含む	にぶい褐	灰黄褐	良好	カキ目	カキ目	
46	SK39	須恵器	甕	体部	9	—	—	—	粗・長石の微細粒を多く含む	暗青灰	青灰	良好	タタキ	平行文	
47	SK48	土師器	甕	体部	—	—	—	—	やや粗・1mm以下の石英、長石をやや多く含む	赤	赤	良好	タタキ、カキ目	不明	二次焼成による変色
48	SK52	土師器	甕	口縁～頸部	—	＜23.6＞	—	—	やや粗・1mm以下の長石を多く含む	灰	浅黄橙	良	ヘラミガキ	不明	
49	SK47	土師器	鍋	口縁部	—	＜25.1＞	—	—	やや密・0.5mm以下の石英、雲母を含む	浅黄橙	にぶい黄橙	良	不明	不明	
50	SK56 SX38	土師器	甕	体部～底部	36	—	9.0	(9.2)	やや粗・1mm以下の石英を多く含む	浅黄橙	灰白	良好	ハケ、指頭圧	ハケ、指頭圧	底外面に砂痕
51	SK56	土師器	甕	体部	—	—	—	—	粗・2mm以下の石英、長石を多く含む	淡橙	にぶい黄橙	良好	ハケ	ハケ	
52	SD1	須恵器	有台杯	口縁～底部	30	12.6	8.4	4.6	やや粗・1mm以下の石英、長石を多く含む	灰白	灰白	不良	回転ナデ	回転ナデ	
53	SD2	須恵器	無台杯	口縁～底部	12	＜11.6＞	7.6	2.8	やや粗・0.5mm以下の石英、長石を含む	口縁部：オリーブ灰 体部：灰	口縁部：灰 体部：灰	やや不良	回転ナデ 底部回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	重ね焼き
54	SD2	須恵器	無台杯	口縁～底部	18	＜11.7＞	＜8.0＞	3.0	やや粗・1mm以下の石英、長石を多く含む	灰白	灰白	不良	回転ナデ 底部回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ 渦巻状のロクロ目	
55	SD2	須恵器	無台杯	口縁～底部	9	＜11.5＞	＜7.1＞	2.9	粗・0.5mm以下の石英、長石を多く含む	口縁部：暗青灰 体部：明青灰	明青灰	良	回転ナデ、底部回転ヘラ切り	回転ナデ	重ね焼き
56	SD2	須恵器	無台杯	口縁～底部	12	＜13.4＞	＜9.4＞	3.3	粗・1mm以下の石英、長石、黒粒を多く含む	口縁部：灰 体部：灰白	灰白	良	回転ナデ 底部回転ヘラ切り→回転ナデ	回転ナデ	墨書重ね焼き

土器観察表（3）

報告No.	出土位置	種別	器種	残存部位	残存率(x/36)	法量（cm）			胎土	色調		焼成	調整		備考
						口径	底径	高さ		外面	内面		外面	内面	
57	SD2	土師器	椀	底部	9	—	＜6.6＞	—	密・1mm以下の長石をごく少量含む	浅黄橙	浅黄橙	良好	回転ナデ	不明	
58	SD3	須恵器	有台杯	口縁～底部	24	＜14.3＞	＜8.2＞	3.9	密・1mm以下の長石、黒粒を多く含む	口縁部：褐灰 体部：灰白	灰白	不良	回転ナデ 底部回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	折縁重ね焼き
59	SD3	須恵器	蓋 （転用硯）	口縁～天井部	12	＜15.0＞	—	3.5	粗・1mm以下の長石を非常に多く含む	口縁部：暗紫灰 天井部：にぶい赤褐	にぶい赤褐	不良	天井部ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	重ね焼き口縁部のみ還元焔焼成天井部外面中心にボタン状のツマミ
60	SD3	須恵器	有台杯	口縁～底部	18	＜13.7＞	＜8.2＞	6.4	粗・0.5mm以下の長石を多く含む	にぶい赤褐	明赤褐	不良	回転ナデ	回転ナデ	酸化焔焼成
61	SD3	須恵器	無台杯	口縁～底部	9	＜11.5＞	＜7.7＞	3.8	やや粗・0.5mm以下の長石を多く含む	明青灰	灰白	良	回転ナデ、底部回転ヘラ切り	回転ナデ	
62	SD3	須恵器	無台杯	口縁～体部	4	＜11.9＞	—	(5.2)	やや粗・長石の微細粒を多く含む	灰	灰	良好	回転ナデ	回転ナデ	
63	SD3	須恵器	無台杯	口縁～底部	6	＜12.1＞	＜6.6＞	3.2	やや密・3mm以下の長石を含む	口縁部：灰 体部：明青灰	口縁部：灰 体部：灰	良	回転ナデ、底部回転ヘラ切り	回転ナデ	重ね焼き
64	SD3	須恵器	無台杯	口縁～底部	24	＜12.3＞	8.8	3.7	やや粗・0.5mm以下の長石を多く含む	口縁部：橙 体部：青灰	口縁部：橙 体部：青灰	良好	回転ナデ 底部回転ヘラ切り→未調整	回転ナデ	重ね焼き口縁部のみ酸化焔焼成
65	SD3	須恵器	無台杯	口縁～底部	18	＜13.2＞	＜9.2＞	2.6	粗・1mm以下の長石を多く含む	口縁部：明赤褐 体部：青灰	口縁部：明赤褐 体部：青灰	良好	回転ナデ 底部回転ヘラ切り→未調整	回転ナデ	重ね焼き口縁部のみ酸化焔焼成
66	SD3	須恵器	無台杯	口縁～底部	7	＜12.2＞	＜7.0＞	2.8	やや粗・長石の微細粒を多く含む	灰	灰白	良好	回転ナデ 底部回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	重ね焼き
67	SD3	須恵器	無台杯	口縁～底部	30	12.0	5.8	3.7	粗・0.5mm以下の石英、長石、黒粒をやや多く含む	口縁部：暗青灰 体部：にぶい赤褐	口縁部：暗青灰 体部：明赤褐	不良	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	重ね焼き口縁部のみ還元焔焼成
68	SD3	須恵器	無台杯	口縁～体部	6	13.2	—	(2.8)	やや粗・長石の微細粒を多く含む	青灰	青灰	良好	回転ナデ	回転ナデ	重ね焼き
69	SD3	須恵器	無台杯	口縁～底部	18	＜12.7＞	7.2	3.2	やや粗・石英、長石の微細粒やや多く含む	灰	青灰	良好	回転ナデ 底部回転ヘラ切り→未調整	回転ナデ	底面に「大」の墨書
70	SD3	須恵器	甕	頸部～体部	9	—	—	(37.7)	粗・0.5mm以下の石英、長石を非常に多く含む	頸部：暗青灰 体部：青灰	頸部：暗青灰 体部：青灰	良好	頸部：回転ナデ 体部：格子タタキ	頸部：回転ナデ 体部：青海波状文	頸部にヘラ記号
71	SD3	須恵器	長胴壺	口縁～体部	9	＜11.6＞	—	(22.6)	やや粗・2mm以下の長石を多く含む	口縁部：暗青灰 体部：青灰	暗青灰	良好	回転ナデ、タタキ、ヘラケズリ	回転ナデ、 青海波状文（弧）	
72	SD3	須恵器	瓶	肩部～底部	12	—	＜5.2＞	(8.9)	密・石英、長石、黒粒の微細粒を多く含む	灰	オリーブ灰	良好	回転ナデ 底部回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	
73	SD3	土師器	椀	体部～底部	18	—	5.3	—	密・長石、雲母、海綿骨針の微細粒を含む	灰白	灰黄	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	墨書
74	SD3	土師器	椀	体部～底部	36	—	6.3	(3.0)	密・1mm以下の石英、長石を含む	橙	にぶい黄橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	
75	SD3	土師器	椀	口縁～底部	7	＜12.6＞	＜5.5＞	3.0	やや密・1mm以下の長石を含む	灰黄	灰白	良	回転ナデ	回転ナデ	
76	SD3	土師器	椀	口縁～体部	5	＜11.6＞	—	(3.9)	密・0.5mm以下の雲母、黒粒を多く含む	灰黄	灰黄	良好	回転ナデ	回転ナデ	墨書
77	SD3	土師器	椀	口縁～底部	36	11.9	4.8	3.5	密・0.5mm以下の長石、黒粒を少量含む	口縁部：赤橙 体部：黄灰	口縁部：赤橙 体部：明褐	良好	回転ナデ、回転糸切り	回転ナデ	重ね焼き
78	SD3	土師器	椀	口縁～底部	36	12.1	4.9	3.8	密・雲母の微細粒が非常に多い	灰黄	灰白	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	
79	SD3	土師器	椀	口縁～底部	9	＜13.3＞	＜6.3＞	4.1	やや密・雲母の微細粒が非常に多い	灰白	灰黄	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	不明	
80	SD3	土師器	椀	口縁～体部	3	＜13.2＞	—	(4.4)	やや密・0.5mm以下の雲母を多く含む	灰黄	灰黄	良好	回転ナデ	回転ナデ	墨書

土器観察表（4）

報告No.	出土位置	種別	器種	残存部位	残存率(x/36)	法量（cm）			胎土	色調		焼成	調整		備考
						口径	底径	高さ		外面	内面		外面	内面	
81	SD3	土師器	椀	口縁～底部	18	＜12.1＞	＜5.2＞	3.7	やや密・石英、長石、雲母、海綿骨針の微細粒を少量含む	浅黄橙	にぶい橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	不明	
82	SD3	土師器	椀	口縁～底部	12	＜13.0＞	＜4.6＞	3.8	やや密・0.5mm以下の長石をごく少量含む	口縁部：橙 体部：浅黄	にぶい黄橙	良好	回転ナデ、回転糸切り	回転ナデ	重ね焼き
83	SD3	土師器	椀	口縁～底部	12	＜12.2＞	＜5.6＞	4.0	密・海綿骨針をごく少量含む	浅黄橙	浅黄橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	不明	
84	SD3	土師器	椀	口縁～底部	18	＜12.4＞	＜4.4＞	4.0	密・0.5mm以下の石英、長石をごく少量含む	灰黄	にぶい橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	
85	SD3	土師器	椀	口縁～底部	9	＜13.6＞	5.0	3.5	密・石英、長石、黒粒の微細粒を少量含む	にぶい橙	橙	良好	底部回転糸切り	不明	
86	SD3	土師器	椀	口縁～底部	18	＜12.0＞	＜4.9＞	3.9	密・0.5mm以下の石英、長石、雲母を少量含む	浅黄橙	浅黄橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	
87	SD3	土師器	椀	口縁～底部	18	＜12.3＞	4.4	4.0	密・2mm以下の石英、長石、海綿骨針を少量含む	浅黄橙	浅黄橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	不明	墨書
88	SD3	土師器	椀	口縁～底部	9	＜11.6＞	5.4	3.7	密・石英、海綿骨針の微細粒をごく少量含む	浅黄橙	にぶい黄橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	
89	SD3	土師器	椀	口縁～底部	30	＜11.7＞	6.0	3.4	密・石英、長石の微細粒を少量含む	にぶい褐	にぶい橙	良	不明、底部回転糸切り	不明	
90	SD3	土師器	椀	口縁～底部	18	＜12.6＞	5.2	3.6	密・石英、長石、海綿骨針の微細粒を少量含む	浅黄橙	にぶい橙	良好	回転ナデ	回転ナデ	
91	SD3	土師器	椀	口縁～底部	9	＜13.4＞	＜6.0＞	4.0	密・石英、海綿骨針の微細粒をごく少量含む	浅黄橙	にぶい黄橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	
92	SD3	土師器	椀	口縁～底部	24	＜12.4＞	＜5.0＞	3.8	密・石英、長石の微細粒を少量含む	口縁部：橙 体部：淡黄	口縁部：橙 体部：灰黄	良好	底部回転糸切り	不明	
93	SD3	土師器	椀	口縁～底部	18	＜11.7＞	6.1	3.0	密・2mm以下の石英、長石を少量含む	浅黄橙	にぶい黄橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	
94	SD3	土師器	椀	口縁～底部	14	13.1	4.7	3.5	骨針を少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	底部回転糸切り	回転ナデ	
95	SD3	土師器	椀	口縁～底部	24	＜12.8＞	＜5.6＞	3.6	密・石英、長石、砂岩、海綿骨針の微細粒を少量含む	口縁部：浅黄橙 体部：オリーブ黒	口縁部：浅黄橙 体部：黄灰	不良	回転ナデ	不明	重ね焼き
96	SD3	土師器	椀	口縁～底部	18	＜12.2＞	5.5	3.9	密・石英、長石、海綿骨針の微細粒をごく少量含む	浅黄橙	浅黄橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	墨書
97	SD3	土師器	椀	口縁～底部	30	＜11.5＞	＜4.6＞	4.3	密・長石の微細粒をごく少量含む	浅黄橙	浅黄橙	良好	底部回転糸切り	不明	
98	SD3	土師器	椀	口縁～底部	33	12.1	4.8	3.9	やや密・1mm以下の石英、長石、海綿骨針をやや多く含む	口縁部：浅黄橙 体部：オリーブ黒	口縁部：にぶい橙 体部：にぶい橙	不良	底部回転糸切り	不明	重ね焼き
99	SD3	土師器	椀	口縁～底部	18	＜11.5＞	＜4.0＞	4.1	密・石英、海綿骨針の微細粒を少量含む	灰白	浅黄橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	
100	SD3	土師器	椀	口縁～底部	30	＜12.7＞	4.8	4.6	密・0.5mm以下の石英、長石を多く含む	黒	灰黄	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ？	重ね焼き
101	SD3	土師器	椀	体部	—	—	—	—	やや密・海綿骨針を微量含む	灰黄	にぶい黄橙	良好	回転ナデ	回転ナデ	墨書
102	SD3	土師器	椀	体部	—	—	—	—	やや密・海綿骨針を微量含む	にぶい黄橙	灰黄	良好	不明	不明	墨書
103	SD3	土師器	椀	体部	—	—	—	—	やや粗・黒粒を微量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	回転ナデ	不明	墨書
104	SD3	土師器	椀	体部	—	—	—	—	やや密・雲母の微細粒を少量含む	灰黄	にぶい黄橙	良好	回転ナデ	回転ナデ	墨書

土器観察表（5）

報告No.	出土位置	種別	器種	残存部位	残存率(x/36)	法量（cm）			胎土	色調		焼成	調整		備考
						口径	底径	高さ		外面	内面		外面	内面	
105	SD3	土師器	椀	口縁部	—	—	—	—	やや密・長石、海面骨針を微量含む	灰黄	灰黄	良好	回転ナデ	回転ナデ	墨書
106	SD3	土師器	椀	体部	—	—	—	—	やや密・海綿骨針を微量含む	灰黄	にぶい黄橙	良好	回転ナデ	不明	墨書
107	SD3	土師器	椀	口縁部	—	—	—	—	やや密・黒粒を微量含む	灰黄	灰黄	良好	不明	不明	墨書
108	SD3	土師器	椀	口縁～体部	—	＜14.0＞	—	—	やや密・海綿骨針を微量含む	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	回転ナデ	回転ナデ	墨書
109	SD3	黒色土器	椀	口縁～底部	18	14.5	5.5	5.1	密・長石、雲母の微細粒をごく少量含む	灰白	黒	良好	回転ナデ、回転糸切り、ヘラミガキ	ヘラミガキ	
110	SD3	黒色土器	椀	口縁～底部	12	＜13.6＞	＜5.4＞	5.3	やや密・1mm以下の長石を含む	口縁部：黒 体部：にぶい黄橙	黒	良	回転ナデ	回転ナデ、ヘラミガキ	
111	SD3	黒色土器	椀	口縁～底部	14	＜12.9＞	5.5	4.7	やや密・長石、海綿骨針を少量含む	口縁部：黒 体部：灰黄	黒	良好	回転ナデ、回転糸切り	ヘラミガキ	
112	SD3	土師器	盤	口縁部	—	—	—	—	やや粗・1mm以下の石英、長石を多く含む	灰黄	黄灰	良	指頭圧	回転ナデ	
113	SD3	土師器	甕	口縁～底部	27	＜13.6＞	7.2	11.2	粗・石英、長石、雲母の微細粒を多く含む	灰黄褐	灰黄褐	良好	回転ナデ、ハケ、底部回転糸切り	回転ナデ、ハケ？	図上復元
114	SD3	土師器	甕	口縁～体部	6	＜12.0＞	—	(11.2)	密・長石、海綿骨針の微細粒をごく少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	回転ナデ、板ナデ	回転ナデ	図上復元
115	SD3	土師器	甕	口縁～体部	5	＜20.2＞	—	(14.1)	粗・1mm以下の石英、長石を多く含む	灰黄褐	にぶい黄橙	良好	カキ目、タタキ	青海波状文	
116	SD3	須恵器	甕	体部	12	—	—	—	粗・3mm以下の長石を含む	灰黄褐	灰黄	不良	タタキ	青海波状文	二次焼成による変色
122	SD8	須恵器	無台杯	口縁～体部	—	＜12.4＞	—	(2.6)	やや粗・0.5mm以下の黒粒を少量含む	灰	灰白	良	回転ナデ	回転ナデ	
123	SD2 SD9	須恵器	無台杯 (転用硯)	口縁～底部	32	12	7.3	2.9	密・2mm以下の石英、長石、海綿骨針、黒粒を多く含む	口縁部：灰 体部：灰白	灰白	やや不良	回転ナデ 底部回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	重ね焼き
124	SD19	須恵器	無台杯	口縁～底部	3	＜13.0＞	＜8.8＞	2.7	やや粗・長石の微細粒を多く含む	灰	暗青灰	良好	回転ナデ 底部回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	器面に黒斑あり
125	SD19	土師器	椀	底部	18	—	4.5	—	密・砂粒をほとんど含まず	浅黄橙	橙	良好	不明、底部回転糸切り	不明	
126	SD19	土師器	甕	体部	9	—	—	—	やや密・0.5mm以下の石英、長石、雲母を多く含む	褐灰	灰黄褐	良好	カキ目	カキ目	外面スス付着
127	SD35	須恵器	蓋	口縁部	—	＜16.6＞	—	—	やや粗・砂粒をほとんど含まず	青灰	青灰	良好	回転ナデ	回転ナデ	
128	SD43	須恵器	横瓶？	体部	—	—	—	—	粗・1mm以下の石英、長石を少量含む	明青灰	青灰	良好	タタキ→カキ目	指頭圧、ナデ	
129	SX38	灰釉陶器	皿	口縁部	—	＜13.6＞	—	—	やや粗・長石の微細粒を少量含む	オリーブ灰	灰オリーブ	良好	不明	口縁部内面に段	
130	SX38	土師器	甕	口縁～底部	9	＜23.3＞	8.0	＜20.7＞	粗・3mm以下の石英、長石を多く含む	口縁～体部：暗灰黄 底部：橙	灰黄褐	良	回転ナデ、ハケ、指頭圧	回転ナデ、ハケ、ナデ	図上復元 二次焼成による変色
131	SX38	土師器	甕	口縁～体部	—	＜20.0＞	—	—	やや密・2mm以下の石英、長石を多く含む	橙	明赤褐	良好	ハケ	ハケ	図上復元
132	SR1	須恵器	有台杯	口縁～底部	24	＜17.8＞	＜13.4＞	4.6	密・長石の微細粒を含む	黄灰	灰白	良	回転ナデ 回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	
133	SR1	須恵器	有台杯	口縁～底部	12	＜15.3＞	＜11.4＞	4.3	やや密・長石の微細粒をごく少量含む	明青灰	明青灰	良好	回転ナデ 回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	

土器観察表（6）

報告No.	出土位置	種別	器種	残存部位	残存率(x/36)	法量（cm）			胎土	色調		焼成	調整		備考
						口径	底径	高さ		外面	内面		外面	内面	
134	SR1	須恵器	有台杯	口縁～底部	32	13.3	9.5	4.3	粗・1mm以下の長石を多く含む	青灰	灰	良	回転ナデ、ヘラ切り未調整	回転ナデ	
135	SR1	須恵器	無台杯	口縁～底部	12	＜12.4＞	6.1	3.4	やや粗・長石の微細粒を多く含む	青灰	青灰	良好	回転ナデ 回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	重ね焼き 器面に黒斑あり
136	SR1	須恵器	無台杯（転用硯）	口縁～底部	12	＜12.0＞	＜7.2＞	2.8	密・長石、黒粒の微細粒をごく少量含む	灰	灰	良好	回転ナデ 回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	重ね焼き
137	SR1	須恵器	無台杯	口縁～体部	12	＜13.1＞	—	(3.3)	やや密・石英、長石の微細粒を多く含む	青灰	青灰	良好	回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ	重ね焼き
138	SR1	須恵器	無台杯	口縁部	5	＜13.0＞	—	—	やや密・1mm以下の石英、長石を少量含む	明青灰	青灰	良好	回転ナデ	回転ナデ	重ね焼き
139	SR1	須恵器	甕	口縁～体部	18	＜16.2＞	—	—	密・0.5mm以下の石英、長石を少量含む	灰白	灰白	やや不良	回転ナデ、タタキ後カキ目	回転ナデ、青海波状文	
140	SR1	須恵器	壺（瓶）か横瓶	肩部	—	—	—	—	粗・長石の微細粒を含む	灰	青灰	良好	タタキ→ナデ	青海波状文	
141	SR1	須恵器	双耳壺	体部	12	—	—	(14.7)	やや粗・0.5mm以下の長石を含む	灰	明青灰	良好	回転ナデ、沈線（2条）	回転ナデ、カキ目	把手欠損、頸部粘土充填 外面自然釉：オリーブ灰
142	SR1	須恵器	壺（瓶）	体下部	2	—	—	—	粗・0.5mm以下の石英を多く含む	黒	にぶい黄褐	良好	ヘラケズリ、ナデ	回転ナデ	
143	SR1	須恵器	壺（瓶）	底部	6	—	＜10.6＞	(6.7)	粗・長石の微細粒をごく少量含む	暗青灰	青灰	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ	
144	SR1	須恵器	壺（瓶）	底部	18	—	＜10.8＞	—	粗・石英、長石の微細粒を少量含む	明青灰	明青灰	良好	ヘラケズリ→ナデ	ナデ、指頭圧	
145	SR1	須恵器	甕	口縁部	—	＜30.7＞	—	—	やや粗・0.5mm以下の長石を多く含む	暗青灰	青灰	良好	回転ナデ、波状文、カキ目	回転ナデ、カキ目	
146	SR1	土師器	鍋	口縁～体部	2	＜27.1＞	—	—	密・2mm以下の石英、長石を少量含む	にぶい黄褐	橙	良好	回転ナデ	回転ナデ	
147	SR1	黒色土器	椀	口縁～体部	6	＜16.8＞	—	(4.4)	やや密・石英の微細粒をごく少量含む	浅黄	黒	良好	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
148	SR1	土師器	甕	口縁部	—	＜16.8＞	—	—	粗・石英、長石、雲母を含む	にぶい褐	褐灰	良	ヨコナデ	不明	
149	SR1	土師器	甕	口縁部	—	＜21.4＞	—	—	密・2mm以下の石英、雲母を多く含む	浅黄橙	にぶい黄橙	良好	回転ナデ、カキ目	回転ナデ	
150	SR1	土師器	鍋	口縁～体部	—	＜35.4＞	—	—	粗・1mm以下の石英、長石を含む	浅黄橙	灰黄褐	良好	回転ヘラケズリ→ナデ	回転ナデ	
152	SR2	須恵器	有台杯	口縁～底部	18	＜15.8＞	＜11.2＞	4.8	やや密・0.5mm以下の石英、長石を多く含む	暗緑灰	青灰	良好	回転ナデ 底部回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	
153	SR2	須恵器	有台杯	口縁～底部	6	＜14.6＞	＜10.2＞	5.0	やや密・長石、黒色粒の微細粒を多く含む	青灰	灰	良好	回転ナデ	回転ナデ	
154	SR2	須恵器	有台杯	口縁～底部	5	＜14.9＞	＜10.5＞	3.6	やや粗・0.5mm以下の長石を多く含む	灰	黄灰	良好	回転ナデ 底部回転ヘラケズリ→ナデ	回転ナデ	
155	SR2	須恵器	有台杯（転用硯）	底部	12	—	＜10.6＞	(3.0)	密・石英、長石の微細粒を含む	暗青灰	青灰	良好	回転ナデ 底部回転ヘラケズリ→未調整	回転ナデ	
156	SR2	須恵器	有台杯	底部	12	—	＜9.1＞	—	やや粗・長石の微細粒をごく少量含む	青灰	明青灰	良好	回転ナデ	回転ナデ	
157	SR2	須恵器	蓋	口縁部～天井部	28	＜15.1＞	—	3.3	密・1mm以下の石英、長石をやや多く含む	青灰	灰	良	回転ナデ 天井部回転ヘラケズリ→ナデ	回転ナデ	天井部中央にツマミ
158	SR2	須恵器	蓋	口縁部～天井部	5	＜16.9＞	—	(2.6)	粗・長石の微細粒を多く含む	青灰	明青灰	良好	回転ナデ、天井部ヘラケズリ	回転ナデ	

土器観察表（7）

報告No.	出土位置	種別	器種	残存部位	残存率(x/36)	法量（cm）			胎土	色調		焼成	調整		備考
						口径	底径	高さ		外面	内面		外面	内面	
159	SR2	須恵器	有台杯（転用硯）	口縁～底部	27	＜15.8＞	11.3	5.1	粗・0.5mm以下の長石を多く含む	灰	灰	良	回転ナデ	回転ナデ、静止ナデ	
160	SR2	須恵器	坏	口縁～体部	—	＜15.4＞	—	(3.8)	やや粗・長石の微細粒を少量含む	青灰	明青灰	良好	回転ナデ	回転ナデ	底部欠損のため高台の有無不明
161	SR2	須恵器	無台杯	体部～底部	30	—	＜9.2＞	(3.7)	やや密・1mm以下の石英、長石を含む	にぶい赤褐	にぶい赤褐	不良	回転ナデ 底部回転ヘラ切り→ヘラナデ	回転ナデ	
162	SR2	須恵器	無台杯	口縁～底部	14	＜12.4＞	＜6.9＞	3.0	やや密・長石の微細粒を多く含む	灰	灰	良好	回転ナデ 底部回転ヘラケズリ→ナデ	回転ナデ	墨書
163	SR2	須恵器	無台杯	口縁～底部	12	＜13.8＞	＜8.4＞	3.5	やや密・長石の微細粒を多く含む	青灰	青灰	良好	回転ナデ 回転ヘラ切り→ヘラナデ	回転ナデ	
164	SR2	須恵器	無台杯	口縁～底部	9	＜12.4＞	＜7.4＞	2.9	密・長石の微細粒を多く含む	灰	青灰	良好	回転ナデ 底部回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	重ね焼き 器面に黒斑あり
165	SR2	須恵器	無台杯	口縁～体部	5	＜13.2＞	—	(2.8)	密・長石の微細粒を少量含む	青灰	青灰	良好	回転ナデ	回転ナデ	重ね焼き
166	SR2	須恵器	無台杯	口縁～底部	9	＜12.8＞	＜7.6＞	3.3	密・長石の微細粒を多く含む	灰	灰白	良好	回転ナデ 底部静止ヘラ切り→ヘラケズリ	回転ナデ	
167	SR2	須恵器	無台杯	底部	36	—	7.4	—	やや粗・長石の微細粒を多く含む	青灰	青灰	良好	回転ナデ 底部回転ヘラ切り→未調整	回転ナデ	
168	SR2	須恵器	無台杯	口縁～底部	12	＜12.3＞	＜7.4＞	2.8	やや粗・石英、長石の微細粒を含む	青灰	青灰	良好	回転ナデ 底部回転ヘラ切り→未調整	回転ナデ	
169	SR2	須恵器	無台杯	口縁～底部	24	11.6	6.5	2.9	やや粗・長石の微細粒を少量含む	青灰	青灰	良好	回転ナデ 底部回転ヘラ切り→未調整	回転ナデ	
170	SR2	須恵器	瓶	口縁～頸部	12	＜7.0＞	—	(4.6)	粗・長石の微細粒をやや多く含む	青黒	青黒	良好	回転ナデ	回転ナデ	
171	SR2 SK52 SX38	須恵器	横瓶	口縁～体部	5	—	—	(18.5)	やや粗・2mm以下の石英を少量含む	明青灰	紫灰	良好	回転ナデ、タタキ、カキ目	青海波状文	体部外面に須恵器片付着
172	SR2	須恵器	壺	肩部	—	—	—	—	粗・1mm以下の石英、長石を多く含む	明青灰	灰オリーブ	良好	回転ナデ、カキ目、ヘラケズリ 底部回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	内面に自然釉 204と同一個体
173	SR2	須恵器	短頸壺	頸部～肩部	6	—	—	—	粗・1mm以下の石英を多く含む	黄灰	明紫灰	良	タタキ→カキ目	カキ目	
174	SR1 SR2	須恵器	甕	口縁～底部	6	＜24.0＞	—	＜44.2＞	粗・2mm以下の石英、長石を多く含む	口縁部：褐灰 体部：青灰 底部：にぶい黄橙	口縁部：灰黄褐 体部：にぶい橙 底部：にぶい黄褐	やや不良	回転ナデ、タタキ、カキ目	回転ナデ、ナデ、ハケ、平行文	図上復元
175	SR2	土師器	椀	口縁～体部	5	＜19.2＞	—	(4.2)	粗・石英、長石の微細粒を多く含む	褐	暗褐	良好	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
176	SR2	土師器	椀	口縁～底部	30	11.9	6.4	3.7	やや密・石英、海綿骨針の微細粒を少量含む	にぶい橙	褐灰	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	
177	SR2	土師器	椀	体部～底部	24	—	6.0	(2.7)	密・石英、長石の微細粒をごく少量含む	浅黄橙	浅黄橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	
178	SR2	土師器	椀	口縁～底部	32	12	4.6	4.1	密・石英、長石、海綿骨針の微細粒をごく少量含む	橙	橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	
179	SR2	土師器	椀	口縁～底部	24	＜11.4＞	4.8	3.8	密・海綿骨針をごく少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	重ね焼き
180	SR2	土師器	椀	口縁～底部	32	11.1	5.8	2.9	密・2mm以下の石英、長石、雲母を少量含む	浅黄橙	浅黄橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	
181	SR2	土師器	椀	口縁～底部	24	＜10.2＞	5.3	3.1	やや粗・2mm以下の石英、長石、雲母を少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	
182	SR2	土師器	椀	口縁～底部	18	＜12.6＞	4.9	4.6	やや粗・海綿骨針を少量含む	浅黄橙	にぶい黄橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	墨書

土器観察表（8）

報告No.	出土位置	種別	器種	残存部位	残存率(x/36)	法量（cm）			胎土	色調		焼成	調整		備考
						口径	底径	高さ		外面	内面		外面	内面	
183	SR2	土師器	椀	口縁～底部	18	＜11.0＞	5.1	4.1	粗・雲母を多く含む	にぶい黄橙	灰黄	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	墨書
184	SR2	土師器	椀	口縁～底部	24	14.4	5.5	5.2	密・海綿骨針を少量含む	にぶい黄橙	浅黄橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	重ね焼き外面にスス
185	SR2	土師器	椀	口縁～底部	34	13.6	5.3	4.8	やや粗・1mm以下の長石を少量含む	橙	橙	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	
186	SR2	土師器	甕	口縁部	6	＜18.9＞	—	—	粗・1mm以下の石英、長石、雲母を多く含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	回転ナデ、カキ目	回転ナデ、カキ目	
187	SR2	土師器	甕	口縁～底部	18	＜10.9＞	6.3	10.2	やや密・石英、長石、雲母を含む	灰黄褐	浅黄橙	良	回転ナデ、底部回転糸切り	回転ナデ	
188	SR2	土師器	器種不明	体部	—	—	—	—	密・雲母の微細粒を少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄褐	良好	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
189	SR2	土師器	椀	底部	24	—	＜5.0＞	—	密・長石の微細粒をごく少量含む	浅黄橙	橙	良好	回転ナデ、指頭圧 底部回転糸切り	回転ナデ	
190	SR2	土師器	甕	体部～底部	12	—	＜8.1＞	(7.6)	粗・雲母を多く含む	褐灰	にぶい黄橙	良好	ハケ、指頭圧	ハケ、指頭圧	底外面に砂痕
191	SR2	土師器	甕	底部	36	—	7.2	—	粗・3mm以下の石英、長石を含む	にぶい黄橙	にぶい橙	良好	ナデ	指頭圧、ナデ	底外面に砂痕
192	SR2	土師器	甕	底部	36	—	7.0	—	粗・1mm以下の石英、長石を多く含む	にぶい黄橙	灰白	良好	不明	不明	底外面に木葉痕
193	SR2	土師器	甕	底部	12	—	＜8.6＞	—	密・2mm以下の石英、長石、雲母を多く含む	褐灰	浅黄橙	良好	指頭圧、ハケ	不明	底外面に砂痕
194	SR2	土師器	甕	底部	27	—	＜8.1＞	—	粗・2mm以下の石英を多く含む	にぶい黄褐	褐灰	良好	指頭圧	指頭圧、ハケ	底外面に砂痕
195	SR2	土師器	鍋	口縁～体部	—	＜33.2＞	—	—	やや密・2mm以下の石英、長石を少量含む	浅黄橙	にぶい黄橙	良好	回転ナデ、タタキ、カキ目	ナデ、ハケ	
196	SR2	土師器	鍋	口縁～体部	6	＜30.3＞	—	—	粗・2mm以下の石英、長石を多く含む	灰黄褐	にぶい黄橙	良好	回転ナデ、板ナデ、カキ目	回転ナデ	
197	SR2	土師器	甕	口縁部	—	＜15.0＞	—	—	やや粗・1mm以下の石英、長石を多く含む	橙	にぶい橙	良好	回転ナデ	回転ナデ	
198	SR2	土師器	甕	体部～底部	—	—	＜10.2＞	—	粗・1mm以下の石英、雲母を多く含む	灰黄褐	にぶい黄橙	良	指頭圧→ハケ ナデ→ハケ	ハケ、カキ目、指頭圧	図上復元底外面に砂痕
200	表土	須恵器	蓋	口縁～天井部	5	＜11.4＞	—	(2.1)	やや粗・0.5mm以下の長石、黒粒を多く含む	青灰	青灰	良好	回転ナデ	回転ナデ	
201	19E・表土	須恵器	有台杯	体部～底部	18	—	＜12.3＞	(3.3)	密・長石の微細粒を含む	灰	明青灰	良好	回転ヘラケズリ→回転ナデ 底部回転ヘラケズリ	回転ナデ、ナデ	
202	表土	須恵器	無台杯	口縁～底部	6	＜12.5＞	＜6.0＞	(3.6)	やや密・石英の微細粒をごく少量含む	口縁部：暗青灰 体部：青灰	青灰	良好	回転ナデ	回転ナデ	重ね焼き
203	表土	須恵器	無台杯	口縁～底部	30	12.5	7.4	3.9	粗・長石の微細粒を少量含む	青灰	青灰	良好	回転ナデ 底部回転ヘラ切り→ヘラナデ	回転ナデ	
204	表土	須恵器	壺	体部～底部	8	—	9.1	(11.7)	やや密・2mm以下の石英、長石を多く含む	灰	灰オリーブ	良好	回転ナデ、タタキ→カキ目 回転ヘラケズリ	回転ナデ、ハケ	172と同一個体
205	6E	須恵器	無台杯	口縁～底部	4	＜10.6＞	＜6.1＞	3.2	密・長石の微細粒を含む	灰	灰	良好	回転ナデ 底部回転ヘラ切り未調整	回転ナデ	重ね焼き
206	表土	瓦質土器系	鉢？	口縁部	1	—	—	—	粗・1mm以下の雲母を非常に多く含む	黒	暗灰黄	やや不良	回転ナデ	回転ナデ	

中曽根遺跡石器観察表

報告No.	出土位置	出土層位	器種	石材	法量				欠損	
					長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
22	20E2	Ⅳ層	石鏃	頁岩	2.77	1.42	0.41	0.9		
23	20E2	Ⅳ層	石鏃	頁岩	2.66	1.48	0.48	1.0		
24	21D	Ⅳ層	石鏃	頁岩	2.98	1.50	0.38	0.9	基部？	
25	21E5	Ⅳ層	石鏃	頁岩	(2.43)	1.80	0.48	1.5	先端部	
26	16E	表土	石鏃	頁岩	2.74	1.40	0.35	0.8		
27	20D22	Ⅳ層	石錐	頁岩	(2.60)	0.82	0.61	1.3	先端部	
28	21D24	Ⅳ層	石錐	頁岩	(3.23)	0.90	0.38	1.2	先端部	
29	22E6	Ⅳ層	楔形石器	頁岩	2.95	2.32	0.31	6.4		
30	22E7	Ⅳ層	楔形石器	頁岩	3.47	2.57	0.60	5.7		
31	21D20	Ⅳ層	二次加工剥片	頁岩	8.08	(6.90)	1.43	51.6	右側縁部	
32	21D24	Ⅳ層	磨製石斧	砂岩	16.12	6.14	3.65	578.0		

中曽根遺跡土製品観察表

報告No.	器種	出土位置			法量			色調	備考
		グリッド	遺構	層位	長さ（cm）	幅（cm）	重量（g）		
117	管状土錘	14B	SD3	−	3.4	1.5	3.9	灰黄（2.5Y7/2）	両端部一部欠損、ほぼ完形
118	管状土錘	14B5	SD3	−	2.5	1.5	3.6	灰黄（2.5Y7/2）	側面一部欠損、ほぼ完形
119	用途不明土製品	8D8	SD3	−	3.6	4.7	8.4	外・内：にぶい橙（5YR6/4）	土師器椀の体部片を利用、縁辺の一部の内外面が丁寧に磨かれている
151	用途不明土製品	−	SR1	−	5.0	2.4	30.6	浅黄（2.5Y7/3）	蚕繭に似た形状、中央部細い溝痕5条、指頭圧痕

中曽根遺跡石製品観察表

報告No.	器種	出土位置		法量			石材	備考
		グリッド	遺構	径（cm）	厚み（cm）	重量（g）		
199	砥石？	21B6	SR2	6.1	3.6	149.0	凝灰岩	側面に加工痕、底面に砥痕

中曽根遺跡鍛冶関連観察表

報告No.	種別	出土位置		法量			備考
		グリッド	遺構	長さ（cm）	幅（cm）	重量（g）	
120	鉄滓	13B	SD3	3.9	2.6	8.3	磁着度低い
121	鉄滓	13B	SD3	3.4	2.7	5.9	磁着度低い

中曽根遺跡木製品観察表

報告No.	器種	出土位置			法量			遺存状況	木取り	樹種	放射性炭素年代測定（yrBP±1σ）	備考
		グリッド	遺構	層位	長さ(cm)	幅（cm）	厚み(cm)					
207	木製品	13E5 14E1	SK6	11層	48.9	3.0	1.0	ほぼ完形	柾目	スギ		中央に2.0×1.3の臍穴、表面に14条、裏面に3条の細かい弧状の傷状の痕
208	柱根	14E11	SB4-P1	—	46.6	12.6	—	上端部欠	丸材	コナラ節	1109±22	端部片面加工
209	柱根	13D24	SB4-P10	—	34.6	13.8	—	上端部欠	丸材	コナラ節	1073±22	端部両面加工
210	柱根	14D20	SB13-P1	—	58.4	10.8	—	上端部欠	丸材	サクラ属		端部両面加工
211	柱根	14D19	SB13-P2	—	50.0	9.0	—	上端部欠	丸材	クワ属	1197±22	端部両面加工
212	柱根	14D3・8	SB13-P5	—	27.1	10.6	—	上端部欠	丸材	ニレ属		端部両面加工
213	柱根	14D4・9	SB13-P6	—	33.6	11.2	—	上端部欠 側面・下端一部欠	丸材	サクラ属	1180±22	端部両面加工
214	柱根	14D5・10	SB13-P7	—	44.7	12.3	8.7	上端部欠 下端一部欠	割材	サクラ属		端部両面加工
215	柱根	15D11	SB13-P9	—	9.9	5.5	—	上端部欠 側面一部欠	丸材	ニレ属		端部両面加工
	柱根	15D16	SB13-P10	—	—	—	—		丸材	ニレ属		腐食により観察不能、未実測
216	柱根	17E23	SB50-P1	—	84.9	11.9	—	上端部欠	丸材	クリ		端部両面加工
217	柱根	17E12	SB50-P2	—	42.0	10.0	—	上端部欠 下端一部欠	丸材	サクラ属		端部両面加工
218	柱根	17E24	SB50-P3	—	70.1	13.6	—	上端部欠	丸材	ケヤキ		端部両面加工
219	柱根	17E13・14	SB50-P5	—	78.7	12.6	—	上端部欠	丸材	サクラ属	1247±22	端部片面加工
220	柱根	17E21	SB50-P4	—	59.2	12.5	—	上端部欠	丸材	クリ		端部両面加工
221	柱根	17E16	SB50-P6	—	90.7	11.7	—	上端部欠	丸材	クリ	1208±22	端部両面加工、「V」字状
222	柱根	17E11・16	SB50-P7	—	82.2	14.9	-	上端部欠	丸材	クリ		端部両面加工
223	柱根	14E17	SA5-P1	—	43.5	15.6	12.1	上端部欠 下端一部欠	割材	クリ	1231±22	端部片面加工
224	柱根	14E22・14F2	SA5-P2	—	36.9	6.7	5.2	上端部欠 側面一部欠	割材	サクラ属		端部片面加工
225	柱根	14E9	P60	—	22.2	8.9	—	上端部・中心部欠	丸材	オニグルミ		端部両面加工
	柱根	20D20	P227	—	—	—	—		丸材	サクラ属		腐食により観察不能、未実測
226	柱根	17E19	SB50 (試掘時出土分)	—	79.3	16.0	—	上端部欠	丸材			端部三面加工

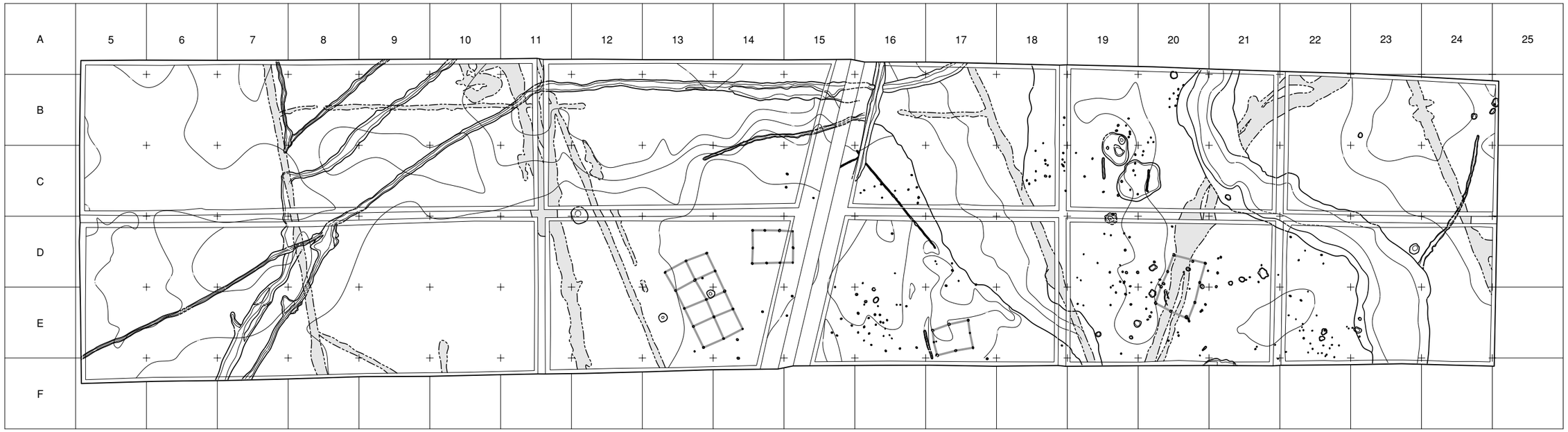
中曽根遺跡陶磁器観察表

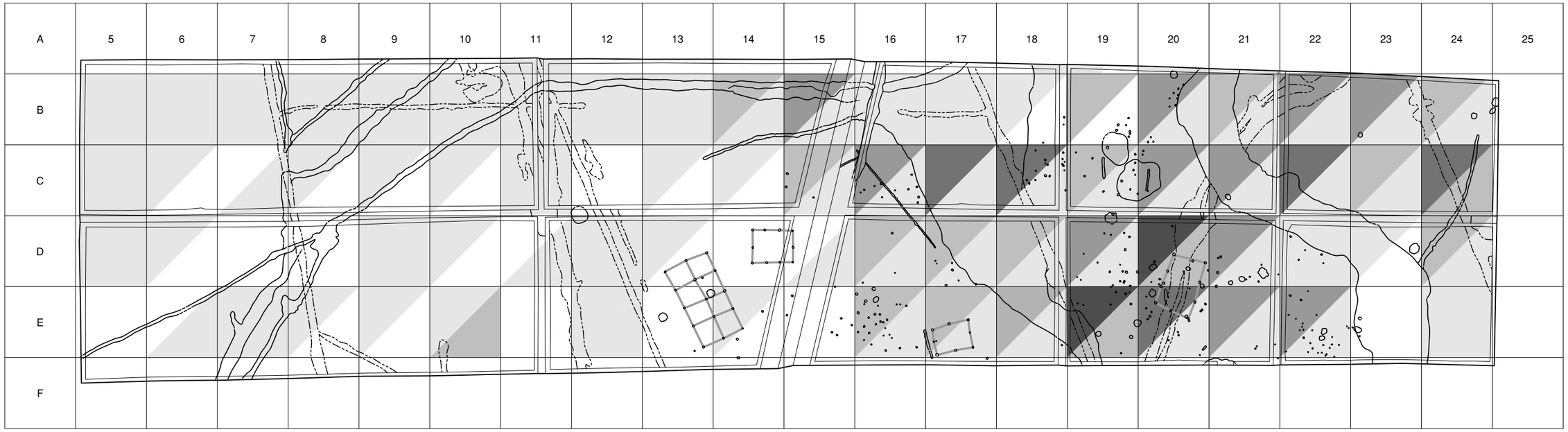
報告№	出土位置	種別	器種	残存部位	法量			胎土・断面色調	整形・調整	釉薬・絵付け	焼成	推定年代	推定産地	備考
					口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）							
227	表土	磁器	皿	破片・底部	—	＜5.4＞	—	白色	ロクロ成形	透明釉・染付	良		中国	
228	表土	磁器	皿	破片・底部	—	＜11.4＞	—	灰色	ロクロ成形	透明釉・染付	良	17世紀後半	中国	
229	19～21A～C表土	磁器	瓶	破片・底部	—	＜4.3＞	—	灰白色	ロクロ成形	透明釉・鉄釉	良	17世紀中葉～後葉	肥前系	高台無釉
230	表土	陶器	皿	破片・底部	—	3.2	—	赤褐色	ロクロ成形	灰釉	良		唐津系	見込：胎土目痕4／腰部以下無釉
231	16～18C・D	陶器	皿	破片・底部	—	4.5	—	赤褐色	ロクロ成形	灰釉	良		唐津系	見込：砂目痕4／腰部以下無釉/被熱
232	10B	陶器	碗	破片・底部	—	4.8	—	明褐灰色	ロクロ成形	藁灰釉	良		唐津系	外面：砂目痕1／腰部以下無釉
233	7B・C表土	陶器	碗	破片・底部	—	3.0	—	灰色	ロクロ成形	鉄釉	良			被熱/底部糸切（右）／見込：重焼痕
234	20D表土	陶器	皿	破片・底部	—	＜4.7＞	—	灰色	ロクロ成形	灰釉	良	17世紀前半？	瀬戸美濃系？	見込：胎土目1
235	表土	陶器	皿	破片・底部	—	4.3	—	灰色	ロクロ成形	灰釉	良		唐津系	腰部以下無釉
236	表土	陶器	碗	破片・底部	—	4.8	—	乳白色	ロクロ成形	透明釉・染付	良		中国広東・福建省	被熱／見込：蛇の目釉剥ぎ

中曽根遺跡銭貨観察表

報告№	種別	器種	出土位置		法量				初鋳年	王朝名	備考
				グリッド	長さ（cm）	幅（cm）	厚み（cm）	重量（g）			
238	銭貨	開元通寶	北区	24C	2.42	2.42	0.13	2.8	621	唐	楷書、上位に月文
239	銭貨	開元通寶	北区	23D	2.45	2.44	0.12	2.7	621	唐	楷書、上位に月文
240	銭貨	開元通寶	北区	23D	—	—	0.09	1.7	621	唐	楷書
241	銭貨	開元通寶	南区	7～11B撹乱	2.39	2.40	0.11	2.5	621	唐	楷書
242	銭貨	開元通寶	北区	北側調査区	2.33	2.31	0.11	2.2	621	唐	楷書、上・下位に月文
243	銭貨	太平通寶	北区	23D	2.47	2.46	0.11	3.0	976	北宋	楷書
244	銭貨	太平通寶	北区	24C	2.43	2.43	0.12	3.2	976	北宋	楷書
245	銭貨	咸平元寶	北区	24C	2.43	2.48	0.09	1.9	998	北宋	楷書
246	銭貨	咸平元寶	北区	24C	2.44	2.46	0.12	3.6	998	北宋	楷書
247	銭貨	天聖元寶	北区	23D	2.49	2.49	0.13	3.4	1023	北宋	楷書
248	銭貨	皇宋通寶	北区	23D	2.51	2.50	0.12	3.4	1038	北宋	楷書
249	銭貨	皇宋通寶	北区	23D	2.39	2.42	0.09	2.3	1038	北宋	楷書
250	銭貨	皇宋通寶	北区	23D	2.43	2.41	0.11	2.4	1038	北宋	楷書
251	銭貨	皇宋通寶	北区	24C	2.46	2.48	0.12	3.9	1038	北宋	楷書
252	銭貨	皇宋通寶	北区	24C	2.48	2.48	0.10	2.3	1038	北宋	篆書
253	銭貨	皇宋通寶	北区	24C	2.41	2.42	0.13	3.3	1038	北宋	篆書
254	銭貨	熙寧元寶	北区	24C	2.37	2.36	0.14	3.5	1068	北宋	篆書
255	銭貨	熙寧元寶	北区	24C	2.32	2.34	0.17	4.1	1068	北宋	篆書
256	銭貨	熙寧元寶	北区	24C	2.33	2.35	0.15	3.2	1068	北宋	篆書
257	銭貨	熙寧元寶	北区	23D	2.39	2.41	0.18	4.0	1068	北宋	篆書
258	銭貨	元豊通寶	北区	24C	2.47	2.46	0.12	2.2	1078	北宋	行書
259	銭貨	元豊通寶	北区	24C	2.42	2.39	0.13	3.6	1078	北宋	行書
260	銭貨	元豊通寶	北区	24C	2.31	2.32	0.11	1.9	1078	北宋	篆書
261	銭貨	元豊通寶	北区	24C	2.42	2.45	0.15	2.4	1078	北宋	篆書
262	銭貨	元豊通寶	南区	10E	2.34	2.36	0.10	2.0	1078	北宋	篆書
263	銭貨	元祐通寶	北区	24C	2.45	2.45	0.12	3.6	1086	北宋	篆書
264	銭貨	元祐通寶	北区	24C	2.38	2.37	0.10	2.1	1086	北宋	篆書
265	銭貨	元祐通寶	北区	23D	2.48	2.46	0.12	3.1	1086	北宋	篆書
266	銭貨	元祐通寶	北区	23D	2.48	2.46	0.11	2.8	1086	北宋	行書
267	銭貨	元祐通寶	南区	7B	2.38	2.42	0.09	1.7	1086	北宋	行書
268	銭貨	紹聖元寶	北区	23D	2.28	2.26	0.11	2.2	1094	北宋	行書
269	銭貨	紹聖元寶	北区	23D	2.35	2.36	0.11	2.8	1094	北宋	篆書
270	銭貨	紹聖元寶	北区	北側調査区	2.39	2.39	0.14	3.8	1094	北宋	篆書
271	銭貨	元符通寶	北区	23D	2.39	2.38	0.15	3.3	1098	北宋	篆書
272	銭貨	淳祐元寶	北区	24C	2.40	2.41	0.11	2.2	1250	南宋	楷書、上「十」

図　　版

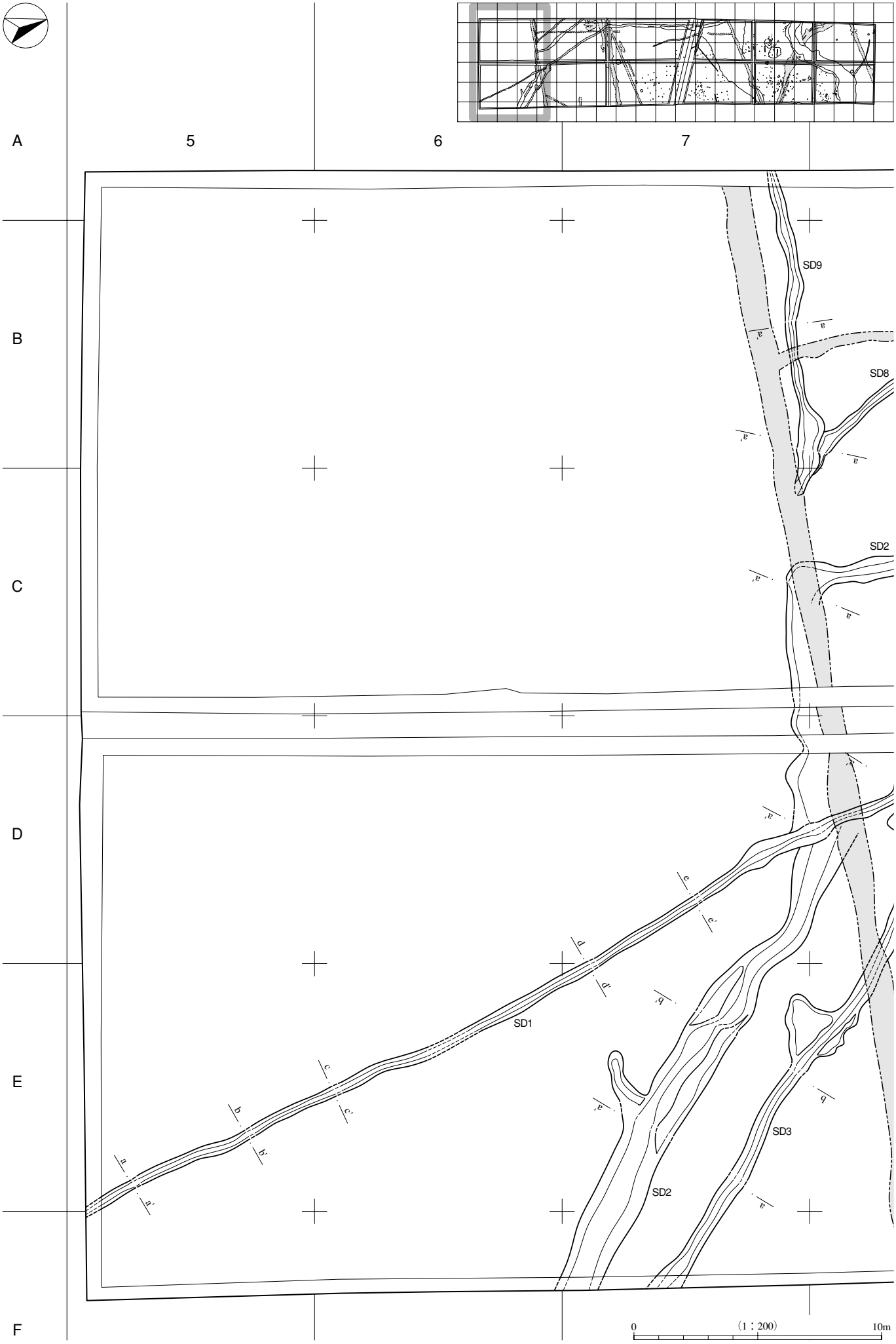




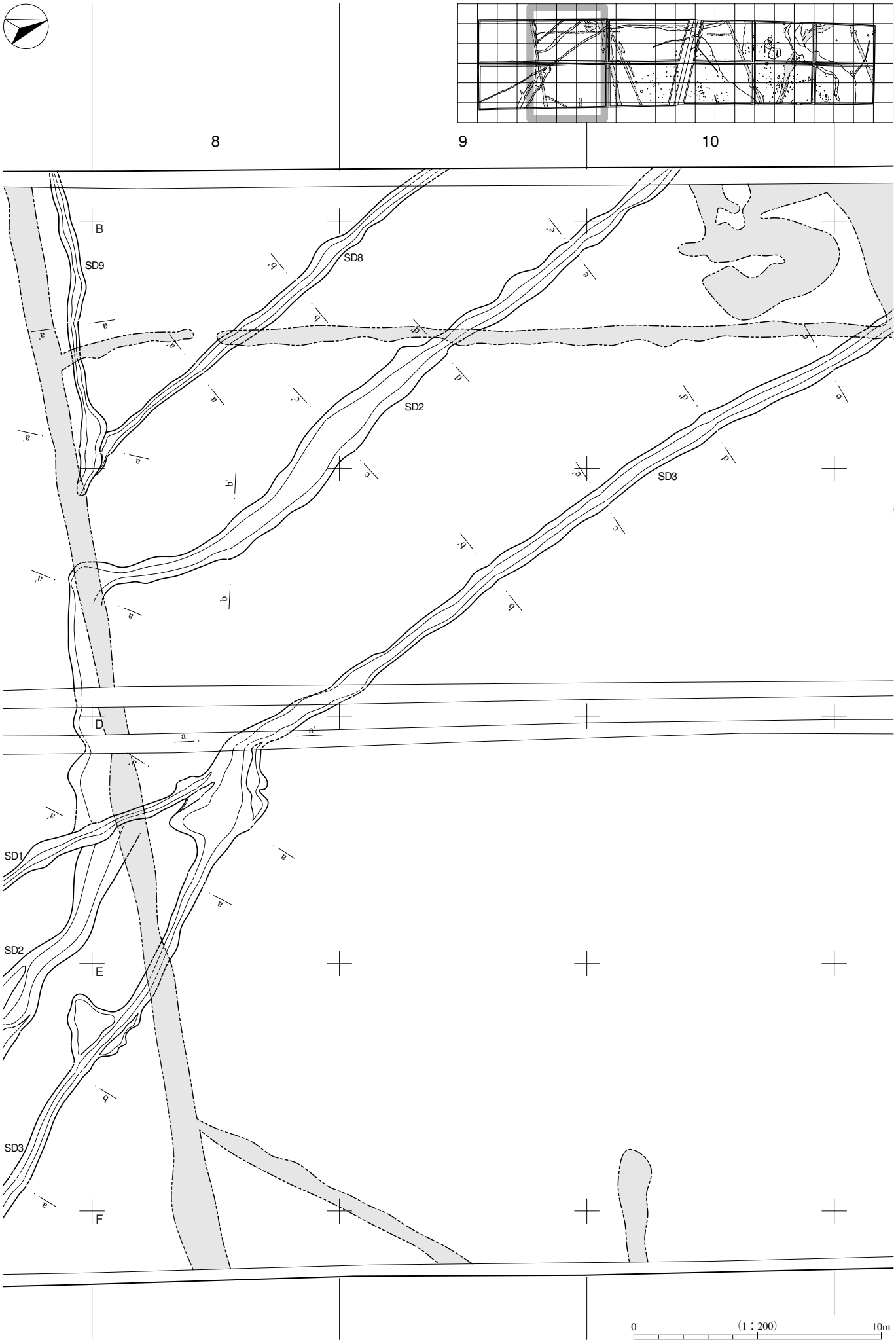
0 (1：600) 30m

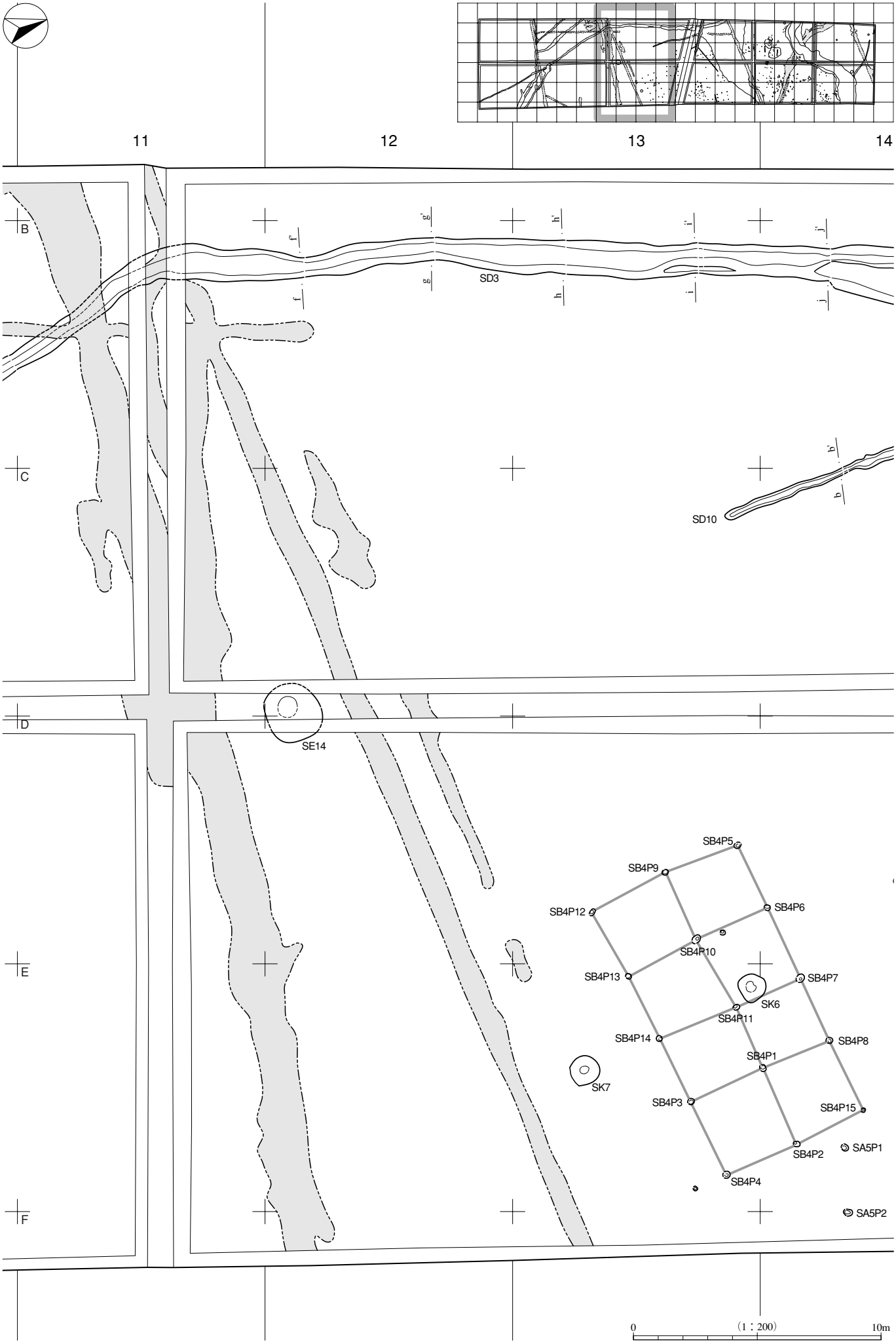
土師器
須恵器

0点
1～25点
26～50点
51～100点
101～200点
201点以上

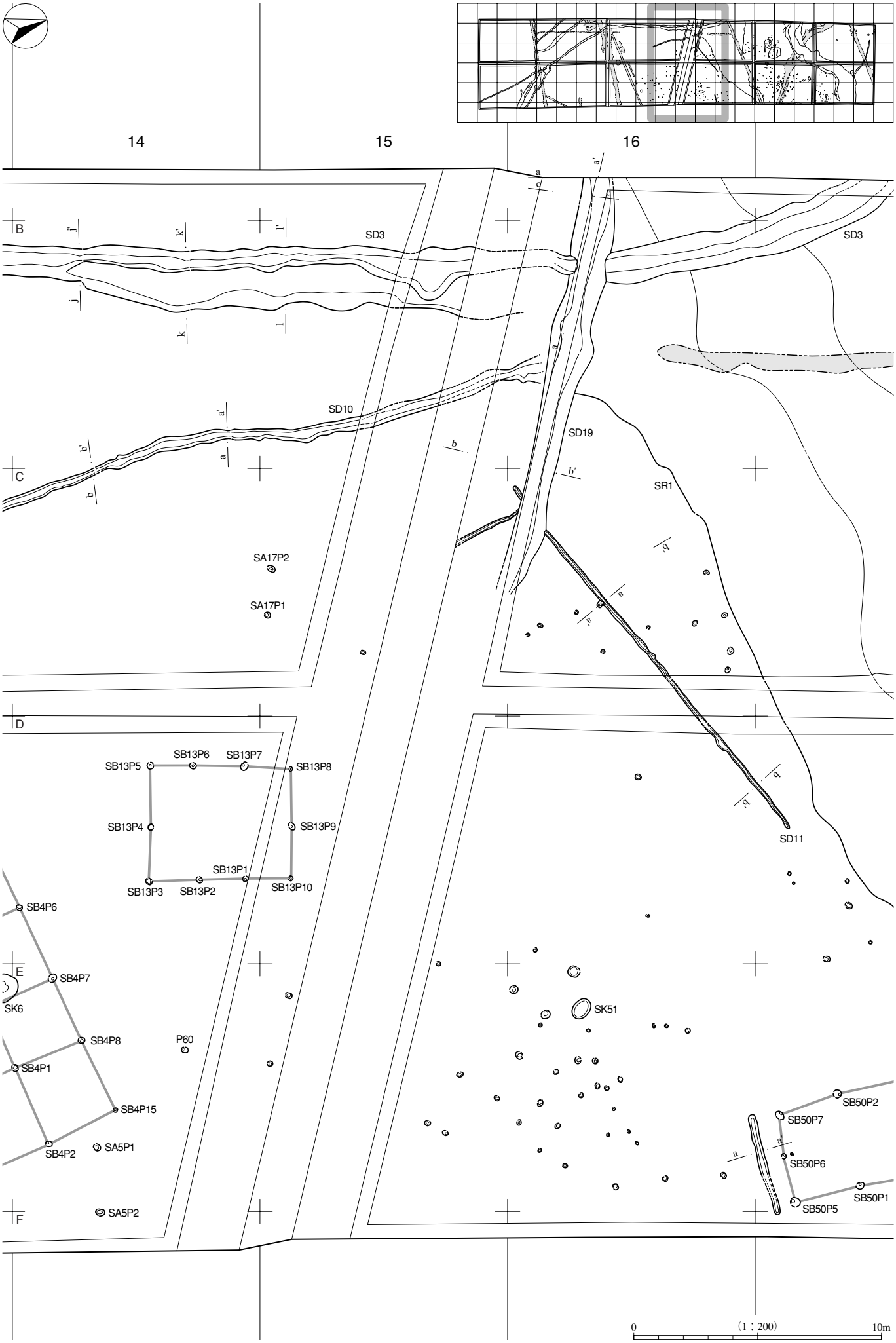

A
B
C
D
E
F
5
6
7
SD9
SD8
SD2
SD1
SD2
SD3
0
（1：200）
10m

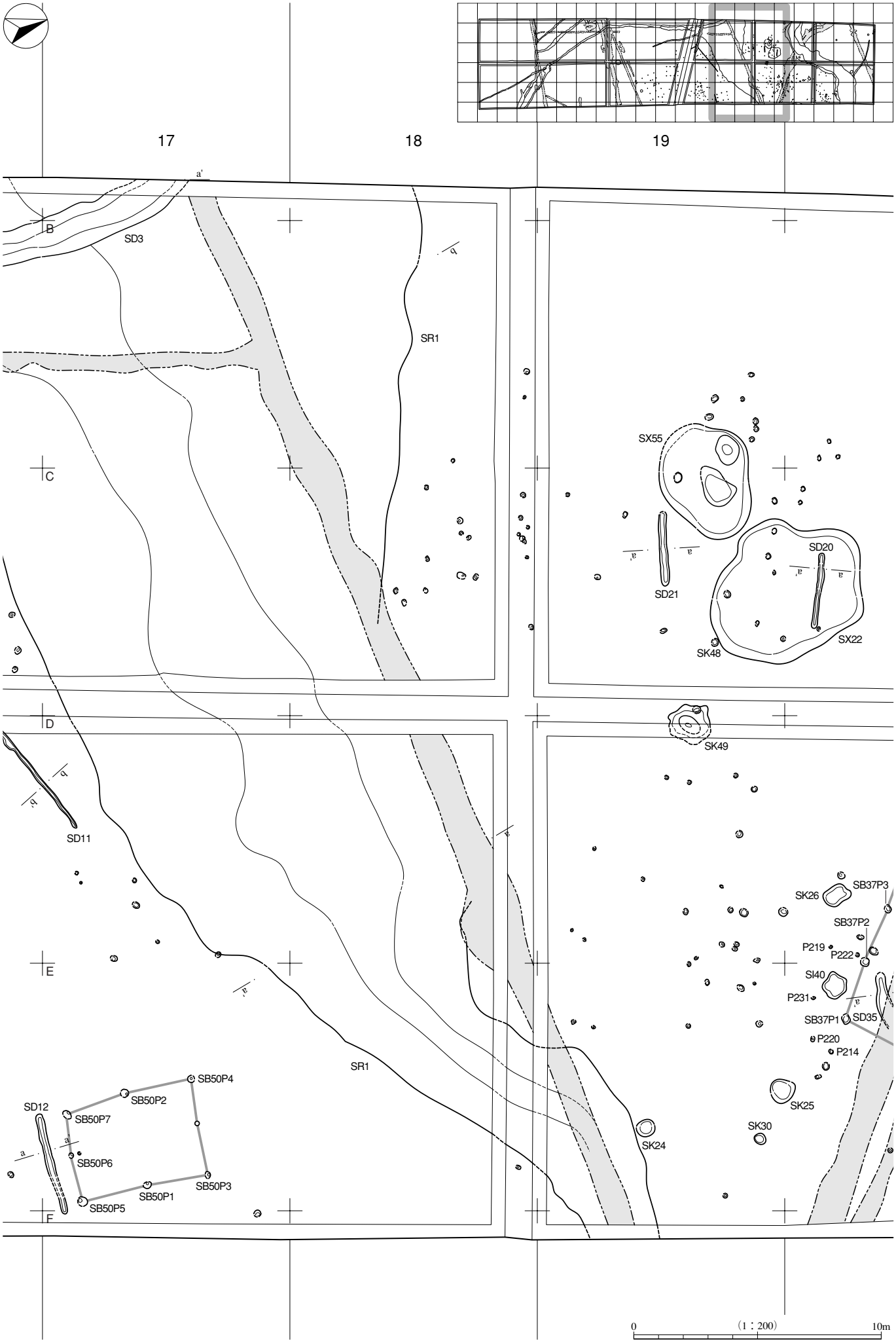
遺構分割図（2）




11
12
13
14
B
C
D
E
F
SD3
SD10
SE14
SB4P5
SB4P9
SB4P12
SB4P6
SB4P10
SB4P13
SB4P7
SK6
SB4P11
SB4P14
SB4P8
SB4P1
SK7
SB4P3
SB4P15
SB4P2
SA5P1
SB4P4
SA5P2
0
(1：200)
10m

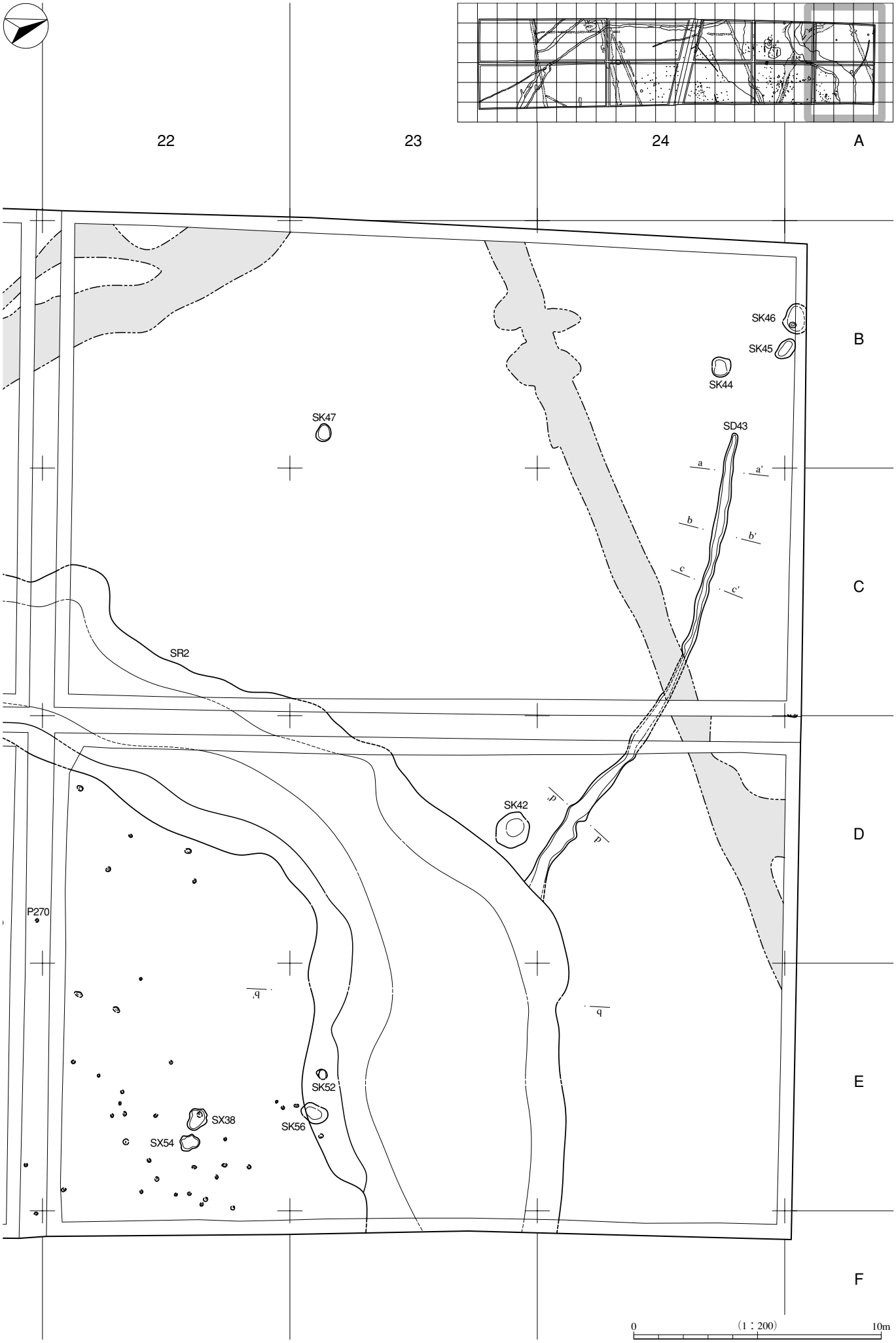
遺構分割図（4）


14
15
16
B
C
D
E
F
SD3
SD10
SD19
SR1
SD11
SA17P2
SA17P1
SB13P5
SB13P6
SB13P7
SB13P8
SB13P4
SB13P9
SB13P1
SB13P3
SB13P2
SB13P10
SB4P6
SB4P7
SK6
SB4P8
P60
SB4P1
SB4P15
SB4P2
SA5P1
SA5P2
SK51
SB50P2
SB50P7
SB50P6
SB50P1
SB50P5
0
(1：200)
10m

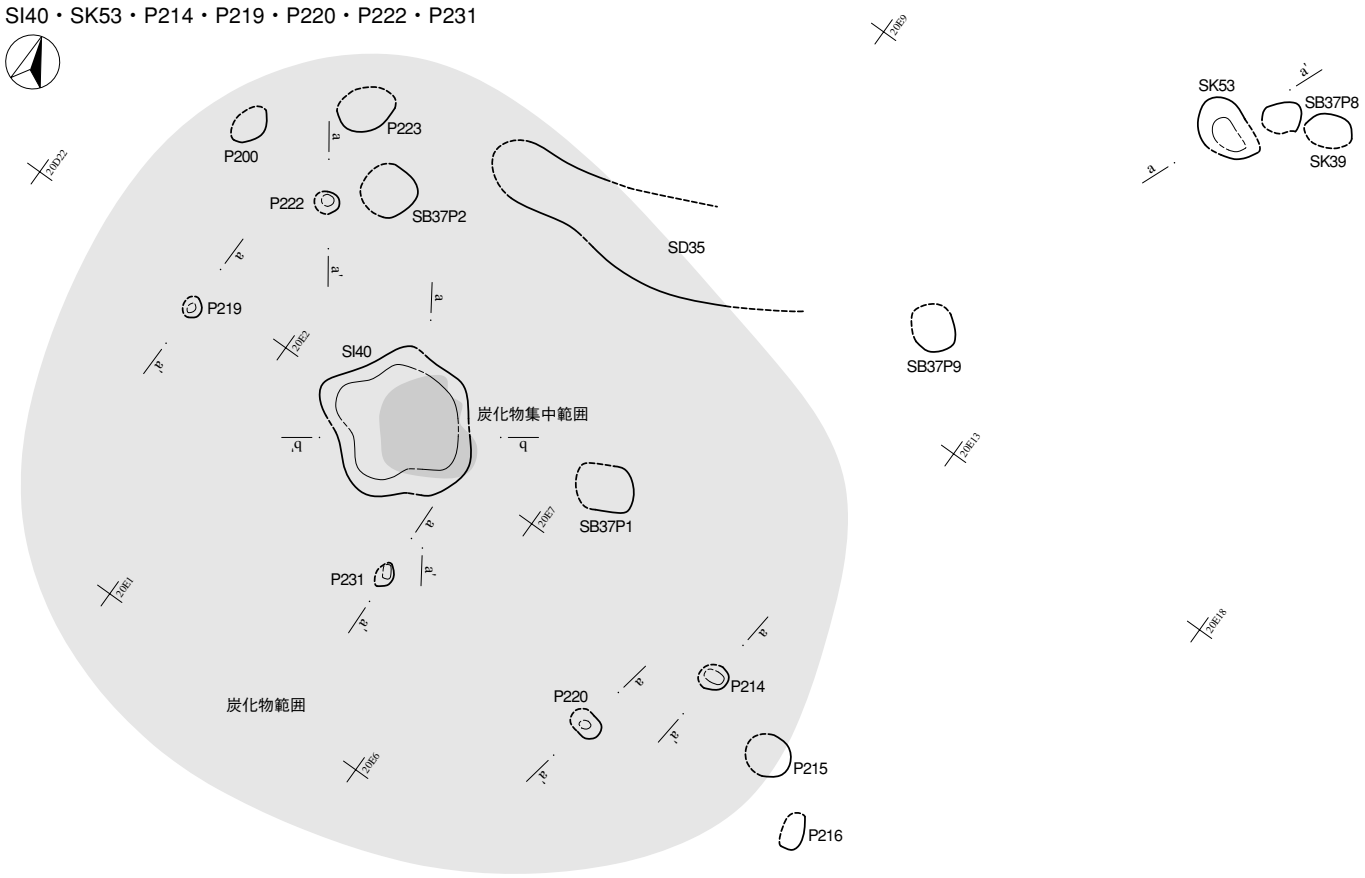

17
18
19
B
C
D
E
F
SD3
SR1
SX55
SD20
SD21
SX22
SK48
SK49
SD11
SB37P3
SK26
SB37P2
P219
P222
SI40
P231
SB37P1
SD35
P220
P214
SK25
SK30
SK24
SB50P4
SB50P2
SD12
SB50P7
SB50P6
SB50P3
SB50P1
SB50P5
0
(1：200)
10m

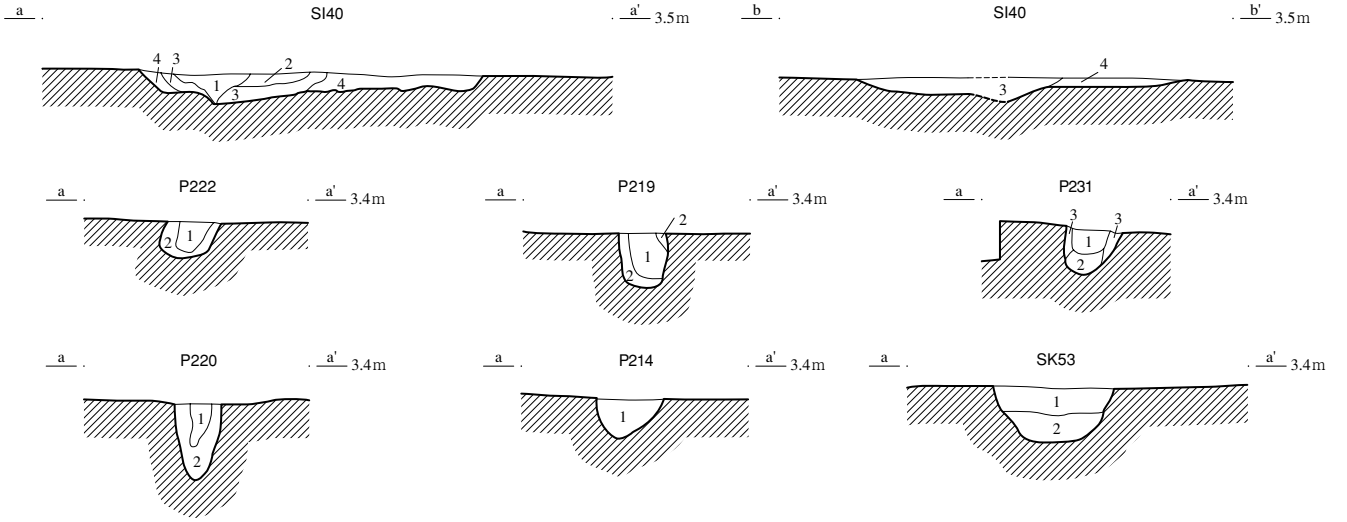
遺構分割図（6）

20
21
22
23
B
C
D
E
F
SK28
SK47
SD20
SX22
SK36
SR2
SI40
SI41
SB37P4
SB37P5
SK26
SB37P3
SK27
P227
P228
P218
P217
P270
SK31
SK32
P219
P222
SB37P2
SB37P6
SK33
SD35
P231
SB37P1
SB37P7
P220
P214
SB37P9
SK53
SB37P8
SK39
SK25
SK52
SX38
SK56
SX54
SD34
SX29
0
(1：200)
10m


22
23
24
A
B
C
D
E
F
SK46
SK45
SK44
SD43
SK47
a
a'
b
b'
c
c'
SR2
SK42
d
d'
P270
b'
b
SK52
SX38
SK56
SX54
0
（1：200）
10m

SI40・SK53・P214・P219・P220・P222・P231





SI40
1．灰色シルト（5Y5/1）しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（2mm）を微量含む。
2．黄褐色焼土（2.5Y5/4）しまりやや強く、粘性弱い。骨片と考えられる白色粒（1mm）を微量含む。
3．黒褐色土（2.5Y3/2）
しまり強く、粘性やや弱い。地山の土が被熱した層。この層直上に炭化物（2～5mm）を中量、白色粒（1mm）を中量含む。
4．灰色シルト（5Y5/1）
しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（1mm）を少量含む。掘り方とも考えられる。

P222
1．オリーブ黒色土（10Y3/1）
しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1～5mm）を少量、灰色シルト（5～30mm）を斑状に少量含む。
2．灰色シルト（10Y5/1）
しまり強く、粘性やや弱い。オリーブ黒色シルト（10～30mm）を少量含む。

P219
1．オリーブ黒色土（10Y3/1）
しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1～3mm）を少量、灰色シルト（10～30mm）を斑状に少量含む。
2．灰色シルト（10Y5/1）
しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（0.5～1mm）を微量含む。

P231
1．灰色シルト（10Y4/1）
しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（1mm）を微量、オリーブ黒色土（10～30mm）を少量含む。
2．オリーブ黒色土（5GY2/1）
しまり弱く、粘性強い。炭化物（1mm）を微量、灰色シルト（10～30mm）を斑状に中量含む。
3．灰色シルト（10Y5/1）
しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（1mm）を微量含む。暗灰色シルトと斑状になる。

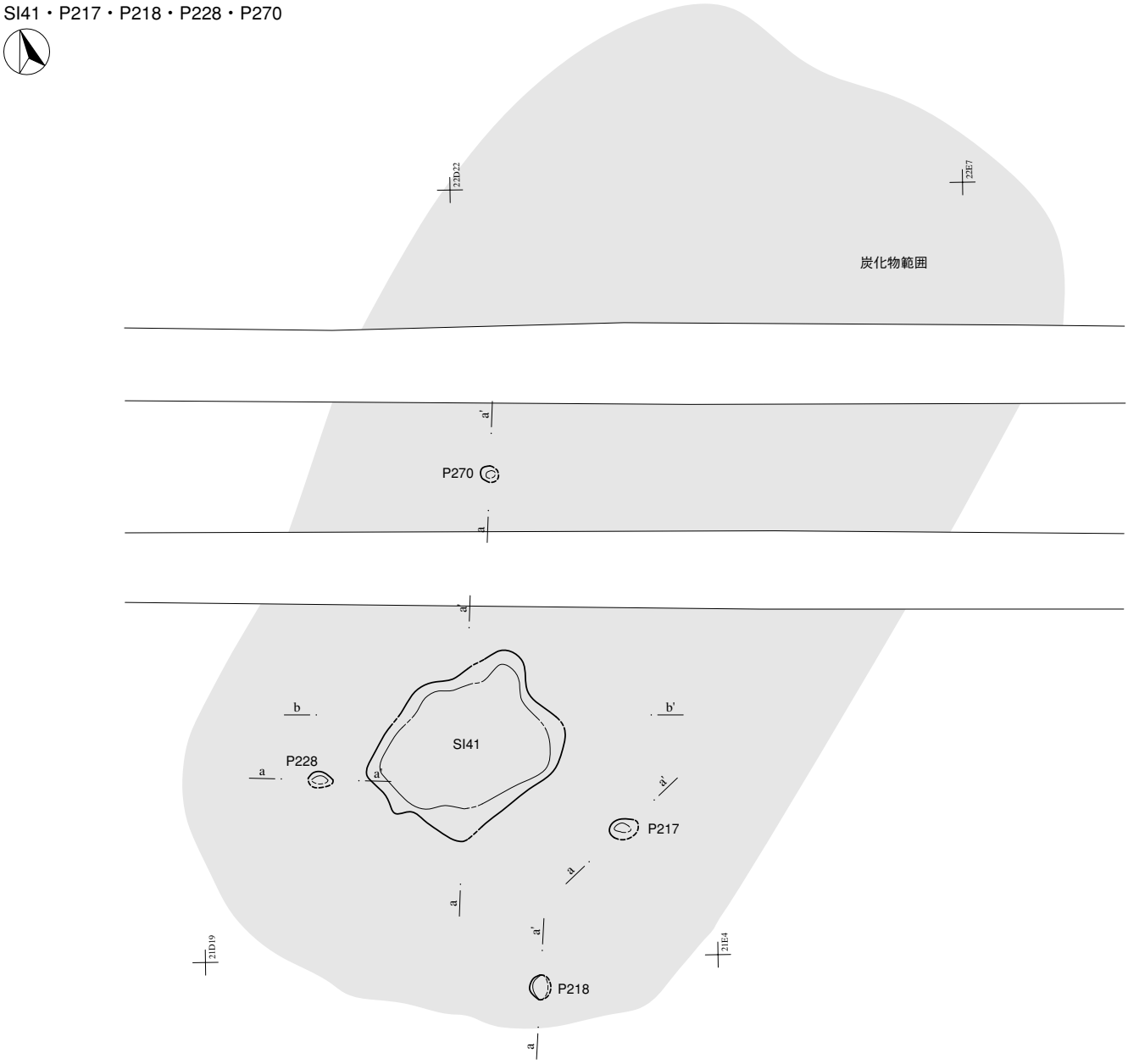
P220
1．オリーブ黒色土（10Y3/1）
しまりやや弱く、粘性やや強い。灰色シルト（10～20mm）を斑状に少量含む。
2．灰色シルト（7.5Y4/1）
しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（0.5～1mm）を微量含む。

P214
1．オリーブ黒色シルト（10Y3/1）
しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1～2mm）を少量、灰色シルト（10～30mm）を少量含む。

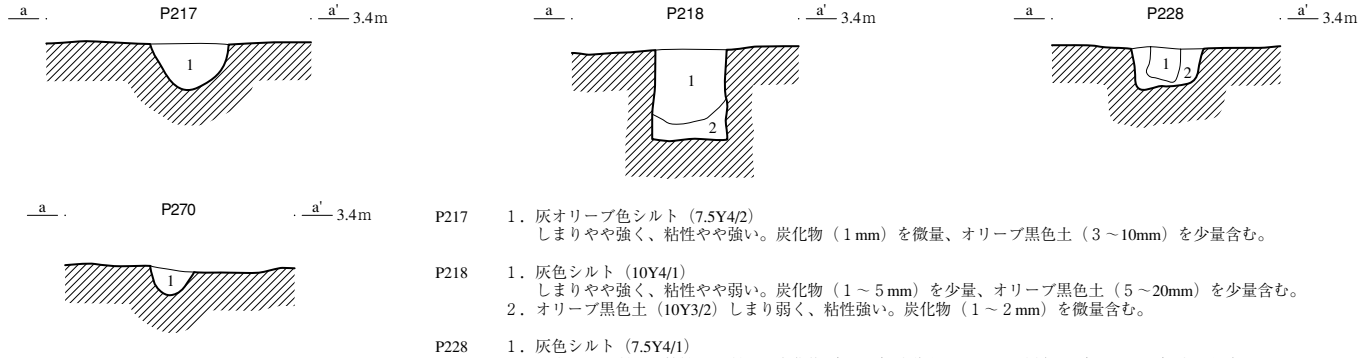
SK53
1．暗灰色土（N3/0）しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（2mm）を少量含む。
2．灰色土（10Y4/1）しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（1～2mm）を少量含む。

平面図　0　（1：50）　2m　　断面図　0　（1：20）　1m

SI41・P217・P218・P228・P270



SI41　1．灰オリーブ色土（7.5Y5/2）　しまりやや弱く、粘性やや弱い。炭化物（1～10mm）を中量、オリーブ黒色土を中量含む。頁岩砕片を多く含む。
　　2．灰オリーブ色焼土（5Y5/2）　しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（3～5mm）を中量、黄褐色焼土（5～20mm）を少量、被熱した地山ブロック（5～10mm）を少量、骨片と考えられる白色粒（1mm未満）を少量含む。
　　3．黒褐色土（2.5Y3/2）　しまり強く、粘性弱い。地山の土が被熱した層。



P217　1．灰オリーブ色シルト（7.5Y4/2）
　　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（1mm）を微量、オリーブ黒色土（3～10mm）を少量含む。

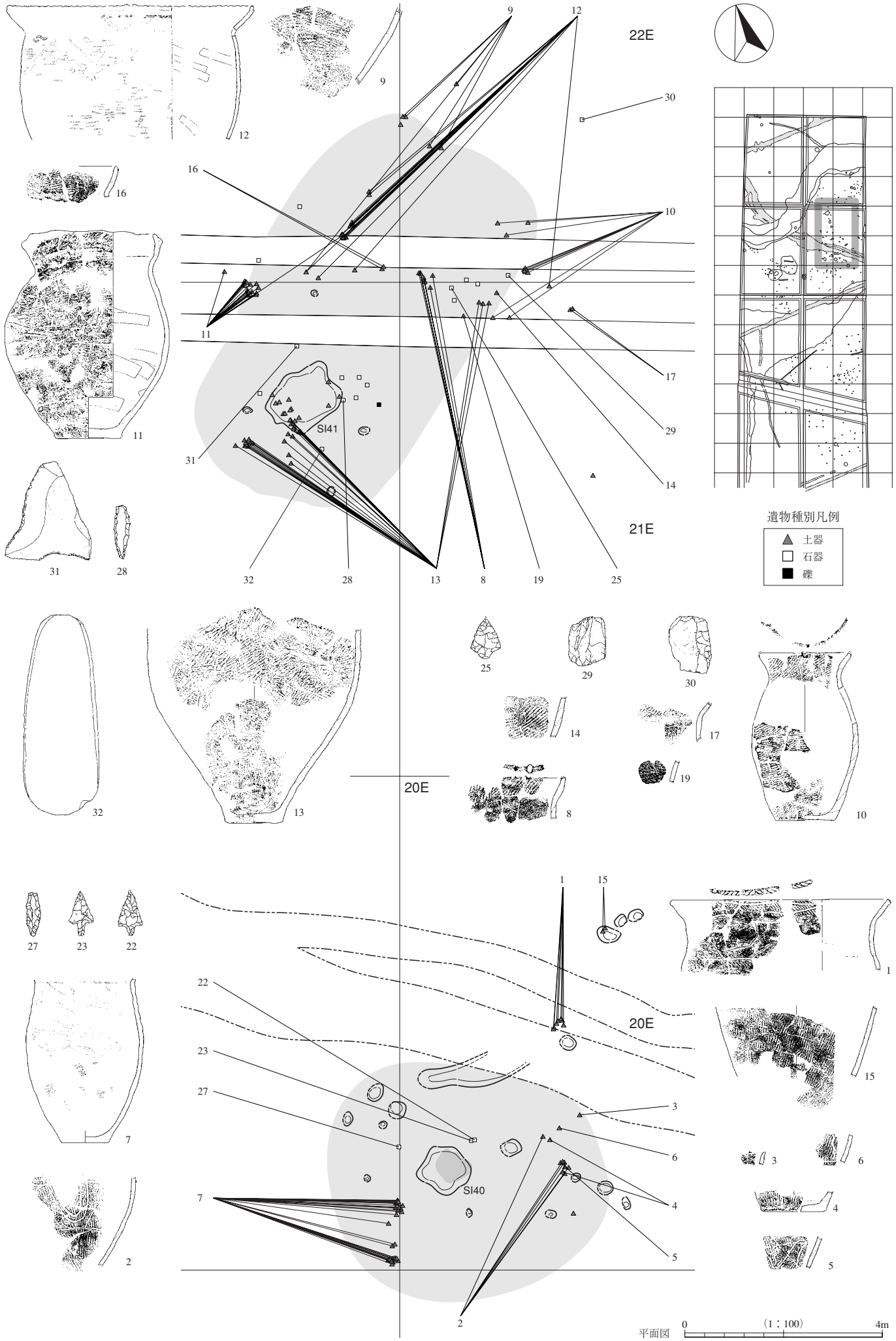
P218　1．灰色シルト（10Y4/1）
　　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（1～5mm）を少量、オリーブ黒色土（5～20mm）を少量含む。
　　2．オリーブ黒色土（10Y3/2）しまり弱く、粘性強い。炭化物（1～2mm）を微量含む。

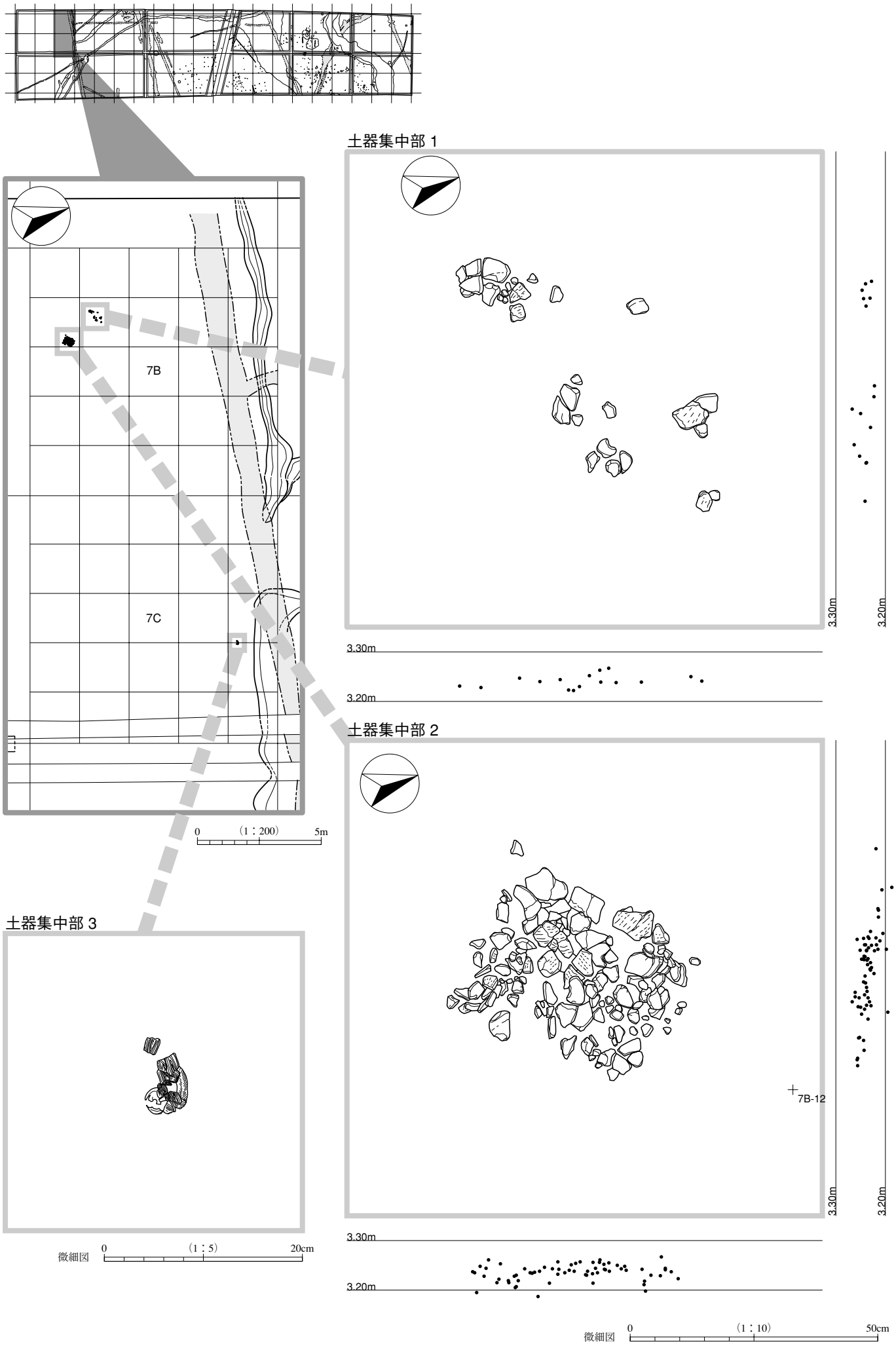
P228　1．灰色シルト（7.5Y4/1）
　　しまりやや弱く、粘性やや弱い。炭化物（1mm）を微量、オリーブ黒色土（5～10mm）を中量含む。
　　2．灰色シルト（7.5Y4/1）しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（3mm）を微量含む。

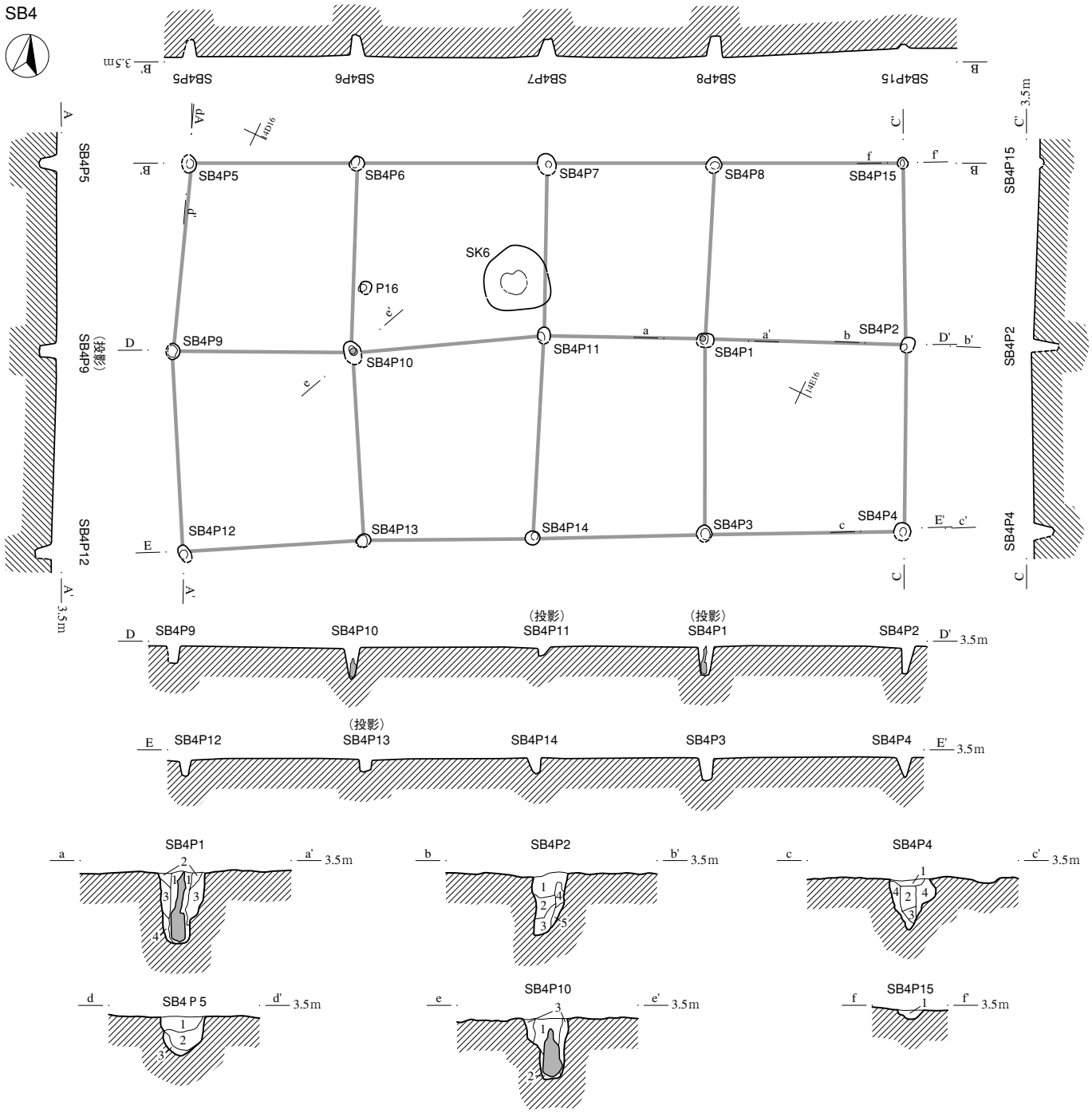
P270　1．灰色シルト（10Y5/1）
　　しまりやや弱く、粘性強い。オリーブ黒色シルト（5～10mm）を少量、砂粒（0.5mm未満）を少量含む。

平面図　0　（1：50）　2m　　断面図　0　（1：20）　1 m

北側調査区　弥生時代　遺物分布図




土器集中部 1
7B
7C
0　（1：200）　5m
3.30m
3.20m
土器集中部 2
7B-12
3.30m
3.20m
土器集中部 3
微細図　0　（1：5）　20cm
微細図　0　（1：10）　50cm



SB4P1
1．褐灰色土（10YR4/1）
　しまりやや弱く、粘性やや弱い。木質分解層。炭化物（1 mm）を微量含む。
2．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）
　しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（1 ～ 3 mm）を少量、オリーブ黒色土（5 ～10mm）を中量含む。
3．オリーブ灰色シルト（5GY5/1）
　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（1 ～ 3 mm）を少量、オリーブ黒色土（5 ～30mm）を少量含む。
4．オリーブ灰色シルト（5GY5/1）
　しまりやや弱く、粘性強い。オリーブ黒色土（3 ～ 5 mm）を微量含む。

SB4P2
1．オリーブ灰色土（2.5GY5/1）
　しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（1 ～ 3 mm）を少量、オリーブ黒色シルト（5 ～20mm）を中量含む。
2．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）
　しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1 ～ 3 mm）を少量、オリーブ黒色シルト（1 ～ 2 mm）を少量含む。
3．黒色土（N1.5/0）
　しまり弱く、粘性強い。木質分解層。オリーブ灰色シルト（20～50mm）を中量含む。
4．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）
　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（1 ～ 3 mm）を少量、オリーブ黒色土（5 ～10mm）を少量含む。
5．オリーブ灰色シルト（5GY5/1）
　しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（0.5～ 1 mm）を微量含む。

SB4P4
1．オリーブ黒色土（10Y3/1）
　しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（3 ～ 5 mm）を少量、オリーブ灰色シルト（5 ～20mm）を中量含む。
2．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）
　しまり強く、粘性やや強い。炭化物（0.5～ 1 mm）を微量、オリーブ黒色シルト（10～30mm）を少量含む。
3．オリーブ灰色シルト（5GY5/1）
　しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（0.5～ 3 mm）を少量、オリーブ黒色シルト（5 ～10mm）を少量含む。
4．オリーブ灰色シルト（5GY5/1）
　しまりやや強く、粘性強い。炭化物（1 ～ 3 mm）を少量、オリーブ黒色土（5 ～30mm）を少量含む。

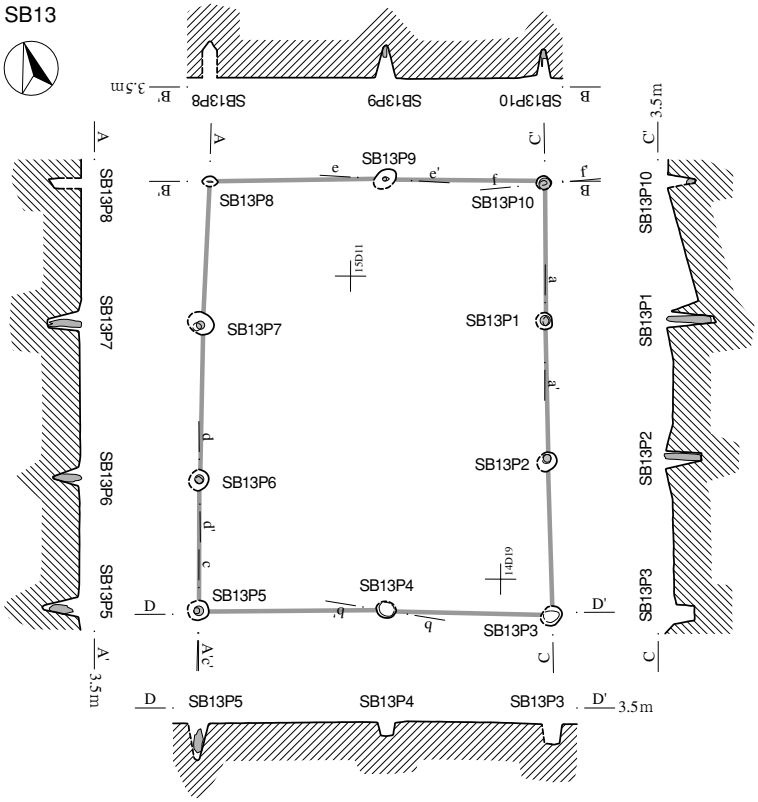
SB4P5
1．黒色土（N1.5/0）
　しまり強く、粘性やや強い。オリーブ灰色シルト（5 ～20mm）を少量含む。
2．オリーブ黒色シルト（10Y3/1）
　しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（3 ～ 5 mm）を少量、オリーブ灰色シルト（5 ～20mm）を中量含む。
3．暗オリーブ灰色シルト（5GY3/1）
　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（1 ～ 3 mm）を少量、オリーブ黒色土（5 ～30mm）を少量含む。

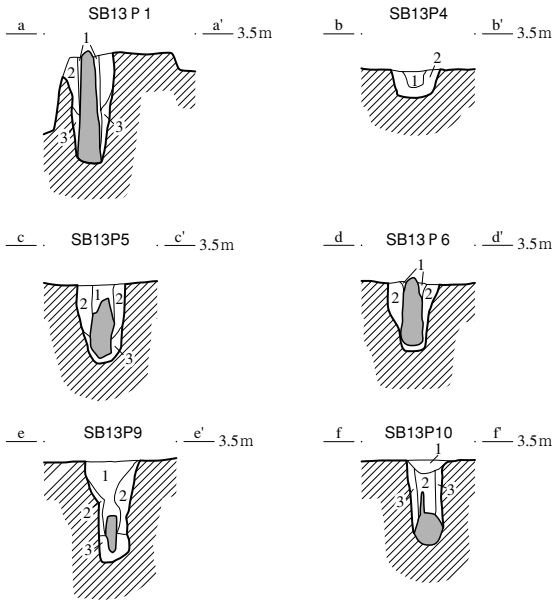
SB4P10
1．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）
　しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1 ～ 3 mm）を少量、オリーブ黒色土（1 ～ 2 mm）を少量含む。
2．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）
　しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（0.5～ 2 mm）を少量含む。
3．オリーブ灰色シルト（5GY5/1）
　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（1 ～ 3 mm）を少量、オリーブ黒色土（5 ～30mm）を少量含む。

SB4P15
1．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）
　しまり強く、粘性強い。炭化物（1 mm）を微量、オリーブ黒色土（20～50mm）を上部に中量含む。

平面図/エレベーション図　0　（1：100）　4m　　断面図　0　（1：40）　2m

SB13





SB13P1
1．灰色土（7.5Y4/1）しまりやや弱く、粘性強い。木質分解層。炭化物（1～3mm）を微量含む。
2．オリーブ灰色シルト（2.5GY6/1）しまり強く、粘性弱い。炭化物（1～3mm）を微量、オリーブ黒色シルト（3mm）を微量含む。
3．暗オリーブ灰色シルト（2.5GY4/1）しまりやや弱く、粘性強い。暗灰色シルト（3mm）を少量含む。

SB13P4
1．黒色土（7.5Y2/1）しまりやや弱く、粘性強い。木質分解層。灰色シルト（0.5～10mm）を少量含む。
2．オリーブ灰色シルト（2.5GY6/1）しまり強く、粘性弱い。炭化物（1～3mm）を微量、オリーブ黒色土（3mm）を微量含む。

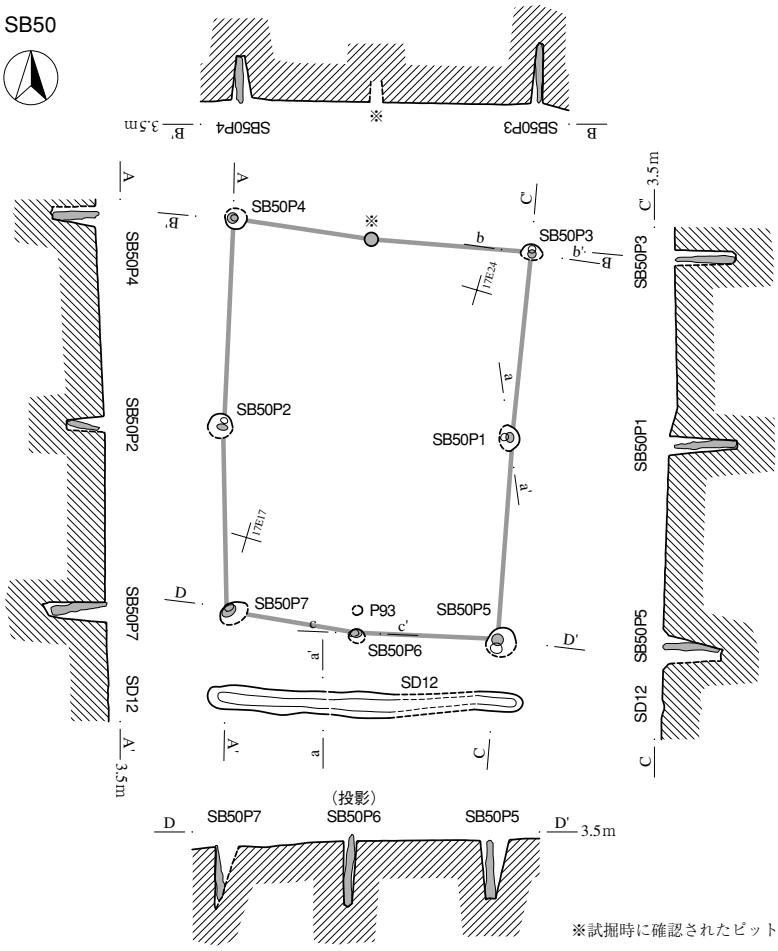
SB13P5
1．黒色土（N1.5/0）しまり弱く、粘性強い。木質分解層。
2．オリーブ灰色シルト（2.5GY6/1）しまり強く、粘性弱い。炭化物（1～3mm）を微量、オリーブ黒色土（3mm）を微量含む。
3．暗オリーブ灰色シルト（5GY4/1）しまりやや弱く、粘性強い。暗灰色シルト（3mm）を少量含む。

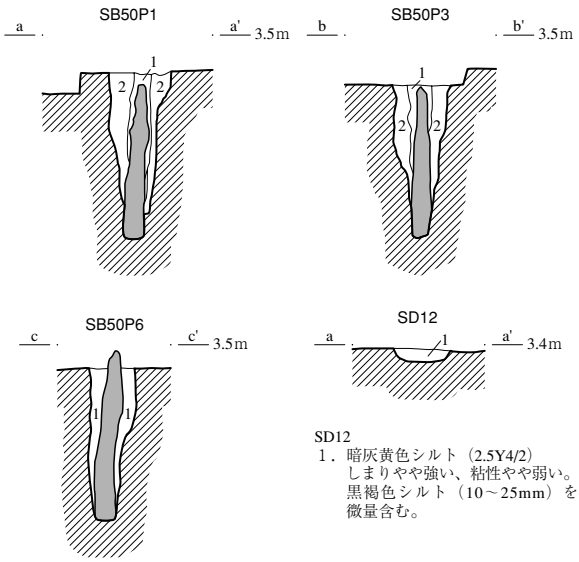
SB13P6
1．黒色土（N1.5/0）しまり弱く、粘性強い。木質分解層。
2．オリーブ灰色シルト（2.5GY6/1）しまり強く、粘性弱い。炭化物（1～3mm）を微量、オリーブ黒色シルト（3mm）を微量含む。

SB13P9
1．黒色土（N1.5/0）しまり弱く、粘性やや強い。炭化物（1～3mm）を微量、灰色シルト（5～10mm）を少量含む。
2．灰色シルト（10Y5/1）しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（1～2mm）を微量含む。
3．灰色シルト（10Y6/1）しまりやや強く、粘性弱い。炭化物（1mm）を微量含む。

SB13P10
1．オリーブ黒色土（10Y 3/1）しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（1～3mm）を微量、灰色シルト（5～10mm）を少量含む。
2．オリーブ黒色シルト（5GY2/1）しまり強く、粘性弱い。炭化物（0.5～2mm）を微量含む。
3．灰色シルト（10Y5/1）しまり強く、粘性やや弱い。砂粒（0.5mm未満）を微量含む。

SB50





SD12
1．暗灰黄色シルト（2.5Y4/2）しまりやや強い、粘性やや弱い。黒褐色シルト（10～25mm）を微量含む。

SB50P1
1．黒色土（N1.5/0）しまり弱く、粘性強い。木質分解層。
2．オリーブ灰色土（5GY5/1）しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1mm）を微量、オリーブ黒色土（5～10mm）を少量含む。

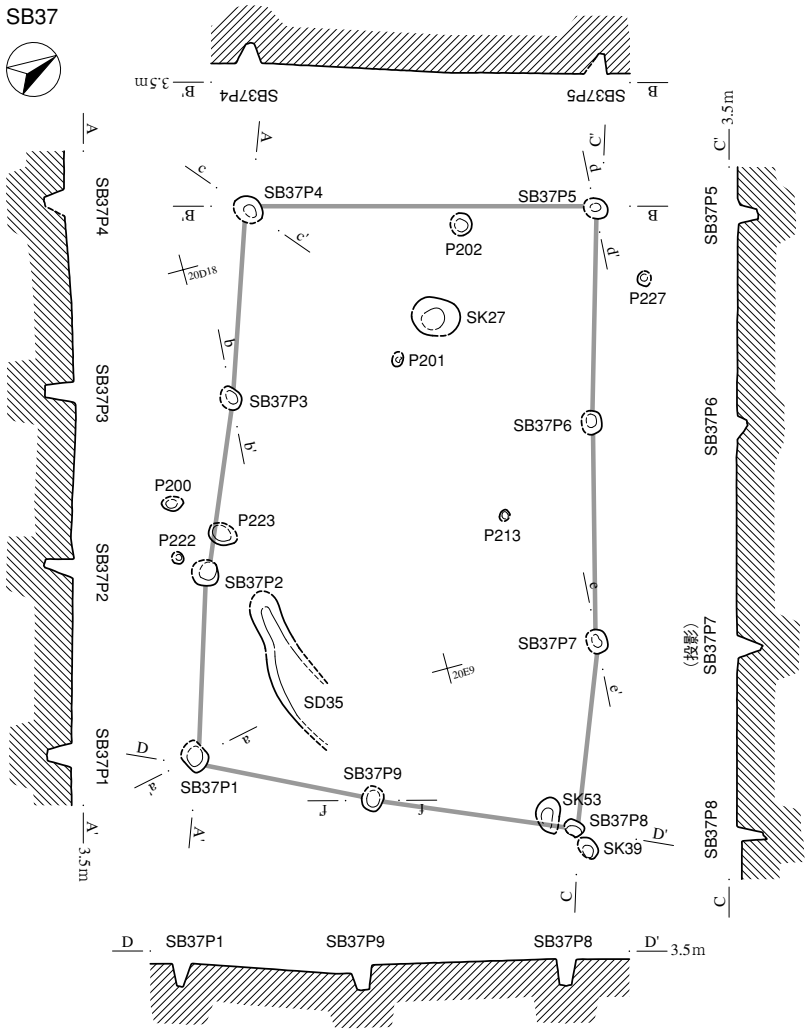
SB50P3
1．黒色土（N1.5/0）しまり弱く、粘性強い。木質分解層。
2．灰色シルト（10Y6/1）しまり強く、粘性やや強い。炭化物（0.5mm）を微量、砂粒（0.5mm）を少量含む。

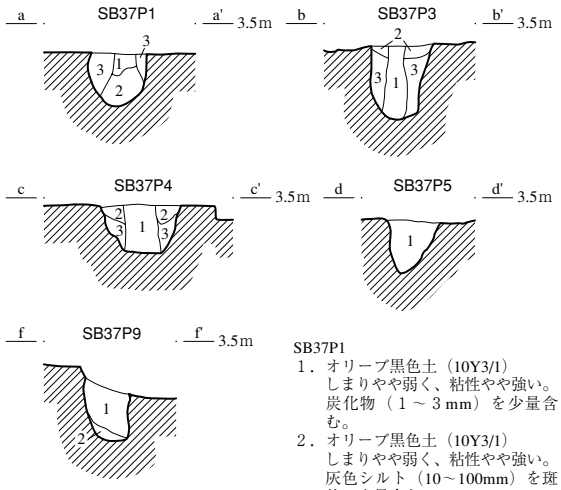
SB50P6
1．灰色シルト（10Y6/1）しまりやや強く、粘性弱い。炭化物（1～3mm）を少量含む。

※試掘時に確認されたピット

平面図/エレベーション図　0　（1：100）　4m　　断面図　0　（1：40）　2m

SB37





SB37P1
1．オリーブ黒色土（10Y3/1）
しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1～3mm）を少量含む。
2．オリーブ黒色土（10Y3/1）
しまりやや弱く、粘性やや強い。灰色シルト（10～100mm）を斑状に中量含む。
3．灰色シルト（10Y5/1）
しまりやや強く、粘性やや弱い。

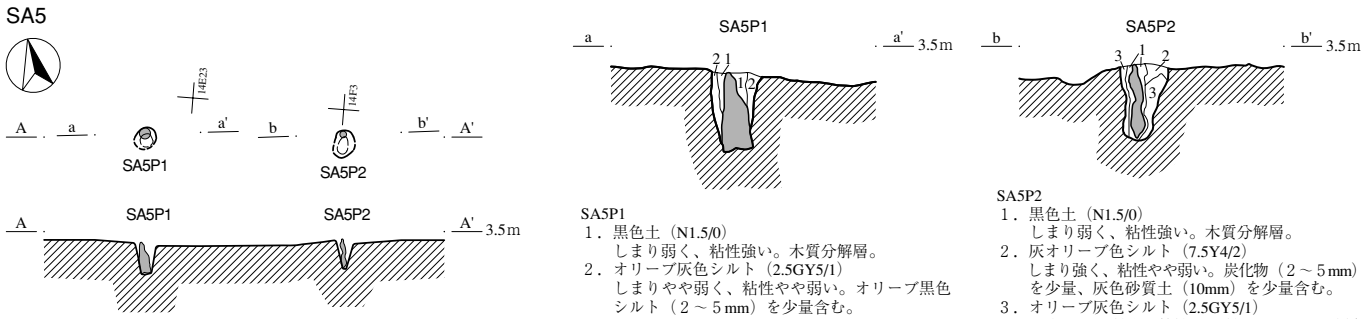
SB37P3
1．オリーブ黒色土（10Y3/1）
しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（0.5～1mm）を微量、灰色シルト（5～10mm）を少量含む。
2．灰色シルト（10Y4/1）
しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（1mm）を微量含む。
3．灰色シルト（10Y6/1）
しまりやや強く、粘性弱い。炭化物（1～3mm）を少量含む。

SB37P4
1．オリーブ黒色土（5GY2/1）
しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1～2mm）を微量、灰色シルト（10～100mm）を斑状に中量含む。
2．灰色シルト（10Y4/1）
しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（1～2mm）を微量含む。
3．灰色シルト（10Y6/1）
しまりやや強く、粘性弱い。炭化物（1～3mm）を少量含む。

SB37P5
1．灰色シルト（10Y4/1）
しまりやや弱く、粘性やや弱い。炭化物（1～5mm）を少量、灰色シルト（5～30mm）を斑状に中量含む。

SB37P9
1．オリーブ黒色土（10Y3/1）
しまりやや弱く、粘性やや強い。灰色シルト（5～100mm）を斑状に中量含む。
2．灰色シルト（10Y5/1）
しまり弱く、粘性強い。炭化物（1～3mm）を微量含む。

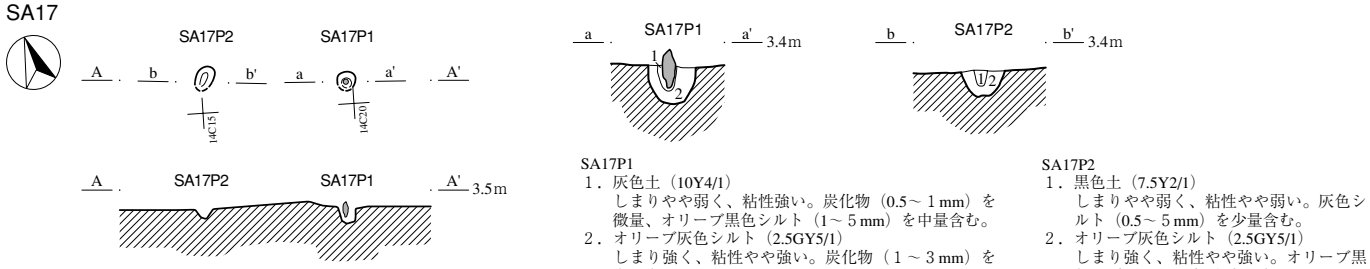
SA5



SA5P1
1．黒色土（N1.5/0）
しまり弱く、粘性強い。木質分解層。
2．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）
しまりやや弱く、粘性やや弱い。オリーブ黒色シルト（2～5mm）を少量含む。

SA5P2
1．黒色土（N1.5/0）
しまり弱く、粘性強い。木質分解層。
2．灰オリーブ色シルト（7.5Y4/2）
しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（2～5mm）を少量、灰色砂質土（10mm）を少量含む。
3．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）
しまりやや弱く、粘性やや弱い。オリーブ黒色シルト（2～5mm）を少量含む。

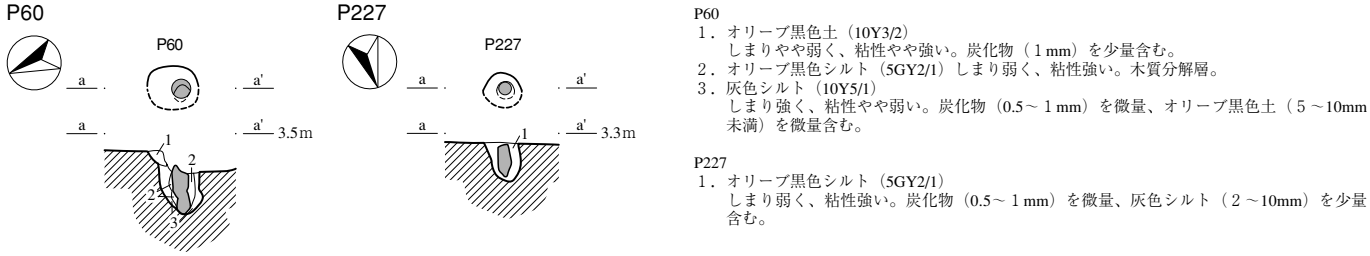
SA17



SA17P1
1．灰色土（10Y4/1）
しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（0.5～1mm）を微量、オリーブ黒色シルト（1～5mm）を中量含む。
2．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）
しまり強く、粘性やや強い。炭化物（1～3mm）を微量含む。

SA17P2
1．黒色土（7.5Y2/1）
しまりやや弱く、粘性やや弱い。灰色シルト（0.5～5mm）を少量含む。
2．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）
しまり強く、粘性やや強い。オリーブ黒色土（5～30mm）を少量含む。

P60　P227



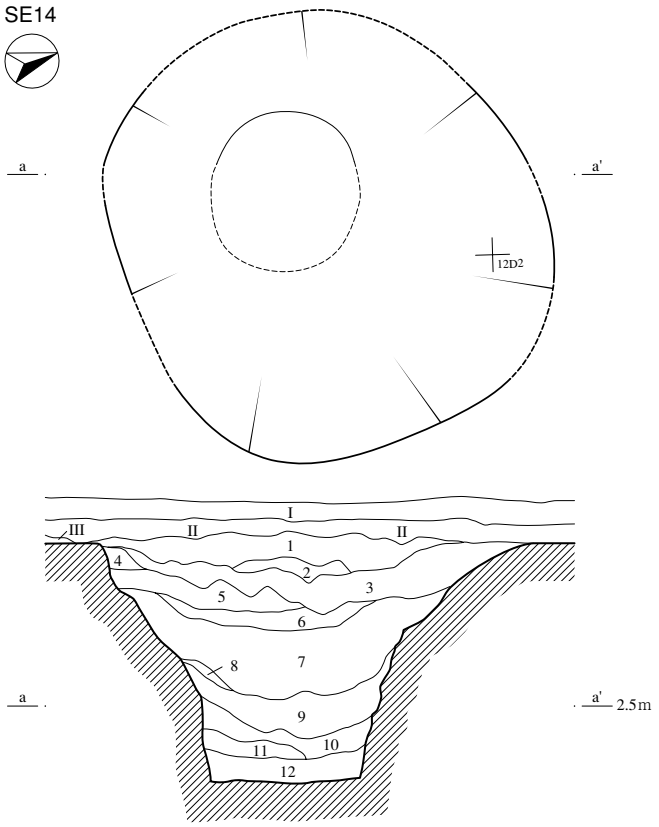
P60
1．オリーブ黒色土（10Y3/2）
しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1mm）を少量含む。
2．オリーブ黒色シルト（5GY2/1）しまり弱く、粘性強い。木質分解層。
3．灰色シルト（10Y5/1）
しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（0.5～1mm）を微量、オリーブ黒色土（5～10mm未満）を微量含む。

P227
1．オリーブ黒色シルト（5GY2/1）
しまり弱く、粘性強い。炭化物（0.5～1mm）を微量、灰色シルト（2～10mm）を少量含む。

平面図/エレベーション図　0　（1：100）　4m

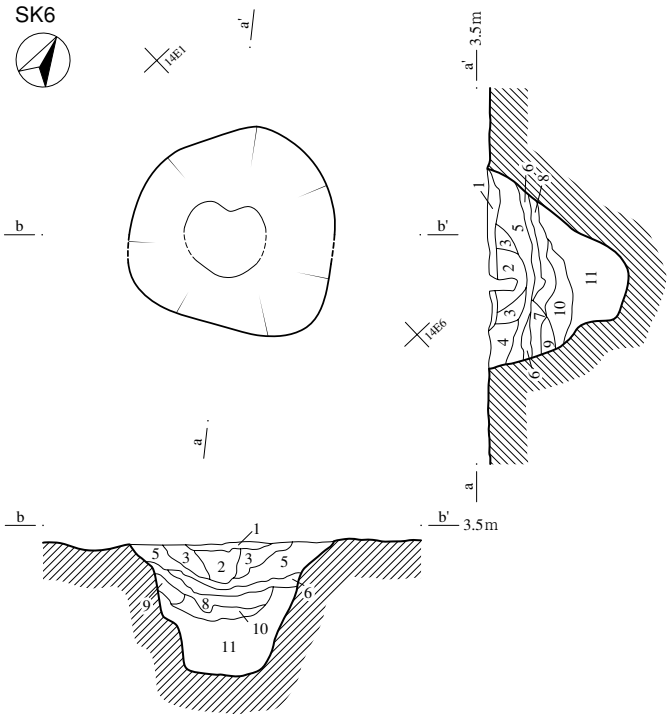
断面図/P60・P227平面図　0　（1：40）　2m

SE14



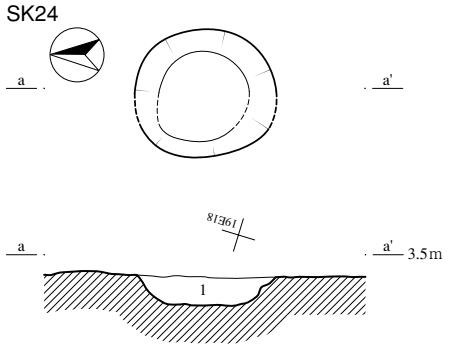
1．オリーブ黒色土（10Y3/1）しまり強く、粘性弱い。炭化物（1～2mm）、オリーブ灰色シルト（5mm）を微量含む。
2．灰色土（10Y4/1）しまりやや弱く、粘性やや弱い。炭化物（1～2mm）、オリーブ灰色シルト（5～10mm）を少量含む。
3．オリーブ黒色土（7.5Y3/2）しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1～5mm）、オリーブ灰色シルト（5～10mm）を少量含む。
4．灰オリーブ色砂（5Y4/2）しまりやや弱く、粘性やや弱い。炭化物（1～2mm）、オリーブ黒色シルト（5mm）を少量含む。
5．灰色砂質シルト（5Y4/1）しまりやや強く、粘性やや強い。オリーブ黒色シルト（10mm）を少量、帯状（厚さ3mm）に炭化物を含む。
6．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（1～2mm）を少量含む。
7．緑灰色粘質シルト（10GY5/1）しまり弱く、粘性強い。砂粒を少量含む。
8．緑灰色砂質シルト（10GY6/1）しまり弱く、粘性やや弱い。
9．青灰色砂質シルト（10BG5/1）しまり弱く、粘性やや強い。褐灰色土（植物腐植土）をマーブル状、ブロック状に多量含む。
10．緑灰色砂質シルト（10GY5/1）しまり弱く、粘性やや弱い。
11．緑灰色粘質シルト（10GY5/1）しまり弱く、粘性強い。マーブル状に褐灰色粘性シルト（植物腐食土）を少量含む。
12．緑灰色粘質シルト（10GY5/1）しまり弱く、粘性強い。褐灰色土（植物腐植土）をマーブル状・ブロック状に多量、砂粒（地山）を少量含む。

SK6



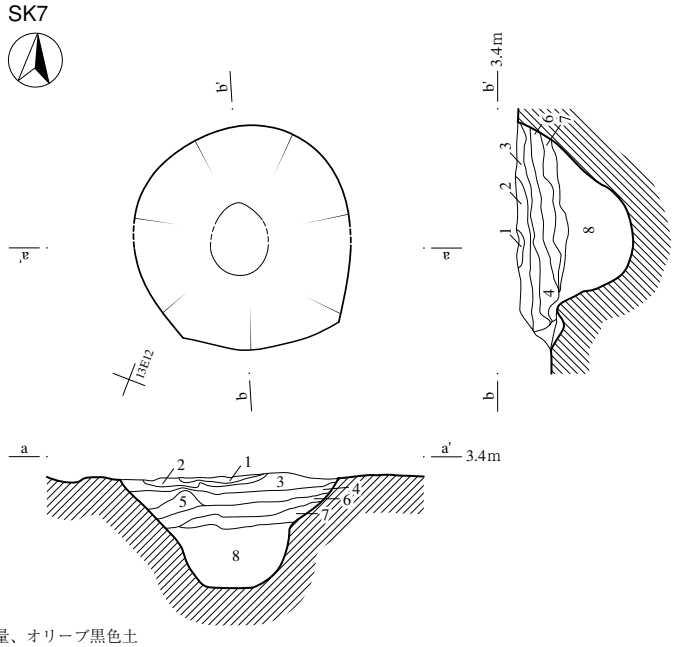
1．オリーブ黒色土（10Y3/1）しまり強く、粘性強い。炭化物（1～2mm）を中量、黄褐色土粒（2mm）を微量含む。
2．灰色シルト（7.5Y4/1）しまり強く、粘性やや弱い。オリーブ黒色土（5mm）を少量含む。
3．灰色シルト（10Y4/1）しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（0.5～1mm）を少量含む。
4．明オリーブ灰色シルト（5GY7/1）しまりやや弱く、粘性やや弱い。炭化物（0.5mm未満）を微量、オリーブ黒色土（2～5mm）を少量含む。
5．オリーブ灰色シルト（5GY6/1）しまりやや弱く、粘性やや弱い。炭化物（0.5mm未満）を微量、オリーブ黒色土（2～5mm）を少量含む。
6．暗オリーブ色シルト（5GY4/1）しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（0.5mm未満）を微量、オリーブ黒色土（2～5mm）を少量含む。
7．オリーブ灰色シルト（5GY5/1）しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（0.5～5mm）を微量、オリーブ黒色土（1～2mm）を少量、オリーブ灰色土（1～2mm）を少量含む。
8．暗オリーブ灰色シルト（2.5GY4/1）しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（0.5～5mm）を微量、オリーブ黒色シルト（1～2mm）を斑状に中量、オリーブ灰色土（1～2mm）を少量含む。
9．灰色シルト（7.5Y5/1）しまりやや弱く、粘性強い。オリーブ黒色土（5～10mm）を少量含む。
10．暗灰色シルト（N3/0）しまりやや弱く、粘性強い。中央付近に炭化物（3～5mm）を多量、オリーブ灰色シルト（0.5～10mm）を少量含む。
11．暗オリーブ灰色シルト（2.5GY4/1）しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（0.5mm未満）を微量、オリーブ黒色シルト（5mm）を少量含む。

SK24



SK24
1．黒色土（10YR1.7/1）
しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂粒（径1mm）を微量、オリーブ灰色シルト（5～15mm）を少量含む。

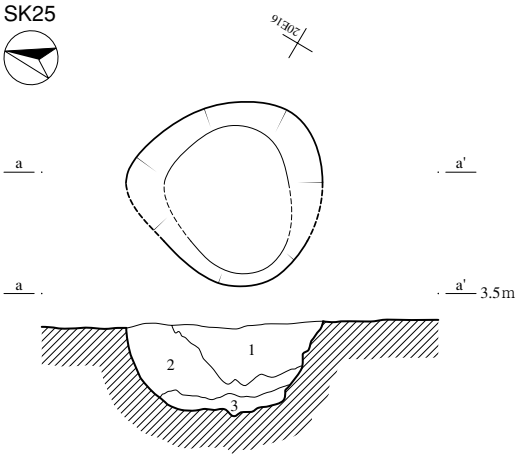
SK7



SK7
1．青黒色土（5BG2/1）しまり強く、粘性強い。炭化物（1～5mm）を多量、灰色シルト（5～30mm）を中量含む。
2．暗オリーブ灰色土（2.5GY3/1）しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（1～2mm）を中量、灰色シルト（5～20mm）を中量含む。
3．灰色シルト（10Y4/1）しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（1～2mm）を少量含む。
4．オリーブ黒色土（10Y3/1）しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（1～5mm）を中量、灰色シルト（10mm）を微量含む。
5．暗オリーブ灰色シルト（2.5GY3/1）しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（3～5mm）を少量、オリーブ黒色土（5～10mm）を多量、灰色シルト（10～20mm）を中量含む。
6．オリーブ灰色シルト（5GY5/1）しまり強く、粘性強い。炭化物（1mm）を微量、灰色シルト（10～20mm）を中量含む。しまりやや強く、粘性強い。灰色シルト（3～5mm）を少量含む。
7．暗オリーブ灰色シルト（2.5GY4/1）しまりやや強く、粘性強い。灰色シルトブロック（3～5mm）を少量含む。
8．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（0.5mm未満）を微量、灰色シルト（2～5mm）を少量含む。

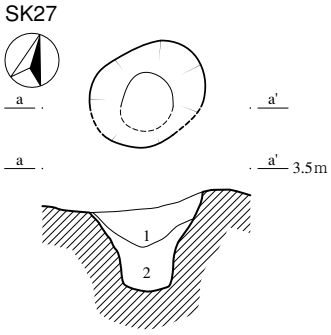
0　（1：40）　2m

SK25



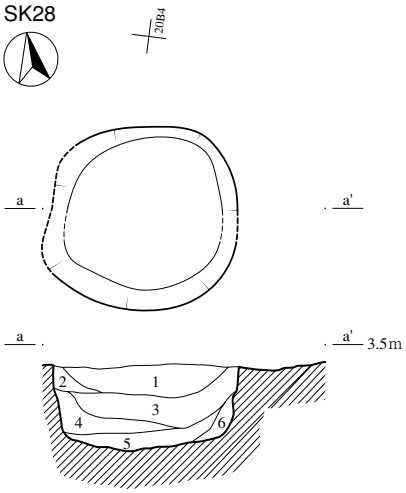
SK25
1．灰色シルト（7.5Y5/1）
　しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1～2mm）を少量、黒色土（30～100mm）を斑状に中量含む。
2．灰色シルト（7.5Y5/1）
　しまりやや弱く、粘性やや強い。黒色土（30～100mm）を少量含む。
3．黒褐色土（10YR3/1）
　しまり弱く、粘性強い。未分解の植物質繊維を含む。

SK27



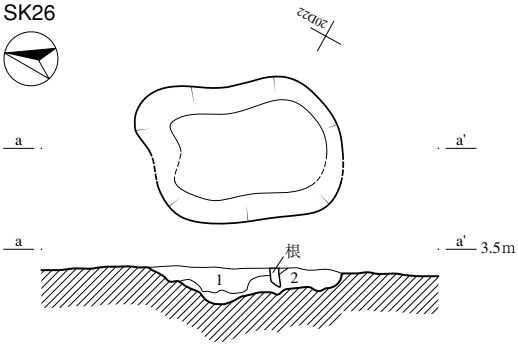
1．オリーブ黒色シルト（7.5Y3/1）
　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（3～10mm）を少量、灰色シルト（5～20mm）を斑状に中量含む。また層上部に花崗岩の破砕礫が多くみられる。
2．灰色シルト（10Y5/1）
　しまり弱く、粘性強い。オリーブ黒色シルトと灰色シルトの混合層。炭化物（5～30mm）を少量含む。

SK28



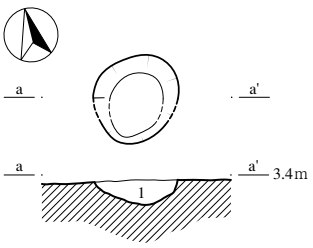
1．オリーブ黒色シルト（10Y3/1）
　しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1～2mm）を少量、灰色シルト（10～100mm）を中量含む。
2．灰オリーブ色シルト（7.5Y5/2）
　しまりやや強く、粘性やや弱い。オリーブ黒色土（2～5mm）を少量含む。
3．灰色シルト（7.5Y5/1）
　しまりやや強く、粘性強い。炭化物（0.5～1mm）を微量含む。
4．灰色シルト（10Y4/1）
　しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（1～2mm）を少量、オリーブ灰色シルト（10～20mm）を微量含む。
5．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）
　しまり弱く、粘性強い。炭化物（0.5～1mm）を微量含む。
6．灰色シルト（7.5Y5/1）
　しまり弱く、粘性強い。炭化物（0.5～1mm）を微量含む。

SK26



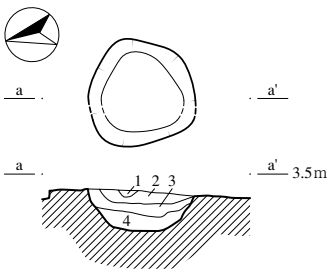
SK26
1．灰色シルト（10Y4/1）
　しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1～10mm）を少量、オリーブ灰色シルト（10mm）を微量含む。
2．灰色シルト（7.5Y5/1）
　しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1～5mm）を微量、オリーブ黒色土（10～30mm）を少量含む。

SK30



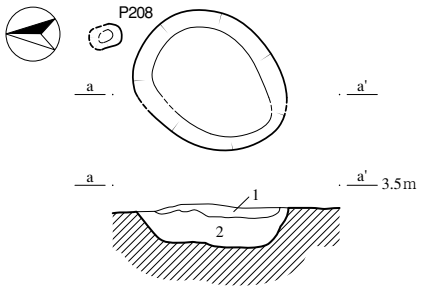
1．灰オリーブ色シルト（5Y4/2）
　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（0.5～10mm）を多量、焼土（20～50mm）を中量含み、遺物がやや多く混入する。

SK31



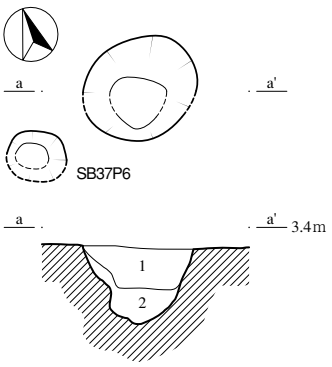
1．オリーブ黒色土（10Y3/1）
　しまり強く、粘性弱い。炭化物を中量（10～20mm）、オリーブ黒色シルト（10～30mm）を少量含む。
2．灰色土（7.5Y4/1）
　しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（5mm）を微量、焼土5～10mm）を少量含む。
3．オリーブ黒色土（10Y3/1）
　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（10～30mm）を中量、焼土（10～20mm）を少量含む。
4．灰色土（7.5Y5/1）
　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（3～5mm）を微量、オリーブ黒色シルト（5～20mm）を少量含む。

SK32



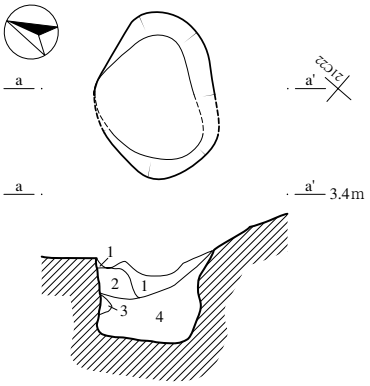
1．灰色土（7.5Y4/1）
　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（5～20mm）、焼土（10mm）を中量、オリーブ黒色シルトを多量含む。
2．灰色土（7.5Y5/1）
　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（3～5mm）を微量、オリーブ黒色シルト（5～20mm）を少量含む。

SK33



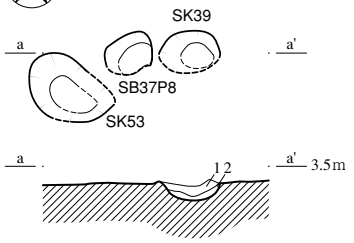
1．灰色土（10Y4/1）
　しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（1～5mm）を少量含む。
2．灰色土（10Y4/1）
　しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（0.5～1mm）を微

SK36



SK36　1．黒色土（10Y2/1）しまり弱く、粘性強い。炭化物（1～2mm）を少量含む。
　2．灰色土（10Y5/1）しまりやや弱く、粘性やや弱い。
　　オリーブ黒色シルト（5～20mm）を少量含む。
　3．灰色土（10Y4/1）しまり弱く、粘性やや強い。炭化物（1～2mm）を少量含む。
　4．オリーブ黒色土（5GY2/1）しまり弱く、粘性強い。未分解植物質を含む。

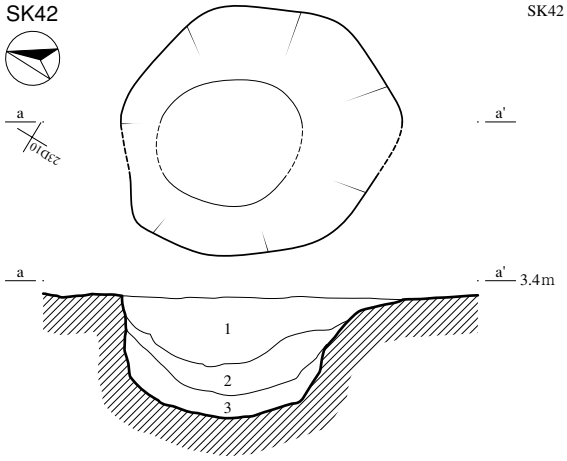
SK39



1．暗オリーブ灰色土（5GY4/1）
　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（2～5mm）を中量、上部に礫1点を含む。
2．灰色土（7.5Y5/1）
　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（2～5mm）を少量含む。

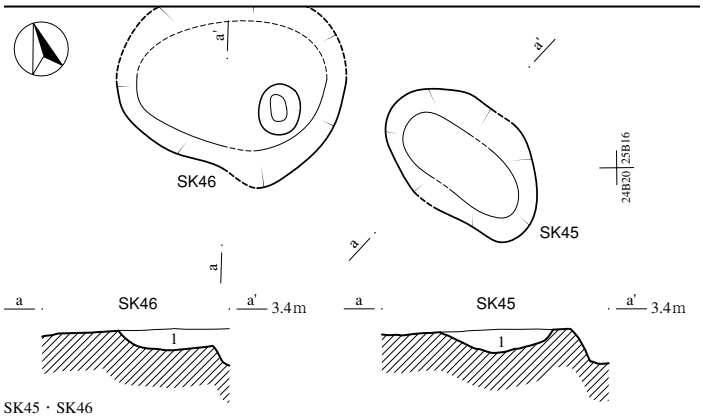
0　（1：40）　2m

SK42



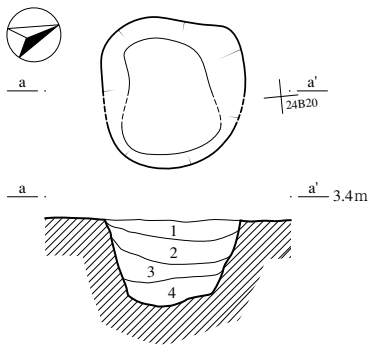
SK42
1．黒色土（10Y2/1）しまりやや弱く、粘性やや強い。
炭化物（1～10mm）を中量、灰色シルト（3～10mm）を少量含む。
2．暗オリーブ灰色シルト（2.5GY3/1）
しまりやや弱く、粘性やや弱い。炭化物（1～5mm、稀に20mm）を少量含む。
3．灰色土（10Y5/1）しまりやや弱く、粘性強い。
炭化物（1～3mm）を微量、暗灰色シルト（5mm）を少量含む。底部付近で帯状の木皮を含む。

SK45・SK46



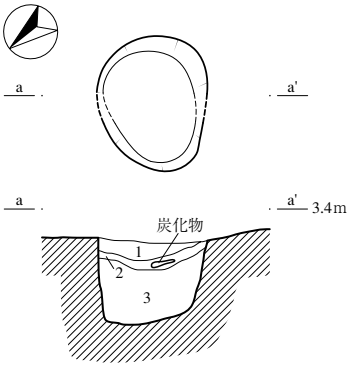
SK45・SK46
1．灰色土（10Y4/1）
しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（1～2mm）を微量含む。周りのIV層より黒味が強い。

SK44



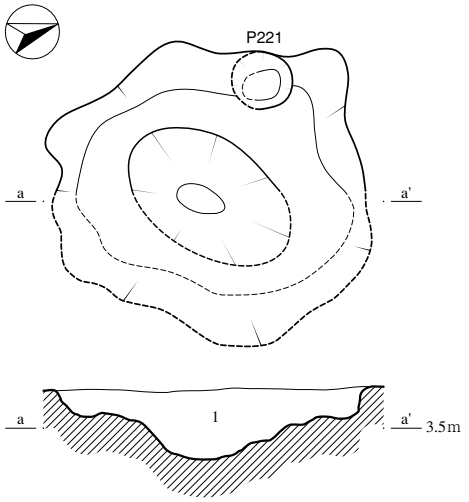
1．オリーブ黒色粘質土（10Y3/1）
しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（1～5mm）を少量、灰色粘質土（2～10mm）を中量含む。
2．灰色土（10Y4/1）
しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1～2mm）、オリーブ黒色粘質土（3～10mm）を少量含む。
3．灰色シルト（10Y5/1）
しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1～2mm）を少量含む。
4．灰色土（7.5Y6/1）
しまり弱く、粘性やや強い。炭化物（0.5～1

SK47



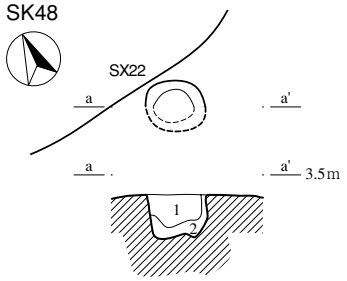
SK47
1．オリーブ黒色土（5Y3/2）
しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1～10mm）を中量、灰色シルト（5mm）を少量、砂粒（1mm）を微量含む。
2．灰色シルト（10Y5/1）
しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1～30mm）を中量、オリーブ黒色シルト（10～20mm）を少量含む。炭化物が一部帯状に混入する。
3．灰色シルト（7.5Y6/1）
しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（1～10mm）、オリーブ黒色シルト（10～30mm）を中量含む。

SK49



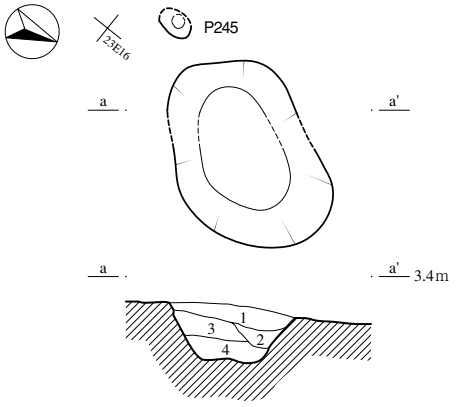
1．灰色土（7.5Y4/1）
しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（3～20mm）、オリーブ黒色シルト（10～50mm）中量含む。

SK48



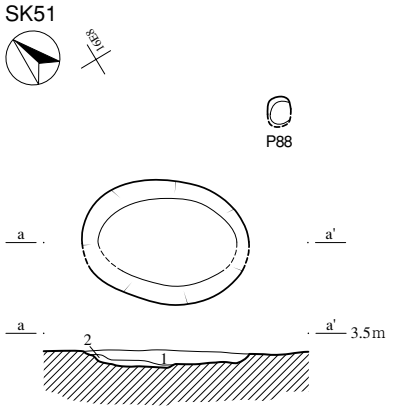
SK48
1．オリーブ黒色土（7.5Y3/1）
しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（2～5mm）を少量含む。
2．灰色シルト（10Y4/1）
しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（2～5mm）を少量、オリーブ黒色シルト（2～50mm）を少量含む。

SK56



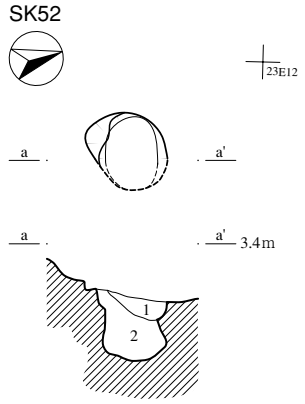
1．褐灰色砂質シルト（7.5YR4/1）
しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1～23mm）を多量、焼土を少量含む。
2．黄灰色シルト（2.5Y5/1）
しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（1～9mm）を多量含む。この層から土器が多く出土。
3．暗灰黄色シルト（2.5Y5/2）
しまりやや強く、粘性強い。炭化物（1～14mm）を微量含む。
4．灰色シルト（5Y5/1）
しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（1～5mm）を少量含む。

SK51



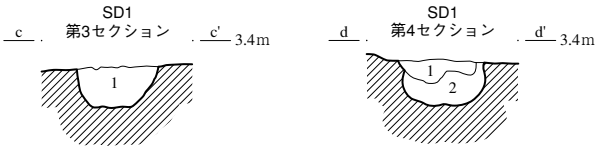
1．灰色シルト（10Y4/1）しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（1～3mm）を少量、暗灰色シルト（5～20mm）を少量含む。
2．灰色シルト（10Y6/1）しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1mm）を微量含む。

SK52



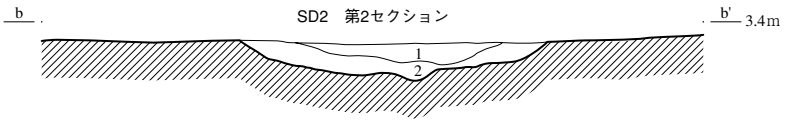
1．褐灰色土（10YR5/1）
しまりやや弱く、粘性やや弱い。炭化物（2～5mm）を少量含む。
2．褐色土（10YR4/4）
しまり弱く、粘性強い。未分解植物質を含む。

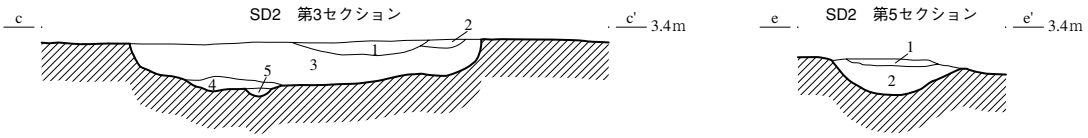
0　（1：40）　2m



SD1-4
1．暗オリーブ灰色土（5GY4/1）しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（0.5mm未満）を少量含む。
2．灰色シルト（10Y5/1）しまり弱く、粘性強い。炭化物（0.5mm未満）を少量含む。

SD1-3
1．灰色シルト（10Y5/1）しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（0.5mm未満）、砂粒を微量含む。

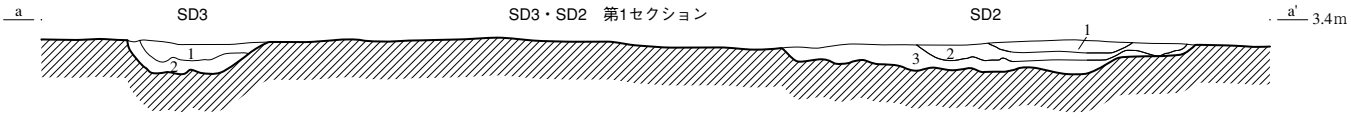


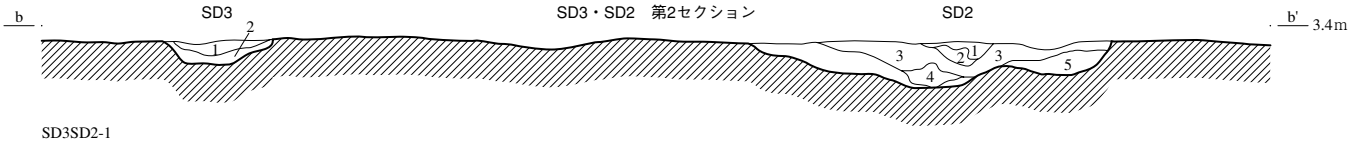


SD2-2
1．オリーブ黒色土（10Y3/1）　しまり強く、粘性強い。炭化物（1～10mm）、灰色シルト（10㎜）、砂粒（0.5mm未満）を少量含む。
2．オリーブ灰色シルト（5GY5/1）　しまりやや強く、粘性強い。暗灰色シルト（5mm）を微量含む。

SD2-3
1．オリーブ黒色土（10Y3/1）　しまり強く、粘性強い。炭化物（1～10mm）、灰色シルト（10mm）、砂粒（0.5mm未満）を少量含む。
2．灰色砂質土シルト（10Y5/1）　しまり強く、粘性弱い。　炭化物（0.5～1mm)を微量含む。
3．オリーブ灰色シルト（5GY5/1）　しまりやや強く、粘性強い。暗灰色シルト（5mm）を微量含む。
4．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）　しまりやや弱く、粘性強い。砂質土とシルトの混合。
5．灰色土（10Y4/1）　しまり弱く、しまり非常に強い。炭化物（3㎜）を微量含む。

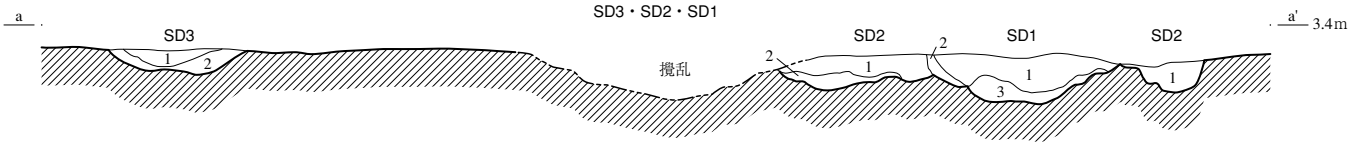
SD2-5
1．オリーブ黒色土（10Y3/1）　しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（0.5～1㎜）を少量含む。
2．灰色シルト（10Y5/1）　しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1mm）を微量、暗灰色シルト（5～10mm）を少量含む。





SD3SD2-1
SD2
1．オリーブ黒色土（10Y3/1）　しまり強く、粘性やや強い。炭化物（3～5㎜）を少量、オリーブ灰色シルトを斑上に含む。
2．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）　しまり強く、粘性やや強い。炭化物（2～3㎜）、暗灰色シルト（10㎜）を少量含む。
3．灰色シルト（10Y6/1）　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（1～2㎜）を微量、マーブル状に暗灰色シルト（10㎜）を少量含む。
SD3
1．オリーブ黒色土（10Y3/2）　しまり強く、粘性やや強い。炭化物（1～5㎜）、砂粒（0.5未満～1㎜）を少量含む。
2．オリーブ灰色シルト（5GY5/1）　しまり強く、粘性強い。炭化物（1～2㎜）を微量、マーブル状に暗灰色シルト（5～10㎜）を少量含む。

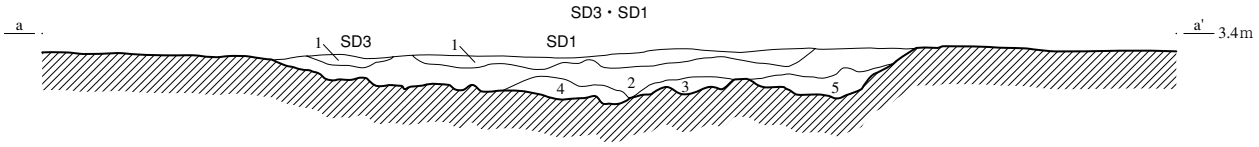
SD3SD2-2
SD2
1．オリーブ黒色土（10Y3/1）　しまり強く、粘性やや強い。炭化物（3～5㎜）を少量、オリーブ灰色シルトを斑状に含む。
2．暗オリーブ灰色土（5GY3/1）　しまり強く、粘性強い。炭化物（1～3㎜）、暗灰色シルト（5㎜）を少量含む。
3．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）　しまり強く、粘性やや強い。炭化物（2～3㎜）、暗灰色シルト（10㎜）を少量含む。
4．灰色シルト（10Y5/1）　しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（0.5～1㎜）、砂粒（0.5mm未満）を微量含む。
5．灰色シルト（10Y6/1）　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（1～2㎜）を微量、マーブル状に暗灰色シルト（10㎜）を少量含む。
SD3
1．オリーブ黒色土（10Y3/2）　しまり強く、粘性やや強い。炭化物（1～5㎜）、砂粒（0.5未満～1㎜）を少量含む。
2．オリーブ灰色シルト（5GY5/1）　しまり強く、粘性強い。炭化物（1～2㎜）を微量、マーブル状に暗灰色シルト（5～10㎜）を少量含む。



SD3SD2SD1
SD1
1．オリーブ黒色土（7.5Y3/2）　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（0.5～1㎜)を少量含む。
2．オリーブ黒色土（7.5Y2/2）　しまりやや強く、粘性やや強い。SD1の1層とSD2の1層の混合層、SD1の1層より黒味が強い。
3．灰色シルト（10Y5/1）　しまり弱く、粘性強い。炭化物（0.5mm）を微量、砂粒（0.5mm未満）を微量含む。
SD2
1．オリーブ黒色土（10Y3/1）　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（1～3mm)、マーブル状にオリーブ灰色シルト（5～20mm）を少量含む。
南西側は水の影響を受けた可能性あり。
2．灰色シルト（10Y5/1）　しまりやや強く、粘性強い。炭化物（1mm）、暗灰色シルト（5～10mm）を微量含む。
SD3
1．オリーブ黒色土（10Y3/2）　しまり強く、粘性やや強い。炭化物（0.5～3㎜）、砂粒（0.5㎜未満）を少量含む。
2．オリーブ灰色シルト（5GY5/1）　しまり強く、粘性強い。炭化物（1～2㎜）を微量、マーブル状に暗灰色シルト（5～10㎜）を少量含む。

0　（1：40）　2m

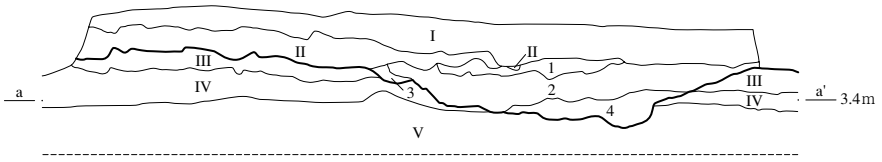
SD3・SD1



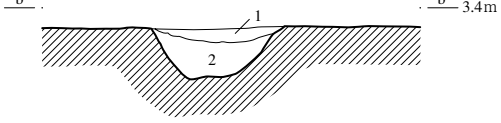
SD1SD3

1．オリーブ黒色土（10Y3/1）　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（１～３㎜）、砂粒（0.5未満～１㎜）を少量含む。
2．暗オリーブ灰色シルト（2.5GY4/1）　しまり強く、粘性強い。炭化物（0.5～１㎜）を微量、暗灰色シルト（５～10㎜）を少量含む。
3．灰色シルト（10Y5/1）　しまり弱く、粘性強い。炭化物（0.5㎜）、砂粒（0.5㎜未満）を微量含む。
4．灰色シルト（7.5Y5/1）　しまり弱く、粘性強い。炭化物（0.5～１㎜）、砂粒（0.5未満）、暗灰色シルト（５～15㎜）を微量含む。
5．灰色シルト（10Y6/1）　しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（0.5～１㎜）を微量、砂粒（0.5未満）を少量含む。

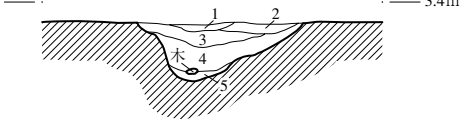
SD3　第1セクション



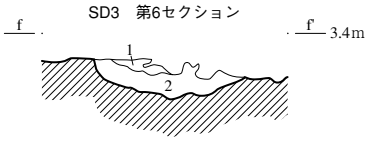
SD3　第2セクション



SD3　第4セクション



SD3　第6セクション



SD3-1

1．オリーブ黒色土（10Y3/1）　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（１～３㎜）を少量、砂粒（0.5未満～１㎜）を微量含む。
2．暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）　しまり強く、粘性強い。炭化物（0.5～１㎜）を微量、暗灰色シルト（５～10㎜）を少量含む。
3．灰色土（10Y4/1）　しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（１～２㎜）を少量、灰色シルト（３～５㎜）を中量含む。
4．灰色シルト（7.5Y5/1）　しまり弱く、粘性強い。炭化物（0.5～１㎜）、砂粒（0.5未満）を微量含む。

SD3-2

1．オリーブ黒色土（7.5Y2/2）　しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（0.5～１㎜）、砂粒（0.5未満）を少量含む。
2．灰色土（10Y4/1）　しまり強く、粘性やや強い。炭化物（0.5～１㎜）、砂粒（0.5未満）を微量、斑状に灰色・暗灰色シルトを含む。

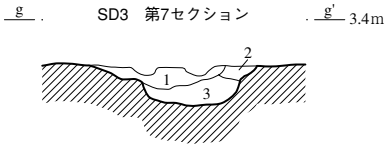
SD3-4

1．オリーブ黒色土（7.5Y2/2）　しまり強く、粘性普通。炭化物（0.5～１㎜）、砂粒（0.5未満）を少量含む。
2．オリーブ黒色土（7.5Y3/2）　しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（0.5～１㎜）を含む。
3．灰色土（10Y4/1）　しまり強く、粘性やや強い。炭化物（0.5～１㎜）、砂粒（0.5未満）を微量、斑状に灰色・暗灰色シルトを含む。
4．灰色シルト（7.5Y5/1）　しまりやや強く、粘性強い。炭化物（0.5㎜）、砂粒（0.5未満）を微量含む。
5．灰オリーブ色シルト（7.5Y5/2）　しまりやや強く、粘性強い。炭化物（0.5㎜）を微量、地山の砂粒を中量含む。

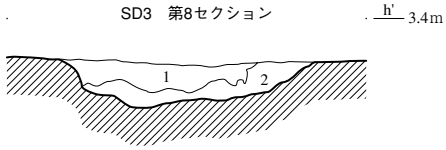
SD3-6

1．オリーブ黒色土（10Y3/2）　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（0.5未満～３㎜）、灰色シルト（５～10㎜）を少量含む。
2．灰色シルト（7.5Y5/1）　しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（１㎜）を微量含む。

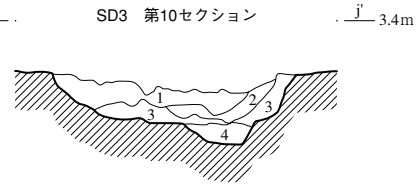
SD3　第7セクション



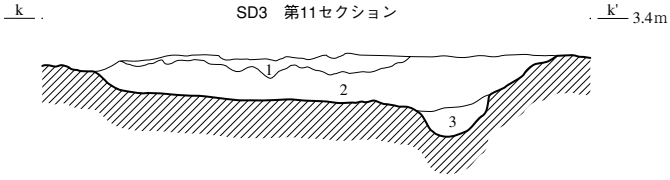
SD3　第8セクション



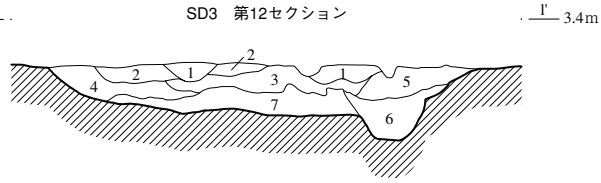
SD3　第10セクション



SD3　第11セクション



SD3　第12セクション



SD3-7
1．オリーブ黒色土（7.5Y3/1）　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（１～５㎜）を微量、灰色シルト（３～10㎜）を少量含む。
2．灰色シルト（7.5Y5/1）　しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（0.5～１㎜）を微量含む。
3．灰色シルト（7.5Y5/1）　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（0.5～１㎜）を微量含む。

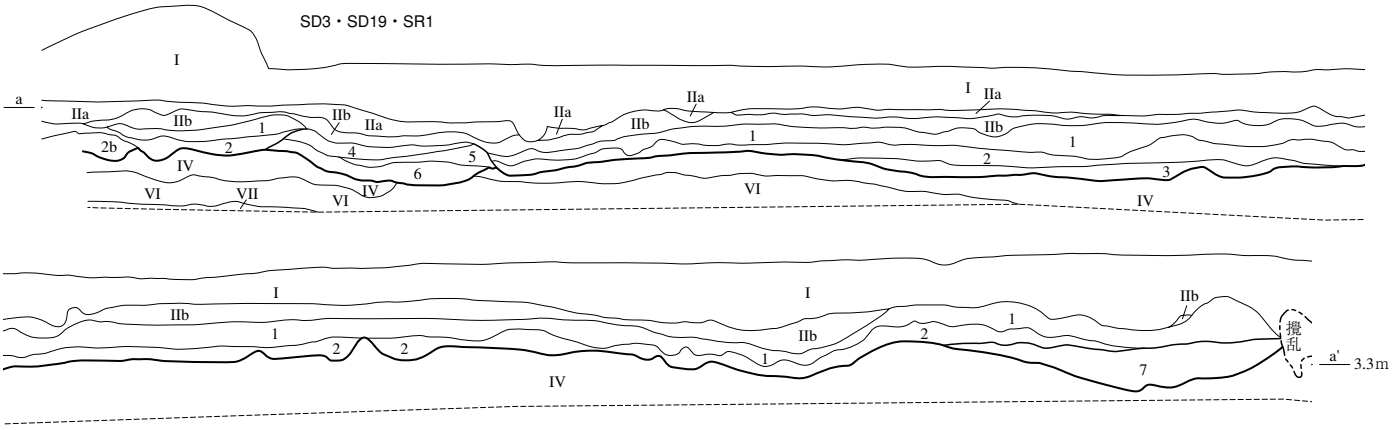
SD3-8
1．オリーブ黒色土（10Y3/1）　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（１～5㎜）、灰色シルト（３～10㎜）を少量含む。
2．灰色シルト（10Y6/1）　しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（0.5～１㎜）を微量含む。

SD3-10
1．オリーブ黒色土（7.5Y3/1）　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（１～３㎜）、灰色シルト（３～５㎜）を少量含む。
2．暗オリーブ灰色シルト（2.5GY4/1）　しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（0.5～１㎜）、灰色シルト（３～５㎜）を微量含む
3．灰色シルト（10Y4/1）　しまりやや強く、粘性強い。炭化物（１～３㎜）、灰色シルト（５～20㎜）を少量、地山の砂粒（0.5㎜未満）を多量含む。
4．灰オリーブ色シルト（7.5Y5/2）　しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（0.5～２㎜）を少量含む。

SD3-11
1．オリーブ黒色土（5GY2/1）　しまり強く、粘性やや強い。炭化物（0.5～１㎜）を微量、灰色シルト（３～10㎜）を少量含む。
2．灰色シルト（10Y4/1）　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（0.5～10㎜）、斑状に灰色シルト（３～20㎜）を少量、地山の砂粒を中量含む。
3．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）　しまりやや強く、粘性強い。炭化物（0.5～３㎜）を少量含む。

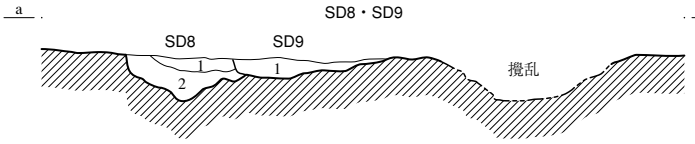
SD3-12
1．オリーブ黒色土（10Y3/1）　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（0.5～１㎜）を微量、灰色シルト（１～20㎜）を少量含む。
2．暗オリーブ灰色シルト（2.5GY4/1）　しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（0.5～１㎜）を微量、灰色シルト（５～10㎜）を中量含む。
3．灰色シルト（7.5Y4/1）　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（0.5～１㎜）を微量、灰色シルト（５～10㎜）を少量含む。
4．暗オリーブ灰色シルト（5GY4/1）　しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（0.5㎜）を微量、地山の砂粒を中量含む。
5．オリーブ灰色シルト（10Y4/2）　しまりやや強く、粘性強い。炭化物（0.5～２㎜）を少量含む。
6．オリーブ灰色シルト（5GY5/1）　しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（0.5～１㎜）を微量含む。
7．灰色砂質シルト（N4/0）　しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（0.5㎜）を微量、地山の砂粒を中量含む。

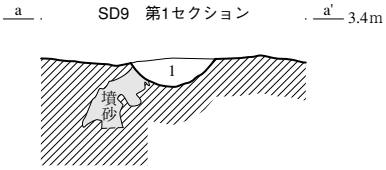
0　（1：40）　2m

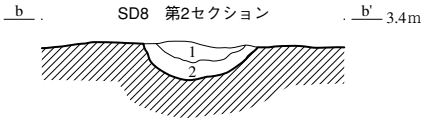


1．褐灰色シルト（10YR5/1）　しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（0.5～３mm）を微量、青灰色粘質シルト（IV層）を多量含む。
2．黒褐色シルト（10YR3/1）　しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（0.5～２mm）を微量含み、木片・繊維が混じる。
2b．IV層と２層の混合層。
3．黒褐色粘質シルト（2.5Y3/1）　しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（0.5～３mm）を少量含む。
4．黒褐色粘質シルト（2.5Y3/1）　しまり弱く、粘性強い。炭化物（0.5～１mm）を微量、灰色粘質シルト（IV層）を多量含む。
5．黒色粘質シルト（10YR2/1）　しまりやや強く、粘性強い。炭化物（0.5～３㎜）を微量含む。
6．褐灰色粘質シルト（7.5YR4/1）　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（0.5～３㎜）を微量、暗褐色シルト（10～15㎜）を少量含む。
7．褐灰色砂質シルト（7.5YR4/1）　しまりやや弱く、粘性普通。炭化物（0.5～３㎜）を微量、暗褐色シルト（10～15㎜）を少量含む。

SR1
SD19
SD3



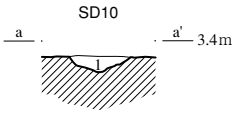




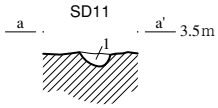
SD8SD9
SD8
1．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（１～３㎜）、砂粒（0.5㎜未満）を少量含む。
2．オリーブ灰色シルト（5GY6/1）　しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（１㎜）を微量、砂粒（0.5㎜未満）を少量含む。
SD9
1．灰色シルト（10Y5/1）　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（0.5未満～１㎜）を少量含む。

SD9-1
1．灰色シルト（10Y5/1）　しまりやや強く、粘性やや強い。
炭化物（0.5未満～0.5㎜）を微量、砂粒（0.5未満～0.5㎜）を少量含む。

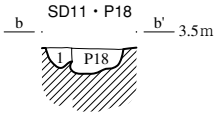
SD8-2
1．灰色土（5Y4/1）　しまり強く、粘性やや弱い。
炭化物（１㎜）を微量、オリーブ黒色シルト（10～30㎜）を少量含む。
2．灰色シルト（10Y5/1）　しまりやや強く、粘性やや強い。
炭化物（0.5～１㎜）、暗灰色シルト（10㎜）を少量含む。

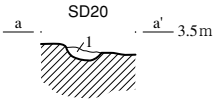


1．オリーブ黒色土（10Y3/2）
しまり強く、粘性やや弱い。
炭化物（１～３㎜）を少量、
斑状に灰色シルトを含む。

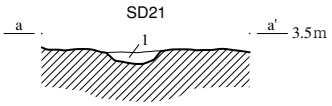


SD11
1．黒褐色シルト（10YR3/1）
しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（0.5～１mm）を微量、
粒子状に褐灰色シルト（５～10mm）を多量含む。

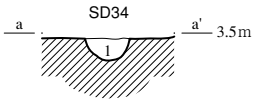




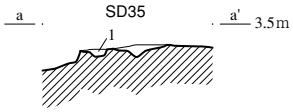
1．灰オリーブ色砂質土（5Y4/2）
しまり弱く、粘性弱い。炭化物（１～10mm）を中量、
斑状にオリーブ黒色シルトを少量含む。



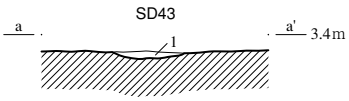
1．灰色砂質土（7.5Y5/1）
しまり強く、粘性弱い。炭化物（１～
10mm）を少量含む。

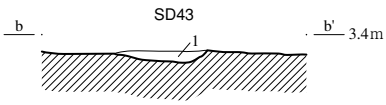


1．灰色シルト（5Y5/1）
しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（２～
10mm）を中量、斑状に暗灰色シルトを中量含む。



1．オリーブ黒色土(10Y3/1)
しまり強く、粘性やや弱い。炭化物（１～３mm）
を少量、灰色シルト（５～10mm）を少量含む。

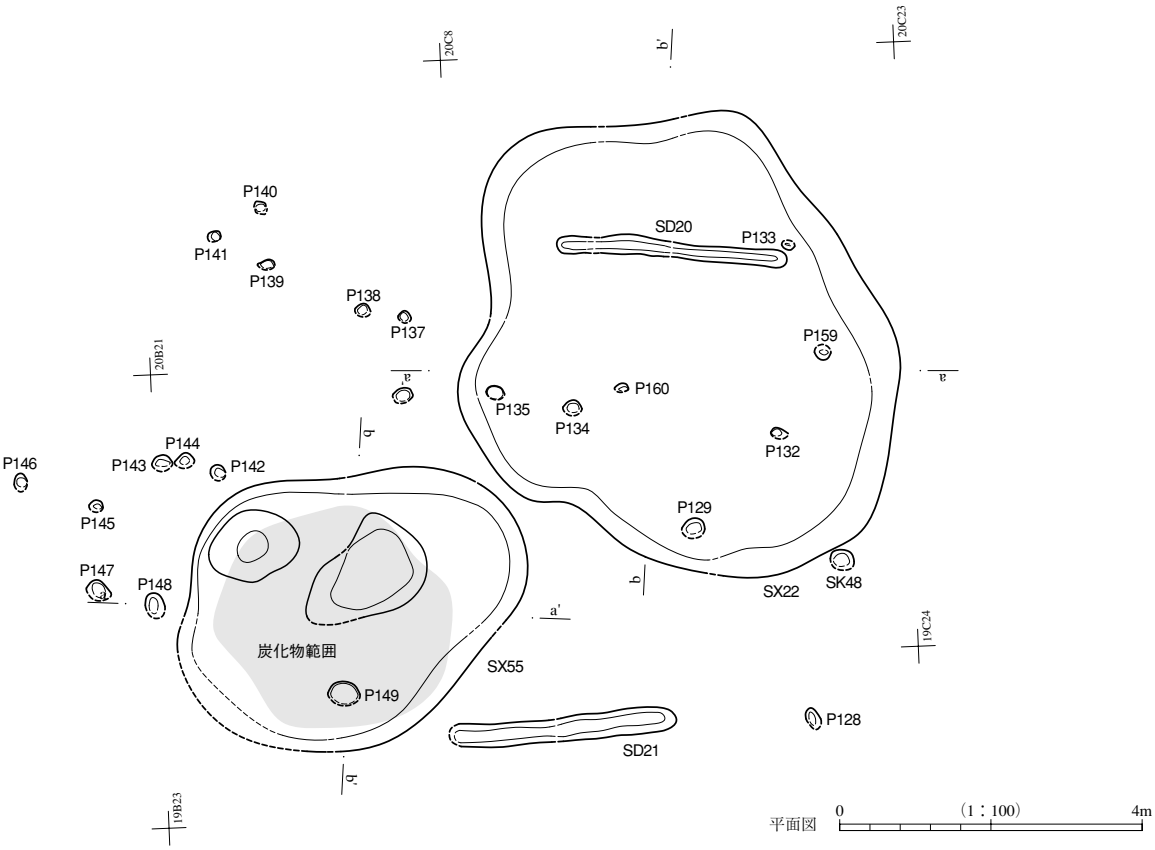


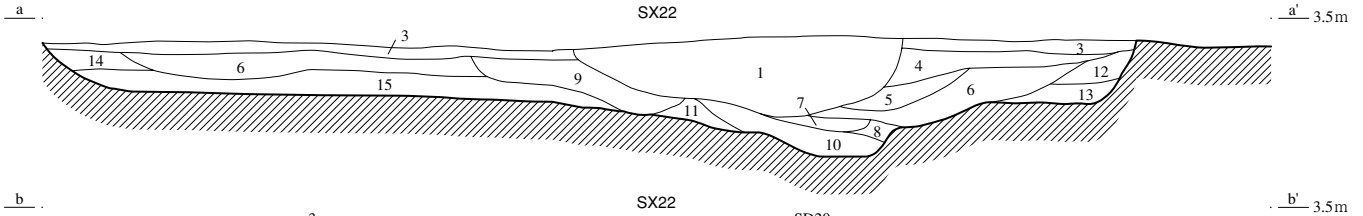


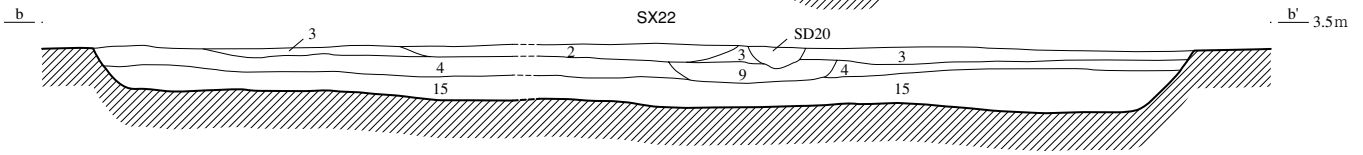
SD43
1．オリーブ黒色土（7.5Y3/1）
しまり強く、粘性やや弱い。
炭化物（１～２mm）を微量、灰色シルト（５～10mm）を少量含

0　（1：40）　2m

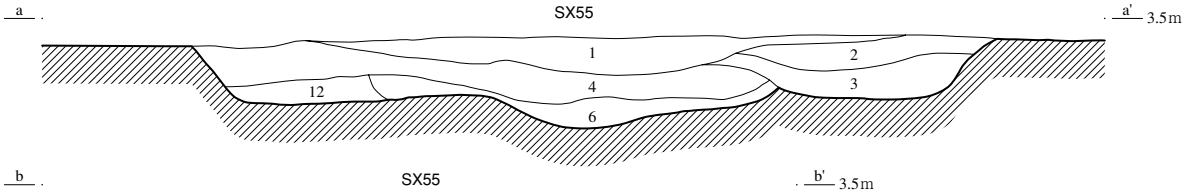
SX22・SX55

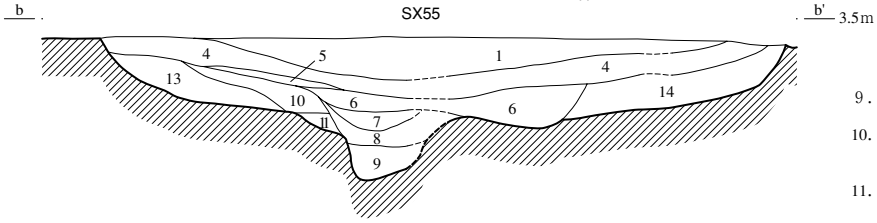






1．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）　しまりやや強く、粘性弱い。
2．黄灰色砂質土（2.5Y6/1）　しまりやや強く、粘性弱い。炭化物（5～10mm）を多量含む。
3．黄灰色砂質土（2.5Y6/1）　しまりやや強く、粘性弱い。炭化物（5～10mm）を中量含む。
4．灰色砂質シルト（5Y6/1）　しまり弱く、粘性弱い。
5．暗灰黄色砂質土（2.5Y5/2）　しまりやや弱く、粘性弱い。
6．灰色砂質シルト（5Y4/1）　しまりやや弱く、粘性弱い。炭化物（10～20mm）を多量含む。
7．灰色砂質シルト（7.5Y4/1）　しまりやや弱く、粘性強い。
8．灰色砂質シルト（5Y4/1）　しまりやや弱く、粘性やや弱い。
9．青灰色シルト（10BG5/1）　しまりやや弱く、粘性弱い。
10．黄灰色砂質シルト（2.5Y4/1）　しまりやや弱く、粘性弱い。
11．灰色シルト（7.5Y5/1）　しまりやや弱く、粘性弱い。炭化物（1～5mm）を微量含む。
12．灰色砂質土（5Y5/1）　しまりやや弱く、粘性弱い。
13．灰色砂質シルト（7.5Y5/1）　しまりやや弱く、粘性弱い。
14．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）　しまりやや弱く、粘性弱い。
15．灰色砂質シルト（5Y4/1）　しまりやや弱く、粘性やや弱い。10層に似る。

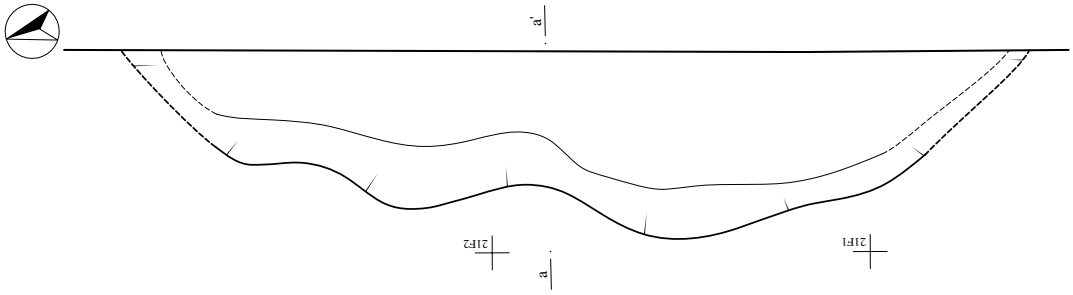


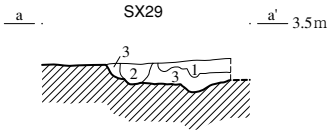


1．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）　しまり弱く、粘性弱い。
2．にぶい黄橙色砂質土（10YR6/3）　しまり弱く、粘性弱い。
3．灰黄褐色砂質土（10YR6/2）　しまりやや強く、粘性弱い。
4．黄灰色砂質シルト（2.5Y5/1）　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（3～5mm）を少量含む。
5．褐灰砂質シルト（10YR5/1）　しまりやや強く、粘性やや弱い。
6．黄灰色砂質シルト（2.5Y4/1）　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（3～5mm）を少量含む。
7．黄灰色シルト（2.5Y4/1）　しまりやや強く、粘性強い。炭化物（5～10mm）を多量含む。
8．黒褐色シルト（10YR3/1）　しまりやや強く、粘性強い。炭化物主体の層である。
9．灰色シルト（5Y4/1）　しまりやや強く、粘性強い。樹根を含む。
10．灰色シルト（5Y4/1）　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（5～7mm）を中量含む。
11．灰色シルト（5Y4/1）　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（5～7mm）を中量含む。
12．褐灰色砂質シルト（10YR4/1）　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（3～5mm）を少量含む。
13．黒褐色砂質シルト（10YR3/1）　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（1～3mm）を微量含む

断面図　0　（1：40）　2m

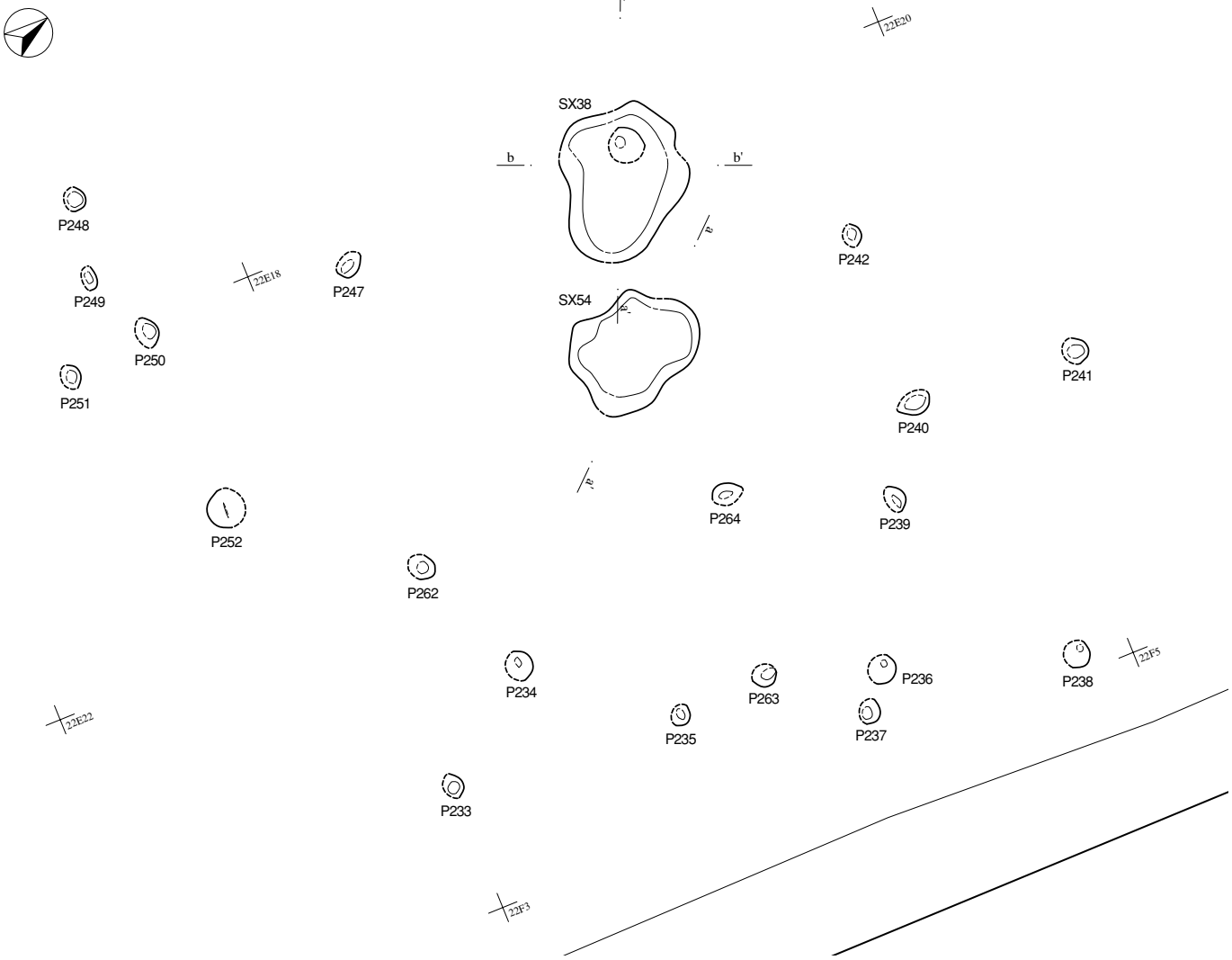
SX29

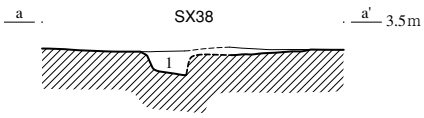


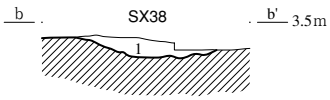


SX29
1．オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）
　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（1～20mm）を中量含む。
2．灰色シルト（10Y4/1）
　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（1～10mm）を少量含む。
3．灰色シルト（7.5Y5/1）
　しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1～10mm）を少量、オリーブ黒色シルト（5mm）を微量含む。

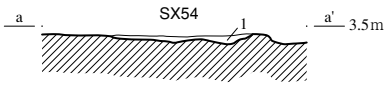
SX38・SX54







1．オリーブ黒色土（5Y2/2）
　しまり強く、粘性弱い。炭化物（1～5mm）を多量、焼土（3～10mm）を中量含む。

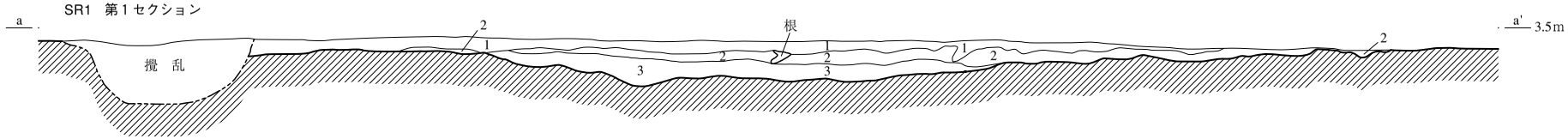


1．オリーブ黒色土（5Y2/2）
　しまり強く、粘性弱い。炭化物（1～5mm）を多量、焼土（3～10mm）を中量含む。

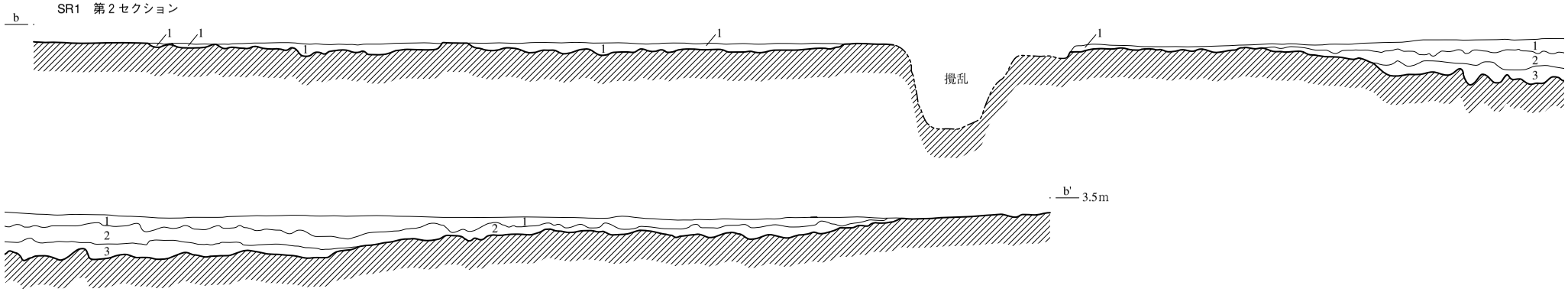
0　（1：40）　2m

自然流路1

SR1　第１セクション



SR1　第２セクション

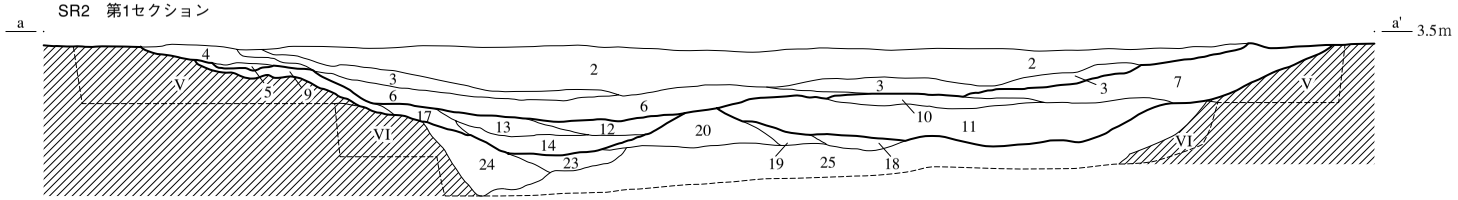


SR1
１．黒色粘質シルト（10YR2/1）　しまりやや強く、粘性強い。炭化物（0.5～３㎜）を微量含む。
２．褐灰色粘質シルト（7.5YR4/1）　しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物（0.5～３㎜）を微量、暗褐色シルト（10～15㎜）を少量含む。
３．褐灰色砂質シルト（7.5YR4/1）　しまりやや弱く、粘性普通。炭化物（0.5～３㎜）を微量、暗褐色シルト（10～15㎜）を少量含む。

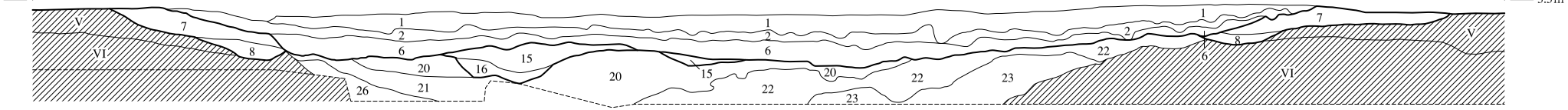
0　（1：50）　2m

自然流路2

SR2　第1セクション



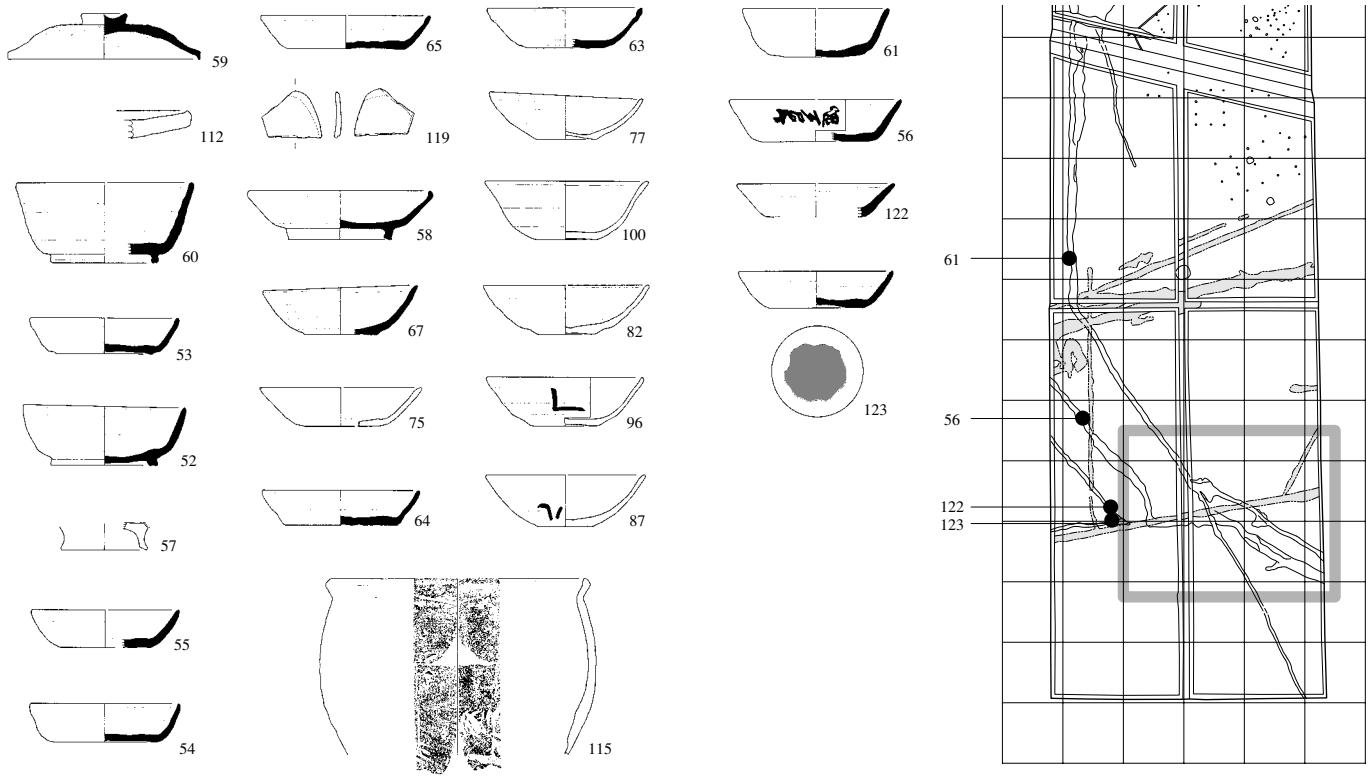
SR2　第2セクション

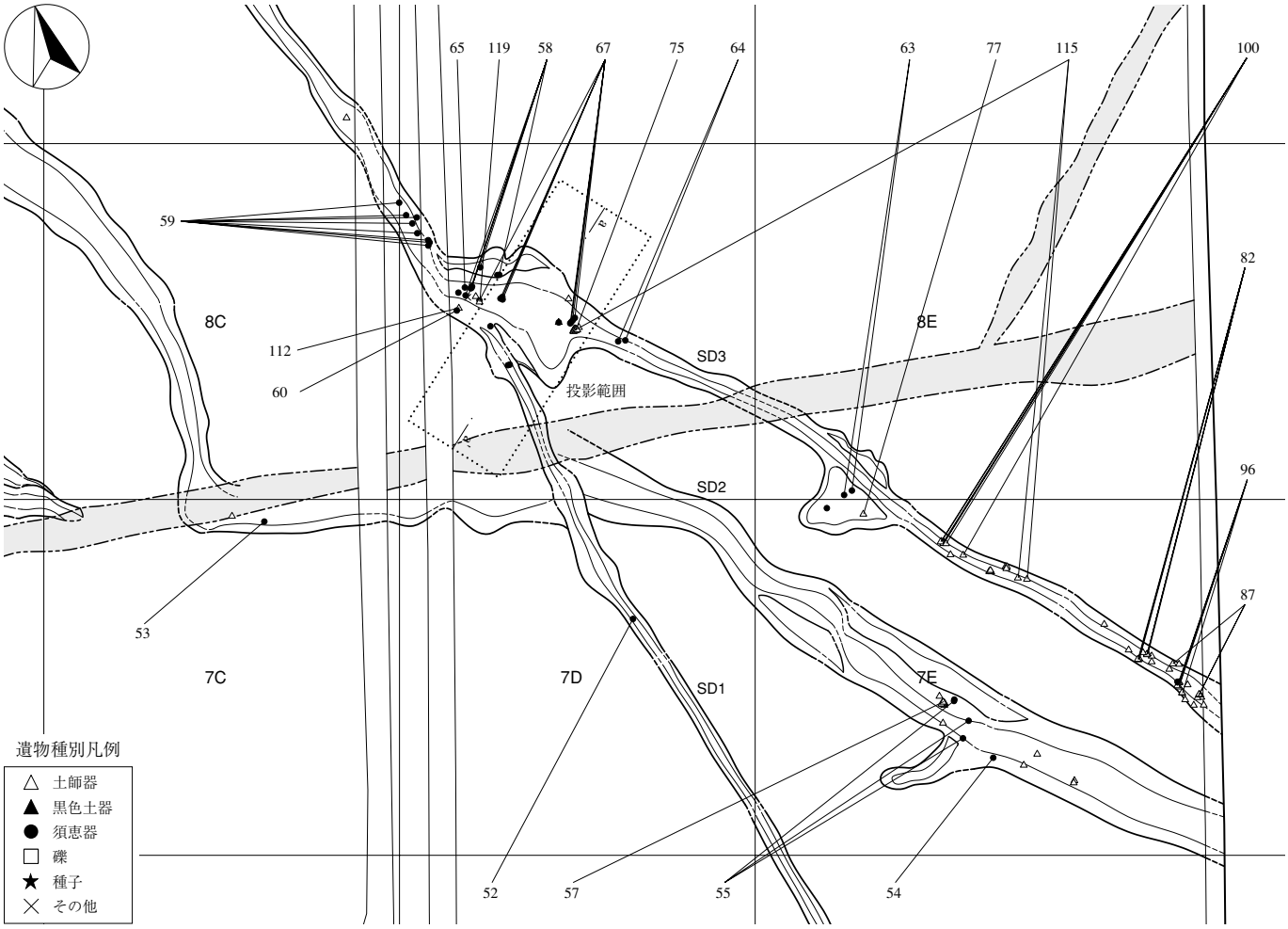


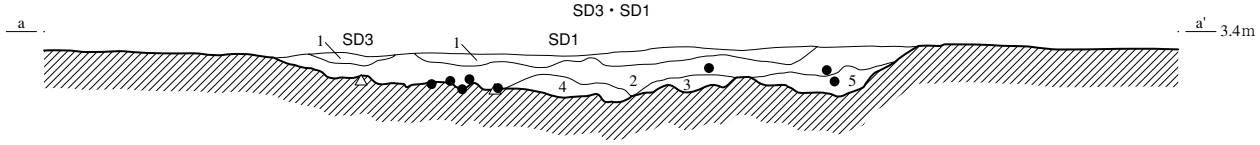
SR2

1．褐灰色シルト（10YR4/1）	しまりやや弱く、粘性やや弱い。炭化物（２～３㎜）を少量、灰黄色（2.5Y7/2）シルト（0.5～50㎜）を中量含む。
2．黒色粘質シルト（7.5YR2/1）	しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（0.5～10㎜）を東側では中量、灰黄色シルト（0.5～10㎜）を微量含む。地点により混入物の量が変化する。
3．赤灰色粘質シルト（上：2.5YR4/1　下：5/1～6/1）	しまり弱く、粘性強い。炭化物（0.5～15㎜）、暗灰黄色シルト（10～30㎜）を少量含む。層内の色調は一定ではなく、下層になるにつれて黒味が薄くなる。
4．褐灰色シルト（10YR4/1）	しまりやや弱く、粘性やや弱い。炭化物（0.5～２㎜）、暗灰黄色シルト（５～10㎜）を微量含む。
5．褐灰色砂質シルト（10YR4/1）	しまりやや弱く、粘性やや弱い。炭化物（0.5～３㎜）を微量含む。
6．黄灰色粘質シルト（2.5Y5/1）	しまり弱く、粘性強い。炭化物（0.5～３㎜）、褐灰色（10YR4/1）シルト（15～30㎜）、黄灰色シルト（40～50㎜）を微量含む。
7．灰オリーブ砂質シルト（5Y5/2）	しまりやや弱く、粘性やや弱い。褐灰色（10YR4/1）シルト（15～30㎜）を少量含む。
8．灰オリーブ砂質シルト（5Y6/2）	しまりやや弱く、粘性弱い。
9．暗灰黄色砂質シルト（2.5Y5/2）	しまり強く、粘性弱い。炭化物（0.5～２㎜）を微量、斑状に黄灰色粘質シルト（６層）を中量、褐灰色シルト（15～20㎜）を少量含む。
10．褐灰色粘質シルト（10YR5/1）	しまりやや弱く、粘性やや強い。褐灰色シルト（５～25㎜）、木片・繊維を少量含む。
11．灰色粘質シルトと灰色砂の互層（10Y5/1）	しまり弱く、粘性やや弱い。灰色砂を多量、褐灰色シルト（15～20㎜）を微量含む。
12．黄灰色砂質シルト（2.5Y5/1）	しまり弱く、粘性やや強い。褐灰色シルト（５～20㎜）を微量、砂粒を多量含む。
13．黄灰色粘質シルト（2.5Y5/1）	しまり弱く、粘性強い。褐灰色シルト（10～20㎜）粒を微量、砂粒を中量含む。
14．灰色砂と明黄褐色砂の互層（7.5Y6/1・10YR6/6）	しまりやや弱く、粘性弱い。明黄褐色砂を多量、褐灰色シルト（20㎜）、にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト（５～７㎜）、木片・繊維を微量含む。
15．灰色砂（7.5Y6/1）	しまりやや弱く、粘性弱い。褐灰色シルト（15～20㎜）、明黄褐色砂（15～20㎜）を少量、木片・繊維を微量含む。
16．青灰色粘質シルト（5BG5/1）	しまり弱く、粘性やや強い。褐灰色シルト（20㎜）、木片・繊維を微量、砂粒を少量含む。
17．黄灰色粘質シルトと灰色砂の互層（2.5Y5/1・7.5Y6/1）	しまり弱く、粘性やや強い。炭化物（２～３㎜）、褐灰色シルト（15～20㎜）を微量、灰色砂を多量含む。北側に向かうにつれて砂質となる。
18．暗赤褐色粘質シルト（5YR3/2）	しまり弱く、粘性強い。木片・繊維を中量、灰色シルト（15～25㎜）、砂粒を少量含む。
19．灰色粘質シルトと暗赤褐色粘質シルトの互層（10Y5/1・5YR3/2）	しまり弱く、粘性強い。暗赤褐色粘質シルトを多量、木片・繊維を中量、砂粒を少量（層下部に向かうほど多く混入する）含む。
20．灰白砂・明黄褐色砂・黄灰色粘質シルトの互層（7.5Y8/1・10YR6/6・2.5Y5/1）	しまりやや弱く、粘性弱い。明黄褐色砂と黄灰色粘質シルトが混ざり互層を成す。褐灰色シルト（15～30㎜）を微量、木片・繊維を少量含む。
21．灰色粘質シルトと暗赤褐色粘質シルトの互層（10Y5/1・5YR3/2）	しまり弱く、粘性強い。暗赤褐色粘質シルトを多量、木片・繊維を中量、砂を少量含む。
22．灰白砂・明黄褐色砂・黄灰色粘質シルトの互層（7.5Y8/1・10YR6/6・2.5Y5/1）	しまりやや弱く、粘性弱い。明黄褐色砂と黄灰色粘質シルトが混ざり互層を成す。木片・繊維を少量、褐灰色シルト（15～30㎜）を微量含む。
23．青灰色粘質シルトと明黄褐色砂の互層（5BG5/1・10YR6/6）	しまり弱く、粘性やや弱い。明黄褐色砂を多量、木材・木片・繊維を中量含む。
24．青灰色粘質シルトと褐灰色土の互層（5BG5/1・7.5YR4/1）	しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（２～３㎜）を微量、斑状に褐灰色土（腐植木材が由来）を多量含む。
25．灰白砂・明黄褐色砂・暗褐色砂の互層（7.5Y8/1・10YR6/6・10YR3/3）	しまりやや弱く、粘性強い。明黄褐色砂と暗褐色砂が混ざり互層を成す。木片・繊維を中量含む。
26．青灰色砂質シルトと褐灰色砂質シルトの互層（5BG5/1・10YR4/1）	しまり弱く、粘性やや弱い。褐灰色砂質シルトを多量、木片・繊維を中量含む。

0　（1：50）　2m

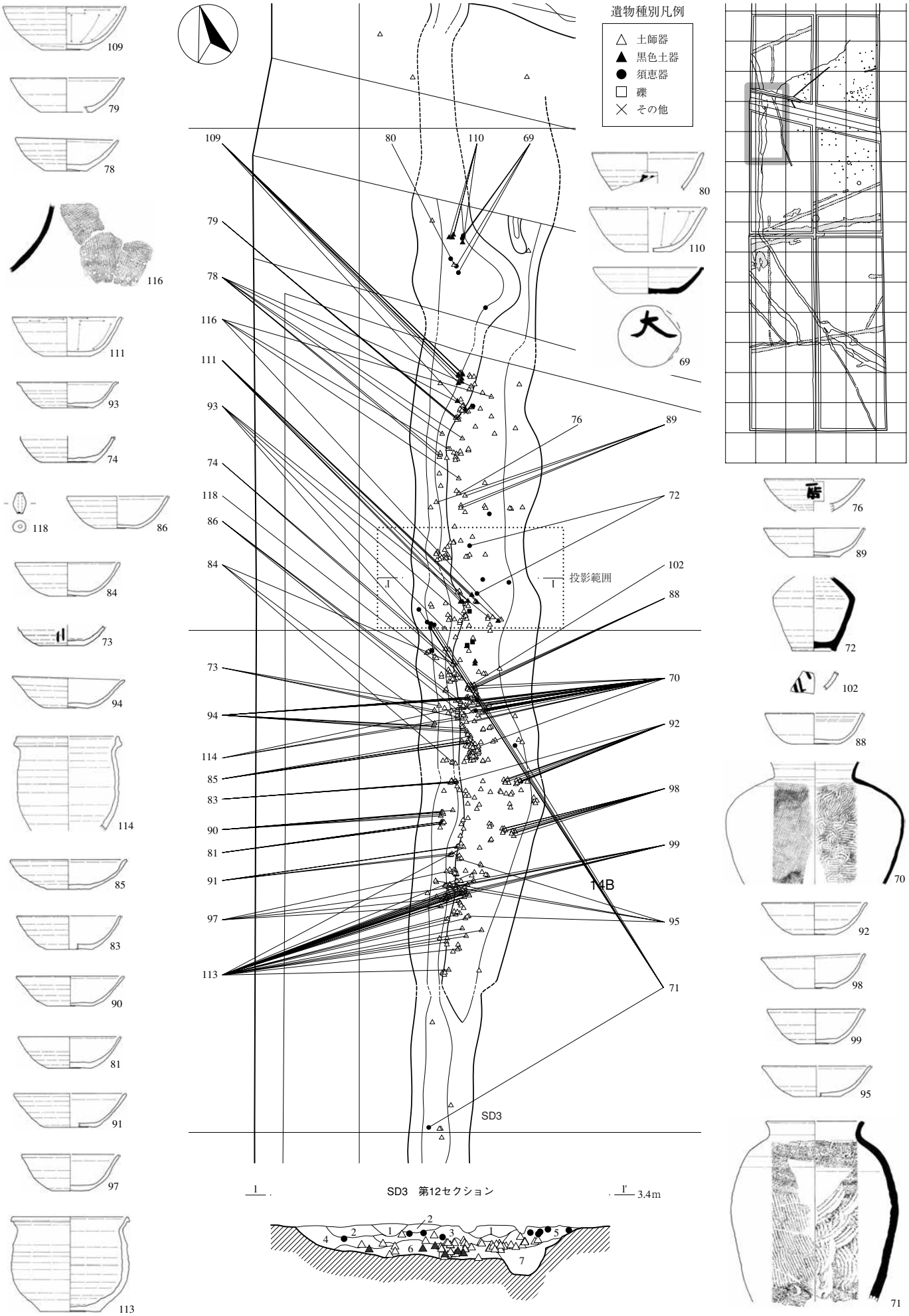


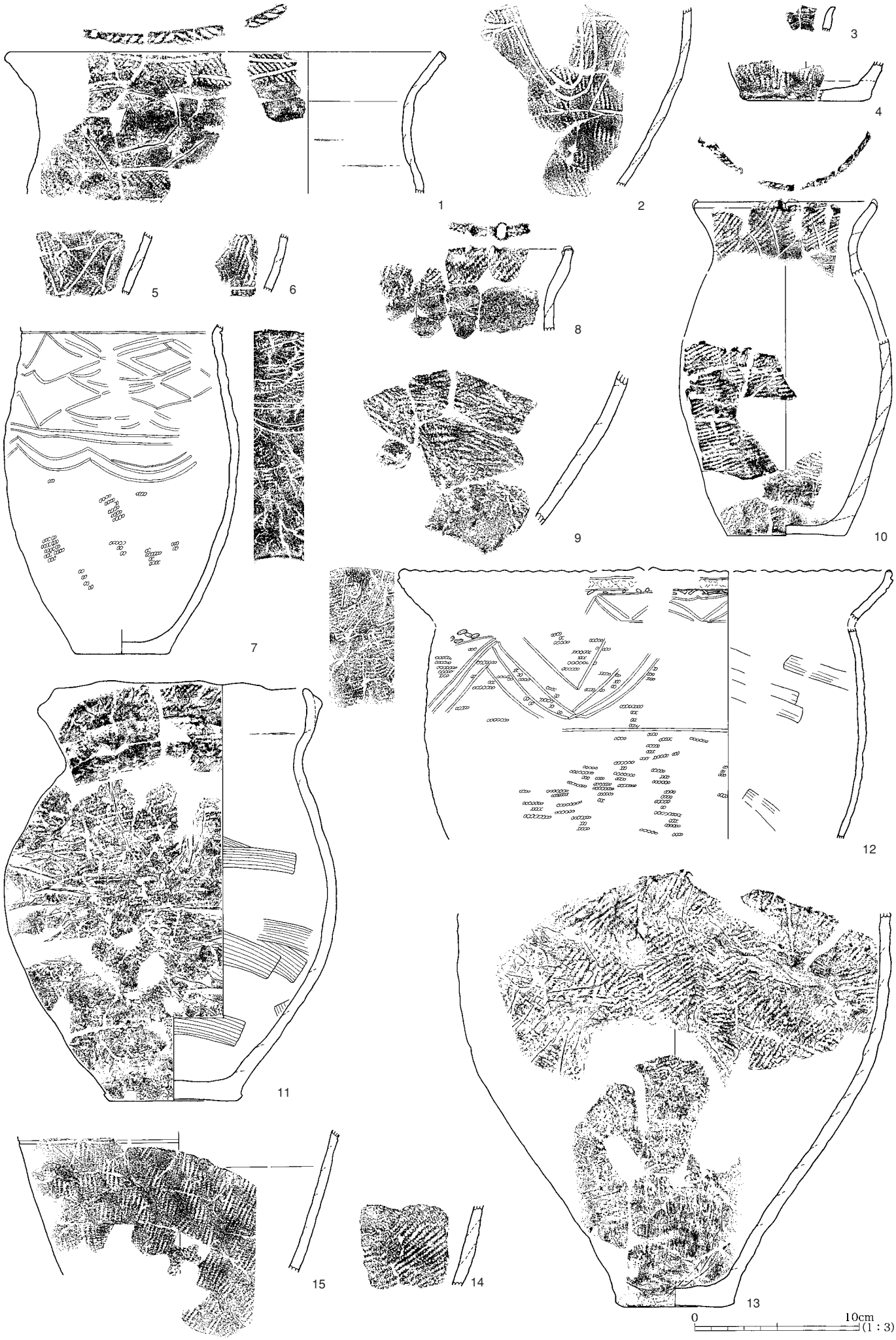


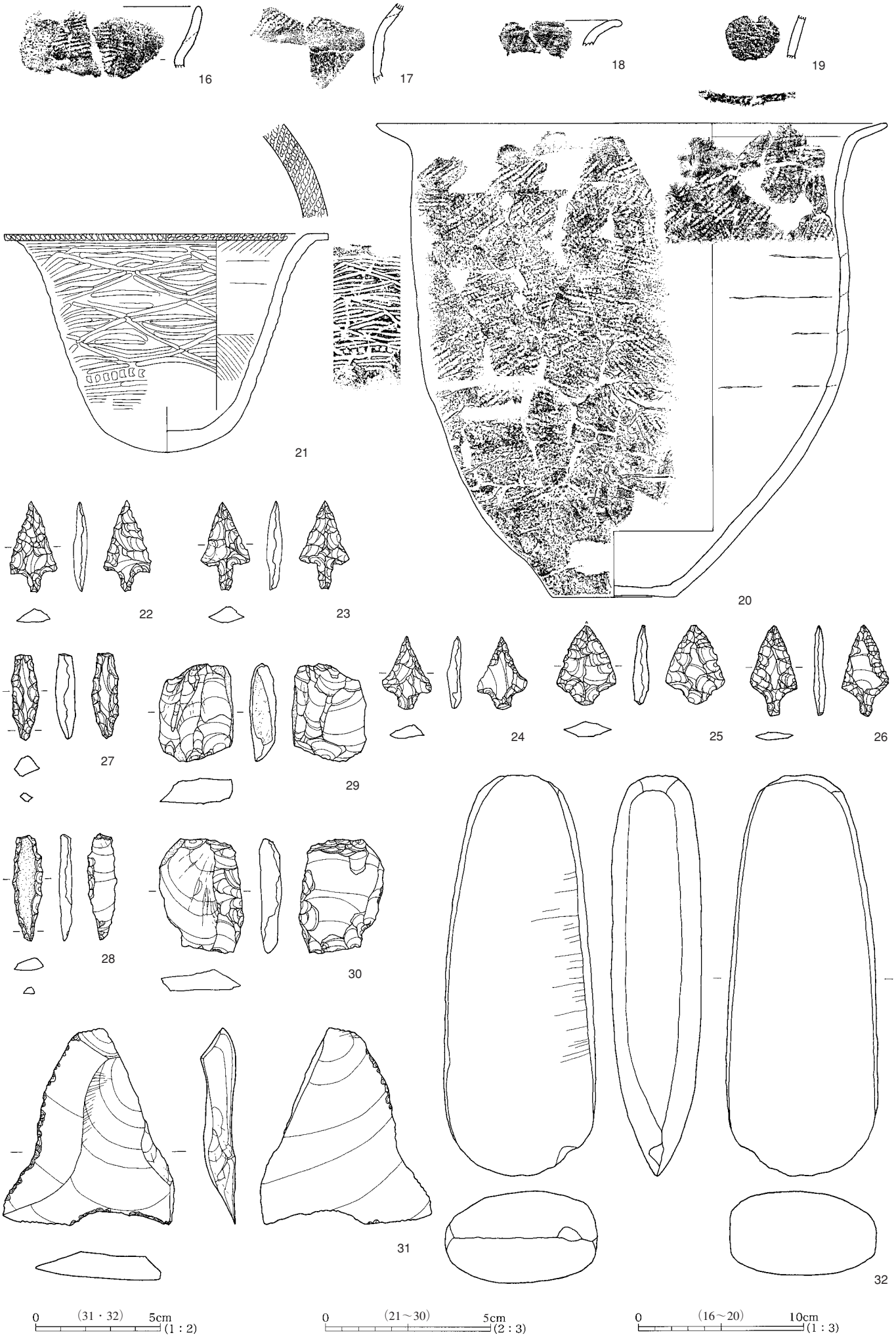


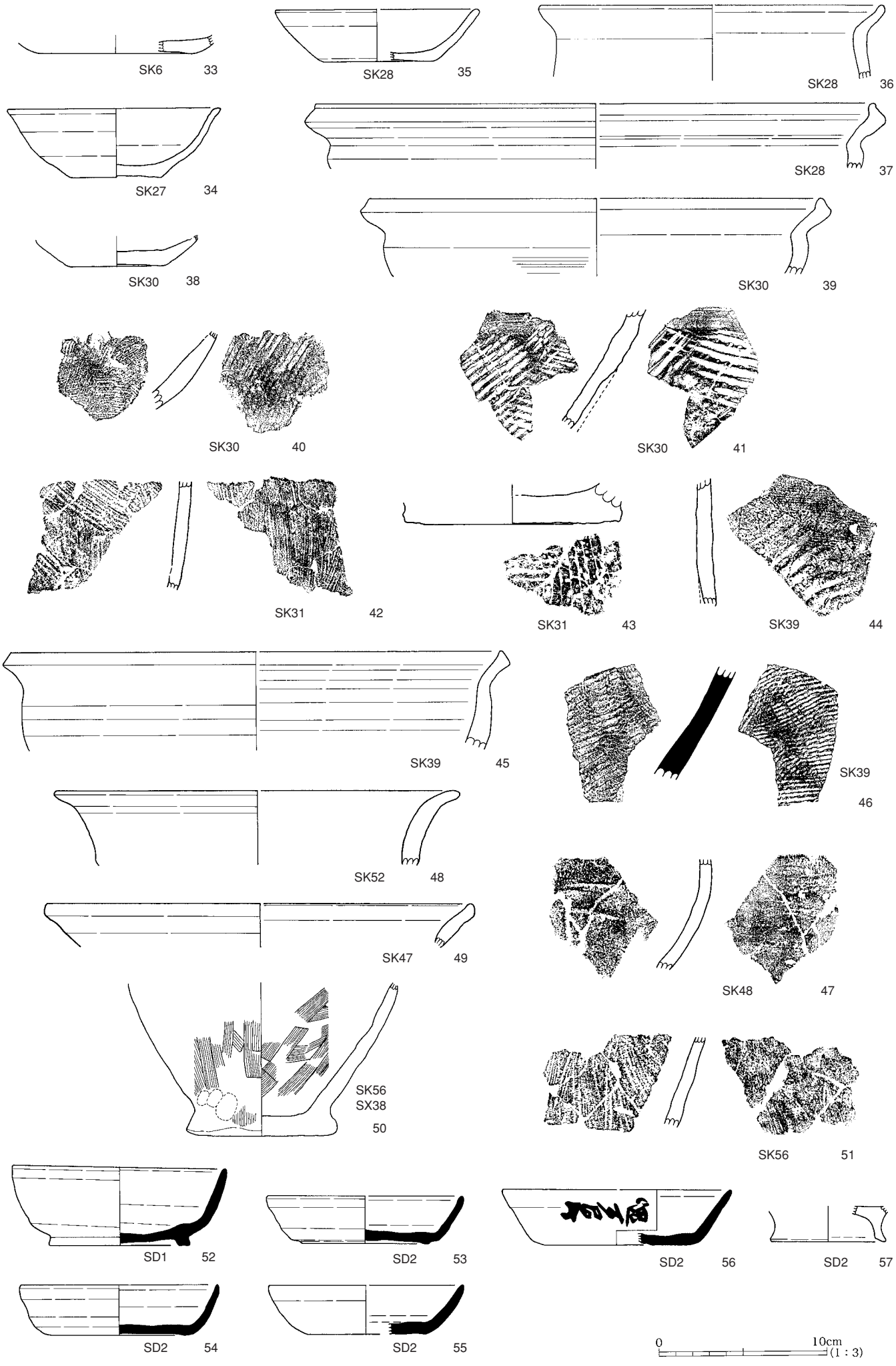
断面図　0　（1：40）　2m　　平面図　0　（1：200）　10m

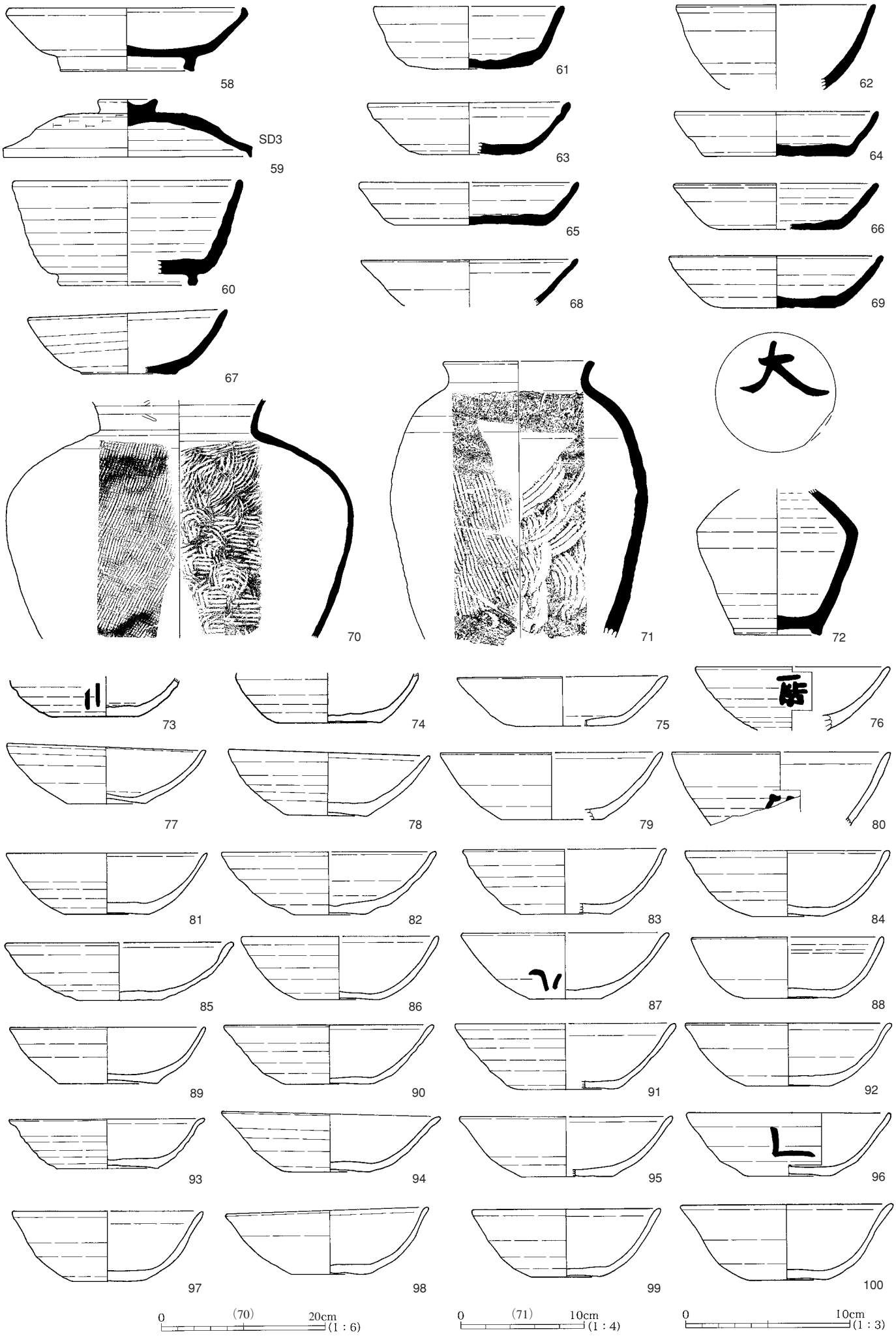
遺物分布図（2）

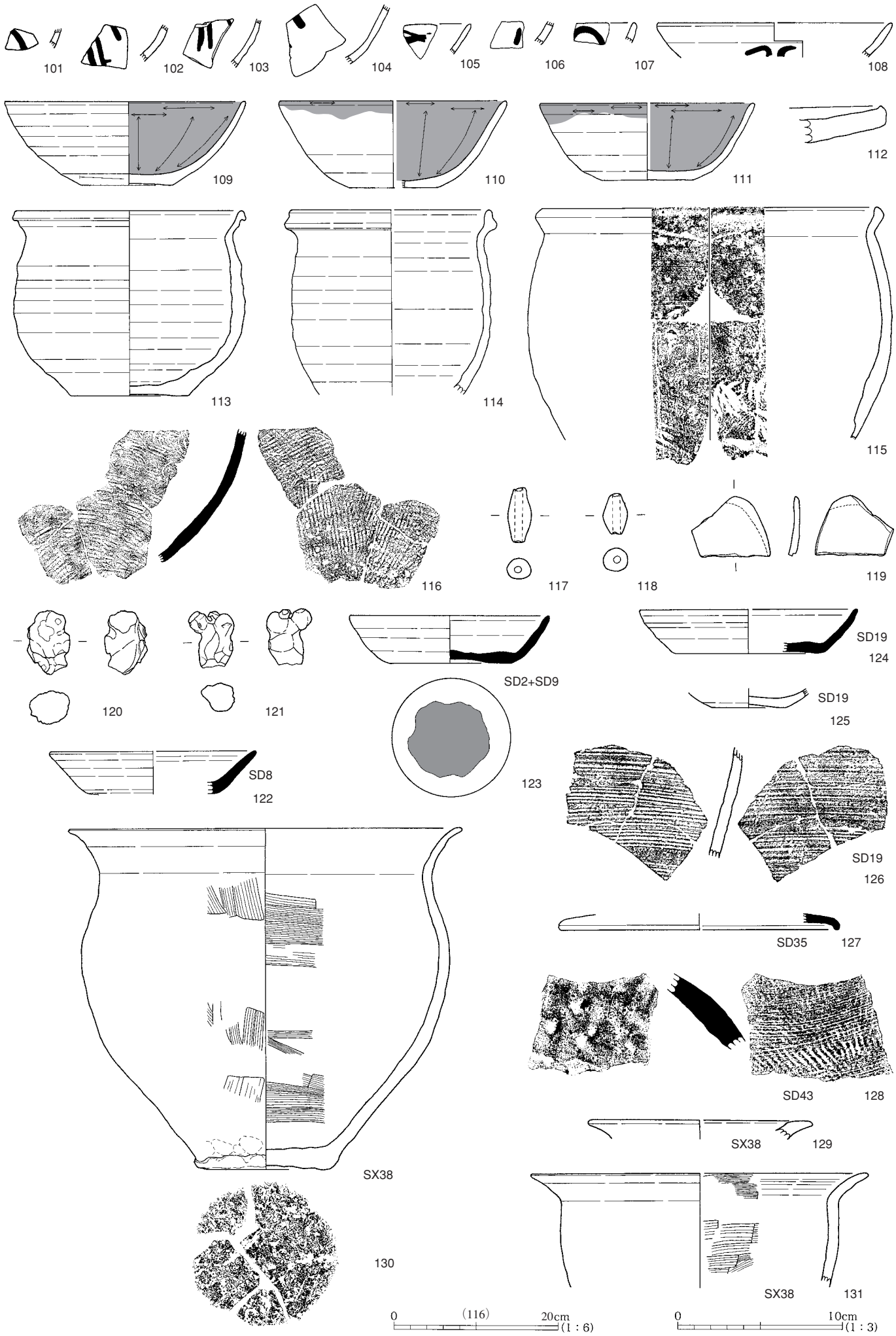

遺物種別凡例
土師器
黒色土器
須恵器
礫
その他
投影範囲
14B
SD3
SD3　第12セクション
3.4m
断面図
0
(1：40)
2m
平面図
0
(1：100)
4m

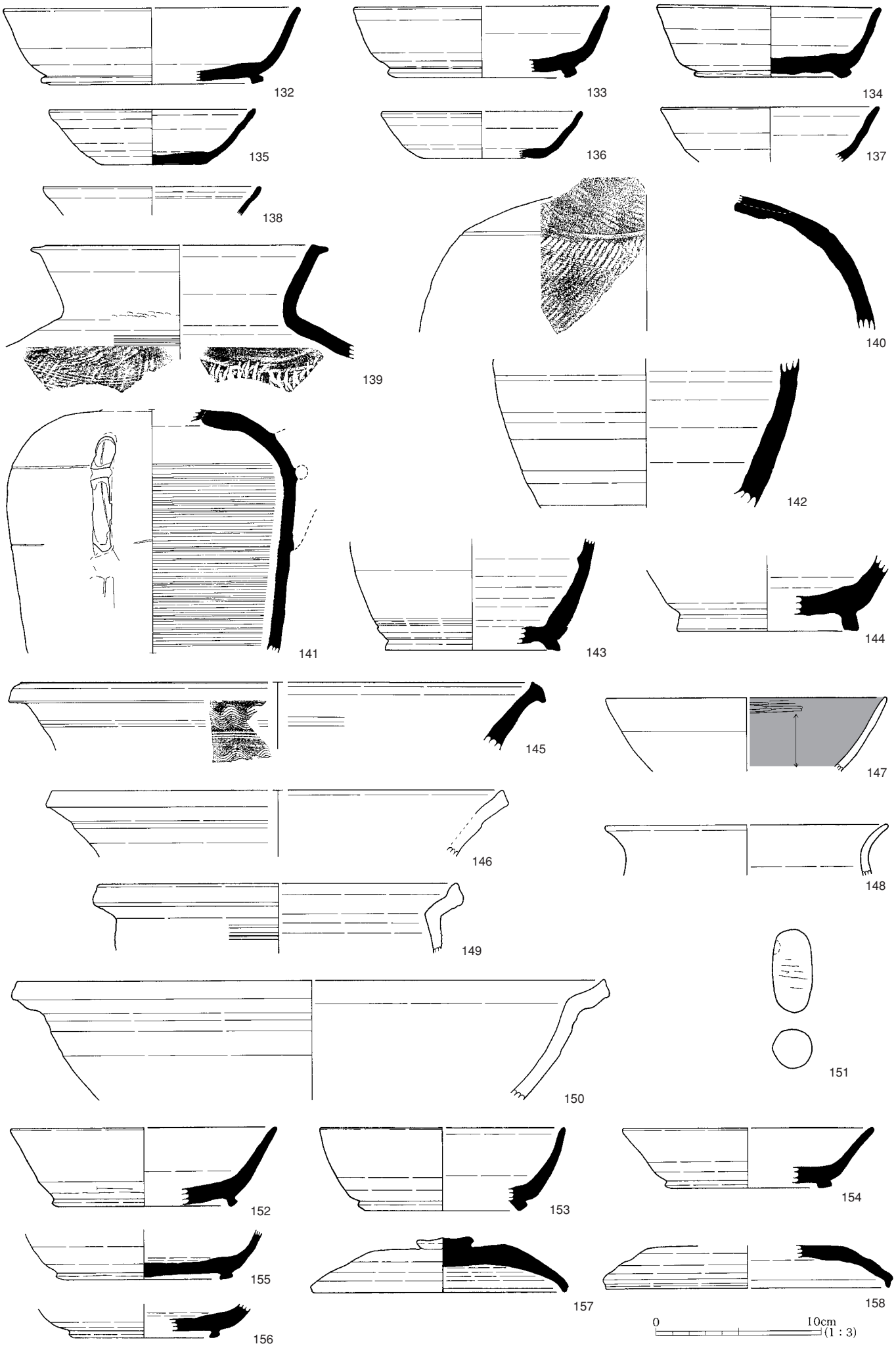

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
0
10cm
(1：3)

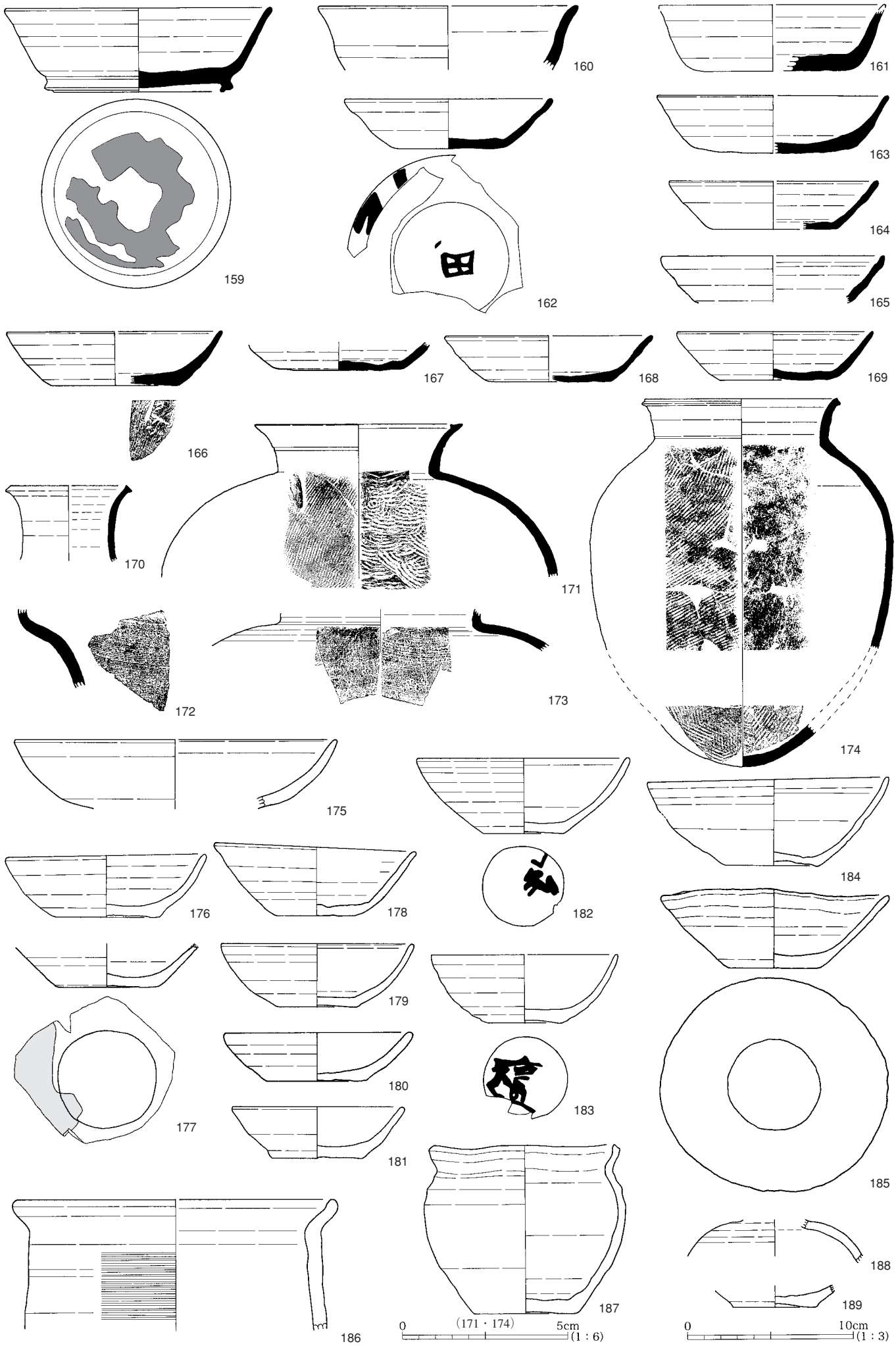

16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0 (31・32) 5cm (1：2)
0 (21～30) 5cm (2：3)
0 (16～20) 10cm (1：3)

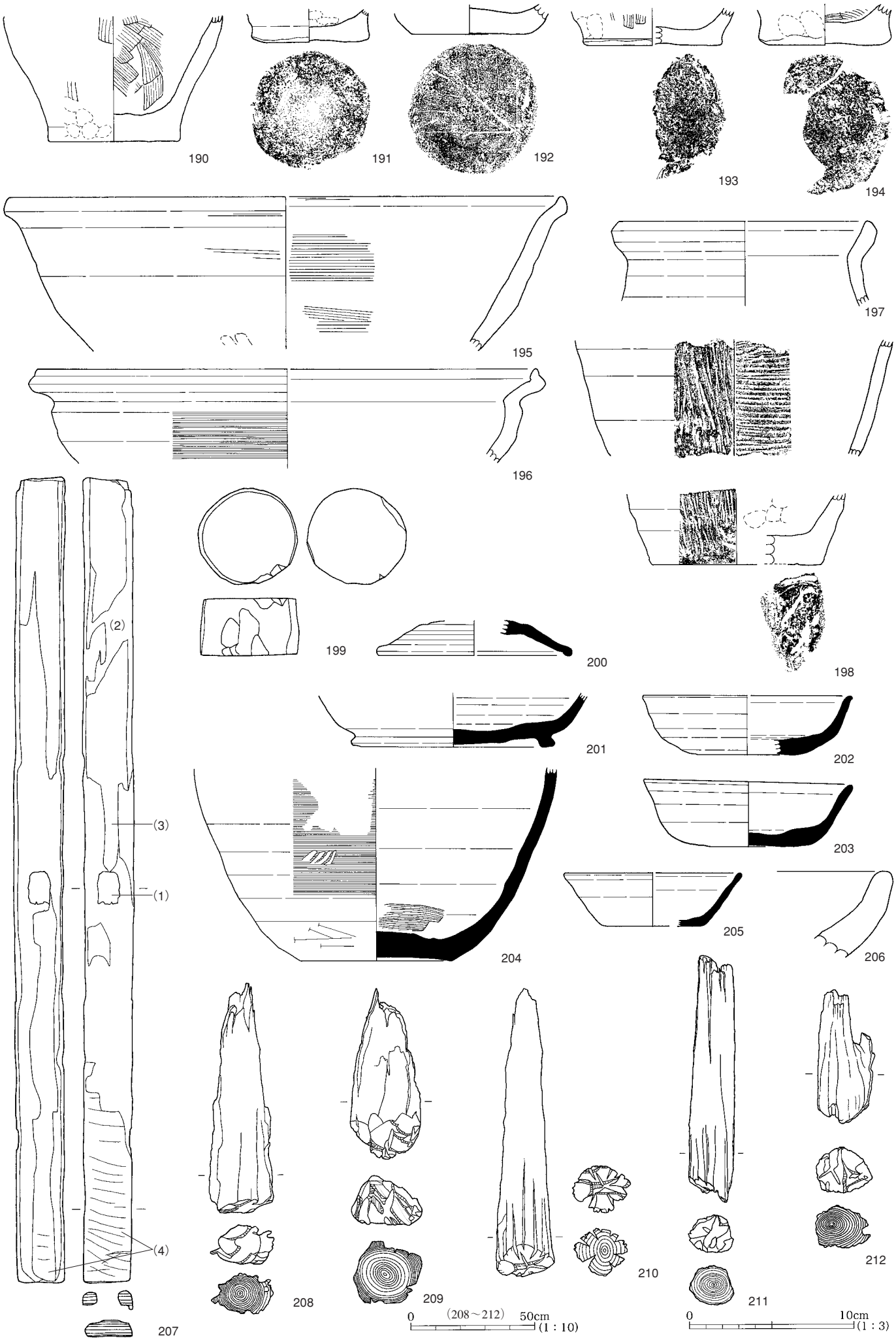

SK6 33
SK28 35
SK28 36
SK27 34
SK28 37
SK30 38
SK30 39
SK30 40
SK30 41
SK31 42
SK31 43
SK39 44
SK39 45
SK39 46
SK52 48
SK47 49
SK48 47
SK56 SX38 50
SK56 51
SD1 52
SD2 53
SD2 56
SD2 57
SD2 54
SD2 55
0 10cm (1：3)

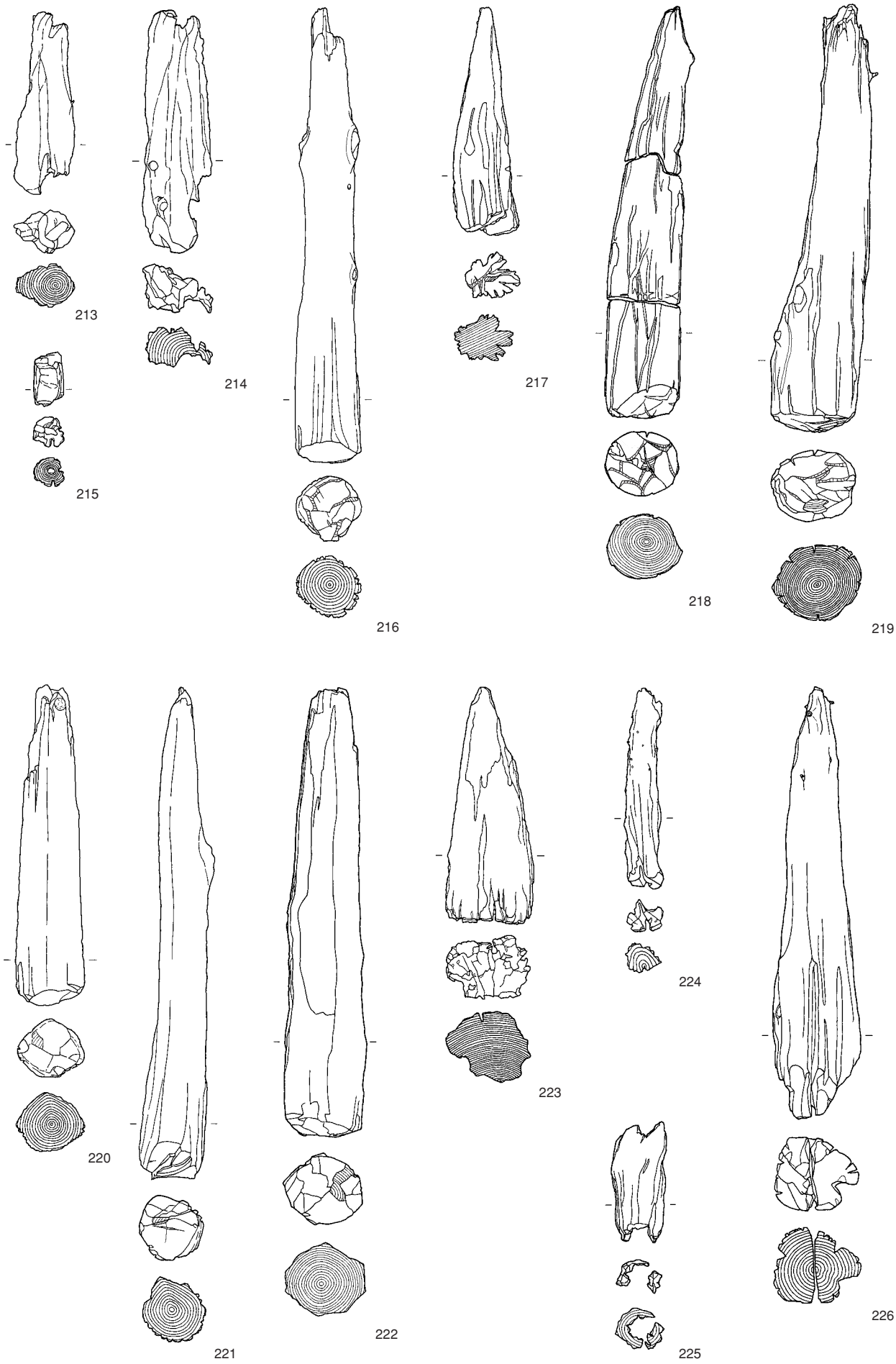

58
SD3
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
大
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
0 (70) 20cm (1：6)
0 (71) 10cm (1：4)
0 10cm (1：3)

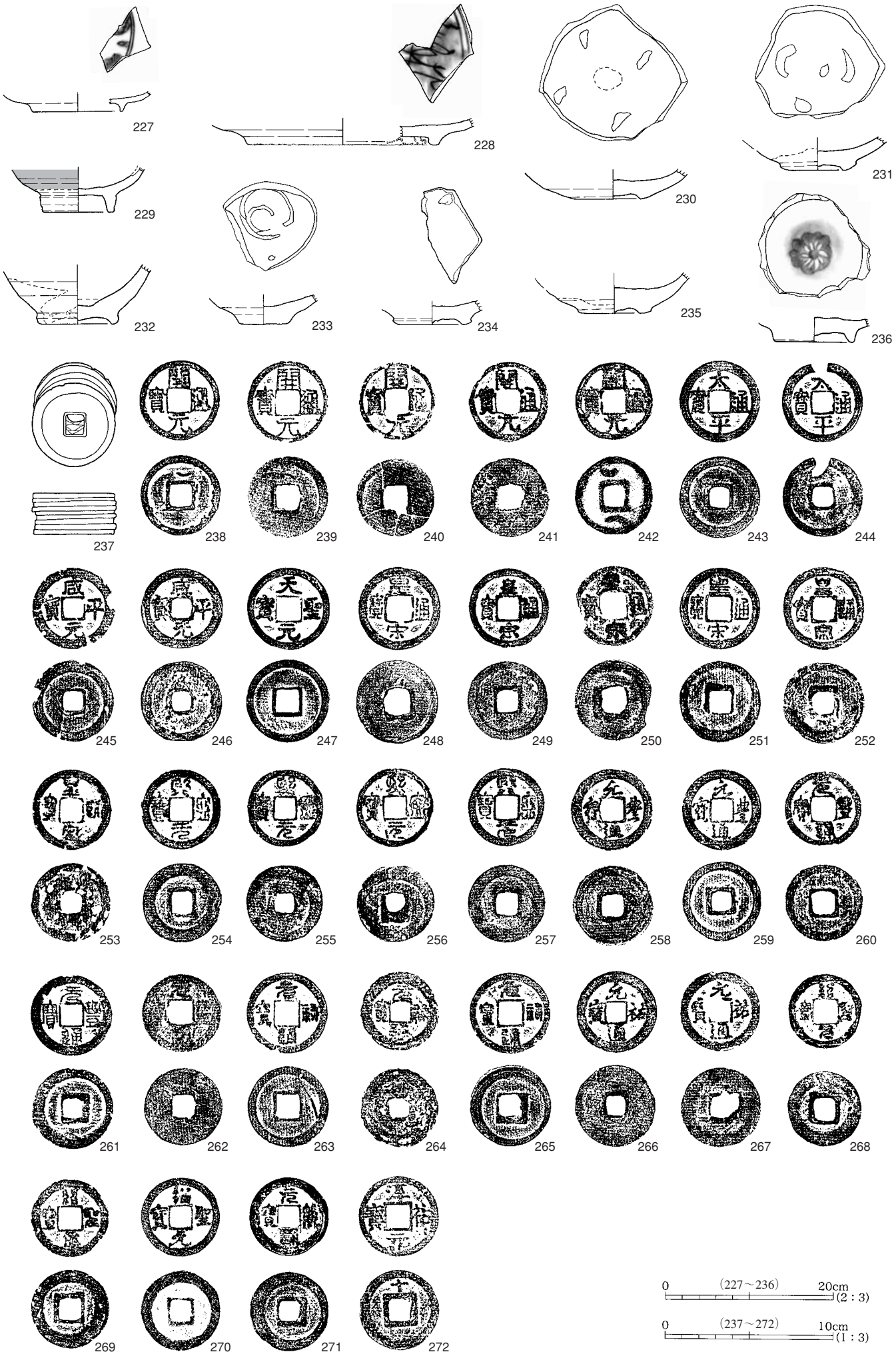

101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
SD2+SD9
SD19
124
SD19
125
SD8
122
123
SD19
126
SD35
127
SD43
128
SX38
129
SX38
130
SX38
131
0
(116)
20cm
(1：6)
0
10cm
(1：3)


132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
0
10cm
(1：3)


159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
0
(171・174)
5cm
(1：6)
0
10cm
(1：3)


190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
(1)
(2)
(3)
(4)
0 (208～212) 50cm (1：10)
0 10cm (1：3)


213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
0
50cm
(1 : 10)


227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
0 (227～236) 20cm (2：3)
0 (237～272) 10cm (1：3)

北側調査区全景（西から）

南側調査区全景（西から）

調査区全景（東から）

北側調査区全景（北から）

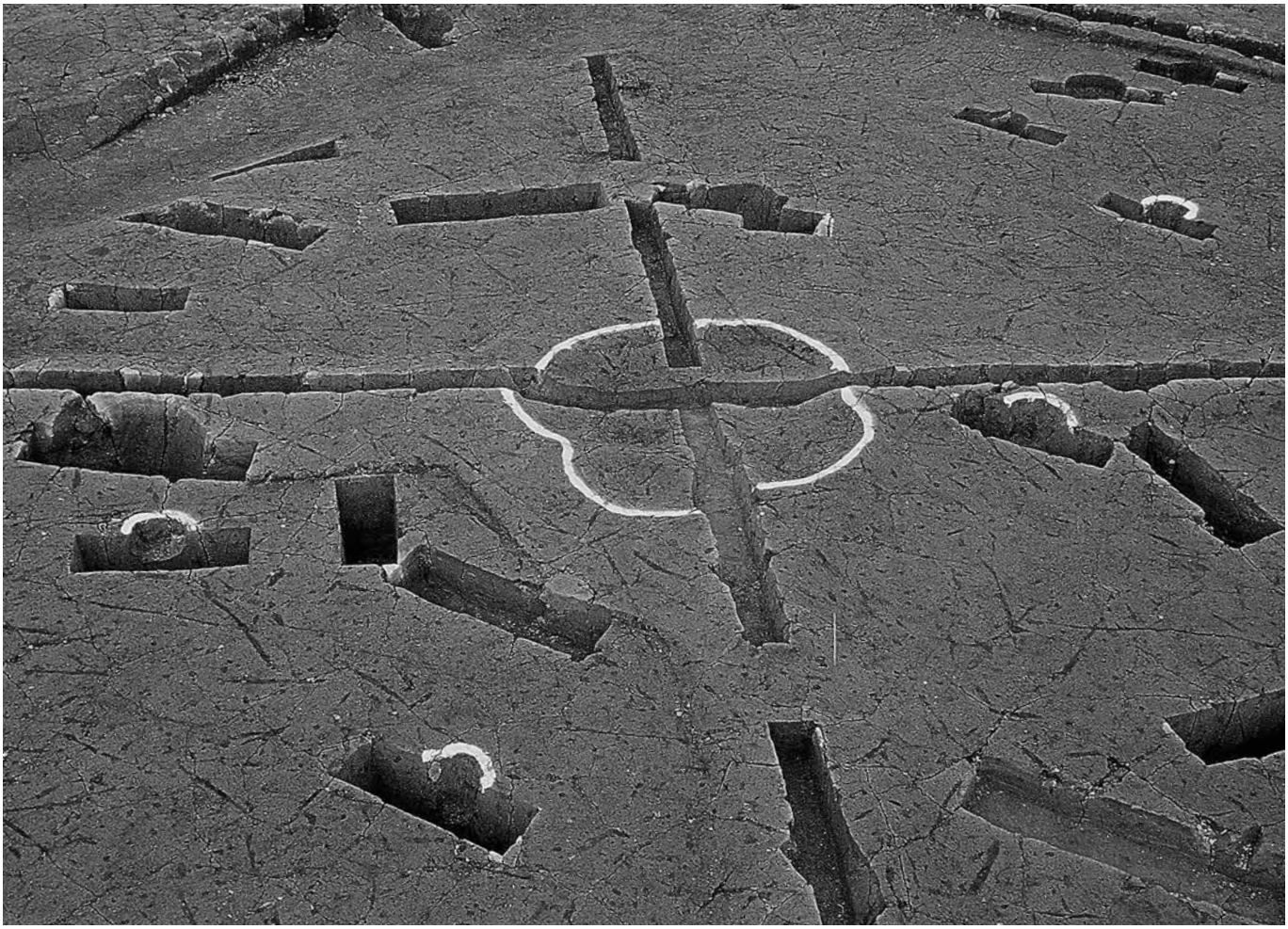
南側調査区全景（北から）

基本土層1（東から）

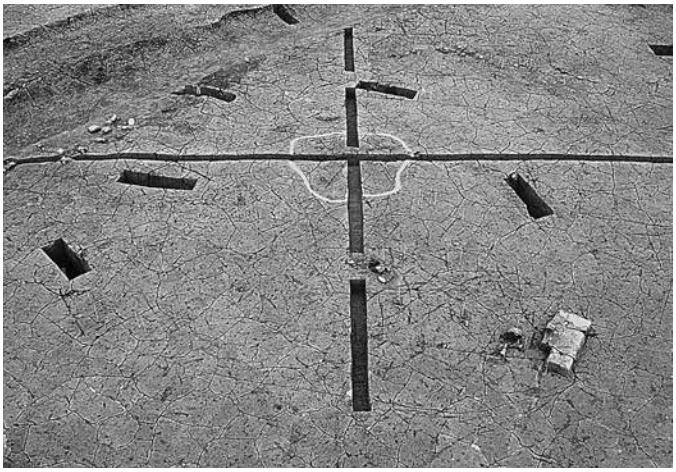
基本土層8（東から）

基本土層9（西から）

基本土層12（南から）



SI40全景（西から）



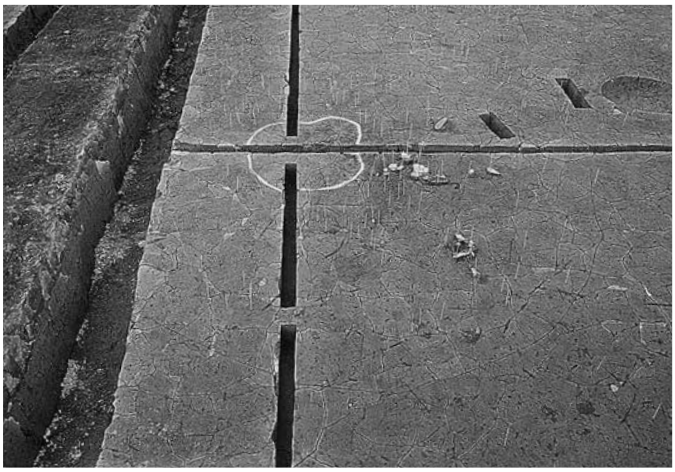
SI40遺物出土状況（南西から）

SI40弥生土器出土状況（北から）

SI40炉跡南北セクション（南西から）

SI40炉跡完掘（南西から）

SI41全景（西から）



SI41遺物出土状況（西から）

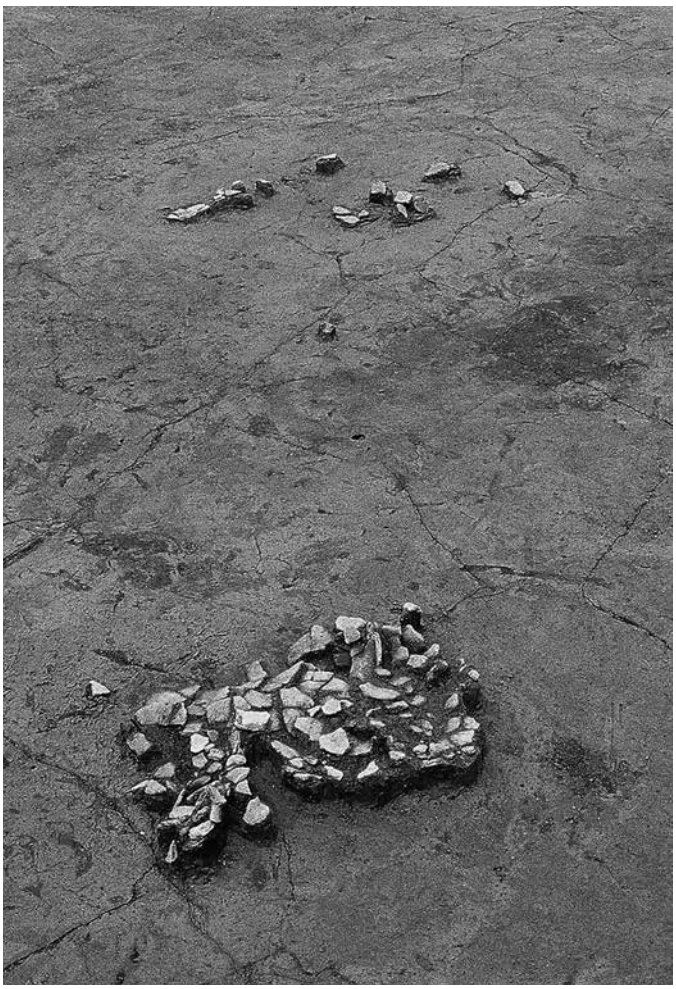
SI41炉跡東西セクション（南から）

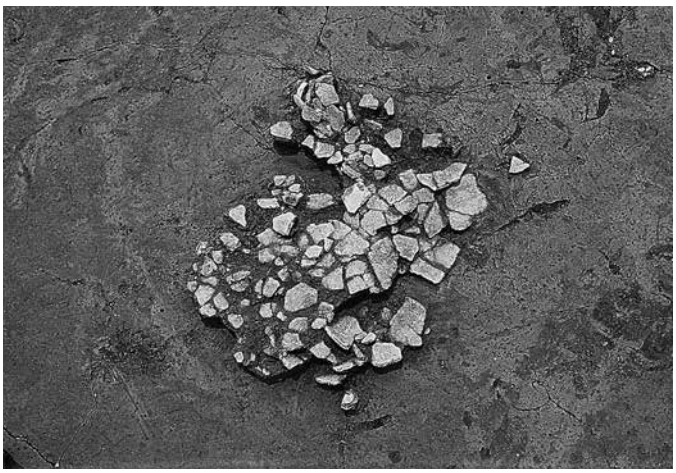
SI41炉跡南北セクション（東から）

SI41炉跡完掘（西から）

SK53南北セクション（南東から）

SK53完掘（北から）

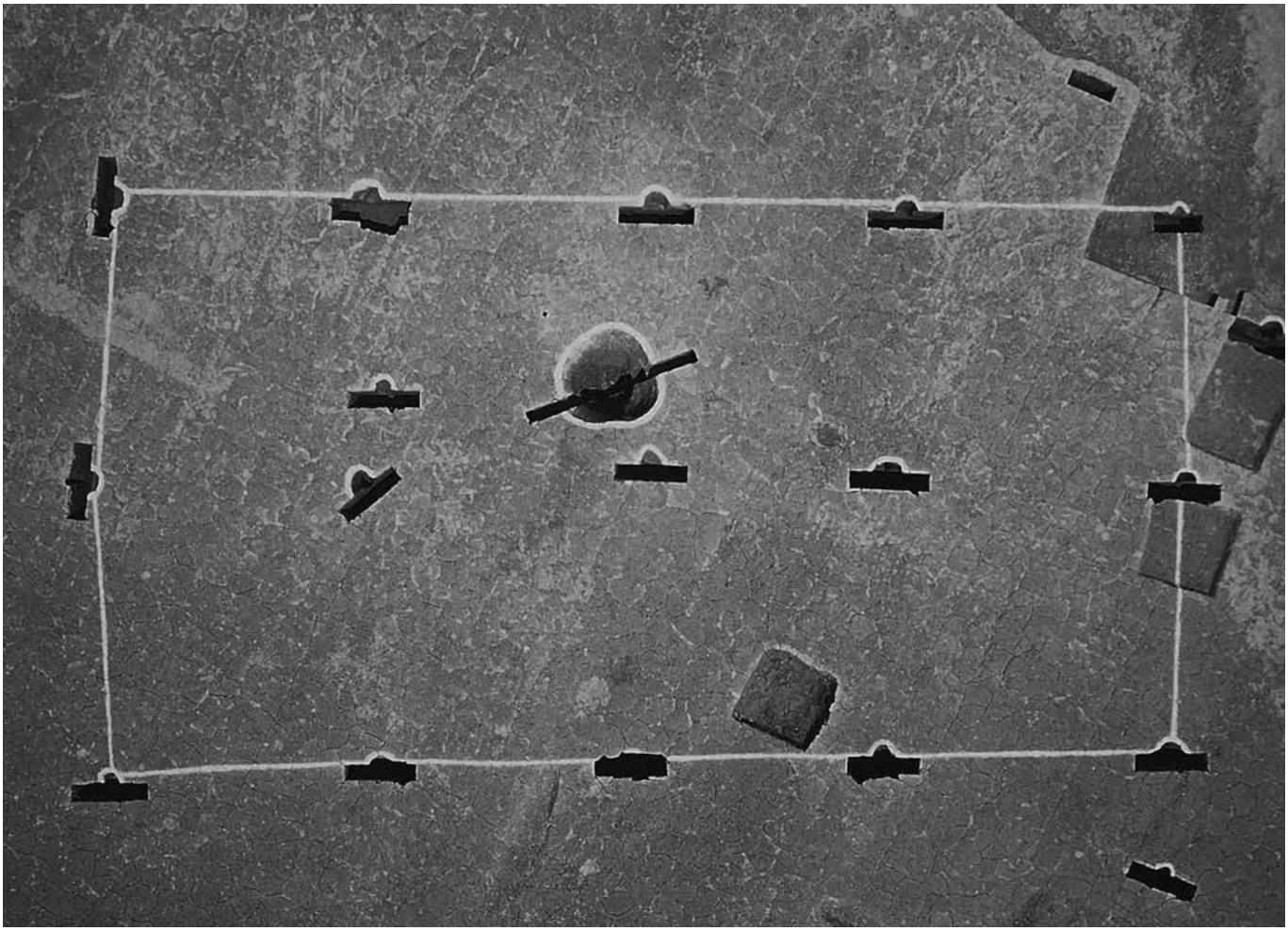

土器集中部１・２出土状況全景（南東から）


土器集中部１出土状況（北から）

土器集中部２出土状況（北から）

土器集中部３出土状況（南から）

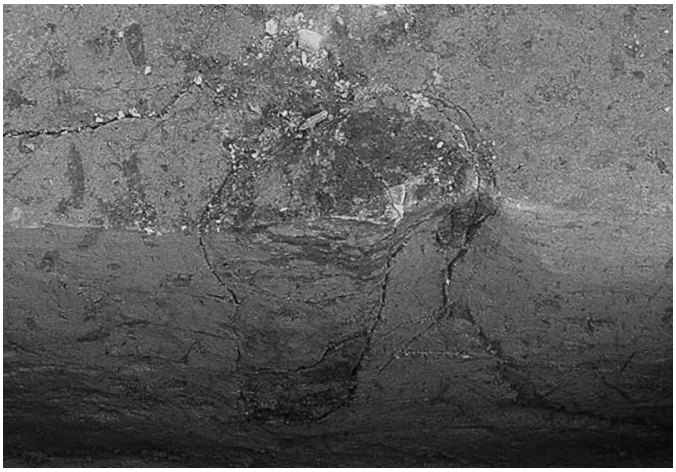
作業風景



SB4全景（南から）

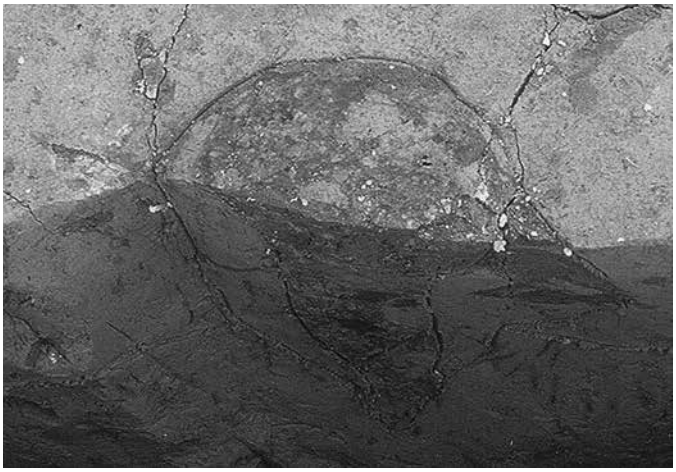
SB4全景（東から）

SB4P1東西セクション（南から）



SB4P2東西セクション（南から）

SB4P3東西セクション（南から）


SB4P4東西セクション（南から）

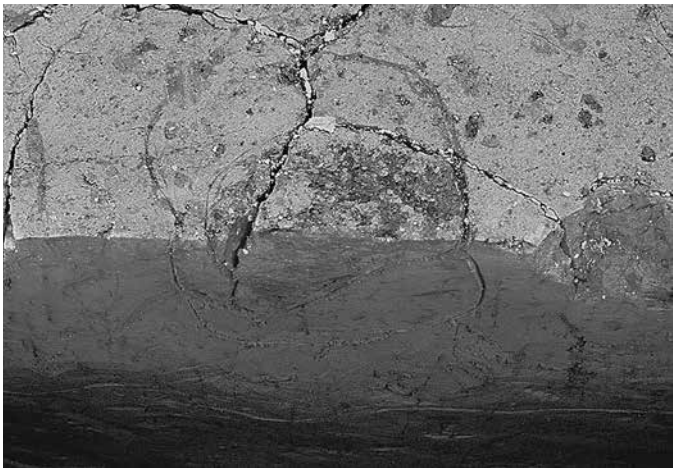
SB4P5南北セクション（西から）

SB4P8東西セクション（南から）

SB4P9南北セクション（西から）

SB4P10柱材検出状況（南から）

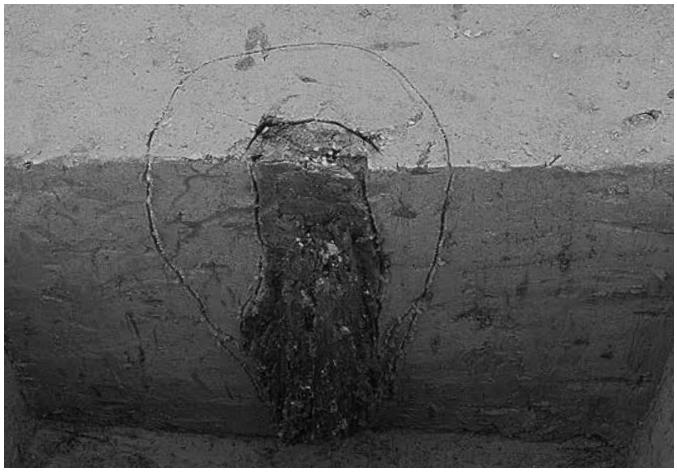
SB4P12東西セクション（南から）


SB4P13東西セクション（南から）

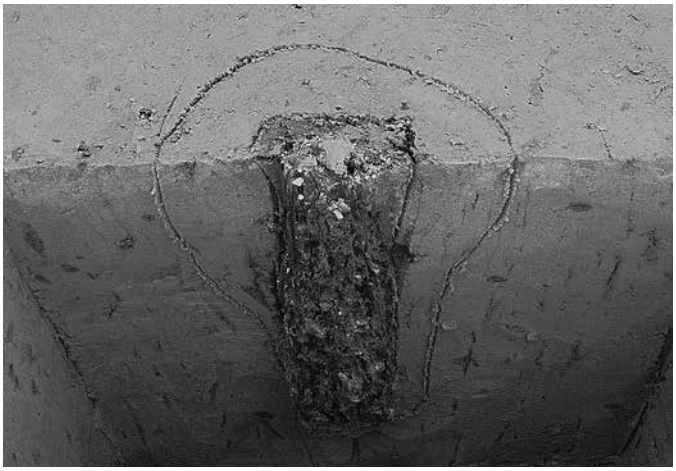
SB4P15東西セクション（南から）

SB13全景（北から）

SB13P1南北セクション（西から）

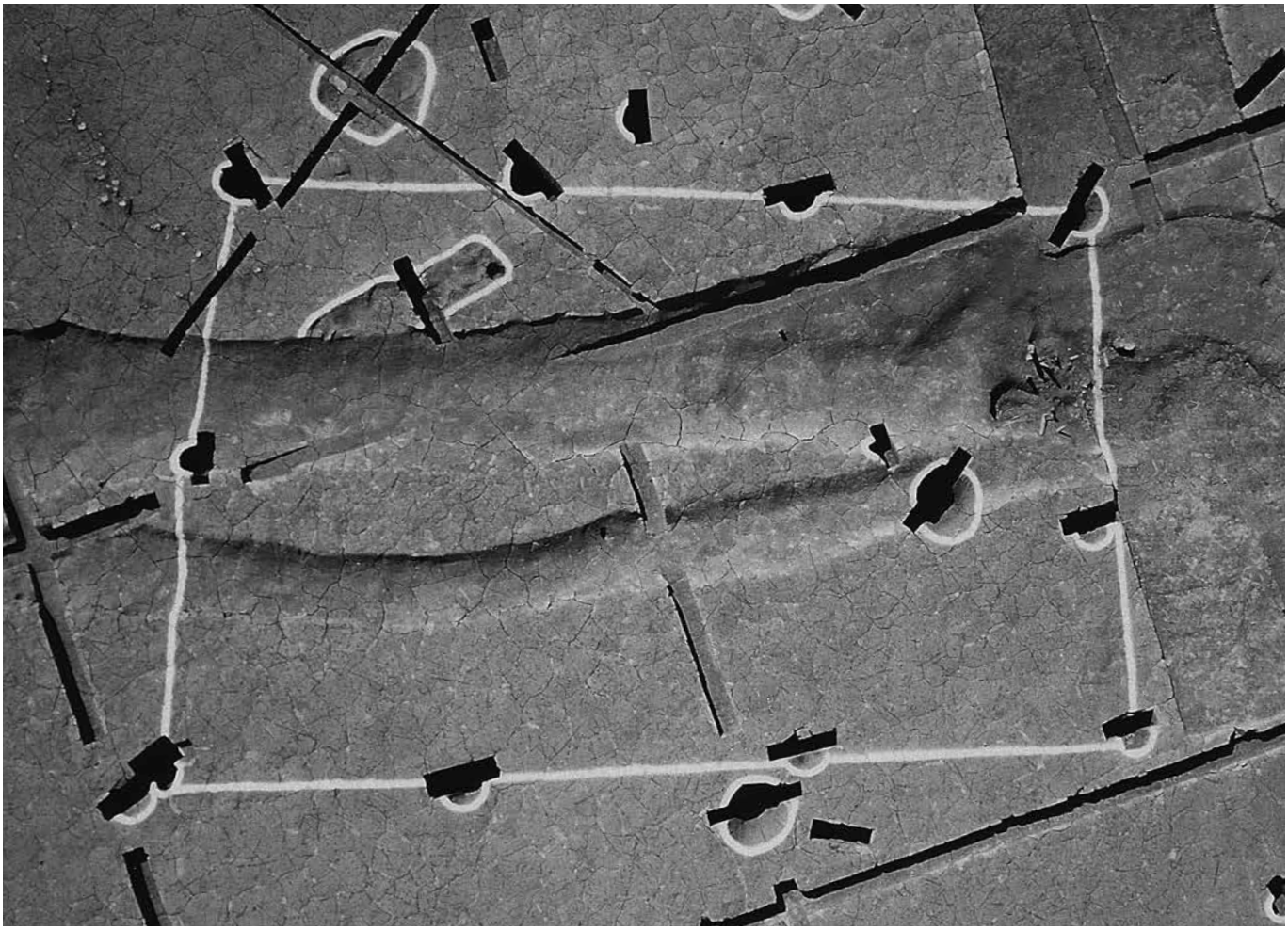


SB13P5南北セクション（西から）



SB13P6南北セクション（西から）

SB13P9東西セクション（南から）



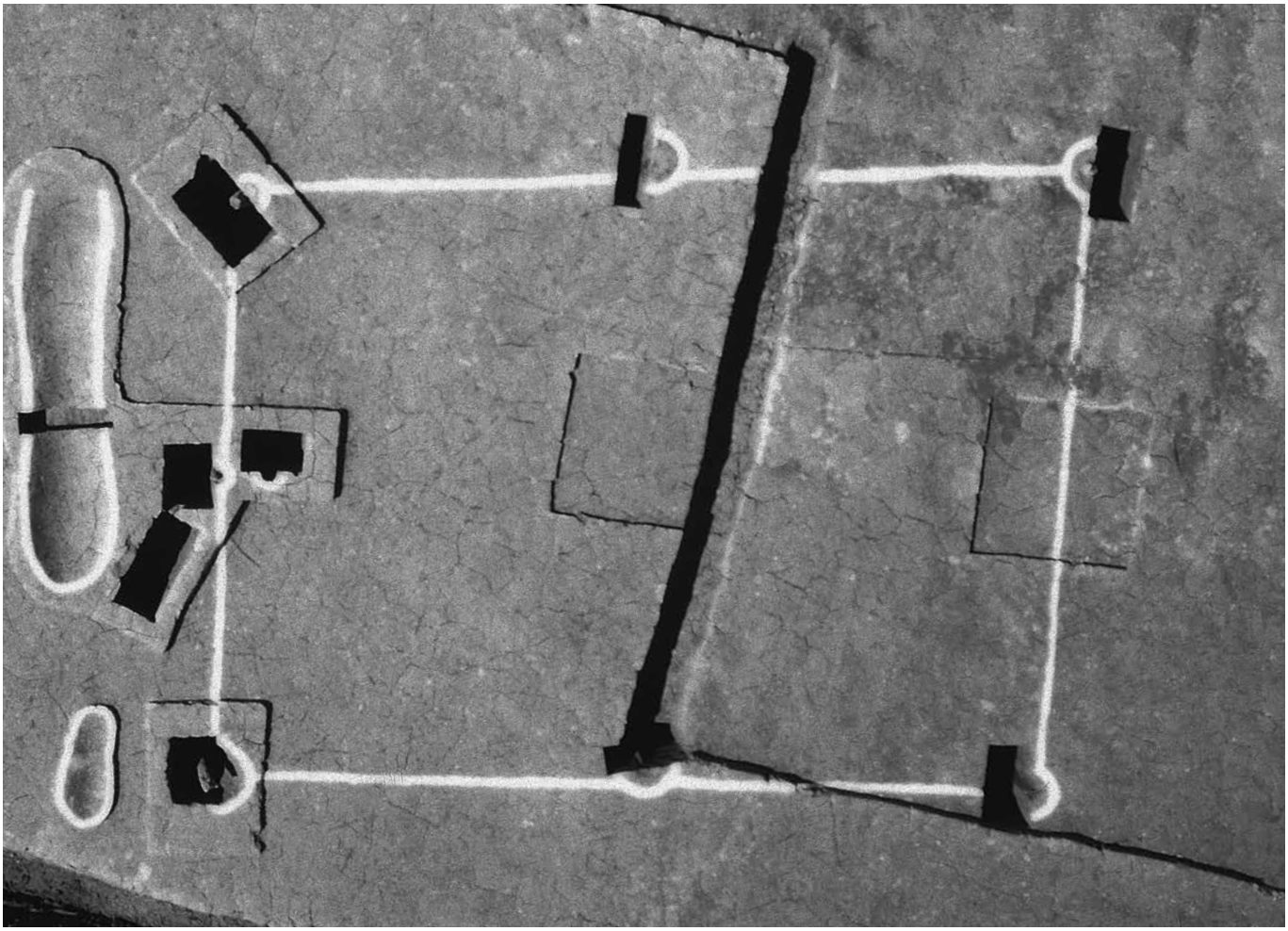
SB37全景（北から）

SB37全景（東から）

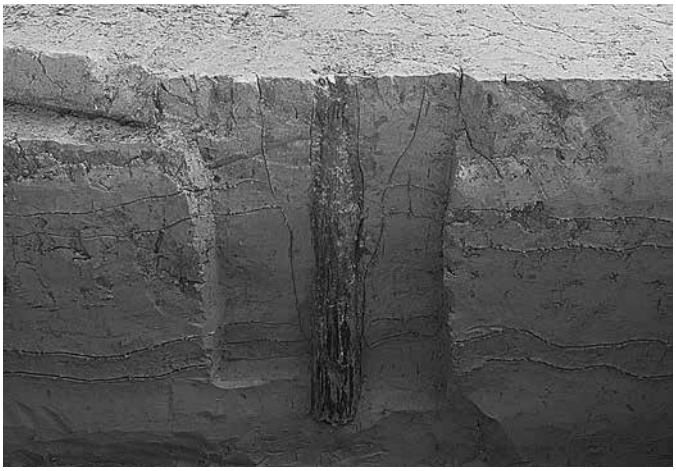
SB37P3東西セクション（南から）

SB37P5東西セクション（南から）

SB37P9南北セクション（西から）



SB50全景（東から）



SB50P1南北セクション（西から）

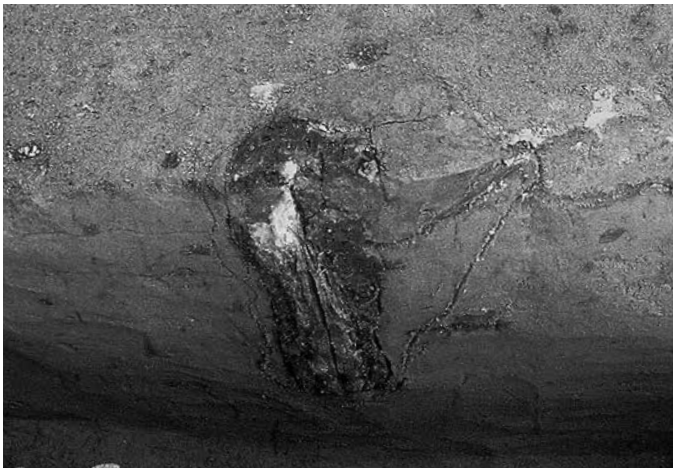
SB50P3東西セクション（南から）

SB50P6東西セクション（南から）

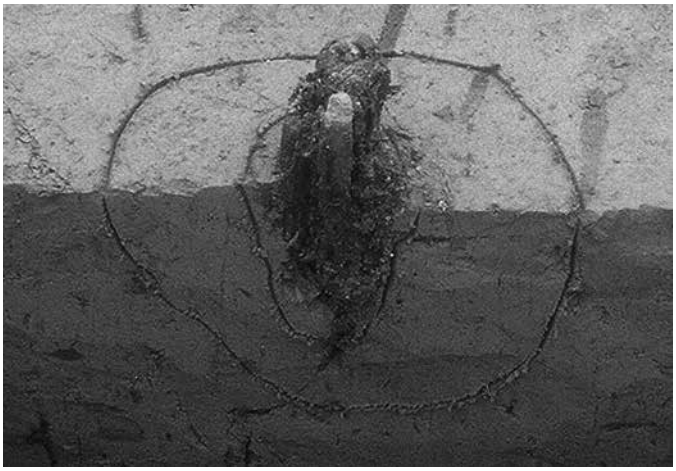
SB50P7南北セクション（南東から）

SA5全景（南東から）

SA5P1東西セクション（南から）


SA5P2東西セクション（南から）

SA17全景（東から）


SA17P1東西セクション（南から）

SA17P2東西セクション（南から）

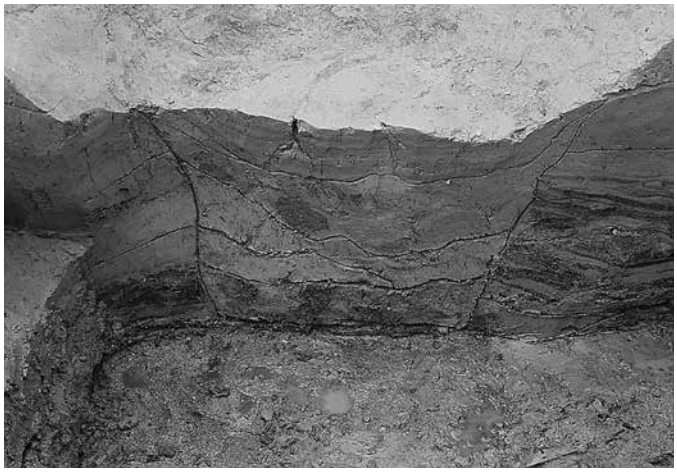
P60南北セクション（西から）

P60完掘（西から）

P227東西セクション（北から）

P227完掘（北から）

SE14南北セクション上層（西から）

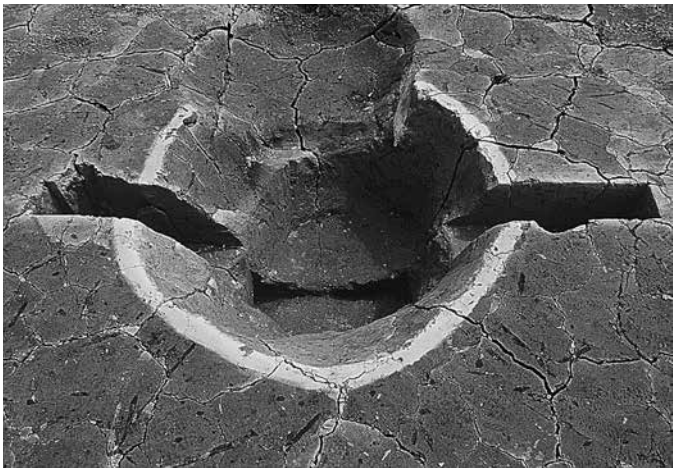

SE14南北セクション下層（東から）

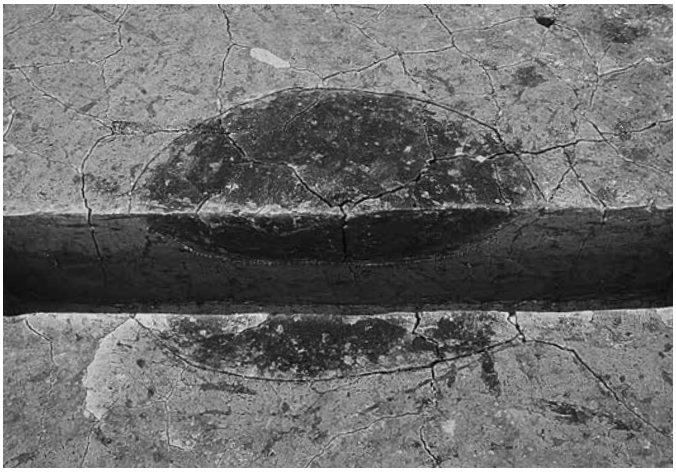
SE14完掘（東から）

SK6セクション（北西から）

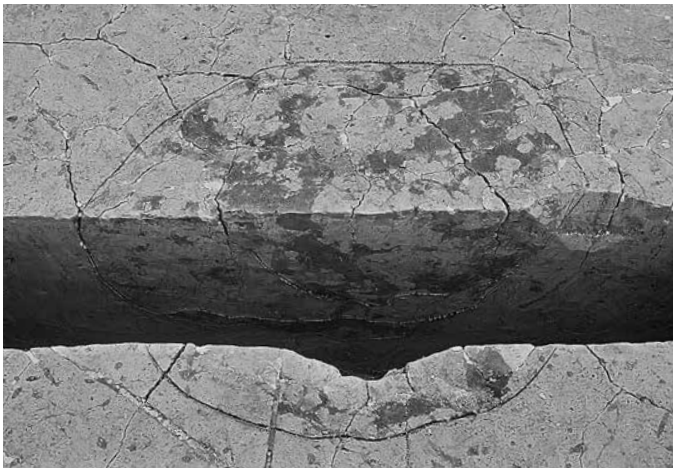
SK6完掘（南から）

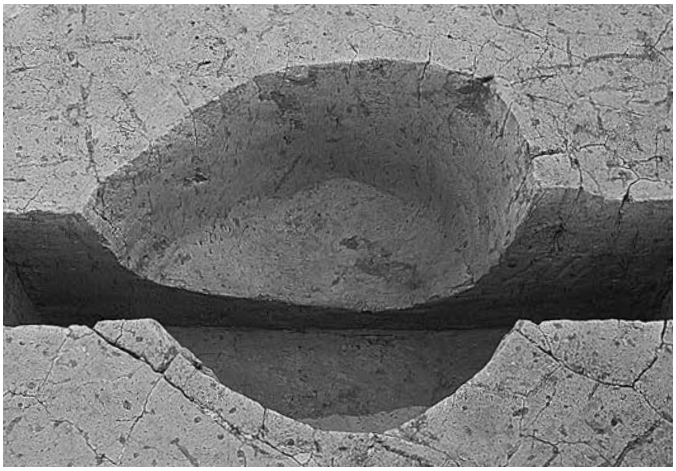
SK7セクション（北西から）

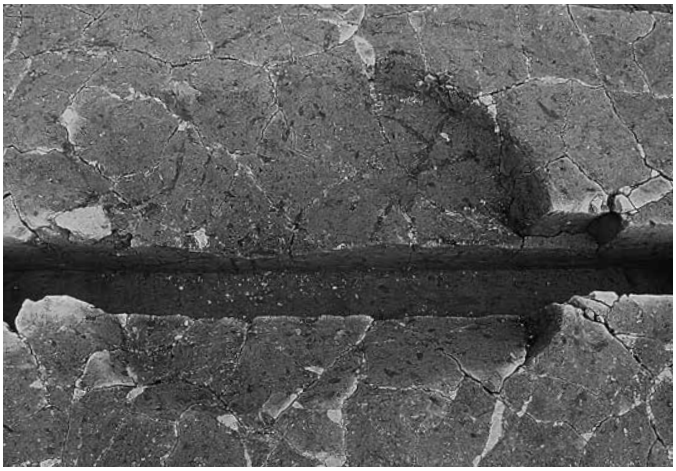

SK7完掘（北西から）


SK24南北セクション（西から）

SK24完掘（西から）


SK25南北セクション（西から）


SK25完掘（西から）


SK26完掘（西から）

SK27東西セクション（南から）

SK27完掘（南から）

SK28東西セクション（南から）

SK28完掘（南から）

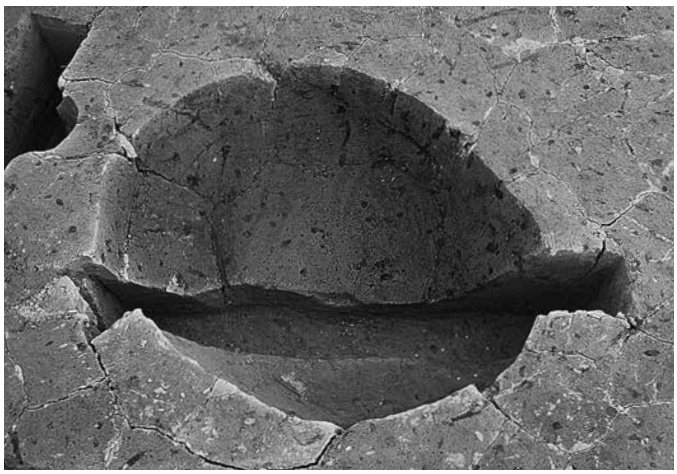
SK30東西セクション（南から）

SK30完掘（南から）

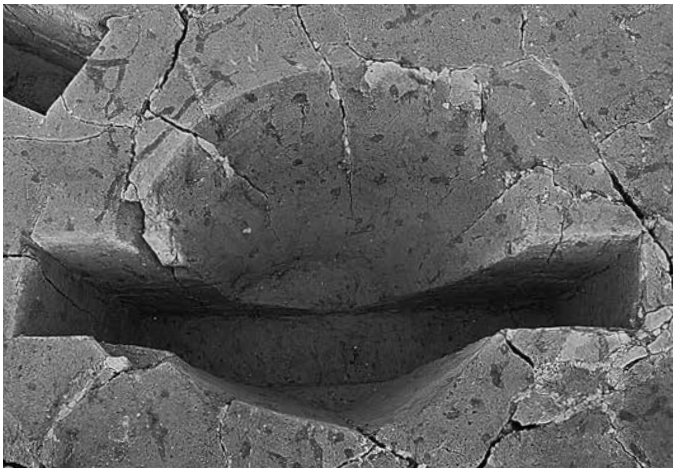
SK31南北セクション（西から）

SK31完掘（西から）

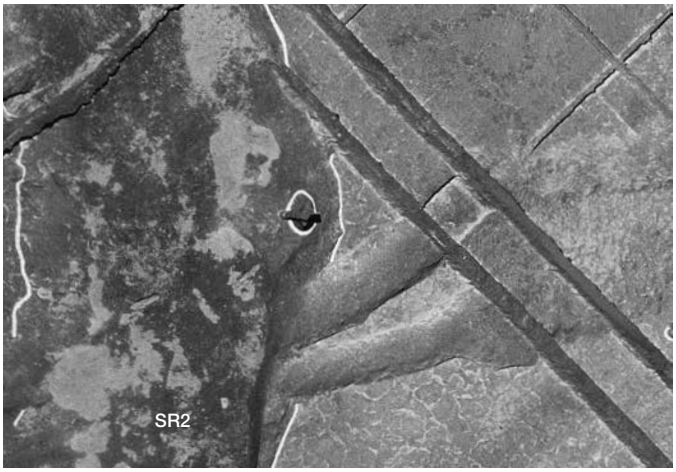
SK32南北セクション（西から）


SK32完掘（西から）

SK33東西セクション（南から）


SK33完掘（南から）

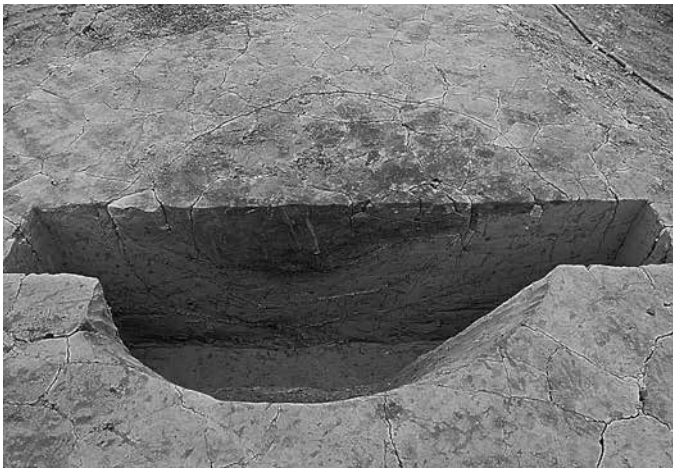
SK36南北セクション（西から）



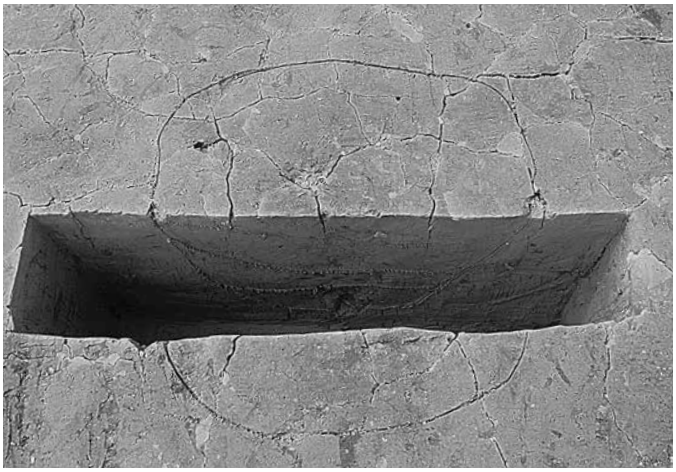
SK36,SR2完掘（西から）

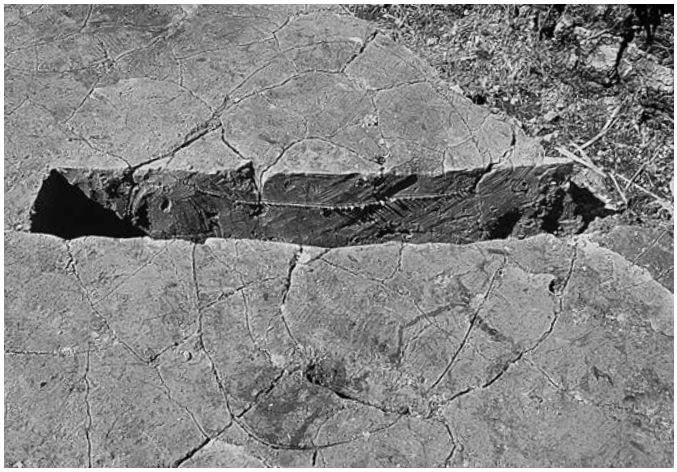
SK39東西セクション（南から）

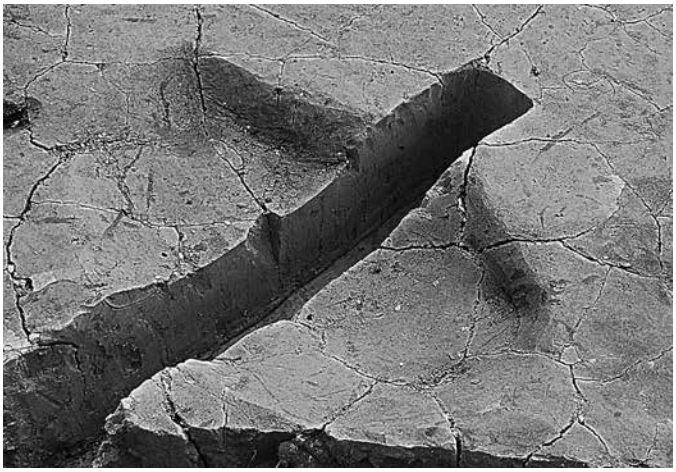
SK39完掘（南から）


SK42南北セクション（西から）

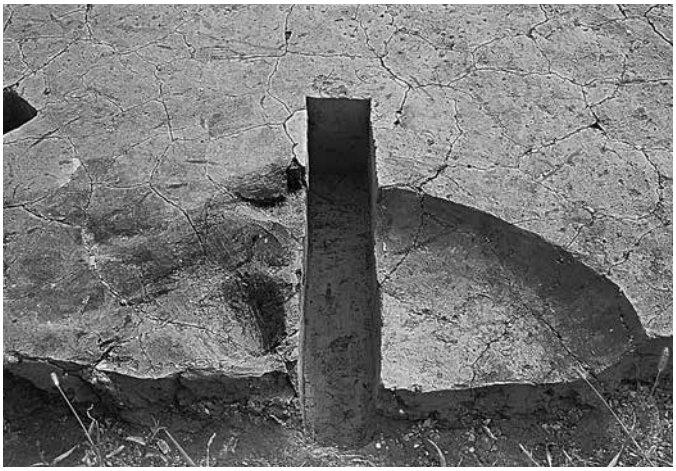
SK42完掘（西から）

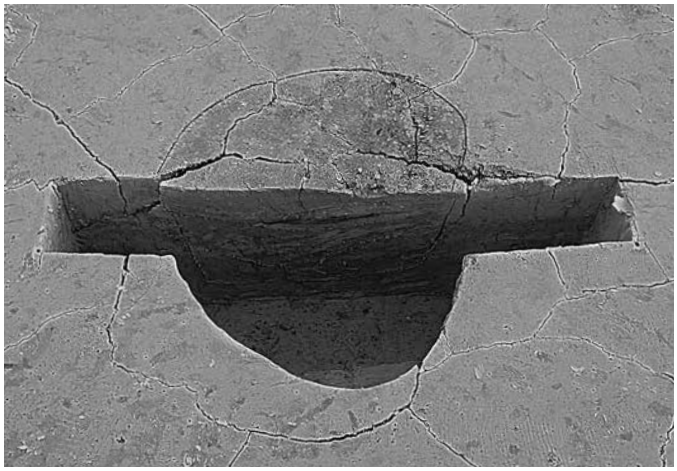

SK44南北セクション（東から）


SK45南北セクション（東から）


SK45完掘（北から）

SK46南北セクション（東から）


SK45完掘（北から）

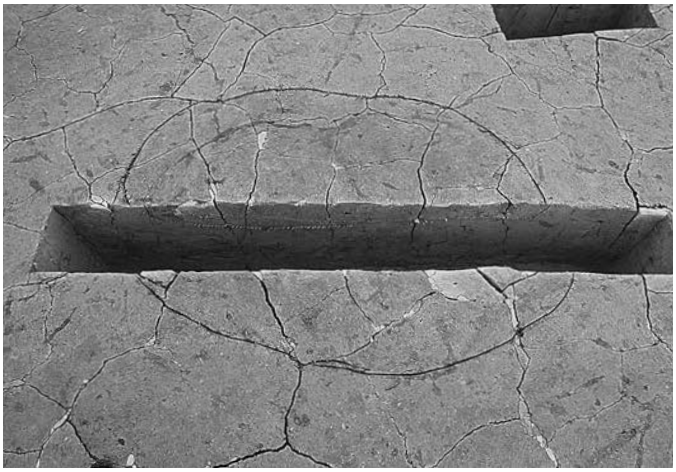

SK47南北セクション（西から）

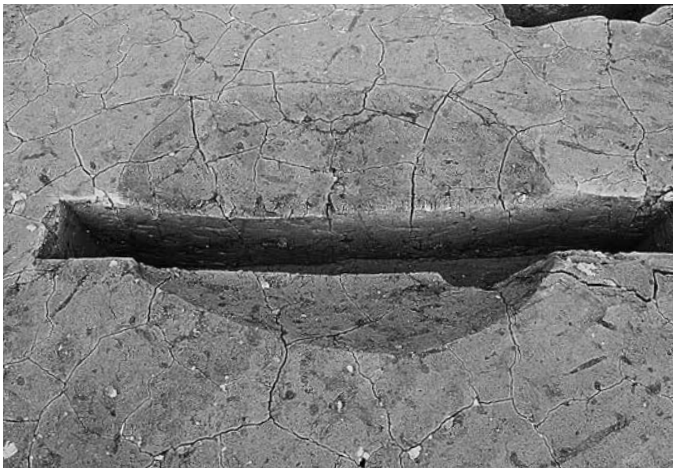
SK48東西セクション（南から）

SK48完掘（北から）

SK49南北セクション（東から）

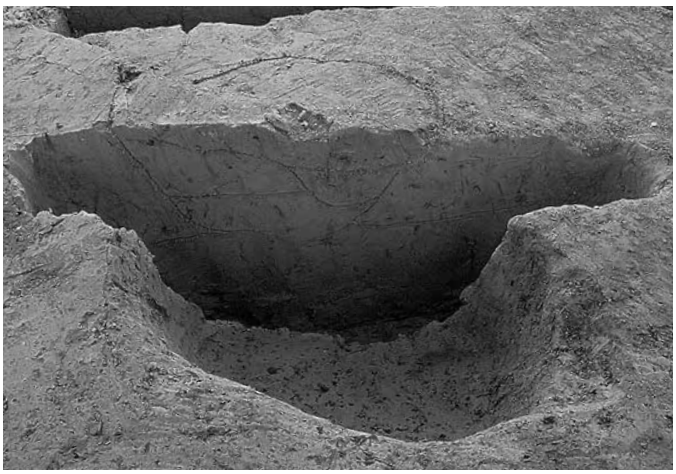
SK49完掘（東から）


SK51東西セクション（南から）

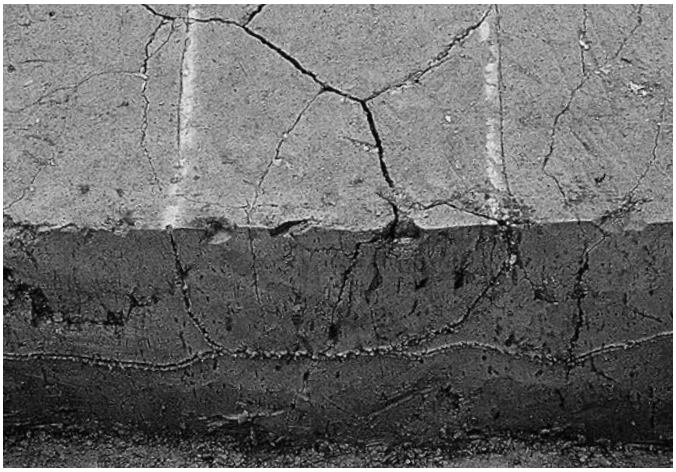

SK51完掘（南から）

SK52南北セクション（東から）

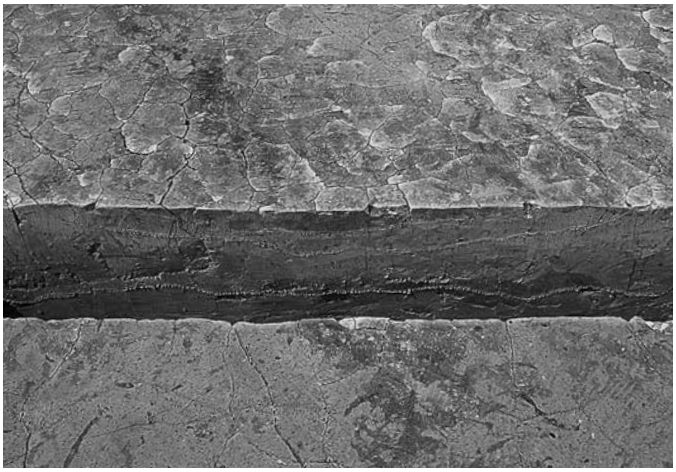
SK52完掘（東から）


SK56南北セクション（北東から）

SK56完掘（南西から）


SD1　c-c'セクション（北から）

SD1,SD2東西セクション（北西から）


SD2　b-b'セクション（南から）

SD2東西セクション（北西から）

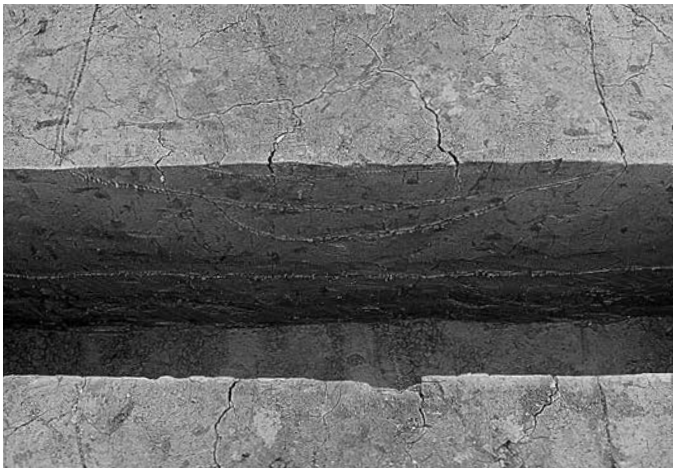
SD2墨書土器出土状況（北から）

SD2完掘（西から）

SD3東西セクション（北西から）

SD3東西セクション（北西から）

SD3　a-a'セクション（東から）


SD3　e-e'セクション（北から）

SD3　i-i'セクション（南から）

SD3付近壁面セクション（東から）

SD1,SD3遺物出土状況（南東から）

SD3遺物出土状況（南から）

SD3遺物出土状況（北から）

SD1,SD2,SD3完掘全景（南西から）

SD2,SD3完掘（東から）

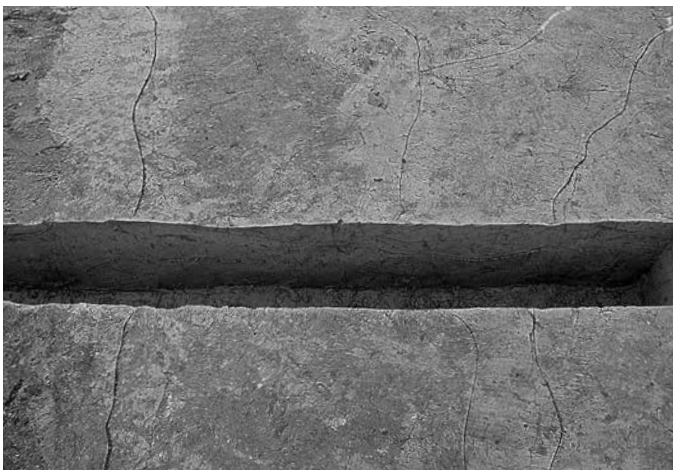
SD3完掘（北から）

南側調査区SD3完掘（北から）

北側調査区SD3完掘（南から）

SD8東西セクション2（南東から）

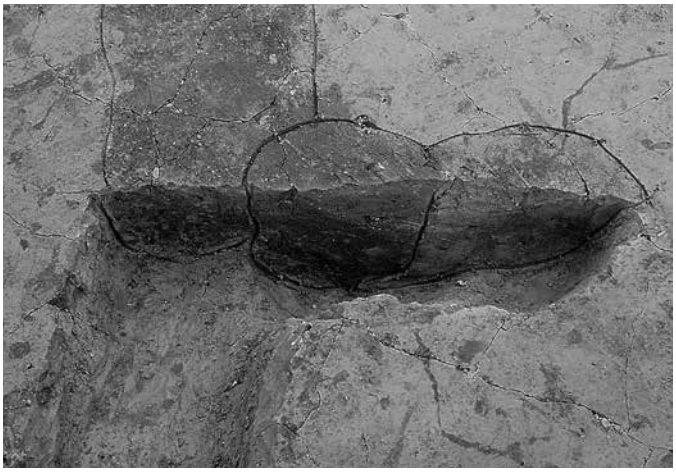
SD8完掘（西から）


SD8,SD9南北セクション（東から）

SD9完掘（西から）

SD10東西セクション（北から）

SD10完掘（北から）

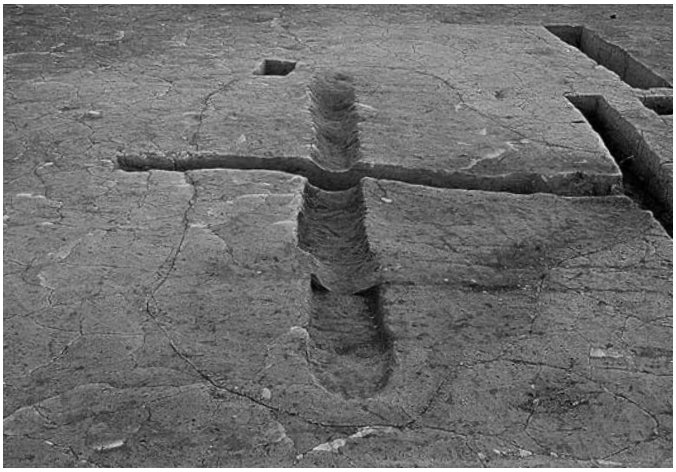

南区SD11南北セクション（西から）

SD11完掘（西から）

SD19南北セクション（東から）

SD19完掘（東から）

SD20南北セクション（西から）


SD20完掘（西から）

SD21南北セクション（西から）

SD21完掘（西から）

SD34東西セクション（南から）

SD34完掘（西から）

SD35南北セクション（西から）

SD35完掘（東から）

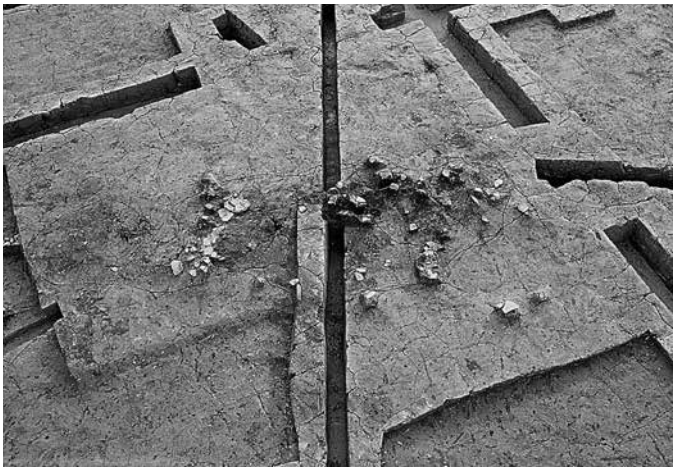
SD43南北セクション（東から）

SD43完掘（東から）

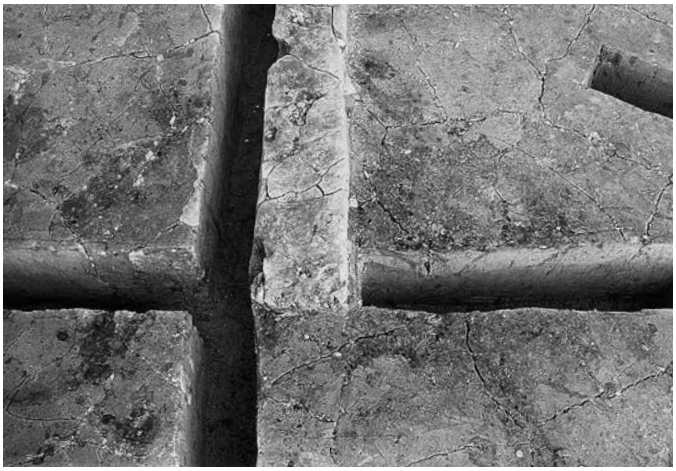
SX22完掘（南東から）

SX55完掘（東から）

SX29完掘（西から）


SX38遺物出土状況（北から）

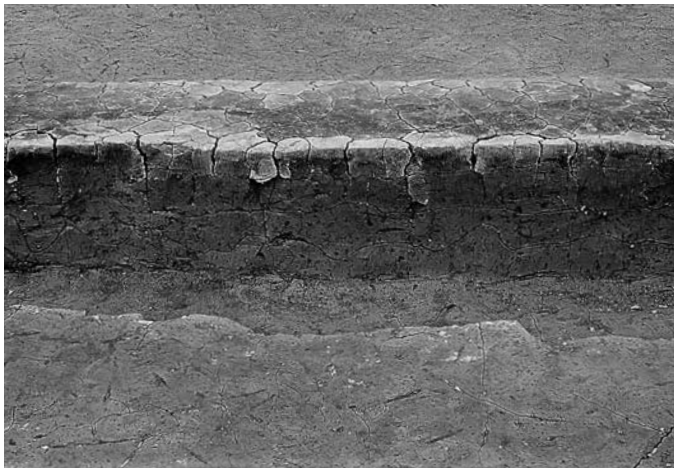
SX38遺物出土状況（西から）


SX38東西セクション（南から）

SX54南北セクション（南西から）

SX38,SX54完掘（南東から）

SR1南北セクション（南西から）

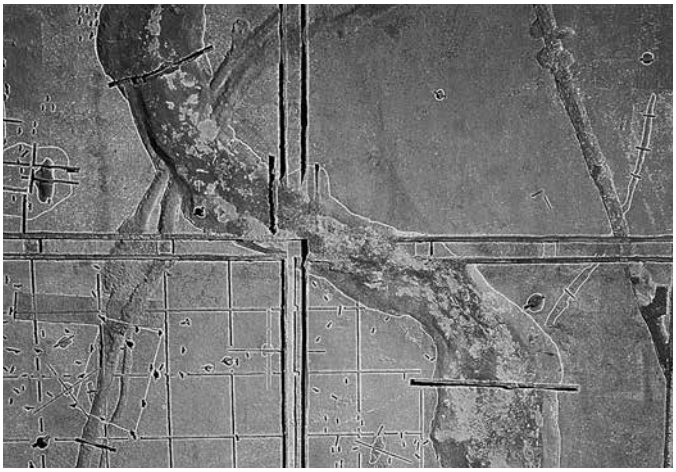

SR1南北セクション（西から）

SR1,SB37,SB50周辺全景（南西から）

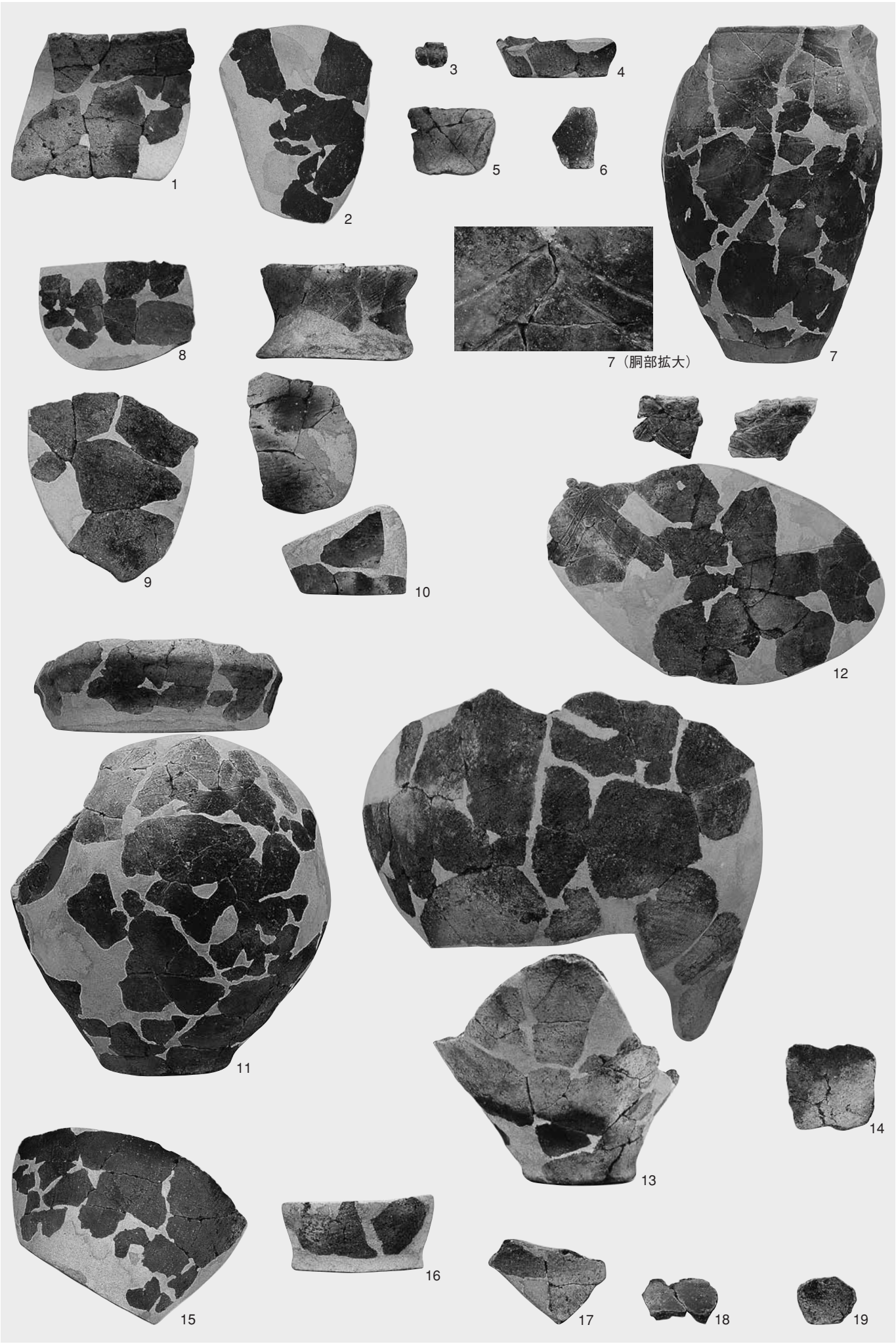
SR1完掘（北東から）

SR2遺物出土状況（北から）

SR2南北セクション（南西から）


SR2,SB37周辺全景（東から）

SR2完掘（北東から）


1
2
3
4
5
6
7
7（胴部拡大）
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19

遺物写真（2）弥生時代遺物・SK6・27・28・30・31・39・48

20

21（胴部拡大）

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

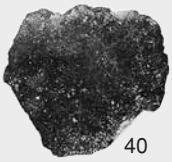
35

36

37

38

39


40

41

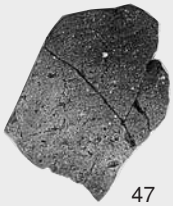
42

43

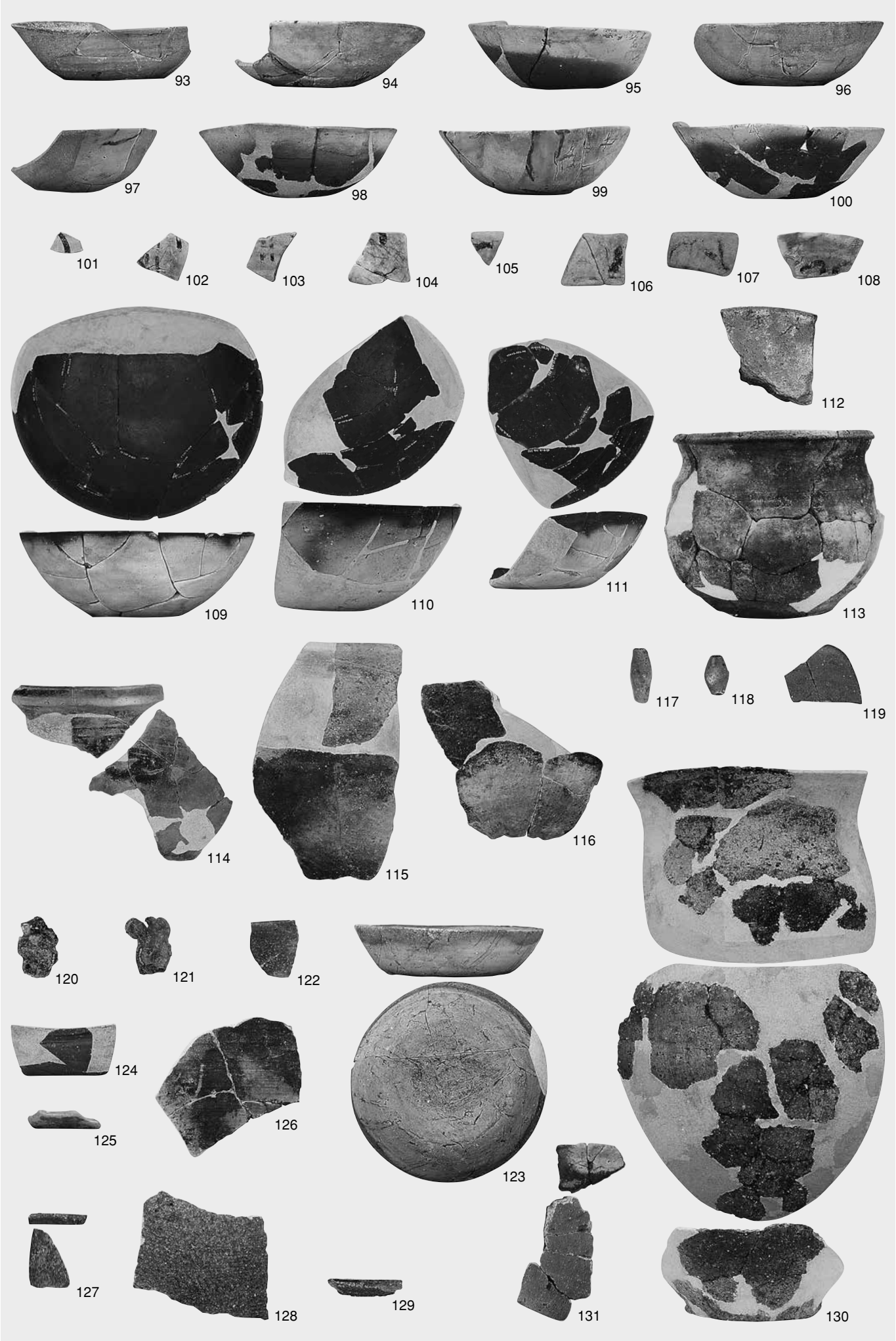
44

45

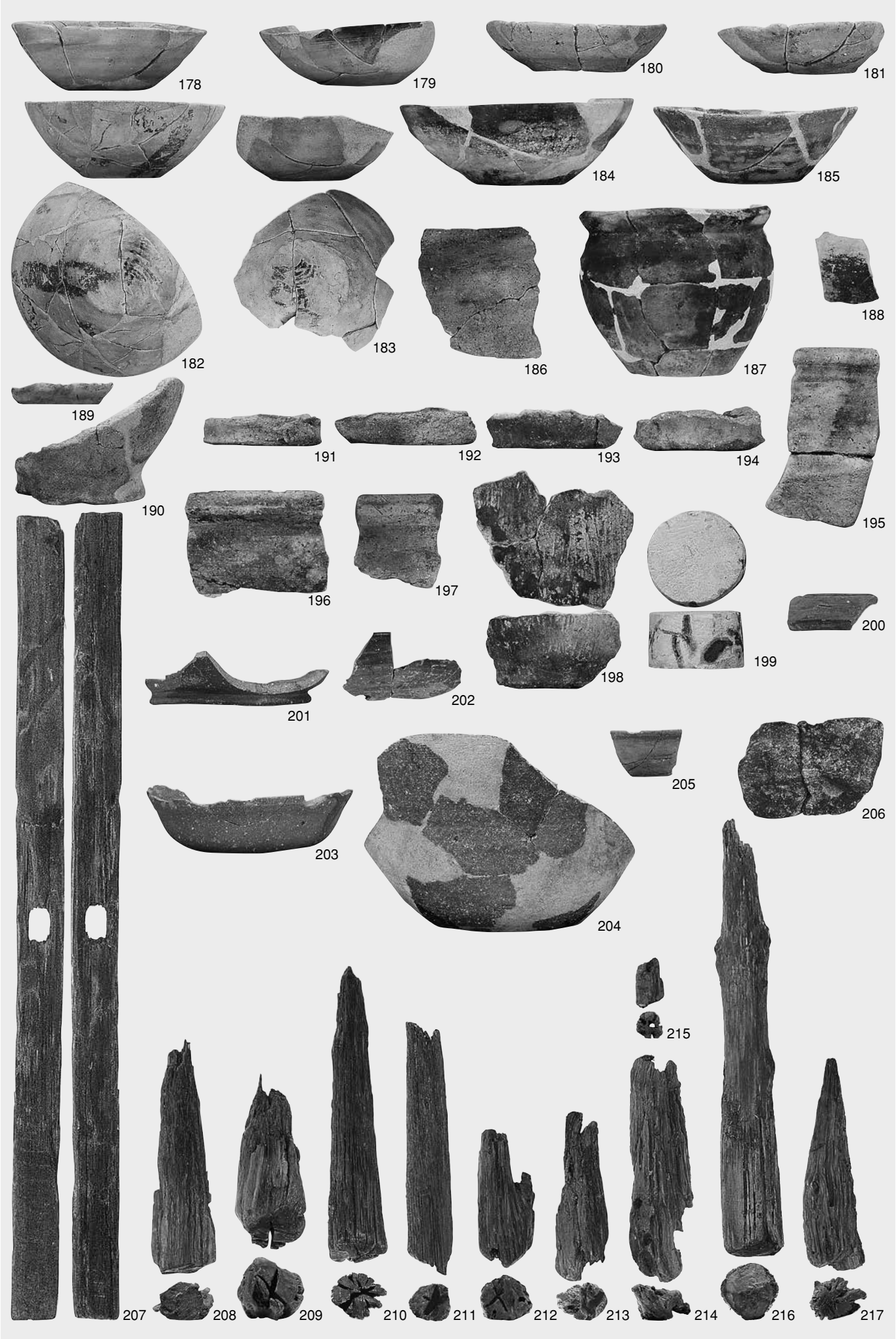
46

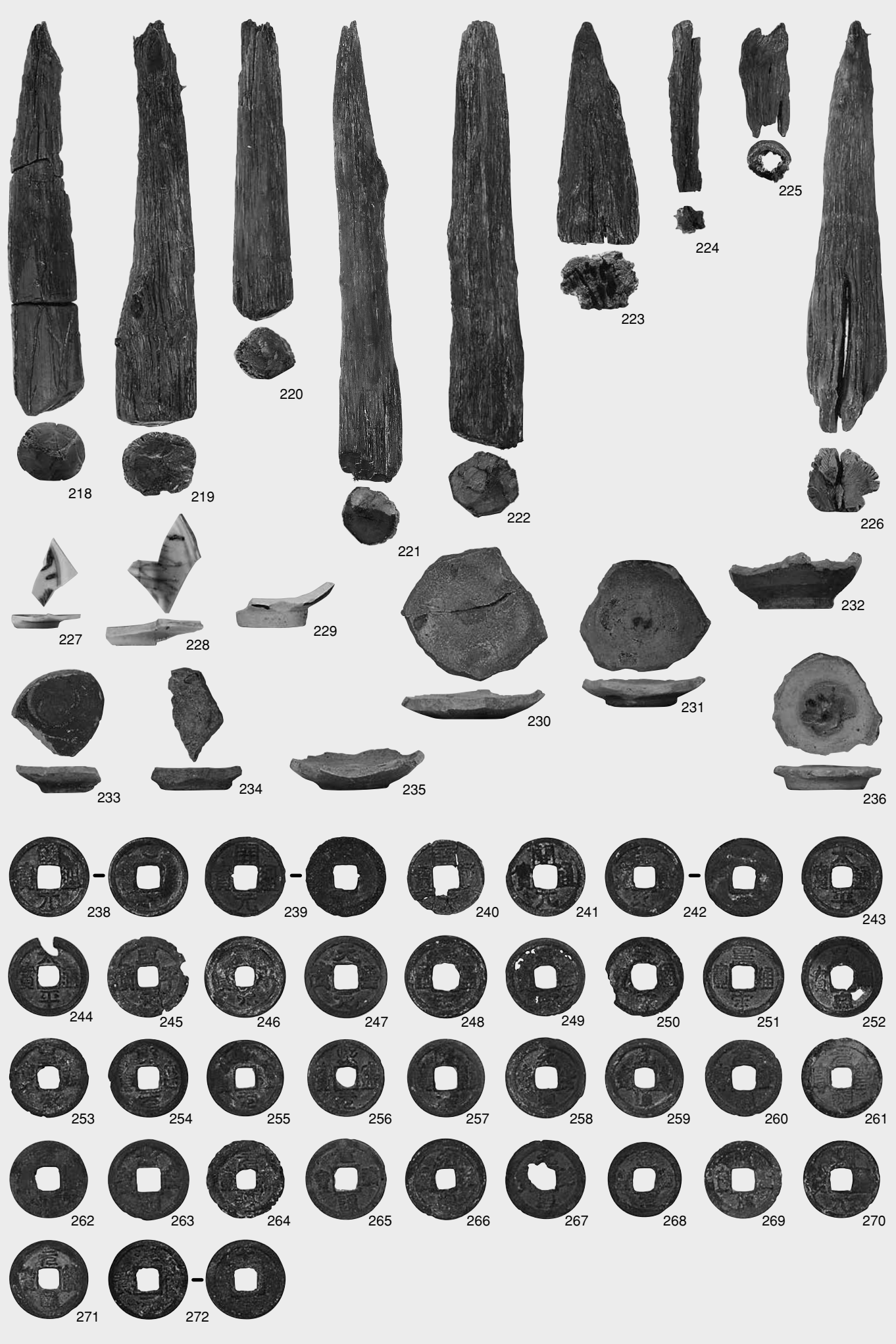

47

48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92


93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131

132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
158
160
161
157
159
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177


178
179
180
181
184
185
182
183
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217

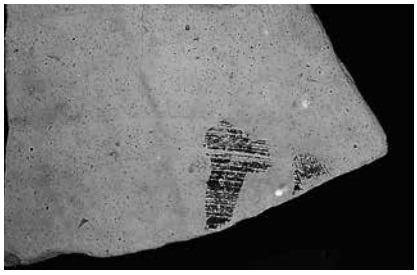

218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272

56

69

73

76

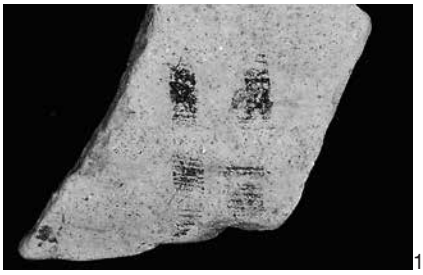

80

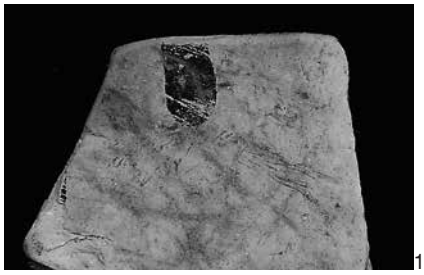
87

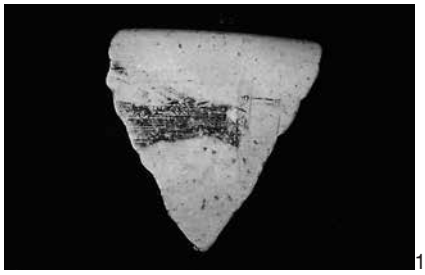
96

101

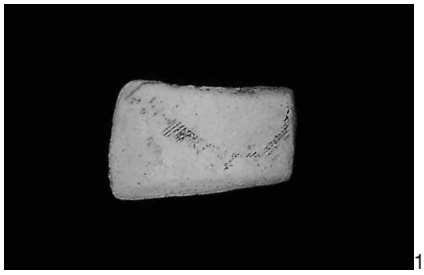
102

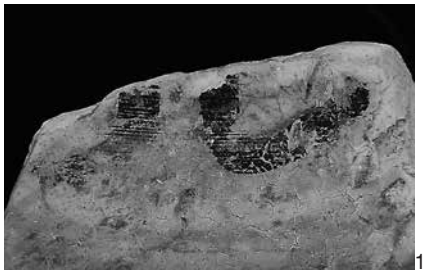

103


104


105

106


107


108

162
底面

182

183

162
体部

報 告 書 抄 録

ふ り が な	なかそねいせき
書　　名	中曽根遺跡
副 書 名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書
巻　　次	XXI
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第168集
編 著 者 名	青木　学・内田　仁・松田重治・荻野早苗・長谷川寿樹（以上　加藤建設株式会社） 植田弥生・小林紘一・丹生越子・伊藤　茂・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani （以上　株式会社パレオ・ラボ） 鈴木俊成（財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団）
編 集 機 関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団・加藤建設株式会社
所 在 地	〒956-0845 新潟県新潟市金津93番地1　TEL 0250(25)3981　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒183-0045 東京都府中市美好町1丁目1番地2号　TEL 042(363)1623　加藤建設株式会社
発行年月日	2006（平成18）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中曽根遺跡（なかそねいせき）	新潟県岩船郡（にいがたけんいわふねぐん） 荒川町大字金屋字（あらかわまちおおあざかなやあざ） 中曽根（なかそね）725ほか	15-582	78	38度 09分 35秒	139度 25分 16秒	20050419 ～20051027	8,563㎡	日本海沿岸 東北自動車道 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中曽根遺跡	集落	弥生時代	住居（2軒）　土坑（1基）	弥生土器　石器	低地に立地する集落
	集落	平安時代 （8～10世紀） 中世・近世	掘立柱建物（4棟） 柱穴列（2列） 井戸（1基）　土坑（24基） 溝状遺構（13条） 性格不明遺構（5基）	土師器　須恵器　木製品 柱根　石製品　土製品 鉄滓 陶磁器・銭貨	川辺に立地する集落

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第168集

日本海沿岸津雄北自動車道関係発掘調査報告書XXI

中　曽　根　遺　跡

平成18年7月29日印刷
平成18年7月31日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市新光町4番地1
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟市金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　八幡印刷株式会社
〒970-8026　いわき市平字田町82-13
電話　0246（23）1471

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第168集『中曽根遺跡』　正誤表追加

頁	位置	誤	正
図版48	左列上から１枚目	南東から	西から
図版53	左列下から２枚目	ＳＫ４５	ＳＫ４６
抄録	北緯	３８度０９分３５秒	３８度０７分４７秒
抄録	東経	１３９度２５分１６秒	１３９度２５分０５秒

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第168集
日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXI『中曽根遺跡』2006

正誤表

頁	行・位置	誤	正	頁	行・位置	誤	正
序	17行目	掘建柱建物	掘立柱建物	67	24行目	[沢田ほか.2003]	[澤田ほか.2003]
目次	6行目	B 本 調 査	B 本発掘調査	69	37行目	[渡辺2001]	[渡邊2001]
目次	20行目	A 住 跡	A 住 居	76	5行目	[小林2003]	[小林2004]
7	11行目	調査指導 寺崎 祐助	調査指導 寺崎 裕助	85	17行目	坂口 豊	阪口 豊
8	25行目	[鈴木2005]	[鈴木2004]	86	13行目	寺崎 裕助ほか.	寺崎 裕助ほか.
8	32行目	砂丘例	砂丘列	87	4行目	2004c	2004
9	23行目	[鈴木2005]	[鈴木2004]	88	古代掘立柱建物 SB4 P14 底面標高	31.4m	3.14m
12	11行目	[戸根2005]	[戸根2004]	89	土坑 SK33 グリッド	20D25・21E5	20D25・20E5
12	37行目	[戸根2005]	[戸根2004]	図版53	写真キャプション 左側、上から３枚目	SK45完掘（北から）	SK46完掘（北から）
16	7、8行目	(5GB6/1)	(5BG6/1)		報告書奥付	日本海沿岸津雄北自動車道	日本海沿岸東北自動車道
30	7行目	北東に向かって	北西に向かって		報告書奥付	平成18年7月29日印刷	平成18年3月30日印刷
30	8行目	北北東へ	北北西へ		報告書奥付	平成18年7月31日発行	平成18年3月31日発行

引用・参考文献の追加

小林　弘　2004　「第II章 沼垂郡（25）岡屋敷窯跡（NY窯跡）」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会

笹沢正史　2004　「第IV章 各論　1 須恵器生産の概要」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会

鈴木正博　1976　「十王台式理解のために（2）」『常総台地』8

滝沢規朗　1999　「第3章 第3節 集落」『新潟県の考古学』

戸根与八郎　2004　「第一編 第二章 農耕社会の出現と古墳文化の形成」『中条町史』通史編　中条町史編纂委員会

古澤妥史ほか.　2003　『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集 大潟遺跡・猫山遺跡・大曲川端遺跡』京ヶ瀬村教育委員会

埋蔵文化財研究会関西世話人会編　1992　「第31回埋蔵文化財研究集会　弥生時代の石器－その始まりと終わり」埋蔵文化財研究会関西世話人会

山崎忠良　2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第156集　北沖東遺跡・長表東遺跡』新潟県教育委員会　(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団